

細川、斯波、吉良、仁木、今川、一色、澁川の諸氏、新田氏の一族たる山名、里見の兩氏、佐々木氏の後裔たる六角、京極、尼子の諸氏、皆さうである。名家としての傳統、主家としての權威が人々を服従させた時代は、もう過ぎ去つてしまつた。武士の主従關係を原理とする組織が崩壊したのである。民衆の力は解放された。貧しい農夫の子でも、組織の力、統率の力さへあれば、最高の支配者になることができる。物をいふのはたゞ實力である。こゝにもし「民衆の支配」の傳統や理想が存してゐたならば、さういふ實力を持つたものは、先づ何よりも民衆の名において、即ち農民の統率者とか商人の指導者とかとして、仕事をしたであらう。しかしこゝにはさういふ歴史的傳統はなかつた。だから實力の競争において民衆の中から出て來た力は、土一揆や海外貿易の方面に現はれるとともに、また武力を以て他を壓倒しようとする新興の武士團としても現はれたのである。戰國時代の群雄と呼ばれてゐるものには、このやうな新しい武士團の統率者が多い。それらはイタリヤのルネッサンスを特徴づけてゐるコンドチエーレや僧主などと極めてよく性格の似たものであるといへるであらう。

右の如き實力の競争は、結局、新興武士團の勝利、新しい武士階級の形成を以て終るのであるが、しかしそ

の新しい支配階級が下から、民衆の中から、出てきたものであることを忘れてはならぬ。この時代は群雄割據時代と呼ばれ、新興の武士團と武士團との間の戦争のみが行はれてゐたかのやうに語られてゐるが、しかし武士團と土一揆との間の抗争も決して少くはなく、さうしてその土一揆もまた次の時代の支配者を生み出す地盤となつてゐるのである。少しく大膽に云ひ切るならば、この時代の群雄をそれ〴〵英雄たらしめたものは、まさに土一揆にほかならなかつた。民衆の團結を力によつて壓倒するか、或は政治的な才能によつて懐柔するか、いづれにしても民衆に嘆美の情を起させるほどの卓抜な業績をあげるによつて、初めて人は「英雄」になることができた。このやうな英雄は在來の大名と同じものではなかつた。大名はその家柄の權威によつて家臣を統率してはゐたが、領國の民衆をまで把握してはゐなかつた。今や家柄の權威が消滅し、たゞ民衆の把握のみが物をいふ時代となつたのである。

このことを代表的に示してゐるのは、十六世紀の中頃、シャビエルの渡來の前後に活躍してゐた武田信玄と上杉謙信とであらう。この二人が英雄として人口に膾炙したのは、もつと後の時代のことでもあらうが、しかし初めから非常な人氣を得てゐたからこそさうなつたので

ある。信玄は何よりも先づ卓越した政治家であつて、領内の民衆の心を巧みに擱んでゐた。のみならず當時の宗教一揆の動向に注目し、外交的にこれと聯絡することを怠らなかつた。謙信もまたその道義心の強い人格によつて民心を得てゐたのみならず、加越能の一向一揆との迫り合ひによつて鍛へられた人である。彼の父は一揆の軍との戦ひにおいて敗死した。彼自身も初めは同じやうに敗北した。さうしてそれに打ち勝ち、一揆の軍の東進の力を阻止し得たとき、彼の卓越した力が認められたのである。甲陽軍鑑の記すところによると、彼は最初一揆の集團を型通りの軍隊の如く取扱つて本格的に取組んだ。しかるに一揆の軍隊の行動は奇想天外であつて、どうにも防ぐことが出来なかつた。この敗因に氣づいた彼は、次の年の戦に、味方の部隊に對しててんでに氣儘勝手な行動を許した。この策が當つて大勝を博したのであるといふ。これは史實であるかどうか解らないが、しかし彼が一揆の集團に對して研究的な態度を取り、その上に出ようとして努力してゐたことは認めてよいであらう。

群雄割據時代を終結せしめた織田信長にとつても、最も手剛い敵は一向一揆であつた。彼がどうしても打ち克つことのできなかつた敵は、たゞ攝津石山の本願寺だけである。彼は宗教一揆の力の恐るべきことを知り、いろ

いろな手を打つた。古來のいかなる武將もなし得なかつた叡山の焼打ち、金山僧徒の磔殺を敢行したのも彼である。伊勢長島の一向一揆を討伐したときには、二萬人の門徒を磔殺した。この過激な手段は、他の多くの一揆衆を慄へ上らせるために、即ち恐怖によつて將來の抵抗を斷つために、取られたのであるかも知れぬ。しかしこのやうな、日本では珍らしい殘虐な態度にまで武士を押しつめるほど、一向一揆は強かつたのである。それを十分に經驗した信長は、解放された民衆の力を決して輕視しはしなかつた。一向一揆は彼に敵對するが故に克服しようとしてゐたが、他面において民衆と結びつく努力は怠つてゐない。皇居の修理や伊勢神宮の外護なども、全國の民衆の感情に訴へようとしたものと見られるが、特に安土の城下町の經營には、この態度がはつきりと現はれてゐる。彼はこの町を座の特權から解放して「樂市樂座」とし、徳政の廢棄を保證した。これは民衆の自由競争を許し、それによつて得た私有財産を保護する、といふことの宣言である。解放された民衆の力はこゝに制度的な表現を得た。中世の崩壊、近世の開始と極めてよく似た現象がこゝに見られるのである。

信長はこの仕事を成し遂げずに死んだが、それを受けついで完成したのは秀吉である。大都市大坂の急激な繁

榮や、豪華な桃山時代の文化を見ると、鬱積してゐた民衆の力が一時に爆發したといふやうな印象をうける。しかもこの華々しい文化創造を率領した秀吉は、一介の農夫の子から出發して關白にまで成り上つた人として、民衆の力の開放を一身に具現してゐる。このことが當時の民衆にどれほど喜ばしい印象を與へたかは、京阪地方における豊太閤崇拜の根強さを見れば解るであらう。

がこのやうに民衆の力の解放が頂點に達したときに、突如として解放の運動はせき止められたのである。なるほど秀吉は新興の武士團の勝利を完全に仕上げた。彼のみならず、多くの農村出の青年が、今や大名となり國主となつてゐる。しかしそれらの武士たちによつて回復せられた社會の秩序を、持續的な秩序たらしめるためには、もう下から湧き上る力に攪亂されては困るのである。民衆の力の解放は、少くとも政治的に影響のある範圍においては、打ち切らなくてはならぬ。そこで秀吉が考へたのは、武士以外の民衆や宗徒の武裝解除であつた。手初めとしては、一五八五年に高野山の武裝解除をやつたが、遂に一五八八年に有名な「刀狩」を斷行し、百姓町人から一切の武器を取り上げた。さうして武裝解除せられた民衆に對しては、その職分に釘づけにするといふ政策が打ち立てられた。武士が百姓町人となることも、百

姓が商人に轉ずることも、禁止せられた。これは封建的な身分制度の基礎工事である。

この武裝解除や身分釘づけの處置は、勿論武力の威壓の下に強制的に行はれたのであるが、その手段として用ゐられたのは他ならぬ民衆の自治組織そのものであつた。長期に亘り民衆は團結によつてその力を發揮して來たのであるが、今やその團結が民衆を弱める武器として用ゐられはじめた。といふのは、秀吉は、刀狩、檢地、轉業の禁などを勵行するに當つて、違犯者に對する刑罰の連帶性を以て臨んだのである。一人でも違犯者を出せば、「一郷も二郷も悉くなで切り」が行はれる。團結の範圍が廣ければ廣いほど、「なで切り」に逢ふ危険が多い。人々は出来るだけ團結を小さくして、相互の警戒の眼を届かせることにより、この危険を防がなくてはならぬ。かくて曾ては武士階級への反抗の手段であつた民衆の團結が、武士階級への隸屬の手段、武士の支配を強化する警察力に轉化した。やがて一五九七年には、辻斬・拘摸・盜賊等の取締といふ純粹に警察的な目的を以て、侍は五人組、下人は十人組の組合を作り、組中の犯人は組合から告發せしめるといふ制度を作るに至つた。これが江戸時代における五人組制度の起りで、土一揆以來の民衆の團結運動は、その最小限の規模にまで押し戻され

たのである。農民の一揆、商人の海外貿易、新興の武士團といふ三つの勢力の競争は、こゝで武士團の完全な勝利に終つた。

家康は右のやうな秀吉の政策を繼承して封建的な身分制度を確立した人であるが、この人の一生を通觀すると、最も重大な運命の岐れ目は、一五六三年、二十二歳の時に起つた參河の一向宗の土呂一揆であつたと思はれる。この時には家臣の半ばが一揆方についた。代々松平郷で田を作りながら微力な主君を守りつゞけてきたこの小さい武士團の團結も、いよゝこゝで一揆の力の前に崩壊するかに見えた。後に江戸幕府初期の有力な政治家として活躍した本多佐渡守なども、この時は一揆方に加はつてゐたのである。それに對して若い家康は、久しく今川の質となつてゐて、近年やつと岡崎に歸つたばかりで、家臣たちとの馴染も薄かつた。大勢の一揆衆に加へて家臣の半ばが敵方であつて見れば、勝敗の數は既に定まつてゐるといつてよい。しかるにいよゝこゝその決算をやる段になると、不思議な現象が起つて來た。崩れかけた軍のなかから若い主君の家康が危険を物ともせず突進してくると、一揆方の武士たちは、その主君にそむいた連中でありながら、どうも身がすくむやうで手出しが出来ないのである。だからその主君を討取るのはやさしい

が、誰も向つて行かうとしないで避けてしまふ。結局その日の勝負はきまらないことになる。幾度會戦して見ても、あの若い主君の姿が現はれてくると、同じやうに駄目にされて結着がつかない。さういふ状態が半年位も續いて、だん／＼一揆方の氣持が腐つて來た。そこを見て仲裁に入るものがあり、結局、責任者を處罰しないといふやうな條件で一揆は降服した。その際本多佐渡守などは一前一揆の本場の加賀へ逐電してしまつた。家康の許へ歸參したのは、十八年後、光秀のクーデターのどさくさの際である。がこの土呂一揆の試煉によつて、松平郷の主従關係の傳統が、當時流行の一揆の力よりも強いことが證明された。これが家康の運の開け初めである。當時の群雄のなかでこの古風な主従關係の傳統を家康ほど確實に握つてゐるものはなかつた。さうして、實力の競争において結局武士團が勝利を占めたとなると、その武士團のなかでは主従關係の筋金を持つたものが最も底力のあるものとして光つてくる。江戸時代の全國的な大名の組織は、松平郷の主従關係を要石としたものである。この前後の聯關を考へると、家康といふ人物が十四世紀以來二世に亘る民衆運動に止めを刺す役割を以て現はれて來たのであるといふこと、その創めた江戸幕府の政策が民衆抑壓において極めて徹底したものであつたとい

ふことは、非常に理解し易くなると思ふ。土一揆が日本の歴史において出来るだけ輕視されて來たのも、この政策の反映であらう。

第二章 シャビエルの渡來

一 ヤジローとの邂逅

シャビエルが日本に來たのは一五四九年、三好長慶が京都を占領し、その家臣松永久秀に庶政を委せた年である。足利の將軍や古い管領の家はもう消滅するばかりになつてゐた。それに反して東の方ではすでに小田原の北條氏が關東平野の經略を完成しようとして居り、武田信玄と上杉謙信との對峙の形勢もほゞ出來上つてゐる。西の方では毛利元就が小さい地頭の家から起つて中國地方最大の領主となるといふ經歷の最後の段階に達してゐた。時に信長は十六歳、秀吉は十四歳、家康は八歳であつて、いづれもまだ舞臺にのぼつてはゐないが、これらの人々の一生の間に、日本民族の運命についての大きい岐れ路が踏み越されて行くのである。鹿兒島に現はれたシャビエルの姿にはすでにこの大きい運命的意義が具現してゐる。それは當時の日本人の眼には映らなかつたし、シャビエル自身にも理解されてはゐなかつた。しか

し今のわれ／＼にとつては、見まいと思つても見ないわけに行かない明かな事實なのである。

江戸時代以來、日本の十六世紀の歴史として記されてゐるところだけを讀んでみると、キリシタンの運動はいかにも一時的な、挿話的なものに見える。その歴史のなかにキリシタンの運動が根をおろしてゐた土壤についての把握がほとんどないからである。その土壤の主なるものは、日本人の參與してゐた東アジアの海上交通、從つて博多、山口、堺、兵庫などのやうな繁華な町々を出現せしめた貿易商人の活動、及び土一揆や宗教一揆として表現せられた民衆の活動である。これらの歴史的现象は、江戸幕府の政策によつて、歴史の意義なきもの、或は一步を進めて歴史的に有害なものとして取扱はれたやうに見える。その結果としてこれらの現象をわざと無視した歴史が出來上つたのである。それらの史料はキリシタン史料のやうに故意に湮滅させられたのではないであらうが、しかし右のやうな取扱ひはおのづからにして湮

滅に近い効果をあげたのであらう。従つて現在においては、外國に残存したキリシタン史料の方が、民衆運動についての國內の史料よりも反つて豊富な位である。この事情もまた日本人自身のキリシタンの運動を後代の日本人が著しく「異國的」なものとして感じた理由になつてゐると思はれる。

われ／＼はその土壤に眼をつけて、十六世紀の日本のキリシタンの運動が日本人自身の體験に屬することを理解しなくてはならぬ。それによつて禁教や鎖國の事實がいかに深くわれ／＼の運命に關與してゐるかも十分に會得されるに至るであらう。

シャビエルに日本傳道の意圖を起させたのは鹿兒島人ヤジロー(或はアンジロー)である。彼はマラッカでシャビエルに逢つたのであるが、どうにかポルトガル語で話し合ふことも出来、彼の側からシャビエルに傾倒するとともに、シャビエルもまた彼から非常によい印象を受けた。そこでシャビエルはこの一人の日本人を通じて日本民族に對する強い信頼と希望を抱くに至つた。その意味でヤジローは十六世紀の日本人の代表者、日本民族の尖端の役目をつとめたのである。しかし日本の歴史はこの重大な役目をつとめたヤジローについて何一つ記録してゐない。われ／＼はこの興味深い遭遇の話をたゞシャ

ゐた司祭は彼に洗禮を授けることを拒んだ。彼がすでに結婚してゐたこと、やがてまた日本に歸りその妻と同棲する意志のあることなどが、妨げとなつたのである。そのうち日本に向つて航海のできる風の季節になつたので、彼はシナ行の船に乗り込み、シナからは他の船で日本に歸ることにした。ところが、シナで日本行の船に乗りかへて日本の海岸へ二十里ほどの處へ達したとき、ひどい暴風に逢つて押し戻され、シナの港へ歸らざるを得なかつた。さうなつて見るとまたキリシタンとなり信仰を得たいといふ希望が働き出してくる。日本へ歸るか、再びマラッカへ行くか、と迷つてゐたときに、ちやうど日本から歸つて來てゐたアルバロ・バスに逢つた。バスはこの奇遇に驚き、ローレンソ・ポテリヨといふ人と共に、その船でマラッカへ引き返すことをすゝめた。今度行けばシャビエルはもうマラッカへ歸つて來てゐるであらうし、またやがて神父の一人がヤジローと共に日本へ行くことになるであらうと云つた。これをきいてヤジローは喜んでマラッカへ引き返した。マラッカではまたアルバレズに逢ひ、遂にシャビエルの許へ連れて行つてもらつた。ちやうど聖母の會堂で結婚式が行はれてゐるところであつた。アルバレズは彼のことをシャビエルに詳しく紹介した。シャビエルはヤジローを抱いて非常に喜

ビエルの書簡(一五四八年一月二日)やヤジローの書簡(一五四八年十一月二十九日附ロー)などによつて知るのみである。ところでさういふ遭遇の起り得た背景としては、當時の東アジア海上における活潑な交通、貿易商人の頻繁な往來があげられなくてはならぬ。右にあげたヤジローの書簡によると、彼は日本で何かの理由によつて人を殺し、遁れて寺にかくれてゐた。その時貿易のために同地に來たポルトガル人の船があつた。その中に前からの馴染のアルバロ・バスといふ人があつて、彼の事情をきき、外國へ逃げた氣はないかときいたので、彼はさうしたいと答へた。するとバスは、自分はまだ貿易の仕事がすまずこゝに留まるが、同じ海岸の他の港にドン・フェルナンドといふ武士があるから、それに紹介しよう云つた。そこで彼はその紹介状を携へ、夜中に狂奔してその港へ行つた。さうしてポルトガル人に逢つてドン・フェルナンドだらうと思つて紹介状を渡したのが、別の船の船長ジョルジ・アルバレズであつた。アルバレズは彼を親切にもてなし船にのせてくれた。航海中いろ／＼キリシタンのことを教へ、またシャビエルの生活や行ひについても話して聞かせたので、彼は非常にシャビエルに逢ひたくなり、また洗禮を受けたいといふ氣持をも起した。しかしマラッカに着いて見ると、シャビエルは同地に居らず、同地に

んだ。ヤジローもシャビエルに逢つて心から感激し、この人に仕へて生涯離れまいと思つた。ヤジローは少しくポルトガル語が出來たので、シャビエルは彼をゴアに送つて教育することにした。ヤジローがゴアに着いたのは一五四八年三月の初めで、洗禮を受けサンタ・フェのパウロといふ教名を得たのは五月の初め、ポルトガル語でこの長い書簡を認めたのは十一月の末である。僅か六ヶ月ほどの間に彼はポルトガル語の讀み書きを覚え、マタイ傳を全部暗記してしまつた。またマタイ傳の要點を日本文で書いた。ヤジローはこれら一切のことを神の恩寵として感謝しつゝ、ロヨラたちのヤソ會にあてて報告したのである。

このヤジローの報告によつて見ると、彼は殺人後の逐電の場面を日本の國內にはなくマラッカまでの東アジアの海上に求めたのである。われ／＼はこのことが當時九州沿岸の人々にとつてさほど珍らしいことでもなかつた、といふ點を理解して置かなくてはならぬ。ポルトガル商人を乗せた船が九州沿岸へ盛んに來始めたのは、一五四二年のポルトガル人種子島漂着以後のことではあらうが、ヤジローをシャビエルに紹介したアルバレズの日本に關する報告書によると、一五四六年頃には、ポルトガル船は鹿兒島、山川、坊の津など十五ヶ所位の港に

出入してゐた。さういふ港にはポルトガル商人の相手になつて貿易を営む商人たちがゐる筈であり、またその商人たちは多少ポルトガル語を解し得るやうになつてゐる筈である。それらの商人は堺や博多あたりで大きい社会的存在となつてゐた貿易商と同じ意味で貿易商であつたわけではない。また自ら船に乗つて冒險的に海外へ押し出して行つたわけでもない。むしろ九州沿岸の諸港に普通に見られる富商であつたのであらう。ヤジローも恐らく鹿兒島の町のさういふ富商の一人であつたと思はれる。彼が鹿兒島へ入港したアルバロ・バスを前から知つてゐたといふこと、ポルトガル語を少しく解したといふこと、逐電の際に一人の弟と一人の僕を連れてゐたといふこと、などがその證據である。さういふヤジローにとつては、京大坂の方面へ逐電するよりも、むしろマラッカへ行く方が氣安かつたかも知れない。しかし彼は殺人の結果鹿兒島にゐられなくなつて外へさすらひ出たのであつて、探求心に煽られ、外への衝動によつて出て行つたのではない。だからマラッカへ行つてもすぐには日本へ歸りたくなつたのである。その彼をシャビエルに近づけたのは全くの偶然であつた。日本近海で四日四晩吹き荒れた暴風であつた。ところで、探求心に煽られ外への衝動によつて動いてゐたポルトガル人は、この偶然を

單なる偶然に終らしめなかつた。彼らはこの鹿兒島の一富商を捉へると共に、この一人の日本人を隅から隅まで探索し、そこに日本民族を、日本の文化を、見出さうとしたのである。シャビエルは日本を目ざす前にさういふ仕方では日本に關する豫備知識や日本人に接近する方法などを獲得してゐたのであつた。

シャビエルはヤジローを通じて日本人が道理に支配せられる民族であること、宗教や學問に對して強い關心を抱く民族であることを知つた。ヤジローがさう語つたのみならず、ヤジローやその弟、その僕などがそのことを實證した。特にヤジローの知的能力はシャビエルたちを驚嘆せしめた。マタイ傳を短期間に覚えてしまつたといふことは、直接彼を指導したトルレスの證言してゐるところである。さういふ點から日本人を非常に高く評價したシャビエルは、日本こそキリスト教の弘布すべき土地であると確信し、どんな危険を冒してでも日本に行かうと決心した。日本行の妨げになるのは、シナの諸港が皆ポルトガル人に叛いたといふこと、またシナ海日本海の風波が世界中で最も激烈であるといふこと、更にこの方面に海賊が非常に多いといふことである。しかしこのヤソ會の闘士にとつては、死の危険こそ最も大きい休息であつた。風波や海賊などは、神の力の前には何でもな

い。信仰あるものにとつては、さういふ危険は恐れるに足りない。だから彼はヤジローに逢つて以來着々として日本行の準備を整へたのである。特に彼が熱心に知らうとしたのは日本の宗教事情であるが、ヤジローは天竺の教がシナ及び日本に弘まつてゐることを知つてゐるだけで、その經典の言語を理解する力なく、従つてその教義にも通じてゐないことを告白した。だからシャビエルは日本に弘まつてゐる宗教を知るといふことを日本に着いてからの第一の課題として初めからねらつてゐたのである。次にシャビエルが努力したのは、キリスト教の綱要を日本語で書くことであつた。シャビエルの日本渡來までにヤジローが、シャビエルの定めた教理問答の拔書や、簡単な教義綱要や、マタイ傳の概要などを、日本語で認めてゐたことは確かである。だからシャビエルは鹿兒島に着いて即座に傳道を始めることが出来たのであつた。この研究的な態度や用意周到な準備こそ、西から迫つて來たヨーロッパの尖端が、マラッカまで出迎へた日本民族の尖端よりも、遙かに優越な力を持つてゐた主要な理由である。

シャビエルが日本に渡來した當時の状況は、彼が鹿兒島で書いた有名な書簡に詳かであるが、彼がこの鹿兒島に一年近くも留まつてゐたのは、右にあげた第一の課題

を解き、傳道の準備を更に一層完成するためでもあつたであらう。このことを眼中に置いて彼の鹿兒島書簡を讀むと、彼の烈しい傳道の情熱の裏に如何に着實な研究的精神が動いてゐたかをまざまざと感ずることができるのである。

二 鹿兒島におけるシャビエル

シャビエルの日本渡來の一行は全部で八人であつた。ヤソ會士ではコスメ・デ・トルレスとジョアン・フェルナンデス、これはいづれもスペイン人である。それに日本人ヤジロー、その弟、その僕。ほかは從僕のインド人とシナ人とであつた。當時バスコ・ダ・ガマの子ペドロ・ダ・シルバがマラッカの長官をやつてゐたが、いろいろシャビエルのために配慮し、日本へ直航しようといふシナ船を見つけてくれた。乗船したのは一五四九年六月二十四日であつた。出航後天氣も風も好かつたのであるが、船頭はトビによつて航海のやり方をきめるので、途中で考が變つて、シナの港で越冬しようとして出した。廣東にいた時、いよ／＼その港に留まらうとし始めたが、これはシャビエルの一行の反對や威嚇をやめさせた。次で順風に乗つて數日航海した後、チンチュウの港へ着き、そこで越冬しようとして企らんだが、丁度出港

して來た船から港内に海賊があることを聞いて急いで外洋へ出た。風は日本へ向つて吹いてゐた。そこで船頭らはやむなく日本に向ひ、八月十五日鹿兒島へ安着したのである。

シャビエルたちはヤジローの身内のものその他から非常な愛情を以て迎へられた。やがてその歓迎は一般的になり、鹿兒島の町の長官、その地方の領主、一般民衆なども彼らに好意と親切を示した。ポルトガルの神父が彼らにはひどく珍らしかつたのである。しかしヤジローがキリシタンになつたことには彼らは一驚かず、むしろそれに敬意を拂つた。親戚のものなどはヤジローがインドのやうな珍らしい所を見て來たことを非常に喜んでゐた。やがてこの國の領主の島津氏も彼を款待するに至つた。當時島津氏は鹿兒島から五里の伊集院にゐたが、彼を呼び寄せてポルトガル人の習俗や國情、インドの所領などについていろいろ質問し、彼の説明に満足したやうであつた。その時ヤジローは聖母マリアの畫像を持つて行つて見せた。領主はこれを見て非常に喜び、その前に跪いて禮拜した。領主の母堂もこれを見て非常に心をひかれたと見え、ヤジローが鹿兒島のシャビエルの許へ歸つて來てから數日後に、使者を寄越して同じ畫像の製作を依頼し、またキリスト教の教義を書面に認めて送つて貰

ひたいと云つて來た。畫像は材料がなくて作れなかつたが、教義の方はヤジローが數日かゝつて書いた。これは九月中頃のことであつたらしい。やがて九月廿九日には、領主がシャビエルたちに會つた。領主は彼らを款待し、キリシタンの教を記した書籍を大切にせよと云つたといふ。その數日後に領主は、臣下一同に對して、自由にキリシタンとなつて好いといふ許可を與へた。

かうして傳道の滑り出しは非常に順調に行つた。しかし言葉の關係から、當時の傳道の主役はヤジローであつた。彼は親戚や友人を集めて晝夜説教し、おのれの母・妻・娘、親戚の男女、友人たちなど多數の人をキリシタンにした。町の人はキリシタンとなることを一向怪しまなかつた。人々は讀み書きが出来るので、祈りの言葉を直ちに覚えてしまふ。さういふ情勢のなかにシャビエルはまるで彫像のやうにしてゐた。人々がシャビエルたちのことをいろいろと云ひはやしてゐるのに、シャビエルの心の中には、日本語さへ出來ればどん／＼信者が得られるといふ強い希望が動いてゐた。だから彼は小兒のやうになつて日本語を學び取らうとした。このことは鹿兒島滞在中に相當の程度に實現されたらしい。特にイルマンのフェルナンデスは、よほど語學の才のあつた人と

見え、非常に迅速に日本語を覺えたといはれてゐる。それと共にまたシャビエルは、日本で讀み書きの出來る人が多いといふ點に着目して、熱心に教義書の作製を企てた。日本語を學び始めてから四十日の間に、先づ十誠の解説を作つた。次でその年の冬の間に日本語で信仰箇條の詳しい解釋を作り、それを印刷しようと考えた。シャビエルがポルトガル語で書き、ヤジローがそれを忠實に翻譯するのである。この企ても彼が鹿兒島にゐるうちに實現されたらしい。これは相當に大きい著述で、天地創造からキリストの出現、苦難、最後の審判までを説き、更に佛教排撃に説き及んでゐたといはれる。この譯は、ヤジローの無學のために失敗の作に終つたが、しかしそれでも後の教義書の基礎にはなつたのである。

このやうに傳道は最初のうちヤジローの力を必要としたのであるが、しかしその頃にもすでに日本に關する研究は熱心にすゝめられてゐた。日本語は出來なくても直接の觀察によつていろいろ／＼なことが解つたし、またヤジローを介してヤジローの知らないいろいろ／＼なことを聞き出すことも出來た。シャビエルが日本から出した最初の書簡は、鹿兒島到着から八十餘日後の十一月五日の日附を持つたものであるが、それには次のやうな日本觀察が記されてゐる。

まづ第一は日本の一般的な印象である。シャビエルが鹿兒島で得た第一印象は非常に好かつた。彼はいふ、自分は今まで交際した人たちは、新らしく發見された諸地方における最良のものである。異教徒の中には日本人よりも優れたものを見出すことは出來ないであらう、と。彼が特に注目したのは、日本人が名譽を重んずること、及び一般に善良であることであつた。名譽は富よりも大切にされてゐる。これはヨーロッパでは見ることでできない點である。日本の國民は一般に貧しいのであるから、貧しいことを恥とは思はないのであるが、しかしそれにしても、巨富を擁する商人が赤貧の武士に對して富貴なる者に對すると同じやうに尊敬の態度を取るといふことは全く珍らしい。赤貧の武士はたとひ巨額の財産を贈られても商人の娘と結婚しようとはしない。武士は名譽ある身分であり、その名譽を失ひたくないからである。武士たちが領主に忠實に仕へるのも、刑罰に對する怖れからではなく、名譽を維持するがためであつた。がこのやうに名譽を重んずるのは武士に限つたことではない。だから一般に日本人は、侮辱や輕蔑の言葉を決して忍ばずとはしない。日本人が賭博を行はないのも、名譽を傷つけたくないからである。次に日本人は、一般に善良であつて、人づき合ひが好く、道理に適つたことを喜ぶ。盜

みの罪を憎むことは、キリスト教國と否とを問はず、日本ほど甚だしい所はない。従つて盜賊は少ない。罪惡を犯しても、その非なる所以を説いて聞かせると、道理を認めてやめる。だから一般民衆の間には、罪惡が少なく、道理が支配してゐる。キリスト教の神のことを聞いてそれを理解し得た時には、彼らは非常に喜ぶのである。

第二は佛敎の問題である。シャビエルは渡來前から日本に流通してゐる天竺傳來の宗教を問題としてゐたのであるが、鹿兒島到着後には直ちに研究をはじめたらしい。彼は數人の佛僧に接近したが、特に當時鹿兒島で名聲の高かつたニンジツ（忍室か）といふ八十歳の高僧と仲よくした。佛僧たちが彼を款待したことは、彼自身「ニンジツは驚くほど自分に親しんだ」と云つてゐるのによつても明かである。彼は、ポルトガルから六千里も距つてゐるこの遠い日本へ、たゞイエス・キリストの福音を説くためのみやつて來た、とその使命を語り、また靈魂の不滅の問題なども論じて見たらしい。しかしニンジツたちは、この遠來の客の珍らしい話に驚くのみで、宗論にはあまり深入りしなかつたらしい。だからここではまだ宗教としての衝突は起つてゐないのである。しかしシャビエルの方では、この接近によつて、「坊

主」たちが俗人よりもひどい罪惡に陥つてゐることを見出した。道理に従ふといふ點でも、彼らは俗人ほど素直でないと思つた。そこで先づシャビエルに起つた問題は、これほど墮落してゐる「坊主」たちが、何故に彼らよりも善良な俗人たちから大きい尊敬を得てゐるか、といふことであつた。その答として彼の頭に浮んだのは、佛僧の禁欲生活であつた。物資の乏しい日本では一般に甚だしい粗食が行はれてゐるが、特に僧侶は、肉類も魚類も食せず、酒も飲まず、野菜と果物と米との食事を日に一回取るだけである。そのほか女との交はりも嚴格に禁ぜられてゐる。さういふ制欲の生活を營みつゝ、信仰に關する物語を説いて聞かせる。それが尊敬を得る所以なのである。さういふ「坊主」の數は日本には非常に多い。シャビエルはこゝに強敵を認め、宗論をはじめ前にすでに彼らからの迫害を覺悟した。もつともその迫害は言葉による攻撃の形をとるであらう。俗人が自發的に迫害を加へてくるとは考へられないが、しかし坊主の論難によつて煽動されれば、どうなるか解らない。だからさういふ迫害によつて命をおとす危険がないわけでもない。がどんな危険があらうとも、われ／＼はキリストの救ひを説くことをやめない、かくシャビエルは、「驚くほど親しく」してくるニンジツを前にして、すでに腹

をきめてゐたのであつた。

第三は日本の國情である。鹿兒島へ來たシャビエルが目ざしてゐたのは、日本の首府ミヤコに行くことであつた。しかし彼が到着した時には風が逆で、五ヶ月後でなければ順風が吹かないといはれ、鹿兒島に待機したのである。そこで彼は、恐らく彼が關心を以て佛僧たちから聞いたであらうと思はれる日本の國情を記してゐる。ミヤコは鹿兒島から三百里で、戸數は九萬以上ある。そこに一つの大きい大學があつて、五つの學部に分れてゐる。(これは五山のことであらう。)外に坊主の住む寺が二百餘、禪宗の僧坊や尼院などもある。このミヤコの大學の外に、主要な大學は五つである。高野、根來、比叡山、多武峯などの大學は、ミヤコの周圍にあつて、おのおの三千五百以上の學生を有つてゐるが、遠く離れて坂東にある大學は、日本の最も大きい大學であつて、學生も最も多い。坂東は廣い地方で、領主は六人であるが、その内の一人が統括してゐる。しかしその一人もミヤコの日本國王に服従してゐるのである。なほ以上の諸大學のほか、日本國中には多數の小さい大學があるといふ。一五五一年中にはこれらの諸大學にイエス・キリストの教を弘めるつもりである。なほ日本國王はシナへの安全通行證(勘合)を與へることが出来るので、それを

得て、シナへ安心して行けるやうに努力しよう。日本からシナへ渡る船は非常に多い。この航海は十日乃至十二日である。

シャビエルは以上の諸點を報道し、日本傳道についての明るい見透しを披瀝してゐる。日本はキリスト教を弘めるに最も適した地である。もし神が十年の齡を與へられるならば、この地において非常に大きなことが出来るであらう。かくて彼は最初の書簡においてすでに後續宣教師の派遣準備を促してゐるのである。

シャビエルはこの書簡と同時にマラッカの長官、バスコ・ダ・ガマの子、ドン・ペドロ・ダ・シルバにも書簡を送つてゐるが、その中で堺に商館を設置すべきことを勧誘してゐる。堺は日本の最も富裕な港で、ミヤコにも近い。そこに商館を設置してインドと日本との貿易を開けば、長官や國王の得る利益は大したものであらう。自分日本國王に説いてインド總督との交渉をはじめめるやう努力するつもりである、と。このシャビエルの言葉は、前述の勘合貿易のことと共に、堺の貿易船と關係の深かつた鹿兒島の港の空氣を反映してゐる。同じことはまたシャビエルの渡來に刺戟されて多數の日本人がマラッカに渡つたことにも見られる。ヤジローが鹿兒島でポルトガル人のことを頻りに賞讃したので、それらの人たち

の氣が動いたのである。その中には坂東及びミヤコの大
學で學んだ坊主二人もまじつてゐた。これらの人たちの
乗つた船は、シャビエルたちを鹿兒島に届けたその同じ
船であつたかも知れぬ。

以上によつてわれ／＼は鹿兒島滞在の初期におけるシ
ャビエルたちの行動や心境をほゞ察知することが出來
る。彼らは前途の見透しについて非常に樂觀的であつ
た。二年の後には日本全國の諸大學においてキリスト教
が説かれてゐる筈であつた。しかしそれは彼らが當時の
日本の政治的情勢について殆んど無知であつたことをも
示すものであらう。三好長慶を中心とした京都地方の戰
亂の様子は、鹿兒島でははつきり解らなかつたかも知れ
ない。従つて佛僧たちもその點についての説明は出來な
かつたかも知れない。しかしとにかく全國的な秩序が失
はれてゐて、日本國王との直接談判などが思ひもよらぬ
ことであつたといふ事情は、鹿兒島人には解つてゐたで
あらう。シャビエルたちは少しく日本語が解るやうにな
ると共に、最初の豫想を裏切るいろ／＼なことに氣づき
はじめたらしい。五ヶ月後にミヤコへの船を與へようと
約束してゐた島津氏は、ミヤコが戰亂の巷である故にそ
の靜まるのを待てと云ひ出した。鹿兒島での傳道も最初

の豫想ほどには伸びなかつた。これは鹿兒島が、鎌倉時
代以來の武家の傳統的な權威を、この下剋上の時代にお
いても遂に覆滅させることのなかつた稀有な地方である
ことと、何らかつながらあるであらう。ヤジローに翻
譯させた教義書には佛敎排撃の議論をも書き込んだが、
キリスト敎の「神」を「大日」と譯するやうなヤジロー
の無學の故に、反つて佛僧の嘲笑を買つたらしい。
さういふ周圍の事情から、遂に一年後の一五五〇年九
月に、シャビエルたちは鹿兒島を去つて平戸へ移つた。
平戸を選んだのは、その二ヶ月ほど前にポルトガル船が
一隻そこへ入港し、その機會にその地を訪ねて有利なこ
とを見て來たからである。鹿兒島にはシャビエルの信賴
するヤジローを残したが、しかしこの傳統の力の強い土
地にヤジローをひとり残すことは無理であつた。數年
後に彼は他の道に入り込んでしまつたのである。

三 山口におけるシャビエル

平戸へ移つたシャビエルは、一ヶ月あまりの後、一五
五〇年十月の末に、トルレスをその地に殘し、フェルナ
ンデスと日本人一人をつれて、日本の國情の視察や傳道
の好適地の探検を目ざした旅にのぼつた。當時の日本の
物騒な情勢から見て、さういふ旅行がいかに危険であり

困難であるかを彼ら自身も好く知つてゐたのであるが、
さういふ危険のなかへまつしぐらに飛び込んで行くとい
ろに、當時のスペイン人の氣質がよく現はれてゐるとい
つてよい。フェルナンデスはもうよほど日本語に熟達し
てゐたし、日本語で書かれた教義書ももう出來上つてゐ
たのであるから、傳道はしようと思へば出來るし、行く
先々に傳手を求めることも不可能ではなかつたであらう
が、しかしまだ保護者もなく信者もなく、従つてまだ全
然聯絡のない地方へ、「探検」の歩を進めて行くといふ
態度は、明かに近世ヨーロッパの精神の尖端たることを
示してゐる。

しかし、それほどの覺悟にもかゝらず、この旅行の
最大の印象は、旅の艱難であつた。第一にあげられるの
は寒氣と降雪とであつて、スペイン人にはよほどこたへ
たらしい。雪と寒さのために脚が腫れ、その上道が悪く
て滑る。荷物を負つたまゝ道に倒れたことも度々ある。
また多くの河を徒渉しなくてはならなかつたし、履物の
ない時も少くなかつた。寒さと飢とのために殆んど死ぬ
ほどに疲れ、雨に濡れそぼたれて宿に着いても、それを
和らげるやうな何の設備もなかつたこともある。第二は
人の興へる不安である。海賊の多い海の上では、しばし
ば人に見つからぬやうに船の中に隠れてゐなくてはなら

なかつた。また盜賊の難を脱れるために身分ある人の馬
丁となつて、はぐれぬやうに驅けたこともある。村や町
について、往來で子供らから石を投げつけられたことも
ある。これらの艱難は全くシャビエルの豫想した以上の
ものであつたらしい。

この時のシャビエルの旅行は、博多、山口を経て、瀬
戸内海を船で堺に渡り、そこから京都へ行つて十一日間
留まり、また西へ平戸まで歸つて來たのであるが、その
間に四ヶ月かゝつた。博多、山口、堺はいづれも海外貿易
によつて榮えたところで、當時の日本の都市發生の先驅
となつたものである。それらの町々が日本の重要な地點
であることは、當時の世間では一般に認められてゐたで
あらう。だからシャビエルもまたこれらの町々に眼をつ
けたのであらうが、實地を踏査してさういふ新興の町こ
そ傳道の好適地であることを見出したらしい。山口の町
では傳手を求めて領主の大内義隆に謁することが出來、
領主の好奇心に答へていろ／＼の話をしたが、結局フェ
ルナンデスに教義書を讀ませ、日本の宗教や道德の腐敗
に對して攻撃を加へるに至つた。領主は悦ばなかつた。
シャビエルたちは覺悟をきめ、翌日から街頭説教をはじ
めた。日本人が眞の神を知らず偶像を禮拜すること、男
色や間引きの如き不道德に陥つてゐることなどを指摘

し、悔改めを迫つたのである。これはフェルナンデスが日本語で述べ、シャビエルはそばで祈つてゐたのであつた。さういふ説教を彼らは山口の町のあちこちでやつた。收穫はあまりなかつたやうであるが、しかしシャビエルにさういふ行動を取らせるやうな何物かが山口の町にはあつたのであらう。やがて彼らは海路を取つて堺に向つたが、海賊の用心や相客の侮辱などでいろ／＼不愉快な思ひをしてゐるうちに、彼らに同情した一人の船客が、親切にいたはつて堺の知人への紹介状を書いてくれた。堺についてその人を訪ねると、この人もまた彼らを親切にもてなしてその家に泊めてくれ、京都への旅路のことをも心配して、或る身分の高い武士の一行に加へて貰ふやうに骨を折つてくれた。さういふ人のゐる堺の町が傳道の好適地の一つに加へられたことも、當然といつてよいであらう。しかし遙々と目ざして來たミヤコは、三好長慶が將軍を近江へ追ひ拂つたあとであり、日本全國の王である内裏は、いかにもみすばらしい有様であつた。またそれらに近づくすべもなかつた。そこで早々に引上げて歸路についたのである。

しかしこの旅行の結果、日本の有力者に近づくには「進物」が必要であること、傳道を開始するにはミヤコよりも山口の町の方が好適であること、などが解つた。

して一つの僧院を興へた。これは最初の山口訪問の際とはまるで異なつた情勢であるが、それを導き出したのはシャビエルの日本國情視察の結果なのである。

かうして山口の町では、鹿兒島の時とは異なり、迅速に活潑な傳道が開始された。町の人たちは新らしい教を聞くために、或はさまざまの珍らしい話を聞くために、朝から晩まで詰めかけて來た。その質問はしば／＼彼らが「難問」と云ひ現はしてゐるやうに答へ難いものであつた。シャビエル自身はこの質問攻めを、豫期しなかつた「迫害」だと云つてゐる。日本人は時刻を問はず訪ねて來て、夜中までも質問を續ける。身分のある人はおのれの家に招いていろ／＼なことを聞かうとする。従つて祈禱・黙想・思索などに没頭の出來る暇がなくなつてしまふ。精神上の休養をとる時さへもない。最初の間はミヤを行ふことさへも出來ず、立てつゞけに質問に答へてゐなくてはならなかつた。かうして、祈禱や食事睡眠などの時間さへも不足するといふやうな状態が、シャビエルの山口滞在四五ヶ月の間續いた。この經驗によつて、シャビエルは、日本人の質問に答へるためには學問があつて辯論に巧みでなくてはならぬ、詭辯に對しては即座にその矛盾を指摘し得なくてはならぬ、とロヨラに報告してゐる(一五五二年一月)。九月に山口へ呼び寄せられたト

博多の貿易商を配下に置いて、シナとの勘合貿易を獨占しようといふ長い間努力して來た大内氏の城下町は、恐らく當時の京都よりも繁華であつたらう。競争相手の細川氏が三好長慶に滅茶々にせられ、上方が連年戦亂に曝らされてゐた當時にあつては、大内氏の隆盛はその絶頂に達し、京都の公卿その他の文化人にして山口に移つてゐたものも少くないのである。その大内氏が一朝にして覆滅せられ、山口の町が戦亂の巷になるであらうなどは、シャビエルには勿論思ひも寄らぬことであつた。で平戸に引き返したシャビエルは、ポルトガルのインド總督や司教の公の書簡と、進物として丁子・時計、その他マラッカの長官から贈られた種々の品物などを携へ、フェルナンデス及び日本人二人をつれて、海路山口に向つた。それは一五五一年の春であつた。

山口ではシャビエルは、公式の書簡と多くの進物とを領主に呈するため、法服をつけて公式に謁見した。領主は珍らしい品々を見て非常に喜び、布教の許可を與へた。この町及び全領土においてデウスを説いてよい、それを信ずることは自由である、といふ意味を書き記した立札を街に立てさせたのである。また宣教師たちに書を加へないやうに人民に命令し、宣教師たちの住居と

ルレスはシャビエルからこの情勢をきいたのであらう。同じやうにこの質問攻めのことを述べて、この地に來るべき宣教師は、高尚な難かしい質問に答へ得るだけの學問がなくてはならぬ、とインドへ書き送つてゐる(一五五二年九月廿日)。これらの質問者のうちには勿論僧侶もまじつてゐたのであるが、しかし鋭い質問をするのは僧侶のみではなかつた。僧侶に對しては一般の人々は表面に尊敬を現はすが實は憎んでゐる、とトルレスは記してゐる。

右のやうな質問攻めの記述は、山口の民衆の探究心がこの熱烈なヤソ會の闘士たちを一時受身にならせたことを示してゐるのである。それは一つには日本語で説明するのがフェルナンデスのみであり、その據り所がヤジロの翻譯した教義書であるといふことにもよるであらう。だからこの山口傳道の初期にシャビエルが一人の若い琵琶法師の心を促へたことは、後の傳道にとつて非常に意義が大きいのである。この琵琶法師は當時二十五六歳の、肥前生れの男であつたが、片眼が少し見えるだけの小さい跛足の體をひきずつて、この新興の都會で、平家物語を彈奏しつゝ暮らしを立ててゐた。強い記憶力と巧みな物語りの技術とはすでに出來上つてゐたのである。この知能優れた青年が、シャビエルの傳道的情熱から靈感をうけ、まつしぐらに彼のふところに飛び込んで

來た。洗禮名はロレンソと呼ばれる。ヤジローがこれまでつとめてゐた役目はやがてこのロレンソによつて擔はれるやうになつた。この後四十年の間に彼のあげた功績は非常に大きいのである。その間のキリシタン傳道の目ぼしい事件のなかに、彼の力の加はらないものは殆んどないと云つてよい。

このロレンソを含んだ山口の町の人々もまたシャビエルたちに非常に好い印象を與へた。トルレスの前記の書簡によると、彼らは、日本人が世界中の何國人よりもキリスト教の植ゑつけに適したものであることを、この地においても認めたのである。日本人はスペイン人と同様に、或はそれ以上に、道理に服することを知つてゐる。

またどの國民よりも強く知識を求め、魂の救ひや神への奉仕をいかにすべきかについて語り合ふことは、彼らにとつて非常な喜びであつた。新發見の諸地方において彼らほど烈しくこの喜びを示したものはない。さうしてその智慧は鋭敏で、理性に支配されてゐる。だからキリスト教の神や救ひのことを教へると、初めは強い反感を持つてゐるものでも、やがて豁然と悟つて彼らの偶像や父母を忘れるやうになる。しかも一度キリスト教に歸したものは、その堅實なること實に比類がない。すでに改宗したものはかなり多數であるが、その大部分はどんな

シャビエルは一五五一年の九月までこの町にゐたのである。

ところでこの年の八月に、バスコ・ダ・ガマの子ツアルテ・ダ・ガマを船長とするポルトガル船が、大分の傍の日出の港に入つた。長途の航海の後にはポルトガル人は神父を必要とするのであるが、そのみならずガマはシャビエルの崇拜者であり、またいろいろな計畫をも持つてゐたらしい。彼は豊後の領主大友義鎮にすゝめて、シャビエルを府内(大分)へ迎へさせた。シャビエルは平戸からトルレスを呼んで、フェルナンデスと二人に山口の信者を守らせることにし、自分は日本人の信者三人と共に九月中旬府内に向つた。その三人の一人はヤジロの弟で、通辯の役をつとめる。他の一人は鹿兒島人で、前に京都旅行に従つた男、あとの一人は山口での新しい改宗者である。

シャビエルがダ・ガマの船でインドまで行つてくるといふことを、すでに山口で考へてゐたのかどうかは明らかでない。トルレスを平戸から呼び寄せたところを見ると、相當長い留守を考へてゐたとも見える。が十月に大分からの使が來て、このシャビエルのインド行きはつきりと知つたトルレスも、やがて直ぐにシャビエルが日本

艱難にでも堪へる覺悟が出來てゐるやうである。これがシャビエルの山口を去る頃に出來てゐた日本人についての觀察であつた。

がこれはロレンソをはじめ町人や武士たちのことである。さういふ俗人たちは、禮儀正しく、慈愛に富み、隣人を誹謗せず、何人をも嫉まない。しかし佛僧たちはさうではなかつた。ヤジローの不十分な佛教の知識によつて佛教排撃の議論を組み立ててゐたシャビエルたちは、こゝで手痛い反撃を受けざるを得なかつた。それを彼らは佛僧たちの黨派心や憎悪として受取つたのである。この時彼らは、ロレンソその他の改宗者から、やゝ詳しい佛教の教義を教はつたらしい。釋迦のこと、法華宗・一向宗・禪宗などの區別のことも、彼らは漸く知り始めた。しかしそれはすべて彼らを論破するためであつた。シャビエルの山口滞在數ヶ月の間には、この方面に長足の進歩があり、佛教に對するキリスト教の相違點が漸く鮮明に表明されるに至つた。

かうして山口には五百人ほどの信者が出來た。その中には武士階級に屬するものが多く、相當の身分の人もゐた。山口の町が當時の日本で最も進んだ都會であつたといふことは、さういふところにも現はれてゐると思はれる。

へ引返して、この當然のこととして語つてゐる。恐らくシャビエルは、東洋のこの方面において日本國民のみがキリスト教に向いてゐること、従つて日本のみがキリスト教の好適の地であることを、直接にインドのヤソ會士たちに説き、多くの優秀な宣教師たちを日本へ連れて來ようと考へたのであらう。そのシャビエルがインドへ歸つてからシナ傳道の計畫を立てたのは、何かこの後の事情の變化があつたものと考へられる。しかしそれにして、山口での經驗がシナ傳道の決意の有力な機縁となつたことは、彼自身がロヨラに宛てた書簡(一五五二年一月廿九日コチン發)によつても察せられる。山口では彼を質問攻めにした日本人の知識は、結局シナ文字で書かれたシナの書籍に基いてゐる。日本人はシナ語を理解することは出來ないが、しかしシナ文を讀むことは出來るのである。シナ文化は日本文化の母胎にはかならない。従つてシナ人がキリスト教を奉じたとなると、日本人はシナから傳へた諸宗派の謬見を直ちに捨てるやうになるであらう。これが彼のシナに眼をつけた理由であつた。して見れば、あの若い琵琶法師などを通じて得られた日本についての知見は、非常に影響するところの大きいものであつたといはなくてはならない。

がそれらは後のことである。シャビエルが去つたあと

の山口は、さしづめどうなつたであらうか。

山口に残つたトルレスやフェルナンデスの報告によると、シャビエルが出發したその日のうちに、山口の町の僧侶たちが、非常な勢でトルレスたちの住居の門から闖入し、トルレスたちやその言説に嘲笑をあげて時を過ぎたといふ。この出来事によつてトルレスたちは、彼らがいかにシャビエルを怖れてゐたかを知つたのであつた。がそれだけにシャビエルの出發はあとに残つたものには心配であつた。僧侶のうちでも禪宗のものは甚だ苦手で、その質問には答へ難い。聖トマスやスコトウスといへども、それに満足に答へることは難しからう。神の特別な恩寵なくしては彼らを説破することは出来ない。さうトルレスは感じた。しかし幸にも彼は、その特別の恩寵によつて、シャビエル出發後の八日か十日の間に、身分あるものや學者などを混へて五十餘人のキリシタンを作つた。トルレスがフェルナンデスの通譯によつていろいろと質問に答へたとき、日本人たちは、この新らしい宣教師もまた信頼しうることを知つて、大變穩やかになつて來たのである。

ところが丁度その頃に戦争の噂がはじまつた。大内氏の家臣陶隆房（晴賢）が大内氏に叛いたのであつた。さうなると僧侶や身分ある人たちはほとんど來なくなつ

夫人と共にその邸に歸り、その三疊の茶室に五日間潜伏してゐた。町は火災・掠奪・殺戮によつて混亂し、トルレスらの生命も相當危険であつたが、しかしどうにかしのぐことが出來た。キリシタンとなつたものには大内氏の家臣が多かつたのであるが、その内には一人も死んだものではなく、最初に信者となつたトメ・内田といふ武士も無事で、その後彼らを守りかくまつた。

かうして山口の傳道は、シャビエルが山口を去つてから一ヶ月経たない内に、一頓挫を來たしたのである。しかし幸に陶隆房は、自ら山口の領主とならうとはせず、自殺した大内義隆の甥、大友義長を迎へて大内氏を嗣がせようとした。大友義長は豊後の領主の弟で、當時府内にゐた。さうしてその府内には丁度その頃シャビエルが行つてゐたのである。

四 豊後におけるシャビエルと大友義長との接觸

シャビエルの府内入城は非常に華々しい儀容を以てなされた。すでに山口で領主に物々しい公式の謁見をやり、それによつて大きい効果をあげたシャビエルは、今度は日出の港のポルトガル船と連合して、前とは比較にならないほど大げさな儀容を張ることが出來たのであ

た。商人や婦人たちが少しは來たが、それらもキリシタンとなるには至らなかつた。やがて叛軍は山口に迫つて來た。遂にトルレスらは、九月二十八日（太陰曆八月二十八日）に至つて、所持品を隠し、逃支度をした。さうしてキリシタンの同情者である有力者カトンドノ（加藤殿か。奉行内藤隆治だとする人もある）の邸に、もとヤジローの従僕であつた男を使にやつて、どうすればよいかを聞かせた。やがてその男は馳せ歸つて、取りあへず大急ぎでその邸まで來いといふ先方の答を傳へた。トルレスらは直ちにその邸に向つたが、途中で甲冑をつけた兵士の部隊にいくつか行き逢つた。兵士たちは、あの天竺人が佛を罵つたからこんな戦争が起きたのだ、あいつらを殺してしまへ、追拂つてしまへ、などと口々に言つて、トルレスらを慄へ上らせた。邸につくとカトンドノは、一人の坊主をつけて、トルレスらを彼の檀那寺に案内させた。その寺の僧も、彼らを惡魔視し、彼らのためにこの不幸が起つたと考へてゐる人で、寺に迎へ入れることは喜ばなかつたのであるが、檀那を怖れてか、或は案内の僧の頼み方が好かつたためか、結局彼らを寺の一室にかくまつた。こゝで彼らは慄へながら二晝夜を過したのであるが、その二晝夜の間武士たちの家が多く焼失した。陶隆房の軍隊が山口を占領し、大内義隆は自殺したのである。トルレスらはカトンドノの

る。それには船長ダ・ガマの側にも大いに力を入れる理由があつたであらう。ヨーロッパの技術や儀容を展示して新しい土地の民衆に強い印象を與へるといふことは、インド以來ポルトガル人の常套手段であつた。だからシャビエルが日出に着いた時には、船には旗を掲げ、祝砲を連發して日本人を驚かせた。ついで府内入城の日には、ダ・ガマ船長をはじめ多くのポルトガル人たちが、華やかな盛装をつけ、従僕を伴ひ、法服に威容を整へたシャビエルを擁して、靜々と行進を起したのである。一人は花鳥を描いた日傘をシャビエルの上にかざしてゐる。他の一人は被をかけた聖母の畫像を捧げてゐる。それについて精巧な上靴を一足捧げてゐるものもある。行列の指揮者は金棒を曳いてゐる。前の年に領主になつたばかりの若い大友義長（宗麟）も士卒を羅列し威容を張つてこれを迎へた。城下の民衆は見物に押し寄せて來た。さういふ華々しい姿で傳道者シャビエルは府内に入つて來たのである。城に入つていよいよ、席につくとき、ポルトガル人の一人は非常に高價な上衣をぬいで、その上にシャビエルを請じ、列席の武士を驚かせたといふ。かういふ行進や儀式の際のヨーロッパ風の動き方が、眼に見えるやうである。

領主は傳道の許可を與へた。シャビエルは直ぐに翌日

から街頭に立つて傳道をはじめた。ヤジローの弟が通辯であつたが、シャビエル自身も日本語で説教したかも知れぬ。最初の行列の印象で民衆の注意を集めたあとであるから、効果は大きく、間もなく五百人の信者が出来たといはれてゐる。この形勢に對してこゝでも佛僧の反抗がはじまつた。シャビエルの攻撃的態度がそれを觸發したのであらう。佛僧たちはフカタジ（石佛で有名な深田寺か）を先頭に立てて宗論を挑んだ。それは對立を深めるばかりであつた。遂に領主に正式の宗論を催はさせ、五日に亘つて對論させたといはれる。こゝでも日本人は、知識欲に富み、限りなく難問を提出する、といふ同じ性格を示したわけである。それをシャビエルはヤソ會の闘士らしい氣魄で壓倒して行つたらしい。豊後滞在は僅かに二ヶ月餘であつたが、その間に彼は山口に劣らぬ有力な根據地を築き上げたのである。

當時二十二歳であつた領主の大友義鎮は、初め信者にはならなかつたが、しかしポルトガル人との貿易には非常に熱心であつた。だからシャビエルを擁して華々しい府内入城をやつた船長ダ・ガマと、その府内の領主との間には共通の關心があつたのである。シャビエルもまたそれを利用することを忘れなかつた。彼はダ・ガマの船で一度インドへ引き返し、日本布教の計畫を強化しよう

と決意したのであるが、それと呼應するかのやうに、大友義鎮はポルトガル王やインド總督に書簡を送り、教師派遣を懇請しようとした。その書簡や贈物を携へた使者を同じ船でインドまで連れて行つて貰ひたいと申出たのである。そこでシャビエルは、この使者のほか、山口から連れて来た三人の日本人及び山口から使ひに来たものヤジローの従僕、合せて五人の日本人を同行することにした。京都への旅に同行した鹿兒島人と山口での改宗者とはポルトガルへ留學に送り、ヤジローの弟と従僕とはインドから日本へ来る新らしい宣教師を案内するためであつた。日本人にインドやヨーロッパを見せよう、或はヨーロッパ人に日本人を見せよう、といふ氣持は、彼らの間にすでに流れてゐたのである。

ダ・ガマの船はこの一行を乗せて一五五一年十一月に日出の港を出帆した。途中廣東でサンタ・クルスといふ船に乗りかへたが、その船長デエゴ・ペレイラがシャビエルにいろいろシナのことを話したので、シャビエルのシナ傳道の氣持が起つたといはれてゐる。マラッカでまた船をかへて、一行は翌年の一月末にインドに着いた。日本人のポルトガル留學もその後實現されたが、歸國後傳道事業に大いに役立つであらうといふシャビエルの期待に反して、惜しいことに彼地で死んでしまつた。

豊後の大友氏は古い家柄で、義鎮は頼朝時代以來十八代目と稱せられる。従つてこゝでは古い傳統が相當に有力であつた。その豊後へ新しい空氣をもたらしたのは、當時九州の諸大名を動かしてゐた海外貿易であつた。朝鮮の貿易にも古くから參加してゐたし、シナとの勘合貿易に大友船を出したこともある。倭寇に出るものも少くなかつた。従つて豊後の港へシナ船の出入するところなども珍らしくはなかつた。後年に大友義鎮がフロイスに語つたところによると（一五七八年十月十六日附、白杵發書簡）、彼が十六歳の時、即ち一五四五年には、すでにポルトガルの商人もやつて来てゐた。これはポルトガル人の種子島漂着よりも二三年の後、シャビエルの豊後滞留よりは六年ほど前のことである。その時には、日出の港へシナ人の小さいジャンクが入港し、その中に六七人のポルトガル商人が乗つてゐた。その重立つたのはジョルジ・デ・フアリヤといふ富人であつた。ジャンクのパイロットはシナ人であつたが、義鎮の父である領主義鑑に、あのポルトガル人を殺せば手間なしで大きい財産が手にはいる、と言つてそゝのかした。領主は欲に動かされてシナ人の獻策を實行しようとした。それを聞いた十六歳の義鎮は、父の所へ行つて、あの外國人は領主の保護の下に領内で買

易をしようとして遠くから来たものである、それを罪もなく理由もないのにたゞ欲から出て殺すといふことは甚だよろしくない、自分は絶対に不同意である、自分は彼らを保護するであらう、と説いて、その實行を喰ひとめた。このことを義鎮はキリシタンとなる最初の因縁として語つてゐるのであるが、確かにこの父子の間にはすでに視圈の相違が出来てゐたのである。なほその後にもデヨゴ・バズといふポルトガル人が府内に來て五年間滞在し、日本語を話すほどになつた。その男がどういふ風にして義鎮と接觸したのかは解らぬが、とにかく朝夕に聖書を読み、數珠を持つて祈禱するその敬虔な態度は、非常に強い印象を義鎮に與へた。僧侶でもない單なる商人がこれほど熱心に勤行するといふことは、よほど靈顯のあらたかな神だからであらうと思へたのである。

かういふ青年時代を送つた義鎮が領主となる時には、いかにも戰國時代らしい血腥いお家騒動があつた。父の義鑑が惣領の義鎮をさし置き、後添の妻の子を世繼にしようとしたからである。それに迎合する家老の權力が強く、それを不可とする正義派の家臣のうちには誅戮をうける者もあつた。そこで正義派の家臣二人が奥へ切り込んで、義鑑夫人、その子のみならず、義鑑をも殺害した。義鎮は當時湯治のために別府へやられてゐたが、急

ぎ迎へられて跡を繼いだのである。

シャビエルが豊後を訪れ、山口では大内義隆が家老の陶隆房に殺される、といふ事件が起つたのは、その翌年であつた。義鎮の同母弟義長を大内氏の後繼として迎へる話が始まつたのは、シャビエルがまだ豊後にゐた間のことらしい。義鎮義長兄弟の母親は大内義隆の姉であるから、義長は叔父のあとの相續に呼ばれたわけである。この交渉は公開的のものであつて、勿論シャビエルの耳にも達したに相違ない。當時、山口の教會を日本唯一の教會として残して行かうとしてゐたシャビエルにとつては、これは非常に重大な報道として響いたであらう。兄の義鎮は宣教師派遣の懇請狀を公式にインド總督に向けて送らうとしてゐる。その弟が、山口の領主となつて、今危機に陥つてゐる教會を保護し得るかも知れないのである。その人物についてもシャビエルは恐らく直接に知つてゐたであらう。さうとなればこの際シャビエルがその全力をつくしたであらうことは察するに難くない。義長が山口の領主となつたならば、極力キリシタンを保護するであらう、といふ了解が、この時彼らの間に成立したといふことも、あり得ぬことではなからう。

義長の大内氏相續については、大友記に義鎮の反對意見と義長の承諾の理由とが記されてゐる。反對意見はか

うである。陶隆房は毛利元就を敵にしてゐるが、隆房にはこの強敵を防ぐ才覚はない。その隆房に擁せられて大内氏を繼いで、元就がそれを承認せず、主家として取扱はないならば、やがて毛利氏と戦はなくてはならない。その際に勝つ見込はない。やがて亡びる大内氏を繼ぐのは無分別である。この反對に對して義長は答へた。元就を恐れてこの跡目相續を斷つたと世人から嘲られるのは、堪へ難く口惜しい。しかし元就と一戦して討死することは、むしろ名譽である、と。この云ひ分は當時の武士の間には立派なものとして通つた。そこで相續の約束が出来、シャビエルの去つた翌年の晩春に、義長は大内氏を嗣いだのである。

この相續の議論は、後の経過を知つてゐる者の考へ方を反映してゐるやうにも見えるが、しかし當時の下剋上の大勢から見ても、義鎮がこのやうな懸念を抱いたといふことは、あり得ぬことではあるまい。毛利元就は下から成り上るといふ大勢を最もよく具現した人の一人である。毛利氏が大きい勢力を持つに至つた後に書かれた毛利記にも「毛利の家、昔年代々有之と云へども、元就以來の義に候」と書かれてゐる。その元就が、三十歳の時、安藝吉田「三千貫の所」を領して以來、「談合」と「結束」とによつて三十年の努力を續け、遂に大内氏に

屬する諸將のうち最も大きい存在にまで成長してきてゐるのである。特に大内氏と尼子氏との間の長期に亘る争覇は、元就の才幹を現はすに恰好の舞臺であつた。大内氏の運命が元就によつて支へられた場合も少くない。世間にはもうこの元就の實力を知つてゐたのである。その際に、元就が主家とする大内氏の實權は家臣の陶隆房に握られ、しかもその隆房が主君義隆に叛いて、義隆父子を自殺せしめるに至つた。たとひ隆房自身が領主とならず、傀儡領主大内義長を擁立するとしても、元就がその領主の權威を認めず、主殺しの故を以て陶隆房を討伐するであらうことは、容易に見通され得たのである。義長が毛利氏に壓倒せられることを豫感しつゝ大内氏を繼いだといふことも、あり得ぬことではなからうと思はれる。

シャビエルが日本に残して行つた教會はこのやうな政治的情勢の上にかゝつてゐた。そのやうな情勢はシャビエルの眼には十分明かではなかつたであらう。彼は日本を去つた後にも、山口の教會がますます隆盛となるであらうことを確信を以て語つてゐる。山口の教會の最大の危険はすでに過ぎた。多數のキリシタンのうちには大身のものもあり、トルレスやフェルナンデスを晝夜保護してゐる。そのフェルナンデスは日本語に上達して、トル

レスの説教の通譯をやることができる。日本はキリスト教を植ゑつけるに非常に適した土地である。この方面で新たに發見された諸國のうちでは、日本國民のみがキリスト教を傳へるに適してゐる。かく彼は力強く主張してゐるのである。それから僅か九ヶ月後に彼は廣東附近の上川島で死んだのであるから、この確信は死ぬまで變らなかつたであらうと思はれる。

山口の教會に關する限り、彼の豫想は裏切られた。四年の後に大内氏に代つて山口を支配し始めた毛利氏は、海外に廣い世界への關心も薄く、キリシタンへの同情も持たなかつた。従つて山口の教會の隆昌は、僅か五年の間に過ぎなかつた。傳道の流れは、この毛利氏の攻勢を防ぎ切ることの出來た大友義鎮の領内へと移つて行つた。その頃若い義鎮は、戦争と政治と歡樂との荒しい生活のなかに沈溺してゐたのであるが、それでも海外の廣い世界への關心やキリシタンへの同情を持ちつづけたのである。

第三章 シャビエル渡來以後の十年間

一 トルレスと山口の教會

シャビエルが日本を去つてインドへ歸り着いたのは一五五二年の一月の末であるが、間もなく四月の中頃には、日本に向ふイルマン、ペドロ・ダルカセヴァとドワルテ・ダ・シルヴァとを率ゐ、インドを出發した。船はシナ行の船で、船長はインド總督のシナ派遣大使の資格を兼ね、シャビエル自身も神父バルテザル・ガゴと共にシナに行つて傳道に従事する決意を固めてゐた。ところがマラッカに着いてから故障が起り、船長の大使は翌年までこの地に留まることになつた。そこでシャビエルは豫定を變更して、神父のガゴを日本行の一行に長老として加はらせ、別の船を工面して六月六日にシナに向つて出發させた。ガゴの一行はシナでまた日本行の船にのりかへ、八月二日出發、同十四日には曾てシャビエルの滞在してゐたタヌシマ(鹿兒島か)といふ島についた。そこで領主の款待を受け、留まること八日、小船に乗つ

て豊後に向つた。中々難航であつたが、九月七日無事に豊後の府内に着いた。シャビエルが日本を去つてから十ヶ月目である。

ガゴたちは到着の翌日領主大友義鎮を訪ねてインド總督からの贈物を捧げ、領主の款待を受けた。が何よりも必要なのは、これからの傳道計畫の樹立である。彼らは山口の教會と連絡を取つたが、山口からは日本語の上手なフェルナンデスを派遣して寄越した。そこでガゴは先づ領主を訪ねてインド總督からの傳言を傳へ、ついで宣教のために度々訪ねて行つて、領主の前にこの傳道計畫の問題を持ち出した。殿はインド總督に書簡を送つてクリシタン宣教師の渡來を促されたさうである。また殿御自身にもクリシタンの教を奉ずる意志があると聞き及んでゐる。従つてわれらはこの教を説きたいのである。もしわれらが領内に留まることを欲せられるならば、クリシタンの傳道を許可する旨布告せられたい。もし今その決心がつき兼ねるならば、われらは山口に行つて日本語を勉

強し、殿が招かれる時を待たう。取りあへず一應は山口へ行つて來たいが、もしわれらがこの國へ歸つてくるやう望まれるならば、山口の神父にその旨を告げて、こゝへ歸つてくることにしよう。かくガゴは申出た。それに對して義鎮は答へた。山口には神父が居り、すでにクリシタンも出來てゐるさうであるが、自分の領内にはクリシタンはゐない。これは甚だ遺憾である。山口には神父トルレスがゐるのだから、貴下たちはこの領内に留まつて傳道してほしい。その上自分はインド總督と度々通信したのであるが、神父が領内にゐないとそれが出來ない。だから領内に留まつてくれれば、傳道の方は手助けをしよう。ガゴはこれを聞いて領主の好意を謝し、さらに押し返して言つた。當地に留まるにしても、古參の神父トルレスからその命令を受ける必要がある。また山口では領主の公式の許可を得て傳道してゐるのであるから、當地でもさういふ公許を得て、クリシタンとならうとしてゐる者の疑懼を除きたい。この領内にもすでにクリシタンとなつたものがある。希望者は更に多數である。領主はこれに答へて、では望み通り即刻許可を與へ、高札を立てさせよう、説教は自由にやつてよい、旅行は急ぐにも及ぶまいと言つた。ガゴは先づトルレスに逢ひたいといふ切望をくり返して述べ、傳道許可の高札

は山口から歸つて後に立てて貰ひたい、山口のと同じ形式にしたいから、と申出た。

このやうに領主の義鎮はガゴたちをひきとめようと、ガゴたちは山口行を急いだのであるが、結局十月になつて先づダルカセヴァが山口に行き、數日遅れてシルヴァもそのあとを追つた。最後にガゴとフェルナンデスが山口に着いたのは、十二月の末、クリスマスの近づいた頃であつた。

山口では前年の内亂以後も、烈しい迫害と艱難とのなかで、トルレスとフェルナンデスとが信者を守つてゐた。やがて大友義鎮の大内氏相續の話もまとなり、晩春の頃には義鎮が山口の領主となつた。さうしてガゴの一行が豊後に到着したとほゞ同じ頃に、山口の教會に對して、有名な大道寺建立の裁許狀を與へた。この裁許狀は一五五七年にビレラがインド及びヨーロッパのヤソ會に向けて送り、一五七〇年にはすでに複製せられて廣くヨーロッパ人の眼にふれたものである。

この一年の間に山口でトルレスのした仕事は決して少くはなかつた。シャビエルが教化した若い琵琶法師もこの間に著しく育つた。平家物語を暗記し、それを感情に訴へるやうに吟誦し得たその才能を以て、今やクリシタ

ンの教を暗記し物語りはじめたのである。その話術は甚だ巧みで、非常にトルレスの助けになつた。のみならず彼は思考の力においても優れてゐた。だからトルレスは、日本人と立ち入つた議論をしようと思ふときには、もとの琵琶法師ロレンソを呼んで代辯せしめた。そのほかにトルレスは一人の少年（ベルシヨール）を育て上げた。この少年はポルトガル語を讀むことが出来、しばしばキリストの一代記を日本人に讀み聞かせるといふ役をつとめた。かうして一年程の間にトルレスは千五百人ほどの熱心なキリシタンを作つてゐたのである。大道寺建立の企てはこの盛り上る力の現はれであつた。

そこへ新しく渡來したダルカセヴァやシルヴァが乗り込んで來たのであるが、この新來者の眼を驚かせたのは、山口のキリシタンの熱心さであつた。ヨーロッパでは一般人がすべてキリシタンであるから、キリシタンであることと宗教的な熱情を持つことは必ずしも一つではない。しかるにこの地のキリシタンは、特に宗教に身を捧げようとする修道者のやうに熱心であつた。新來の教師たちに對して親切であることはヤソ會の兄弟（イルマン）以上である。人種の違ふポルトガル人もキリシタンたるが故に本當の兄弟のやうに思ふとともに、同じ日本人でもキリシタンでないものゝことを念頭に置かな

い。否、むしろそれらを憎んでゐる。さうしてキリシタン同士は不自然と思はれるほどの強い愛を以て交はつてゐる。少しでも信仰が弱まると宣教師のところへ來て治療を求め、誰の前でも昂然としてキリスト教の神のこゝとを語り、キリスト教に歸依しないものを攻撃し、その眼の前で佛像を壊したりなどする。さういふ風であるから、この地の信者が日曜日毎に宣教師のもとに集まつて、ミサに列し、説教を聞く様子は、ほかの異教國に於ける場合とは甚だしく感じが違ふ。これが新來の教師たちの受けた印象であつた。

やがて神父のガゴが、フェルナンデスと共に、クリスマスに間に合ふやうに豊後からやつて來た。そこで日本にゐるヤソ會士は全部揃つた。さうして恐らく日本における最初の華やかなクリスマス祭が行はれた。宣教師らはミサを歌ひ、また終夜キリストの一代記を語つた。トルレスとガゴとは前後六回ミサを行つた。信者らは非常に喜んで、夜を徹して會堂に留まつた。フェルナンデスがキリスト教の神のこゝとを讀んで聞かせる。疲れると、ポルトガル語の讀める例の少年が代つて讀む。それがすむと信者たちは、もつと話をしてくれといふ。鶏鳴のミサの時には、トルレスがミサを歌ひ、ガゴが福音書と書簡とを讀んだ。ほかのイルマンたちも應唱した。そ

れがすんで信者たちは一度家に歸つたが、翌朝のミサの時にはまた集まつて來た。ミサのあとで世界の創造やキリストの一生に關する説教が讀まれた。つゞいてガゴも説教をした。そのあとで信者たちの骨折りにより來會者一同が食事を共にしたが、その際信者のなかの年長者や會堂の近くに住む信者たちがいかにも嬉しさうに他の人の給仕をしてゐたことは、信者となつた日本人にのみ見られる現象であつた。

クリスマス祭の祭儀は日本の信者たちに非常な印象を與へた。それを見た宣教師たちは、かういふ營みに必要な品々の不足を痛感したと見え、それらを調達するためにダルカセヴァをインドへ歸すことに決定した。傳道のために有効な手段に對して彼らが如何に敏感であつたか、またそれを如何に重大視したかは、これを見ても解るのである。

儀式に對する喜びと聯關して、日本人の厚葬の風もまた彼らの注意に上つた。信者たちは神父と相談して、宣教師に與へられた廣い地所の一部にキリシタン墓地をつくり、死者のために非常に美しい墓を立てたのである。さうして葬儀の際には最も身分の高いものも熱心に參列した。トルレスはこれを見て葬儀にも力を入れ始めたのであらう。二年後の一五五四年十月に彼が豊後に送つた

書簡（一五五五年九月廿日豊後發シルヴァの書簡に收録）によると、山口の領主の重臣フェイスメの義兄弟であるアンブロシヨの葬儀には、トルレスが男女の信者二百餘人をひきゐて參加した。トルレスは白法衣と袈裟をつけ、ポルトガル語の出來る青年ベルシヨールは白法衣をつけて十字架上のキリストの像を捧げた。墓地は宣教師館から遠いので、高い棺や明るい提燈を列ねた莊嚴な行列は、山口の町中を練つて行つた。死者の親族も山口の町の大衆もこれを見て非常に感激した。未亡人は四日間貧民に食物を施與し、會堂にも多額の寄附をした。

がこのやうな儀式に對する喜びのほかに、もう一つ目立つたのは、日本の信者たちが貧民救濟のやうな愛の行に非常に熱心なことであつた。當時佛敎の僧侶たちは、キリシタン攻撃の一つの論點として、彼らは寺への布施が惜しいからキリシタンとなつたのであらうと言つた。それを聞いた信者たちは、トルレスの許へ來て、あなたが寄捨を受けないからかういふことを言はれるのである、だからこの非難を避ける方法として、會堂の門に箱を備へ、信者らの自由な寄捨を受けて、それをこの町の貧民に施與することにしようか、と提議した。これには勿論トルレスは同意したであらう。やがて信者たちは、月に一回貧民に給食することに定め、米の寄捨を受

ける箱を會堂に備へつけた。給食の日になると、いつもその箱は溢れるほどに充たされた。給食をはじめ前にトルレスは十誠の話をした。ダルカセヴァも數回その場に列席して、給食をやる信者たちの強い愛のこゝろに驚いたのであつた。「私は彼らと交はつて、自分が恥かしくなつた」とダルカセヴァはいつてゐる(一五五四年ガゴ發)。この信者たちの活動は山口の教會に多數の貧民をひきつけた。その中には信者となるものも少くなかつた。二年後のトルレスの書簡によると、信者たちは毎月三四回の給食をやつて居り、貧民の家を建てて計畫も出來たといふ。

かういふ信者たちの熱心は、早くから山口に治病の奇蹟を産み出してゐた。洗禮の水を飲むことによつていろいろの病氣が癒るのである。これはトルレスが飲ませたのではなく、熱心な信者が自分の信仰から出て飲ませたのである。かういふ治病の事績はこの時代のヨーロッパにも少くないであらうが、特に日本の地においては起り易かつたであらうと思はれる。これもまたキリシタンの信仰の傳播には役立つたのである。

このやうに、トルレスの下にある山口の教會では、信者たちが活潑に動いてゐた。そこに新來のガゴは一月餘り滞在し、再びフェルナンデスをつれて豊後にひき返し

た。この時シルヴァは山口に留まり、インドへ歸る筈のダルカセヴァはガゴに従つた。彼らは一五五三年の二月四日に山口を出發し、十日に府内へ着いたのである。

二 豊後における教會の建設

豊後では領主の大夫義鎮が、ダルカセヴァに託するために、インド總督への書簡を作らせた。その書簡には、總督の贈物に對する謝意や神父たちの好遇と保護との約束などに次いで、神父ガゴの在留によりインド總督との通信の道が開けたことの喜びを述べた。自分はこの通信を前から望んでゐたが、それを媒介する人がなく、これまででは實行出來なかつた。今はその人を得たから、ポルトガル王のために盡さうとする自分の意志を形に現はすことができる。自分の領内の人々をキリシタンにするために、もつと多くの神父を派遣して貰ひたい、といふのである。この書簡が出來上ると、ダルカセヴァは直ぐにそれを携へて平戸へ向つた。多分二月の十四日であらう。通譯の人をつれないので、手眞似で意を通じながら、平戸まで十八日かゝつたといふ。平戸ではもうシナ行の便船はなかつたらしく、彼がダ・ガマの船で出發したのはその年の十月十九日である。

ところで丁度右の書簡が作られてゐた頃に、三人の軍

で、たゞ祈つてゐた。

領主を殺さうと企てた重臣たちは、その家族や親族と共に、短時間の間に亡ぼされた。しかしその家に火を放つたので、町の被害は大きく、商家や武士の家が三百戸ほども焼けた。ガゴたちの持ち物の置いてあつた家も、周圍を火に包まれたのであるが、不思議に助かつた。夜になつて領主の使が來た。今日は大分心配したが、戦争は幸ひに止んだから安心して貰ひたい。貴下らの持ち物は焼けたことと思ふが、その損失は償ふから、これも放念を願ふ、といふ傳言であつた。

この騒ぎの後、ガゴたちは暫く或る寺院に住んでゐたが、その内山口のと同様な傳道許可狀を貰ひ、會堂のための敷地をも給せられた。ガゴたちの住む宣教師館の建築も早速開始され、同一五五三年七月二十二日マゲダレナの祭日の頃にはすでに出來上つてゐた。その建築のためには信者たちが車を以て石を運ぶといふやうな勞働に服し、勞働をなし得ない身分のある信者たちは、風爐を携へて來て湯を沸し茶を立てて勞働者たちをねぎらつた。また熱心な信者である一人の鍛冶屋は、他の人々が仕事を休んでゐる祭の日に、ふいごや炭を携へて來て宣教師館のために釘を作つた。さういふ風にしてこの會堂は、信者たちの熱心の上に建てられたのである。

臣が領主を殺さうとするといふ事件が起つた。それがこの書簡と關係のある事件であるかどうかは解らない。四年前に父の義鑑がやはり家臣に殺されたのであるから、さういふ家中のもつれの續きであつたかも知れない。とにかくダルカセヴァが出發してから二日の後、二月十六日に、その騒擾は激化し、府内の町は焼かれるであらう、掠奪が行はれるであらう、神父は所有品を匿さなくてはならぬと信者が告げに來た。ガゴは領主の身の上を心配してフェルナンデスを見舞にやつた。フェルナンデスが館に行つて見ると、武士が溢れるほど詰めかけてゐて、どれが敵、どれが味方とも解らなかつた。たゞ謀叛人を討伐する軍隊の統率者數人だけが識別された。領主と話すことなどは到底出來ない、自分の首さへも危ない、と彼は心配してゐたが、偶然領主が彼の側の戸を開けたので、彼は領主に會つてガゴの祝福と祈りの言葉を傳へた。領主の義鎮は非常に喜んで、謙遜な態度で、彼のための祈りを頼むと言つた。

ガゴとフェルナンデスとの運命もまた領主の運命にかかつてゐた。領主が倒れば彼らもまた倒れなくてはならぬ。で彼らは一切を神の手に委ねて待つた。町には驚くべく多數の武装した人が動いて行つた。ガゴたちは戸を閉ぢ家の中に籠つて、劍を喉に當てられたやうな氣持

領主がキリシタンを保護してゐるのであるから、宣教師たちに公然害を加へるものはなかつたが、しかし佛教の僧侶たちの迫害は執拗に行はれた。ガゴたちが寺院にゐた時には、度々議論を吹きかけ、嘲笑や罵詈を浴びせた。宣教師館に移つてからも、夜宣教師館に石を投げ込むとか、路上で石を投げつけるとか、といふ風なことをやつた。領主は投石のことを聞いて、その附近に住んでゐる武士たちに護衛を命じ、或は夜中使を出してガゴたちを見舞はせたので、それきり投石は止まつたが、佛僧たちの敵意は止まなかつた。しかしさういふ敵意にもかかはらず、日本人の信者たちは、自分はキリシタンであるといふことを街頭に立つて公言し、熱心にキリスト教の神のことを説いた。或る信者は、その住んでゐる町に信者のない家は一軒もない、といふやうな情勢をつくり出した。また或る身分の高い信者は、町から一里のところにあるおのれの家を招き、家族たち三十人を信者にして貰つた。盲目の少年の目が開き、重病の娘が忽ちに全快するといふやうな現象も起つた。かうしてこの一五五三年の秋までには府内とその附近に六七百人の信者が出来たのである。

けてゴアを出發した。その航海が豫定通りに運んだならば、一五五四年の八月には日本に着き、山口の教會を見ることが出来たであらう。しかるにインド洋では風が逆になり、暴風が起つたため、マラッカに着くのが非常に遅れた。マラッカでの彼らの非常な努力にもかかわらず、結局日本に向ふ季節風の時期を逸することになつてしまつた。マラッカの長官はこれに同情して、翌一五五五年の四月には、ポルトガル國王のカラベラ船を以て彼らを豊後まで届けようと云つてくれた。がこの航海も途中でずるまは行かなくなり、マネスやビレラが豊後についたのは一五五六年七月である。フロイスはさらに八年ほど遅れて日本へ來た。

四 山口の教會の活動とその受難

かうしてマラッカやシナ沿岸に日本へ向ふ新しい傳道的情熱が停滞してゐた間にも、日本における教會は着着として進展しつゝあつた。

山口の教會では、トルレスの許にあつて新來のシルヴァが熱心に日本語を學び、もとの琵琶法師のロレンソは服従・貧困・清淨のヤソ會士の生活を身につけ、青年のベルシヨールはポルトガル語の理解をすゝめた。こゝではミサも説教も日本語の本によつて行はれた。トルレス

三 シャビエルの死と日本への關心の高揚

以上のやうな日本の情勢をインドに報告しようとするダルクセヴァは、歸途廣東附近の上川島において、一年前の一五五二年十二月二日にシャビエルが死んだことを聞いた。遺骸はすでにマラッカに移され、そこでダルクセヴァの到着を待つてゐた。マラッカからはダルクセヴァが遺骸と共にインドに向ひ、一五五四年の復活祭の頃にゴアに着いたのである。ゴアでの感激は大變なものであつた。シャビエルが讚美せられると共に、日本への關心も高まつた。ヤソ會のインド管區長ベルシヨール・マネスは復活祭の後にはもう日本行を決意してゐた。その許可を得るために總督を訪ねると、總督はちやうどダルクセヴァのもたらした大友義鎮の書簡を讀んでゐたが、マネスの來意を聞く前に、何をしてゐるのだ、何故早く日本へ行かないのか、と切り出した。そこで早速事はきまり、マネスは神父ガスパル・ビレラと、イルマン五人、少年生徒五人を同伴することにした。そのイルマンのなかには後に日本史を書き残したルイス・フロイスもまじつてゐたのである。これらの人々はこの後日本傳道を力強く推進した傑物であるが、五月にはもう日本に向

は日本の風俗に適應することを心掛け、生れて以來の肉食の習慣を廢して日本人と同じ食物におのれを慣らしたほどの人であつて、日本人の氣持を好く理解し、それをどういふ風に扱へばよいかをも心得てゐた。従つて信者たちの信頼を得ることも非常であつた。

山口の教會の傳道の仕事は山口の町のみには限らなかつた。多分シルヴァが山口に來てから最初の冬のことであらうと思はれるが、山口から一里ほど距つた村で五六十人の農夫が信者になつた。皆讀み書きの出来ない人たちであつたが、その語るところを聞くと、學問あるものも口を出す餘地がないほどであつた。この信者らは絶えず集會を催はしてゐたので、トルレスは嚴寒の頃にもこの琵琶法師のロレンソを説教にやつた。ロレンソは洗禮を受けようとする人十二人を連れて歸つて來た。その中に齒のない老婆が數人ゐたが、さういふ人たちでもラテン語の主の祈りを暗記してゐて、まるで子供の時から知つてゐるかのやうであつた。さういふ調子で、その村の信者には主の祈りを知らないものもなく、その發音もポルトガル人に劣らなかつた。二年後の一五五五年にはこの村の信者は三百人になつたといはれてゐる。

シルヴァが來た次の年一五五三年のクリスマス前夜には、前年と同じやうに、氣高い男女の信者たちが會堂に

詰めかけて来た。夜の一時からシルヴァと日本の青年ベ
ルシヨールとが、代る／＼に日本語で、アダムより世の
終りに至るまでの六つの時期の歴史を讀んだ。初めの五
期は舊約の物語の摘要のやうなものである。(一)は人
間の創造、エデンの園の生活、アダムの墮罪など、(二)
はノアの洪水、言語の分裂、偶像崇拜の始、ソドムの滅
亡、ニネベのこと、ヤコブの子ヨセフのことなど、(三)
はイスラエルの子らのエジプトにおける奴隸化、モーゼ
による解放、律法の確立など、(四)はエリシヤやユヂ
スのこと、ネブカドネザルのことなど、(五)はダニエ
ルのことなど。そこまで讀んだあとでトルレスが曉のミ
サを行ひ、いろ／＼と歌つた。さうして晝のミサのあと
で、シルヴァは、第六期の初め、即ちイエス・キリスト
が、この世に來たことを讀んだ。かうしてミサや説教が
終つた後に、信者一同は宣教師館でトルレスたちと食事
を共にした。この日と翌日には信者たちは貧民への食
物施與を盛大に行つた。

キリストの誕生を祝ふ祭に對應して重要なのはキリス
トの受難と復活とを記念する復活祭であるが、この祭は
それに先立つ四十日間の斷食期を以てすでに二月の中頃
に先觸されるのである。その開始期は灰の水曜日である
が、シルヴァが山口に來てからの最初の灰の日は、一五

五三年の二月十五日で、ガゴはフェルナンデスと共にす
でに豊後に去つて居らず、トルレスが灰を祝福してその
意味を説明した。信者たちは、この四旬節の間に絶えず
斷食を行つた。毎朝食事をする習慣のある日本人には、
このことは非常に苦痛であつた。いよ／＼復活祭の週に
入り、キリストが十字架についた金曜日になると、トル
レスは十字架の祈禱を行ひ、信者らに十字架を拜せしめ
た。そのあとでシルヴァが受難の説教をした。これは恐
らくロレンソか誰かが通譯したのであらう。その翌々日
四月二日の復活祭の日にはミサの後に信者たちが盛大な
食物施與をやつた。そのため會堂に青い布を張つて墓所
のやうにしつらへ、祭壇の前には二本の蠟燭を立てた。
トルレスは祈禱をし信者らはそれに應唱した。それと同
じやうに翌一五五四年の四旬節にも信者たちは熱心に告
解を行ひ、またしば／＼斷食した。特に復活祭の週に多
は數の信者が斷食を行ひ、宣教師館に來て泊つた。夜は
信者たちの間で互に體験を語り合ひ、信仰を鼓舞した。
金曜日には多數の信者が會堂に集まつて、十字架の儀式
に列し、キリスト受難の説教を聞いた。この時にはシル
ヴァはもう日本語で説教したらしい。

信者たちが貧民施食の仕事を熱心に進めるに従つて、
貧民の中から信者となるものが多數に現はれた。一五五

四年の夏の頃には毎日十人、二十人の貧民が信者となつ
たといはれる。さういふ貧民の信者たちは、いろ／＼の
祈禱の文句を覚え、毎日會堂の門に來て祈禱を捧げた上、
満足して立ち去つた。多分さういふ現象や信者たちの熱
心な慈悲の行を見た結果であらう。都から來てゐた二人
の學僧がキリスト教に關心を持ちはじめ、トルレスの許
へ教へを受けに來て、遂に信者となつた。キョーゼン
(パウロ)とその友センニョ(バルナベ)がそれであ
る。二人はトルレスの助けを得て宣教師館の側に一軒の
家を作り、何處からも何物をも受けずに、たゞおのれの
手を以て獲たもののみによつて生きるといふ生活をはじ
めた。彼らの求めるのはたゞ徳のみであつた。二人は新
らしい植物の如く日々に伸びて行き、その謙遜な態度に
よつてトルレスを感服せしめた。キョーゼンは宗學に精
通した學者であつたから、やがて佛敎の誤りとキリスト
教の優れた點とを非常に明晰に把握し、それを人々に説
くやうになつた。ロレンソがすでにさういふ仕事を始め
てゐたのであるが、佛敎學者としてキョーゼンは一層突
き込んだ説教を始めたのであらう。

ほかにもう一人パウロと名づけられた信者が、この頃
新らしく出來た。五十を越えた相當に有名な人で、文章
を書くのが上手であつた。この人も、その妻が信者とな

つて以來非常に善くなつたのを見てキリスト教に關心を
持ちはじめ、遂に信者となつたのである。さうして日本
語の教義書をすべて書寫し、熱心に讀み、トルレスにい
ろいろと聞きに來た。自分でも數種の書物を書いた。徳
の高い謙遜な人であつたから、親戚・友人その他多くの
人が彼に導かれて信者となつた。

かういふ情勢の下に山口の信者たちは、一五五四年の
末には、貧民施食を毎月三四回行ひ、貧民の家の建築を
企てて募金をはじめた。信者の數はほど二千人に達してゐ
た。トルレスの宣教師館も著しく腐朽して來たので、新
らしい建築が企てられた。半年餘りの後、一五五五年七
月半ばには、幅九間餘、長さ六間半の新會堂が完成し、
ミサが行はれた。その秋にはシルヴァが豊後に移り、フ
エルナンデスが山口に歸つて來たらしい。

これらの經過を通じて、山口の教會における信者たち
の活動は非常に顯著である。トルレス自身も、「神の言
葉は弘まり、キリスト信者は増加し、告解・説教、その
他精神的な修練が盛んに行はれた。」と言つてゐるが
(一五五七年十一月七日府内發)、恐らくこの時が山口の教會の最盛期で、

それを作り出したのは、信者たちの盛り上げる力であつ
た。後年トルレスはマネスに向つて、「自分の全生涯
中、山口の六七年間のやうに大きい歡喜と満足とを以て

生きたことはなかつた」と述懐してゐる（一五五八年一月十日書）。その歡喜と満足とは、結局において信者たちの活動にもとづいてゐるのである。

しかし新會堂のミサが行はれて後、僅か三ヶ月にして、陶晴賢が嚴島において毛利元就に惨敗した。山口の領主の權威は地に墜ち、町の平和は失はれた。翌一五五六年に入ると、毛利氏の壓力が追々加はつて來て、毛利勢がなほ尼子氏と戦つてゐる間に、すでに山口の町は内訌の兵亂によつて焼かれた。「日本の戦争は火を以てする。家屋は木造で壁がないから、火は風に煽られて猛烈となり、リスボンと同じ大きさだといはれる山口の町全部が、一軒ものこらずに焼けた。國王の宮殿も、神父が非常に骨折つて一年前に建築を完成した會堂も、火を免れることは出来なかつた。」（同上又ネ）トルレスやフェルナデスが多年の艱難を忍びつゝ築き上げたものは、三四時間の中に悉く失はれた。領主や大身などの家臣であつた信者たちも、諸方へ散り／＼になつてしまつた。

やがて敵兵が來襲するだらうとの知らせに、信者が數人集まつて、トルレスやフェルナデスの身の上を相談したが、その結果は騒ぎが靜まるまで山口にはゐない方がよい、といふことであつた。火災後二三十日を経て、敵はいよいよ山口の町へ一里ほどの所まで迫つて來た。

五 豊後の教會の成長、慈善病院の經營

豊後の教會では、一五五三年以來、日本語の巧みなフェルナデスがガゴを助けて、佛僧に對抗しつゝ傳道をすゝめた。ところでこゝでは、領主の保護があるといつても、身分ある人、事理を解する人の歸依は少なく、僧侶・富者・武士などは、頑固に舊信を守り、現在に執着してゐた。信者となる善良な人たちは多く貧民であつた。そこでガゴは知識ある人々、身分ある人々の教化に力を入れようとしたのであらう。自ら教義書を編纂して日本語に譯させ、領主大友義鎮に獻じた。義鎮はそれを重臣たちの臨席してゐる前で讀ませ、大に満足してその書に署名した。別に寫本を作つて置き署名本は重臣たちに讀ませるといふのである。

かういふ教義書を作る際に、ガゴは、シャビエルの教義書翻譯以來その仕事にたゞさはつて來たフェルナデスのほかに、パウロといふ日本人の信者の助けを藉りた。このパウロは、山口で改宗したパウロ・ギョーゼンと同じやうに、佛敎の教理に精通した人であつた。改宗して以來は、佛敎とキリスト敎との相違點を明かに指摘し、佛の敎へが偽りでありキリスト敎の神の敎へが眞で

信者たちは頻りにトルレスたちの退去をすゝめた。トルレスも遂に、亂後には歸つてくるといふつもりで、退去を決意した。信者たちは集まつて別れを悲しみ、出發の日にも町から二三里のところまで送つて來たが、まるで死別れでもあるかのやうに、男も女も少年も皆泣いた。トルレスも涙を抑へることが出来ず、激しい悲痛と愛情とを表はして別れた。かうして豊後へついたのは五月であつたが、悲しみと愛情とのために遂に病氣になり、七月にマネスたちが到着した時にはまだ癒つてゐなかつた。

トルレスはこの時フェルナデス、元琵琶法師のロレンソ、青年ベルシヨールなど、山口の教會の幹部をすべて同伴した。信者を守る人はあとに残らなかつた。トルレスは間もなく山口へ引き返すつもりでゐたのである。半年の後、十二月には、大内義長やその他の大身から山口に歸るやうにとの書簡が來た。トルレスは早速領主大友義鎮の許可を求めたが、義鎮はまだその時期でないと言つて許さなかつた。翌一五五七年にはいよいよ毛利元就が山口を占領し、大内義長は自殺した。あとには毛利大友兩氏の直接の對抗がはじまり、大友義鎮自身が幾度かの戦争の試煉を経なくてはならなかつた。山口の教會を回復すべき機運は中々廻つて來なかつたのである。

あることを主張して止まなかつた。その説教は非常に巧みで、佛敎を非難しても聽衆は怒らず、福音を説けば聽衆はその眞理なることを納得した。惜しいことに三年後の一五五七年に病死してしまつたが、ガゴはこの人を非常に高く評價し、ヤソ會士たらしめようとしてゐたやうである。多分このパウロとの接觸の結果であらう。彼は早くからキリスト敎の用語の問題に注意を向けた。シャビエルの殘して行つた教義書は佛敎の用語を使ひ過ぎてゐる。それは虚偽の言葉を以て眞理を説くにほかならない。従つて誤解を生ずる。さういふ有害な言葉は捨て去り、新しい事物は新しい言葉を以て現はさなくてはならぬ。かういふ見地の下に彼は有害な言葉五十以上を見つけ出したのである。

身分あるものを教化しようといふガゴの希望は、一五五四年には幾分かづつ充たされたやうに見える。府内に近い或る村を治めてゐた人が信者となり、ガゴをその村に招いて、妻子その他村人を受洗せしめた如き、その一例である。中でも目ぼしいのは、府内から九里か十里ほど離れた朽網郷の「大家族を有する一老人」の歸依であつた。府内の一信者アントニオが朽網に行つて、信仰の力で病氣を癒したのが機縁となり、この「身分ある老人」を改宗せしめるに至つたのである。老人はルカスと

いふ洗禮名を受け、その地方の多數の人々を教化したが、翌一五五五年の初めには、ガゴを朽網へ招いた。ガゴは、その頃豊後にゐたフェルナンデス、説教のうまい日本人パウロ、及び右のアントニオを伴つて、四旬節の頃に朽網に赴いた。ルカスの妻、二人の息子、その他家族のみで六十人、家族の外のものを入れると二百六十人の人々が洗禮を受けた。この地方一帯の領主はケイミドノで、豊後の最も有力な大身二人の内の一入であつたが、この人も説教を聞いて非常に喜び、豊後の國主の許しを得たらば信者にならうと言つた。彼は信者の保護を約し、出来るだけ多くの人の改宗を希望したので、彼自身の家來で洗禮を受けたものも少なくなかつた。かうして朽網には、ガゴの希望するやうな、身分あるもの事理を解するものの歸依が實現されたのである。

しかし府内で信者となるものは依然として貧民や病人であつた。薬は洗禮の水だけであつたが、それが好く利き、十里二十里の遠方からさへも求めに來た。さういふ信者の間に「外形の行事」がいかに強い印象を與へるかを知つてゐたガゴは、いろ／＼の儀式を盛大に行ふと共に、信者の葬儀に特に力を入れた。先づ一般的に來世のことを理解させるために、毎年十一月の一ヶ月間は、毎日ミサを行ひ、死者の連禱を歌ひながら、棺を運び出

す。その棺は會堂の中央に常置し、四隅に四本の大蠟燭を立てて置くのである。この行事には勿論、死についての説教が伴つてゐる。さうして實際に誰か信者が死ねば、多數の信者が集まつて嚴肅な儀式を行ふ。棺を造ることによつて棺を造り、それを絹布で覆ひ、富める人を葬る場合と全然同じやうな鄭重な儀式を以て葬るのである。會堂を出る前に主の祈りを三唱し、信者らも合唱する。棺は四人で運び、十字架のキリスト像を携へた白い法衣のイルマンと、聖水や聖書を携へた青年とが、ラダイニヤの音頭をとり、信者たちがこれに伴唱する。兩側には高い燈籠に火を點じたものを多數立てて行く。かういふ葬儀の行進は日本人に非常な感激を與へ、最初の時には三千人の見物が集まつた。特に、貧しい人をもこの様に嚴肅に葬るといふことが、人々を感動せしめたのであつた。

が貧民と病人とを相手にする府内の教會は、遂にそれに適應した特殊な活動を始めるに至つた。それは病院の經營である。その機縁を作つたのは、一五五五年にガゴの許へ告解のため、またそれ以上に魂を救ふ道の修業のため、やつて來たルイス・ダルメイダであつた。彼はリスボンの富裕な貴族の子で、その頃三十歳であつたが、

マラッカ、シナ、日本を往來する航海者貿易商人たちの間ではすでに知名の人となつてゐた。このダルメイダが、この年にはダ・ガマの船で平戸へ來たのであつたが、ガゴの許に滞留してゐる間に、豊後の信者の状態を見、特に日本における産兒制限(間引き)の風習のことを聞いて非常に心を動かし、その救済のために病院設立の費用として千クルサドを提供しようと言ひ出したのである。その病院には、貧しい信者の乳母や二頭の牝牛などを用意し、貧民の嬰兒をどし／＼引き取つて哺育する。その嬰兒は入院と同時にキリシタンにしてさふ。そのため領主に請願して、嬰兒を殺さずに病院へ連れて行くやうにといふ命令を發布して貰はなくてはならぬ。さういふ計畫であつた。この計畫は早速領主の前に持ち出されたが、領主の大友義鎮も非常に賛成してそれを許可した。これは多分この一五五五年の九月頃のことであつたらうと思はれる。間もなくダルメイダは、ガゴやフェルナンデスに伴つて一度平戸まで行つたが、その秋に出帆するダ・ガマの船には乗らず、そのまま日本に留まつて病院の仕事を始めたのである。

ダルメイダはこの時すべての所有をヤソ會に捧げようと決心したらしく、まだ日本へ到着しない管區長マネスの一行のために、船を買ふ資金二千クルサドを贈ると

か、日本傳道に必要な畫像數種をリスボンへ注文するために、麝香に投資して百クルサドを贈るとか、いろ／＼ヤソ會のために肩を入れはじめた。

ダルメイダの最初の計畫は、恐らく一五五五年の末か翌年の初めには、緒についたのであらう。しかしそれが本式の病院として大仕掛けに建設されるに至つたのは、まる一年後のことである。その間にトルレス以下山口の教會の連中が豊後へ逃げて來た。管區長マネスの一行も豊後についた。府内の教會の形勢は急激に變つて來た。これまで府内の教會に貧民の信者の多いのを嘆いてゐたガゴは、平戸に移つてそこで新らしく傳道の仕事をはじめめることになり、府内の教會は山口で信者たちの愛の行を指導してゐたトルレスが引き受けることになつた。新來の神父ビレラ——このうち日本で非常に多くの仕事をすするビレラは、老いたるトルレスを助けつゝ日本の習慣や信者の取扱ひ方についてのトルレスの貴重な體驗を學び取るために、府内に留まつた。かうして府内の教會がトルレスのもとに一五五六年のクリスマスを盛大に祝ひ、この地方の多數の信者がこの愛の行の導師のまはりに集まつたとき、そこに新らしい機運の生じて來たことは察するに難くない。多くの財産をなげうつて愛の行に没頭しようとしてゐたダルメイダがそこにゐる。過去の

學識をなげうつてキリスト教的な愛の實踐に浸り込んだパウロ・キョーゼンも山口から來てゐる。さうして貧民や病人は會堂にあふれてゐる。だからこの時、何かが急に燃え上つて來たのである。その證據に、トルレスは、クリスマス後にビレラにつけて朽網に派遣したフェルナンデスを、數日後に急に呼び返して、領主義領と病院についての交渉をはじめてゐる。義領は病院の仕事の善いことを知つて居り、前にその建設の決心をしたのであつたが、貧民と接することを賤しむ氣持から、その時まで躊躇してゐたのであつた。そこでトルレスは早速實行に着手し、會堂の隣りの地所に大きい病院を建てた。その病院は二つの部に分れ、一は普通の外科と内科、他は癩病院であつた。治療にはグルメイダとパウロ・キョーゼンとが當つた。グルメイダは特に外科の手術がうまく、そのやり方を他の人にも教へた。イルマンのシルヴァなどもその一人である。パウロは漢方醫で、内科をひきうけ、遠く數里の山の中まで往診した。漢方藥の效能はトルレスたちにも認められた。

かうして豊後の慈善病院は、豊後の教會の著しい特徴になつた。

六 トルレスとビレラ、平戸の教會

インド管區長マネスは、その堪へぬいた試煉の大きさに驚嘆したのであつた。そのほかに彼は、シャビエルの通辯をして歩いたフェルナンデスから、シャビエルが日本において如何に多くの苦難に堪へ忍んだかをも聞いた。しかしさういふ苦難や戦亂の不安などは、この管區長には不向きであつた。フェルナンデスに案内されて豊後の内地を旅行したとき、木を枕にして蓆の上に寝ね、何の調味もなしに米の飯を食ふといふ日本の生活が、すでに彼を病氣にしたのである。漸く動けるやうになると馬に乗つて府内へ歸つては來たが、三ヶ月の間日々悪寒と發熱とに苦しむ、死ぬかと思ふほどであつた。そこで彼は、目下の日本が戦亂のために傳道に適しないこと、インド管區長としての職責が他にあることなどを考慮し、日本に來たと同じ年の秋に、豊後にゐたポルトガル船へ病中の身を託して日本を去つたのである。

しかしそれでもインド管區長が日本を視察したといふことは無駄ではなかつたであらう。その上神父ビレラとイルマン二人とが加勢に來たことは、教勢の擴張に非常に役立つた。まづ第一は平戸に日本で三番目の教會が出来たことである。平戸にはすでにトルレスが一年ほど滞在して、かなりの數の信者を作つて置いたのであるが、その後は手が足りなくて、ポルトガル船の入港した折に

シャビエルの死に刺戟され強い感激を以て一五五四年の五月に日本に向けインドを出發した管區長マネスの一行は、運悪く途中で二年餘の年月を空費し、一五五六年七月の初めに漸く豊後に到着した。この遅延はマネスには好い影響を與へなかつたであらうが、さらにその到着の當時、豊後は内亂で騒いでゐた。マネスらは日出の港に着く前に豊後の國主が殺されたといふ噂をさへ聞いたのである。着いてから確かめて見ると、十五日前に國主は謀叛の嫌疑のある大身十三人の家を焼きその一族を滅したとのことであつた。その謀叛人らは三年前ガゴが府内に落ちついた時の謀叛の殘黨であつたらしい。一夜のうちに雙方で七千人の人が死に、國主は府内から七里の島か山かに遁れてゐた。國內にはまだ戦争の懼れが充ちてゐた。その不安のなかで宣教師たちが少しも死を怖れず傳道に熱中してゐる姿を見て、マネスは「自分を恥ぢた」と云つてゐる。がこのやうな現前の不安状態のみでなく、彼はまたトルレスから山口の戦亂やその教會の没落の話を開かねばならなかつた。この「善き老人」トルレス、日本人に適應するために肉食を捨てて乏しい菜食に甘んじてゐるトルレス、迫害と戦亂とに堪へ忍んで漸く築き上げた教會を今や悉く失ひ去つたトルレス、この徳と克己とに於て完全な、模範的なトルレスを見て、

ガゴが出張するといふ程度に止まつてゐた。そこへマネスの着後間もなくガゴが派遣されたのである。平戸の領主松浦隆信は、日本への渡來の途中シナで停滞してゐたマネスに宛てて招請の書簡を發した。マネスは平戸へは向はず眞直に豊後へ來たのであるが、右の領主の招請を無視する氣はなかつたのであらう。ガゴは通譯のイルマン一人、信者一人をつれて平戸に移り、領主の許可を得て、地所を買ひ聖母の會堂を建てた。やがてこの後にはこの地の教會の重要性がだん／＼増して行くのである。

第二はトルレスがビレラに日本傳道の特殊のやり方、特殊の喜びを教へ込んだことである。一五五六年の降誕祭後に、トルレスはビレラにフェルナンデスをつけて朽網に送つた。ビレラは山奥の農村の人々の純眞な信仰や愛情にふれて、初代の教會における新鮮な信者を見るやうな思ひをした。ついで一五五七年には貧民病院の建設があり、愛の行にいそむ信者たちと共に働らいた。この年の四旬節の頃には、領主が五里ほど離れた城にあつて彼らを直接保護することが出來ず、キリシタンの宣教師らは殺され宣教師館は焼かれるであらうとの噂が頻りにあつた。宣教師らは死を覺悟し、夜も服装を解かず寝た。信者が數人、警護のために宣教師館に泊つたが、宣教師たちも順番に徹夜して警備に加はつた。しかしさ

ういふ不安のなかでも毎日の説教は缺かさず、金曜日と日曜日との鞭打の苦行を続けた。さういふ膽の据つた態度をもトルレスはビレラに仕込んだのであつた。やがて復活祭の週が来ると、戦亂の不安にもかゝらず、極めて盛大にさまざまの行事が行はれた。教會の人々のほかにこの冬を豊後で過ごした數人のポルトガル人もそれに參加した。そのお蔭で二つの合唱隊には五人づつのポルトガル人が加はることが出来た。オルガンの演奏や、この合唱隊の歌は多くの信者を熱狂せしめた。木曜日にはポルトガル人たちとともに日本人の男女約三十人が聖餐を受けた。これは初めての聖餐であつて、日本人の信者に與へた印象は非常に深かつた。希望者はもつと多數にあつたのであるが、トルレスは時機の熟したもののだけを選び出したのである。聖餐の時には、それを受ける者も受けない者も涙を流して泣いた。さういふ強い感激は宣教師たちにとつても「生れて以來初めての」経験であつた。その他いろいろの行進や鞭打の苦行や儀式などが一信者を感動せしめた。復活祭の前夜には、トルレスは非常に舞臺効果の大きい方法を用ゐた。繪布その他のものを以て莊嚴に飾り立てた祭壇、復活したキリストの像、火を點じた多數の蠟燭などを、初めは黒布で隠して置く。さうして會堂の中央の小祭壇で、合唱隊の一部に唱

はせながらミサを行ふ。それが終るとトルレスは引き込んでそつと服を變へる。合唱隊がミサを唱ひはじめ。「主よ、憐れみ給へ」の章が終ると、トルレスが高らかに「高きにある神に榮光あれ」を唱ひ出し、合唱隊がそれに和する。その途端に黒布が切つて落され、莊嚴な祭壇が會衆の前に現出するのである。信者たちはまるで失神したやうに打たれた。翌日の朝には、日本で作つた立派な天蓋の下に聖體を奉じて、美しい廣い庭園の中を行進して廻つた。天蓋は四人のポルトガル人が持ち、トルレスは晴れの服装に薔薇を飾つた緑の冠をつけてあとに従つた。次には香爐を持ち花冠を戴いたイルマン一人、その次にはいろ／＼な色の薔薇の花環を戴いたイルマン四人がオルガンにつれて歌ひながら續いた。天蓋のそばには、ポルトガル人二人が松明を持ち、最古參の日本人二人が燭臺に蠟燭を立てて持ち、さらに二人の白法衣を着たものが蠟燭を持つてついてゐた。この行列は庭を三度廻つたが、銃を持つたポルトガル人が十三四人ゐて、その度毎に聖體に對して祝砲を放つた。この行進もまた信者たちには非常な感動を與へたが、しかしそれによつて強い印象をうけたのは信者たちのみではない。一般の見物人も會堂の敷地内に充滿し、その騒ぎのために説教が出来ないほどであつた。ビレラはかういふ祭儀の日本

人に對する影響力をもはつきりと認識することが出来たのである。

からしてビレラが日本での最初の一年を送つた頃、一五五七年の夏に、大友義鎮は毛利氏に通じた秋月文種を破つて、博多の町を手に入れた。この戦勝に氣をよくした義鎮は、九月に宣教師館を訪ねて晩餐を共にした。その時彼は宣教師たちに俸祿を與へようと言ひ出したが、トルレスはそれを病院の費用にまはしてくれと頼み、その通りにしてもらつた。義鎮はまた博多に宣教師館と會堂とのための地所を與へようと言つた。これはトルレスが喜んで受け、早速その準備に取りかゝつた點である。それだけ宣教師の手がふえてゐたことは、ヌネス來朝の結果の第三の點として擧げてよい。トルレスは平戸にゐるガゴに博多の教會建設の仕事をやらせ、平戸には日本のことに慣れて来たビレラを置かうと考へた。ちやうどその九月にポルトガル船が二隻平戸に入港したので、トルレスは早速ビレラを手傳ひにやつた。この時から平戸におけるビレラの一年間の活動がはじまるのである。初めには船のポルトガル人たちを激勵して、日本人の信者に好き模範を示すために、いろ／＼の儀式を行つた。特にミサを歌ひながら小山の上の十字架に向つて行進する聖行列が人々の注意をひいた。行列の先頭には四十人の

ポルトガル人の銃手が加はつて、時々齊射をやる。船は旗を飾り、祝砲を打つ。笛とチャメラとの樂隊、蠟燭や炬火、高く捧げられた十字架、美しい法服をつけた神父たち。さういふ行列が日本の諸地方から貿易のために集まつて来てゐた人々に強い印象を與へたのである。

さういふ行事のあとでガゴは博多の地所を受取るために出發したが、あとに残つたビレラは、大友義鎮の軍が平戸を襲撃するであらうとの噂に嚇かされた。戦争が起れば日本人の信者の女子供たちは多數死ぬであらうし、貧しいものさへも掠奪を受けて安靜を失ふであらう。信者のある者は夜ビレラを訪ねてさういふ不安を語り、もしビレラが平戸に留まるならば、さういふ際には會堂に来てビレラと共に死ぬであらうと言つた。さういふ状況のなかにビレラは敢て留まり、平戸及びその附近の島々に傳道をはじめたのである。

戦争は幸ひにして起らなかつた。一五五八年の初めにはビレラの傳道も非常に調子よく進んで、二ヶ月間に千三百人の信者を作り佛寺三ヶ所を會堂に改造した位であつた。それには領主松浦氏の一族たる籠手田左衛門(ド・アントニオ)の協力があつた。籠手田氏は生月島、度島その他の小島の領主であつて、前から信者となつてゐたが、ビレラの勧めに従ひ、ビレラと共に村々を説教

して廻つたのである。しかし佛寺から佛像を運び出して焼き拂ひ、あとをキリスト教の會堂とするといふやうな過激なやり方は、佛僧や佛教信者の反動を呼び起さずにはゐなかつた。その先頭には一人の佛僧が立つた。彼はキリスト教を攻撃し宣教師と討論などもやつた。かうしてキリスト教徒と佛教徒との對抗がはじまり、右の佛僧は宣教師の國外追放を叫び出したのである。身分のある武士で、小山の上の十字架を切り倒したのもあつた。それに對抗して島のキリスト教徒は、更に多くの佛像を焼いたり海に投げ捨てたりした。遂に佛教徒の武士たちは領主に宣教師の追放を請願するに至つた。それがきかれなければ内亂が起りさうであつた。領主は遂に屈して、インド管區長ヌネスに對する約束にもかゝらず、ビレラを平戸から追放したのである。

かうして平戸の教會は挫折したが、しかし信者がなくなつたのではなかつた。籠手田氏の度島、生月島、その他平戸島の村々には依然として信者が多く、美しい會堂もあり、改宗した僧侶や熱心な信者による説教禮拜も續けられた。平戸の町では公然たる説教は禁ぜられてゐたが、信者のあることは右の村々と同様であつた。二三年後にルイス・ダルメイダが出張して來たときには、度島は「天使の島」のやうであつたし、生月島も住民の三分

の一は信者となり、六百人を容れる會堂を持つてゐた。ダルメイダは最大級の感激の言葉を以てこれらの信者の状況を報道してゐる。この地方は倭寇の活動以來海外交通の尖端に立つてゐたのであるから、さういふ現象が起るのも不思議はないのである。

がさういふ民衆の氣分と、武力によつて決せられる當時の政情とは、全然別のものであつた。新興の毛利氏の武力は、丁度この頃に北九州を不安と動搖に陥れた。ビレラが平戸を追はれて間もなく、ガゴもまた博多を逃げ出さざるを得なかつたのである。

ガゴが大友義鎮から博多の地所を實際に受取ることが出來たのは、一五五八年の復活祭の後であつた。彼はフェルナンデスと共に博多に赴いて宣教師館と會堂とを建築し、布教活動をはじめた。博多には山口から來てゐる信者もあつたが、中でも山口から移住して來たアンドレ・イといふ武士は、非常に熱心で、遂にエルサレムのエステパンのやうに殉教するに至つた。その子がヤソ會に入つてイルマンとなつたジョアン・デ・トルレスである。土地の人は嚴選して信者としたので、數は少なかつたが、富裕な貿易商も數人信者となつた。ところが一五五九年の復活祭の後に、大友氏に背いた筑紫氏の二千人ほどの兵が博多に來襲した。市民はその日防禦するにはし

たが、夜のうちに敵と折衝して町を引き渡した。大友氏の代官は殺された。フェルナンデスは信者の子供數人をつれ、會堂の所有品を携へて、平戸の船に乗つて逃げた。ガゴはイルマンのギリエルメ、一人の日本人信者、一人のポルトガル人と共に、海上二里ほどの所にゐた日本船に乗せてもらつたが、その船の船頭は、翌朝博多の町が筑紫氏に占領せられたのを見て、急に態度を變へた。宣教師たちの所持品は掠奪され、その生命も危険に瀕した。しかし四日ほどの後に船頭は彼らのことを占領軍に告げ、三艘の舟に乗つて來た武装兵に彼らを引渡し、兵士たちは船頭から掠奪品を取り上げ、更にその上に彼らの衣服をも剥ぎ取つた。が一里ほどの沖合まで歸つてくると、ガゴと識り合ひの有力者が來て、下着などを呉れた。博多の海岸へ上るとまた多くの兵士に取巻かれ、再び殺されさうになつた。その間に、一緒にゐた日本人の信者が、博多の町のジョアンといふ富裕な信者にこの事を知らせたので、ジョアンは占領軍の當局と聯絡をとりつゝガゴたちの救出に努めた。大抵のことは贈物や金で埒があいた。かくてガゴたちは、十日間ジョアンの家に隠れ、ついで他の信者の家に五十日間隠れてゐた。さうして數人の信者の奔走によつて、亂後三ヶ月、一五五九年の夏に博多を逃げ出すことが出來たのである。

豊後の信者たちはガゴの生還を見て非常に喜んだ。ガゴはこの強い愛と喜びとに接して、恰も「樂園にあるかのやうな」喜びを感じたといふ。この時にはガゴは、博多の會堂や宣教師館は焼き拂はれ、井戸までも埋めつくされたと信じてゐた。しかし會堂はたゞ壊されただけであつた。やがて博多の信者たちは自發的にこれを修繕して立派な會堂に仕上げた。信者たちが富裕なので、かういふ點は目立つて行き届いてゐた。二年後には教師の派遣を懇請して來たが、先づダルメイダが行き、ついでダミヤン、フェルナンデスなども行くやうになつた。

が一五五九年の夏には、平戸の教會も博多の教會も壊滅し、宣教師たちは全部豊後に集まつてゐたのである。この時トルレスは、布教の活動を萎縮させるどころか、逆に劃期的な飛躍を試みようとした。それは十年前のシャビエルの計畫に従つて日本の精神的中樞を突くことであつた。彼はビレラを起用して京都に派遣することにした。目標はさしづめ叡山であつた。元琵琶法師のロレンソが通譯として付き添ふほかに、府内の教會で養成せられた日本人青年ダミヤン、近江坂本の出身である信者デヨゴなどが同行した。インド管區長ヌネスが起草し、ロレンソ自身が日本語に譯した教義書を、彼らは携へて行

つた。
この一行が盛大なミサに送られて豊後を出發したのは、一五五九年の八月末か或は九月初めであつた。

第四章 ビレラの畿内開拓

一 ビレラ京都に来る

ビレラの一行の瀬戸内航海は、同船者からかなり苛められたやうであるが、しかし四十餘日を費して無事に一五五九年の十月十八日に堺についた。「堺の町は甚だ廣大であつて、大きい商人が多數にある。この町はヴェニス市のやうに執政官によつて治められてゐる」とビレラは報告してゐる。が彼らは數日間こゝで疲れを休めただけで、眞直に叡山をさして進んで行つた。先づ坂本のデヨゴの家に行き、前に豊後に連絡のあつたダイゼンボー（大泉坊か）を訪ねたが、その僧は既に死し、後繼者は無力であつた。叡山の座主に會はうと努めて見たが、これも成功しなかつた。そこで彼らは叡山をあきらめて京都へ入つたのである。

その頃の京都は、既に無力となつた將軍足利義輝や細川晴元と、下からのし上つて來た三好長慶やその家臣松永久秀との間に、争奪を繰り返してゐる場所であつた

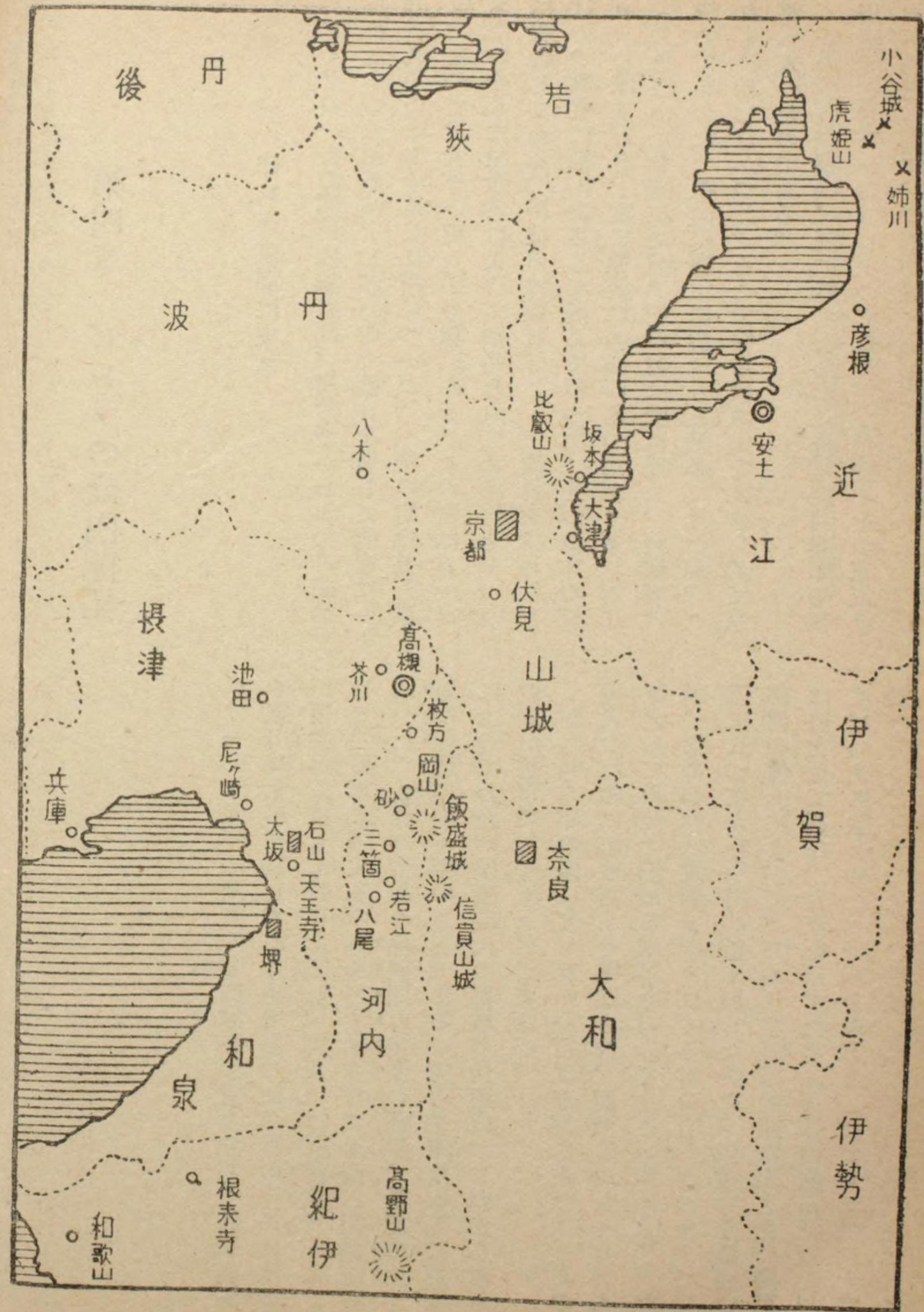
が、一五五九年は兩者の間に講和が成り立ち、將軍義輝や細川晴元が在京してゐる時であつた。春の初めには織田信長が入京して將軍に謁し、初夏には長尾景虎が入京して、將軍に謁するのみならず參内して天盃と御劍を賜はつた。これは信長の桶狭間の奇襲の前年、景虎の川中島の合戦の前々年のことである。秀吉や家康も既に舞臺に上つてゐた。戰國時代の群雄の角逐は、これから數年の間が絶頂であつたと言つてよい。

かういふ年の末にビレラの一行は京都に來た。度々の戰災のために町は著しく破壊され、薪炭も少なく食料も缺乏してゐた。泊める家がないので小さい家を借りたが、初めの内は説教を聞きにくるものもなかつた。で京都に入つてから一月半近く経つた後に、相當身分の高い佛僧の仲介によつて、ビレラは將軍義輝に謁した。將軍は彼を見て喜び、友誼を示すために自分の飲んだ盃を以てビレラに飲ませた。將軍を味方としたビレラは、十字架を取つて街頭に立ち、説教をはじめた。來集者は驚く

べく多数であつた。噂は忽ち市内にひろがり、このことを話し合はない家はないほどになつた。ピレラの借家へ教を聞き或は議論をしようとして押しかけてくるものも多数であつた。しかし教に従はうとするものは殆んどなかつた。

ピレラの報告によると、當時佛僧たちは狂人の如く市街を奔走して、キリスト教を罵り人民を煽動したといふ。それがどの程度に眞實であるかは解らぬが、とにかく京都の町の民衆が、この異様な新來者の教を容易に受けつけなかつたことは事實であらう。ピレラの住んでゐた町の住民は、煽動されたか否かはとにかくとして、ピレラがそこに住むことを好まなかつた。人々は家主に對してピレラを追ひ出すやうに迫り、家主もピレラに即刻立ち退きを乞うた。しかしピレラたちは行く先がなく、ぐづぐづしてゐた。すると家主は拔身の劍を携へて迫つて來た。人を殺せばおのれも死ななくてはならないといふ日本の習慣の下においては、この家主はおのれの死の危険を冒してまでもピレラの立退きを欲したのである。ピレラは白刃の下において少しく恐怖を感じた、と言つてゐる。

かくてピレラは一五六〇年一月二十五日、太陰曆正月の二日前に、「壁なくまた何ら寒氣を防ぐべきものもな



いゝ家に移つた。時は極寒で雪が多く、このあばら家での生活はかなり苦しかつたが、しかし信者となるものは追々ふえて來た。彼らはキリスト教を嫌つてゐる両親や友人や隣人などに隠れてやつて來た。附近の村々や山中からも來るものが多かつた。この間にも迫害は續き、多数の子供が石や土を投げつけるとか、嘲罵の言葉を言ひはやすとか、といふことは絶えなかつた。家主は酒屋であつたが、ピレラたちのために町の人々からホイコツトを食ひ、止むなく再三ピレラの立退きを要求したが、ピレラたちは懇請して猶豫を乞ひ、やつと三ヶ月間そこに留まることが出來たのである。

この苦しい三ヶ月の間に信者となつたものはほぼ百人であつた。その中にはケンシウといふ禪宗の師家などもあつた。この人は初めは傲慢な態度で、自分は悟りを開いてゐる、救ひを求めに來たのではない、たゞ暇つぶしに珍らしいことを聞きに來た、と言つてゐたが、改宗して非常によい信者になつた。この人によつて信者となつたものも少くない。なほほかに改宗した佛僧は十五人ほどあつた。公家の家來で信者となるものもあつた。しかし改宗しないまでもキリスト教の眞理であることを承認した佛僧もかなり多かつた。眞言宗の人は、キリスト教の神も結局大日如來と同じだといふ。禪宗の人は本分と

同じだといふ。浄土宗の人は阿彌陀と同じだといふ。神道の人はコキヤウ（古教か）と同じだといふ。皆もう一步の所まで来てゐるのである。かういふ傳道の仕事には元琵琶法師ロレンソの力が相當強く働いてゐるやうに見える（一五六〇年六月二日）。

（京都發ロレンソ書簡）

丁度その頃、一五六〇年の二月の末（永祿三年正月廿七日）に、正親町天皇即位の大典が行はれた。攝津芥川城にゐた三好長慶はその月の半ばに淀の城に移り、翌日軍隊をひきゐて京都に入つた。即位式の日には管領代として御門警固の役をつとめた。これは實權を握つてゐるといふことの表示であらう。家臣の松永久秀は京都の市政を掌握してゐた。多分この大典のあとのことであらうと思はれるが、ビレラは三好長慶の庇護を求めするために、その家臣に伴はれて長慶を訪ねた。それを見たものは、三好殿がビレラを捕縛させたと噂したが、そのあとで松永久秀からビレラたちに害を加へてはならないといふ布告が出た。異人追放の聲が高かつたにかゝらず、ビレラたちに害を加へるものがなかつたのは、右の庇護があつたからである。

織田信長の桶狭間の戦の行はれた一五六〇年の夏、ビレラは再び將軍を訪ねて京都居住の許可を請うた。許可は口上のみならず書面を以て與へられた。さうして、宣

教師に對し危害や妨害を加へる者は死刑に處する、といふことが公布された。その後は迫害も止み、信者の數が追々にふえて、會堂が必要となつて來た。そこで一軒の大きい家を買ひ、京都で最初の會堂を作つたのである。

この會堂には信者のみならず一般の日本人も説教を聞きに來た。改宗する勇氣がなくてもキリスト教を善しと認める日本人は少くなかつた。京都における最初のクリスマスも、信者たちの歡喜の下に行はれた。かういふ状態で一年ほど布教を續けてゐた間に、ビレラは京都における祭禮や佛教諸宗の状況を靜かに觀察してヤソ會の同僚たちに報告してゐる。祭禮では祇園祭・盂蘭盆會・端午の節句、佛教では時宗・眞言宗・一向宗・日蓮宗など。その状況は明治時代以後に残存してゐたものと同様である。さういふ雑多な信仰や習俗、千年の間に堆積し並立してゐた多種多様なものが、今や一律に「異教的なもの」として敵視せられる。そこで一年の後には再び激しい迫害が盛り返して來た。京都を支配する松永久秀やその家臣らは、佛僧その他キリスト教を排斥する人々に買収され、將軍の知らない間に、宣教師たちの追放を決定したのである。しかるにそれを知つた一人の大名が、將軍と謀つて、追放の實行に先立ち、一夜使を寄越して、宣教師たちは京都を立ち退き自分の城に入

つて佛僧たちの怒の鎮まるのを待つがよい、と言つてくれた。その夜は信者たちが宣教師のもとに集まつてゐたが、相談の結果この提案に従ふこととし、多數の信者たちが同伴して同夜直ちに宣教師たちを四里離れた城に送り込んだ。ビレラたちはそこに三四日の間潜伏した。しかしビレラはそのまゝそこに留まることを不可とし、京都に引き返して、信者たちと密かに協議の上、京都に留まるか去るかを決断するために四ヶ月の猶豫を請ひ、許された。そこでビレラたちは公然會堂に歸つた。それと共に迫害の形勢は緩和された。

丁度その頃に豊後のトルレスからビレラに對して堺の町に行くやうにとの指令が來た。堺の町からトルレスに對して教師の派遣を求めた結果である。ビレラはこの指令に従ひ、一五六一年の八月に、ロレンソたちを連れて堺に移つた。初めビレラは、クリスマスには京都へ歸つて信者と共に祝ふつもりであつたが、僅か一ヶ月後の九月に六角氏と三好氏との戦争が再燃し、京都はまた戦亂の巷となつてしまつたので、時々ロレンソを派遣するこゝとはしたが、自分はそのまゝ一年間堺の町に留まつてしまつた。

二 堺における一年間

堺は非常に富裕な町で、「ヴェニス」のやうな政治を行つてゐた。西は海、他の三方は深い堀で圍み、外との通路には門を設けて嚴重に監視してゐた。防衛力も十分であつて、どの大名にも對抗することが出來た。従つて當時の日本においては堺ほど安全な所はなく、他の國々が戰亂に惱んでゐる時にも、この町は平和であつた。敵對してゐる武士たちも、この町に入つてくれば、敵對をやめて仲よく禮儀正しく付き合い合はなくてはならない。もし紛擾を起して町の秩序を破ると、當局は直ちに町の周圍の門を閉ぢて犯人を檢擧し、嚴重に處罰する。だから彼らはこの町の中では紛擾を起さないのである。しかし町の中で穩かに付き合い合つてゐる敵同士は、町の外に半町も出たところでは出會へば、直ぐに劍を抜いて立ち合ふのである。

堺の町での布教は、ビレラが期待したほどうまくは行かなかつた。キリスト教信者は賤しい貧民に多いといふ先入見がこの町にひろまつてゐて、富裕な市民たちはその體面のために容易に改宗しないのである。最初説教をきいてキリスト教の眞理を認めた數人の學者もさうであつた。しかしそれでも半年の間に洗禮を受けたものは四十人位あつた。貿易のために堺の町に集まつてくる異郷人のうちで洗禮を受けたものはそれよりも多かつた。ビ

レラはさういふ信者たちと共に一五六一年のクリスマス
を祝つたが、祭具がないためにミサは行はなかつた。そ
の祭具が豊後から着いたのは翌一五六二年の四旬節の始
まる頃であつた。ビレラはミサの祕義を説き、聖餐のこ
とを話して信者を感動させた。信者たちの多くは金曜日
毎に鞭打を行ひ、告解をする。資格のあるものは非常に
熱心に、涙を流して聖餐を受けた。やがて復活祭になる
と、出来るだけ盛大にこれを祝ひ、京都からも数人の信
者が参加した。

かうして堺にも教會が出来た。それは他の地方におい
てのやうに急激に盛んにはならなかつたが、しかしまた
浮沈の激しい運命にも逢はず、畿内における安全な根據
地となつた。京都が危なくなると、宣教師たちは堺に退
き、こゝから畿内の諸地方に働らきかける。さういふ點
から見れば堺の教會の意義は決して輕くないのである。

ビレラは堺にゐる間に、根來の僧兵や高野山の勢力を
認識した。根來の僧兵は河内高屋城に據つてゐた畠山高
政と共に近江の六角氏に呼應して三好長慶と戦つたので
ある。阿波から來た三好の援軍は堺に上陸して南方の敵
に對抗したが、大小の戦争において常に勝利を得たのは
僧兵であつた。一五六二年の四月には、遂に僧兵たちが
三好の援軍の將である長慶の叔父を打ち取り、援軍を崩

壊せしめた。長慶は河内飯盛城で包圍せられた。それを
救つたのは山城の方から來た三好の軍勢、特に松永久秀
なのである。結局戦争は六月の末に三好、松永の側の勝
利に歸したが、しかしその間に根來の僧兵の示した實力
はビレラの關心を刺戟したらしい。彼はその背後にある
高野山や弘法大師のことに注意を向けた。こゝにも悪魔
の權化が見出された。

日本の強力な宗派が戦争に従事してゐるのに對して、
ビレラの指導する微力な教會は、その戦災に苦しむもの
の救助に努力した。京都の會堂は幸にして掠奪や火災を
脱したが、そこに集まる信者らは、毎月三人の當番を選
出して寄附金の募集や貧民の救助を續けたのである。ビ
レラの代りに京都へ出張したロレンソは、すでに山口で
かういふ經驗を積んで來た人であるから、實地の指導は
恐らく彼によつたのであらう。身分の高い富んだ婦人
で、その財産をこの仕事のために投げ出した人もあつ
た。これは京都中の評判になつた。

三 結城山城守の招請

その京都へビレラは一五六二年の九月にひき返したの
である。

聖母マリアに捧げられた京都の會堂で、九月八日の聖

母誕生の祭日に、彼は京都で最初のミサを行つた。これ
はビレラが三年來望んでゐたところであつた。そのため
に彼は信者たちにミサの意義を説明してその熱心を湧き
立たせた。ついで彼はクリスマス準備にとりかゝつ

た。告解や斷食が熱心に行はれた。クリスマスには告解
を行つた人々が非常な歡喜を以て參加した。聖餐を受け
る資格のある数人の信者は、聖餐の祕義を説き聞かされ
て、感動のあまり涙を流しながらこれを受けた。ミサも
盛大に行はれ、信者たちを恍惚たらしめた。さういふ信
者たちの態度には實際に素朴な誠實さがあつた。ビレラ
はこゝでも、新鮮な信仰に充たされてゐた教會の初期
を、人々が皆愛と信仰とにおいて一つになつてゐたあの
幸福な時代を、想ひ起したのである。

クリスマスの後、一五六三年になつてからは、ビレラ
は福音書のことを説教して、信者たちの信仰を進めて行
つた。それはイエス・キリストの生涯を説いて復活祭の
準備をすることでもあつた。かうして信者たちの信仰は
ますます固められて行つたが、新しい改宗者はあまり
なかつた。外から説教を聞きにくるものも初めのやうに
多くなかつた。京都で最初の四旬節が営まれる頃には、
それが全然なくなつた。ビレラは近郊の村々を説教して
廻り、漸く數人の改宗者を得たといふ程度であつた。し

かし信者たちは熱心に聖餐を受けることを望み、復活祭
の週の木曜日即ち主の晩餐の日には三十餘人の信者が聖
餐を受けた。復活祭の當日には九人の受洗者があつた。
その中には一人の高僧も混つてゐた。

京都の教會はかうして地味に育つて行つたが、復活祭
のあとでまた戦争が起り、僧兵の動きが激しくなつたの
で、ビレラは信者たちと協議の上、また堺の町に移つ
た。丁度そこへ奈良から結城山城守の招請が來たのであ
る。ビレラはこの「キリスト教の敵」の招請に幾分の疑
を抱いたが、しかし死を賭してもそこに行かうと決心し
た。それは一五六三年の四月の末であつた。こゝに畿内
傳道の一つの大きい轉機がある。

結城山城守は清原外記と共に當時の京都で著名な人物
であつたが、それは武力を握つたものとしてでなく、不
思議に深い智慧を持つたものとしてであつた。彼は佛教
の諸宗に通じてゐたのみならず、文藝・武略・占星など
のことも明るく、將軍、三好長慶、松永久秀などの
「頭腦」として活躍してゐた。従つてビレラの教會の取
扱ひなども主として彼の判斷によつて定まつたのであ
る。丁度この頃には叡山の衆徒が京都の治安を司る松永
久秀に對して三ヶ條の要求を提出してゐたが、その内の

二ヶ條はキリスト教宣教師の追放に關するものであつた。インドから來た神父は日本の神佛を攻撃する。それによつて民衆が信仰を失ひ秩序の破壊に向ふ怖れがある。また彼らの滞在した地は、山口でも博多でも、戦争によつて破壊された。京都を同じ運命から救ふためには、この神父を追放しなくてはならぬ。これがその要求の趣旨であつた。松永久秀はこれに對して、神父は外國人であり、將軍、三好、松永などの庇護を求めたものである。十分調査した上でなくては追放するわけには行かない、と答へた。さうしてその調査を結城山城守と清原外記とに委任した。京都の教會の信者たちはこの調査が彼らに不利であるべきことを覺悟してゐたのである。従つて堺に移つたビレラも、結城山城守をキリスト教の敵と見てゐたのであつた。

しかるに事情は逆であつた。京都の信者の一人デヨゴといふ人が、訴訟の用務で、當時松永久秀に従ひ奈良に來てゐた結城山城守に會つたとき、山城守はいろ／＼とキリスト教のことを聞き、それに同情の態度を示した。さうして更に詳しく神父からその教を聞きたいと言ひ出した。自分はキリスト教の弘布を支持する。事によれば自分も信者になるかも知れない。清原外記も同意見である。さういふ意味のことをも彼は言つた。事の意外な

に驚喜したデヨゴは、他の一人の信者と共に使者の役をひき受け、山城守の招請状を携へて堺へ來たのである。

堺の信者たちにとつてもこの招請は意外であつた。彼らはデヨゴよりも用心深く、謀殺のたくらみではないかとさへも疑つた。だから彼らはビレラの奈良行を止めた。ビレラはロレンソを偵察に送ることにした。ロレンソは死の危険などを問題とせず喜んで出掛けて行つた。こゝにこの元琵琶法師の目ざましい活躍がはじまるのである。堺の信者たちが彼の生命の安否を氣づかつてゐた間に、彼は當時の最高の知能といはれてゐた山城守と外記とを説き伏せ、遂に同心せしめるに至つた。二人に導かれて松永久秀にも會ひ、説教を試みた。山城守の招請は嘘ではなかつたのである。今はビレラが奈良に來て彼らに洗禮を授けなくてはならぬ。神父が松永久秀と近づきになり、その保護を得る望みもある。そのためにビレラを奈良へ招く再度の書簡を携へて、ロレンソは堺へ歸つて來た。

ビレラはロレンソと共に奈良へ行つて、彼を招いた結城山城守や清原外記に洗禮を授けたが、その際山城守の子左衛門尉、澤の城主高山圖書（右近の父）など數人の武士にも洗禮を授けた。さうして堺へ引返さずに京都へ歸り、そこで聖靈降臨節を迎へた。

四 河内飯盛地方の開拓

この事件は畿内における急激な教勢擴張の皮切りであつて、この後矢つぎ早にいろ／＼な事件が起つたせゐる。當時の最も近い報告書にも記憶の曖昧さを示すものがある。第一ビレラの奈良へ行つた時期が精確に記されてゐない。一五六三年四月二十七日附堺發のビレラの書簡の末尾には、すでに奈良からの招請と死の危険を冒してそこへ行かうとする決意とが記されてゐるから、この招請がほゞその頃であることは疑ひがない。しかしその後幾日にして奈良に向つたのであらうか。この事件を比較的詳しく書いたフェルナンデスの書簡（一五六四年十月九日平戸發）によると、初めに派遣されたロレンソは、四日以内に歸らなければ殺されたものと思つて貰ひたいと言つて出掛けしたが、四日過ぎても歸らなかつた。人々が心配して一人の信者を偵察に出すと、途中で、ビレラを奈良へ迎へるための馬と人を伴つたロレンソに出逢つた。ビレラはその人々と共に京都に歸つて、山城守、外記、及び三好長慶の親戚で教學に通じたシカイといふ武士に洗禮を授けた、といふことになつてゐる。これは奈良をさへ眼中に置いてゐないのである。フロイスの日本史では、ロレ

ソが堺に歸つてから四十日を経て迎への人馬が來たといふ。復活祭後一週間を経て京都を去り、聖靈降臨節には京都にゐたとすると、ビレラが京都を留守にしたのは全部で四十日位である。フロイスの記述の通りでは復活祭後五十日の降臨節に京都にゐることは出來ないであらう。

がビレラ自身の書簡から考へると、この奈良行は一五六三年の五月中のことと言つてよい。それから三好長慶が歿するまでは一年と二ヶ月ほどであるが、その間に長慶の根據地、河内の飯盛城を中心とした地方が急激に開拓されたのである。當時の日本には既に信長、秀吉、家康たちも舞臺に登場して居り、西方では毛利元就が尼子氏に止めを刺しかけてゐたが、しかしそれはまだ地方的現象で、中央の畿内を掌握する力は、今の大阪の東方、四條畷に近い飯盛城にあつた。従つてビレラは、いはば當時の日本の中樞に跳りかゝつたのであつた。

その過程がどうであつたかも知れぬが、その出来事は、ビレラに伴つて奈良に行つたロレンソが、その足で飯盛の地に赴き、三箇の伯耆殿、池田丹後殿、三木半太夫など七十三人の武士を教化したのであつたか、或は前記のシカイ殿が飯盛城に歸つてキリスト教を宣傳し、同僚や友人の間に歸教の氣運を醸した上でビレラ或はロレ

ンソを招いたのであつたか、はつきりしたことは解らない。がビレラ自身の報告するところによると、暑熱の頃になつて彼はロレンソを飯盛城に派遣した。そこでは多数の身分ある武士が洗禮を受け、會堂を建設した。ビレラもそこへ行つた。その後もしばしば訪れた(一五六四年七月十日)。この暑熱の頃は一五六三年の夏を指すと見るほかはない。しかるにその同じビレラは同じ頃に書いた他の書簡(一五六四年七月十五日)で、一五六四年に京都の異教徒たちのキリスト教に對する關心が薄らいだので、一人のイルマンを飯盛に派遣したと語つてゐる。このイルマンはロレンソに相違ないが、ロレンソは第一回の時に七十餘人、第二回の時にもまた同数の武士を信者たらしめた。ビレラはこの形勢を見て飯盛の地に赴き、多數の人に洗禮を授け、相當な會堂をそこに建設した。これを書いてゐるのは一五六四年の七月で、また新しく飯盛附近の岡山から招かれ、そこへ行つて會堂の如きものを設けようと思つてゐた時である。従つて前の暑熱の頃がこの年の夏でないことは明かだといはねばならぬ。して見るとビレラは、ロレンソの第一回の飯盛布教をも一五六四年のこととして記述するほどに、記憶が曖昧なのである。しかしこれはこの一年間に起つたことがあまりに多かつたといふことの證據であらう。飯盛附近の砂や三箇はこ

の間に信者の大きい群を持つやうになつた。砂は結城山城守の子の左衛門尉がゐたところ、三箇は伯耆守の居城で、當時は河に圍まれた中島であつた。右にあげた岡山は結城山城守の甥の彌平次がゐたところで、こゝもやがて信者の村になつた。これらの場所は、京都と堺との間の有力な根據地として、この後大きい役目をつとめるやうになる。

この新しい形勢を作り出したおもな役者は、片眼の僅かに見えるびつこのロレンソであつた。がロレンソが如何にその琵琶法師としての話術を巧みに使つたとしても、かうして急激に武士たちの間に改宗の機運が起つたことには、何か別のわけがあつたであらう。三好長慶の部下のこの武士たちは、前年根來の僧兵と戦つて手を焼いたのである。キリスト教の正面の敵である佛僧たちが、今や彼らにとつても敵となつた。この形勢の持つ意義は決して軽くはないであらう。しかし、それだからと言つて、武士たちが悉くさういふ氣分を持つたといふのではない。フェルナンデスの報告によると、飯盛城の佛僧や佛教徒たちは、ロレンソの大きい收穫を見て、或は議論により、或は侮辱や迫害によつて、改宗者たちを引き戻さうと努力した。その點はこれまでの京都の情勢と同じなのである。たゞ新しい機運が在來と異なつてあ

るのは、改宗したのが武士たちだといふことであつた。

彼らは一日、迫害者たちに對して武器を取つて立ち上つた。さうなると信仰が新鮮である者の側に力が出るのである。この形勢を聞いた結城山城守は、ビレラに勧めて、城の彼方一日程のところに住住してゐた三好長慶を訪ね、キリスト教の眞理を説かしめた。長慶はビレラを厚遇し、キリスト教にも同情を示した。さうして會堂や信者の保護を約した。それによつて飯盛の信者たちは安全になつた。ビレラはそこへ行つて新しく十三人の武士に洗禮を授けた。これは多分飯盛布教の初期のことであらうと思はれるが、それによつて見ると、覇權を握つてゐた三好長慶自身が、新しい機運のなかに立つてゐたと言へるのである。彼の「頭腦」の役をつとめてゐた結城山城守や清原外記の眞先の改宗は、三好長慶の態度と無關係ではないであらう。

山城守や外記は、改宗後、イエス・キリストの光榮のために大著述をやつた。日本の各宗派の起原・根柢・基礎、及び内容を説明してその虚偽を明かにし、終りにキリスト教を説いて、これこそ眞實の救ひの教であることを示したものであつた。これは武士たちの間に相當に影響があつたといはれる。一五六四年の夏には、京都の附近十六里以内のところ、五ヶ所の城内に會堂が建設さ

れてゐた。或は、京都の周圍十二乃至十四里の間に會堂七ヶ所を建ててゐた。

この結果は九州のトルレスを動かして、一五六四年の初秋に、神父ルイス・フロイスや、イルマンのルイス・ダルメイダの京都派遣を、決意せしめるに至つた。ところで、この新來のフロイスも、豊後で病院をはじめたダルメイダも、同じ期間に九州で新しい形勢を作り出してゐたのである。

第五章 九州諸地方の開拓

一 基地——豊後の教會

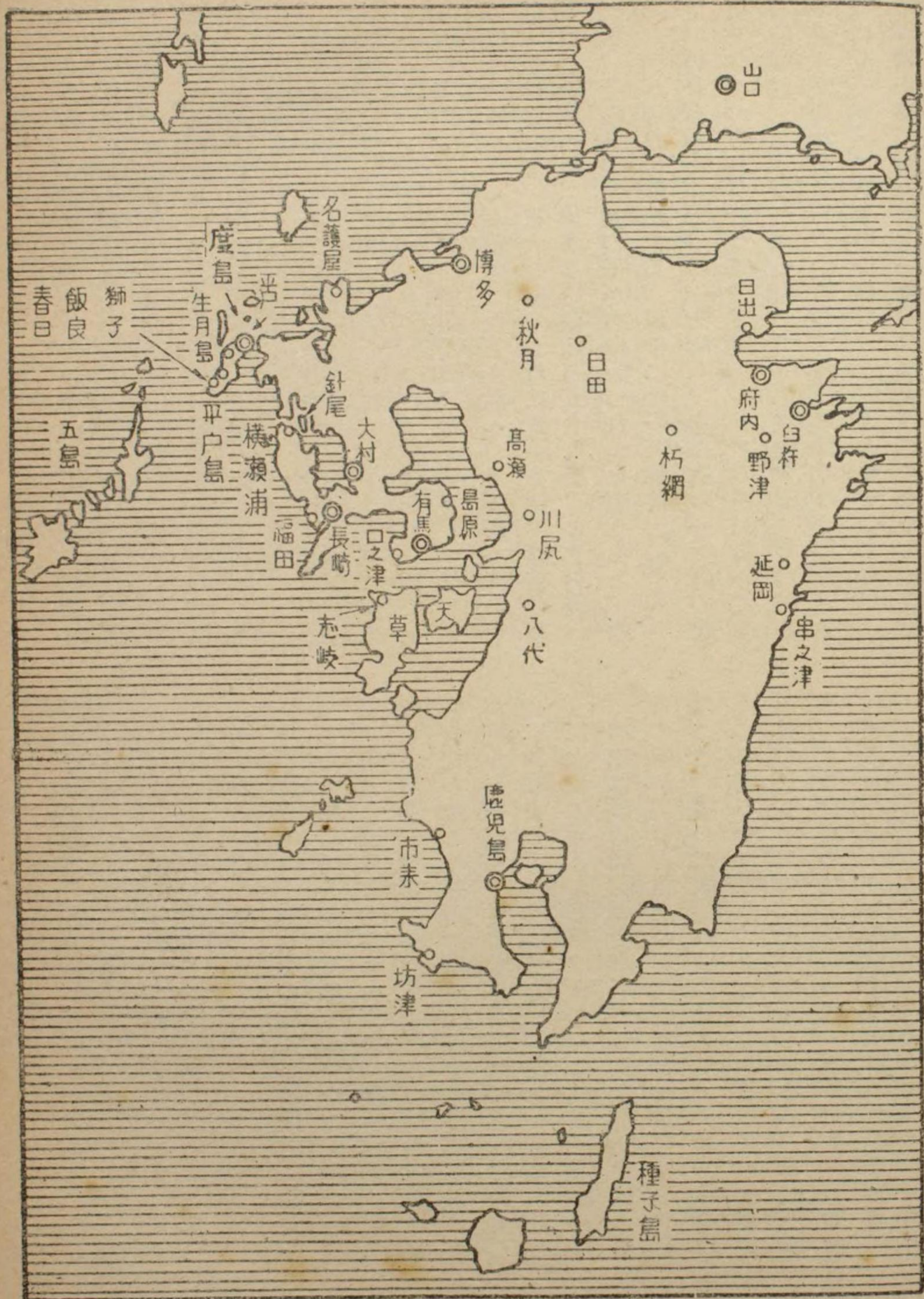
一五五九年の初秋に、ピレラやロレンソが京都に向つて出發したあと、殘餘のヤソ會士たちは全部豊後に集まつてゐた。二年後の一五六一年六月にルイス・ダルメイダが博多や平戸に派遣せられるまでは、豊後以外の地の信者は宣教師に接することが出来なかつた。それほど筑紫地方は不穩だつたのである。他方、京都や堺においても、ピレラはこの期間に一度もミサを行ふことが出来なかつた。従つてこの期間に教會が活潑に活動してゐたのは、ただ豊後だけであつた。

豊後の教會を最初に創設したガゴは、一五六〇年十月に、日本で病氣勝ちだつたイルマンのペレイラを連れて、マヌエル・デ・メンドサのジャンクに乗つて豊後を去つた。日本へ出来るだけ多くの宣教師を招かんがためであつた。

老齡のトルレスは、身體的にもすつかり日本の風土に

適應し、落ちついて日本布教の方針を考量しつゝ、日々
のミサや日曜日の告解などに精勵してゐた。日曜日の午
後を告解の時間に宛てたのは、信者たちの勞働を妨げ
ず、また日曜日を守る習慣を養ふためであつた。かうい
ふ努力の間にも彼の日本人に對する信賴はますます、高ま
つて行つた。自分はこれまで信者の國や不信者の國を多
く見て來たが、しかしかほどまで道理に従順な國民、か
ほどまで強く信心や苦行を好む國民を見たことはない。
日本には大いなるキリスト教會の起りさうな徴候があ
る。ただ足りないのは宣教師の數である。かう彼はイン
ド管區長に訴へてゐる。

豊後の教會の狀況も前とは少しづつ變つて來た。まづ
第一は、一五六〇年のクリスマスに、トルレスが信者た
ちに勸めて演劇をやらせたことである。信者たちの選ん
だ劇は、「アダムの墮罪と、贖罪の希望」「ソロモンの
裁判」「天使羊飼に救主の誕生を告ぐ」「最後の審判」
などであつた。これらの劇は非常に巧妙に演ぜられ、看



衆が喜んだといふ。翌一五六一一年の復活祭の時にも、いろいろな儀式が盛大に行はれたほかに、復活の日の朝マリヤ・マグダレナが墓所において天使に逢ひ、主の復活を使徒ペテロに報告する場面が演ぜられた。さういふ演劇を演ずる側にも、またそれを見て感激する看衆の側にも、舊約や新約の物語が相當詳しく浸み込んでゐたことは、推測するに難くないであらう。

第二は豊後の教會における児童教育の仕事である。児童の教育に主として當つてゐたのは、ピレラと共に渡來したイルマンのギリエルメであつた。彼はラテン語で主の祈り、アベ・マリア、使徒信經、サルヴェ・レギーナ（處女マリアへの祈禱歌）などを教へ、日本語で神の十誡、教會の制令、重大な罪、これに對する徳、慈善の事業などを教へた。集まる児童は四五十人で、ミサを聴いた後、その日の當番の子が右のいづれかを唱へると、他の一同がそれに應唱する。正午には一同會堂に集まつて、毎日右の内の三分の一を唱へ、その内の一ヶ條の説明をきく。それが終つて、丁度トルレスの手があいてゐる時には、二人づつ側へ行つて手に接吻する。そのあとで焼米か何かを少しづつ貰つて歸つて行くのである。夕方にもアベ・マリアの時刻に三十四五人集まつて來て、十字架の前に跪いて、一時間位かゝつて教はつたものを

皆歌ふ。日本人は記憶がよく、スペイン人よりも理解力がすぐれてゐる、とフェルナンデスが報告してゐる（一五六一一年十月八日）。これらのことのほかに、日本の文字について（一五六一一年十月八日）の教育は、京都から歸つて來た青年ダミヤンが當つた。児童らは十ヶ月の間に、寺小屋で二三年かゝつて教へるよりも多くを覺えた。

第三はキリスト教信者の葬式が制度的に確立されて來たことである。その係りはイルマンのシルヴァであつた。信者の間にミセリコルヂア（慈善の組）をつくり、貧しい信者の葬式の場合には、この組から助けを出す。信者たちはこの慈善の組の仕事を非常に喜び、死者の家が町から一里も一里半もある場合にさへ、男女ともに熱心に會葬する。かうして貧しい者をも富める者と同じやうに立派に葬ることが、日本人には強い印象を與へた。

第四は慈善病院の仕事がすつかり整ひ、日々の外來患者のほか、百人以上の入院患者を收容し得るやうになつたこと、従つて病院の建設者ダルメイダが傳道の仕事に専心し得るやうになつたことである。ダルメイダは日本で發心してヤソ會に入つた人であるが、その積極的な仕事の才能を認められたトルレスは、博多や平戸の教會再建の仕事にダルメイダを拔擢するに至つたのである。

二 平戸附近諸島の開拓

平戸の教會の再建のことは絶えずトルレスの心の中にあつたのであるが、いよく誰かを派遣しようとして考へてゐた矢先、一五六一年の五月下旬に、博多から信者である三人の富める商人が訪ねて來た。その中の一人は妻子その他家族をつれて來てトルレスに洗禮を乞うた。彼らの主な用事は宣教師の派遣を求めたことであつた。そこでトルレスは、平戸訪問を兼ねて博多へダルメイダを派遣することに決したのである。

ダルメイダは六月初に日本人青年ベルシヨールをつれて府内を出發した。博多では信者の熱心な歓迎を受け、十八日の間に七十人ほどの信者を作つた。その中には山口の領主の説教師であつた老僧も加はつてゐた。ダルメイダに病氣の治療を受けた者も少くなかつたが、奇蹟的に癒つた重病人が二人あつた。博多の信者のうち重立つた者二人は、ダルメイダの旅行に同伴すると云つて、止めてもきかなかつたので、一緒に博多を立つて度島に向つた。

度島は籠手田氏の領であつて、約三百五十人の信者があつた。ダルメイダはこゝで八人の人に洗禮を授けたが、それによつて全島に信者でないものは一人もなくな

つた。信者たちは會堂に行くことを非常に楽しみにしてゐる。會堂は美しい建物で、綺麗に掃除してある。そこには曾て佛僧であつた好き信者がゐて、神父の代りにキリスト教の教義を島の信者たちに教へ込んでゐる。従つて信者の大多數は、十分教義に通じてゐる。會堂には、もと佛寺であつた時と同じ収入があり、また貧民救助の同情金も集まるので、會堂の經營、貧民への施與、願拜者の接待などには欠けるところがない。ダルメイダは同伴者四五人と共に約半月の間そこに留まつたが、王者をも饗し得るやうな食物を供せられた。その間に、平戸から數人のポルトガル人がこの島を見に來た。彼らは信者たちの敬虔な態度やダルメイダに對する服従と愛、その他いろいろなることを見て非常に感心し、この島の信者は自分たちよりも遙かにすぐれた信者である、もしヤソ會の神父たちがこれらのことの五分の一をでも知つたならば、皆こゝに來ることを望むであらうと云つた。ダルメイダもこれに同感したが、特に彼を動かしたのはこの島の児童であつた。約百人の児童が教を受けるために會堂に集まつてくる。會堂に入つて聖水をとり、跪いて祈る様子は、まるで宣教師のやうであるが、唯一回教へただけでさうなつたのである。中でも二人の児童は、教義を高唱する度毎に、初めから終りまで身じろぎもせず、全

く入神恍惚の境に浸つてゐるやうであつた。のみならず彼らは教義と共にその解説をも共に覚え込んでゐる。兒童たちさへさうであるから、その親たち、多くの男女の信仰の厚いことはいふまでもない。ダルメイダはこの信者たちに非常に同情し、神の前で涙を流して、もつと多くの宣教師の來ることを祈つた。さうして毎日二回づつ説教し、二回づつ教義を授けた。

その内に度島西方四里ほどの生月島ウツギから迎ひの船が來た。ダルメイダの一行が島につくと、大勢の人々が岸に待ち受けてゐた。生月島の人口は二千五百ほどであつたが、その内の八百人が信者であつた。美しい樹木に取り巻かれた會堂は非常に大きく立派で、六百人以上を容れることができた。こゝでダルメイダは、人々の晝間の仕事の邪魔をしないやうに、早朝と夜との二回説教をし、子供たちには午餐後に教へることにした。説教には多數の人が集まり、婦人だけで會堂が殆んど一杯になつたので、男子は庭に蓆をしいて坐つた。到着の翌日ダルメイダは島内數ヶ所の小堂を見て廻つたが、いづれも元は佛寺で、景勝の地を占めてゐた。それらには度島の場合と同じく元の住僧がキリスト教徒となつて住んでゐた。ところでこの島には、信者の多い土地で會堂から遠く子供らが教義を學びにくることの出來ないところがあつた。

ダルメイダはそこに會堂を建てることを計畫したが、人は非常に喜んで工事に加はり、數日の間に作り上げた。丁度平戸には五隻のポルトガル船が來てゐたので、そこから額に入つた畫像とか帷帳とかその他教會用品を取り寄せた。ダルメイダはこゝで數日間説教し、教義を教へた。

生月島の次にダルメイダは平戸島西側の獅子、飯良、春日などの諸村を訪れた。獅子村では新築の會堂に祭壇を造つた。この工事のために生月から大工七人をつれ、他の信者たちと共に大きい船に乗つて行つたが、村では王を迎へるやうに道路を掃除して迎へた。こゝでも日中は勞働し夜と朝説教をするといふ仕方、ミサを行ひ得るやうな祭壇を造り上げ、この會堂を管理してゐる元佛僧に信者や兒童を導く方法を教へた。飯良村は全村こぞつて信者となつてゐたが、まだ會堂がなかつたので、信者たちによつて會堂を建てさせることにした。春日村でも同様で、海陸の眺望のよい清淨な場所を選んで直ちに會堂建築に着手した。これらの會堂の裝飾用品は皆ダルメイダが平戸から送つたのである。

これらの村々を巡回した後、ダルメイダは一度生月島に歸つた。そこへ籠手田氏から平戸の様子を知らせてくる筈であつた。籠手田氏の意見では、領主松浦隆信に

謁することなく、全然秘密に平戸で用を果すがよいとのことであつた。でダルメイダは、船で平戸に着くと、先づポルトガル船の船長を訪問し、ついでひそかに籠手田氏の邸に行つて、全家の款待を受け、夜半まで神のことを語り合つた。その夜はポルトガル船へ歸つて寢たが、翌朝船長と相談して船の甲板を飾りつけ、聖像の額を掲げて臨時の會堂を設けた。これらの畫像はやがて他の地方へ持つて行かれるのであるが、その前に平戸の信者たちに見せて置かうと思つたのである。この知らせによつて、籠手田左衛門、その弟、その家臣を初めとし、多くの信者が畫像を拜みに來た。ダルメイダはまた島々の信者にも日曜日に畫像を見に來るやうにと傳へた。その日には島々その他から多數の人が船でやつて來た。船長は帆布を張り、旗を吊し、數發の祝砲を發した。ダルメイダは船に充滿した信者たちに向つて説教をした。そのあとで船長は遠くから來た人々を親切に饗應した。その日の後にも、聖像が掲げてあつた間は、信者を滿載した船が諸方からやつて來て、ポルトガル船の中は復活祭の週の金曜日のやうであつた。平戸の町ですることの出來ない活動を、ポルトガル船の上でやつたのである。

しかしダルメイダは平戸の町に手をのばさないのではなかつた。着いて二日目の夜は町の信者の家に泊り、集

まつて來た信者たちに秘密に説教をした。また信者の戸別訪問をやつて神のことを説き聞かせた。従つて信者たちの近親で改宗するものもあり、約二十日の間に五十人が洗禮を受けた。その間にダルメイダは會堂再建の方法として、ポルトガル船の船長から、ポルトガル人の會堂の建設を願ひ出させた。領主はそれに對して、相談して見ようと答へた。この答が拒絶に等しいことを知つてゐたダルメイダは、直ちに教會の所有地にある一信者の家に祭壇を設けることを決意した。この信者は親切に隣り合つた二軒の家を提供して、その内の美しい方を會堂として、自分は會堂の番人にならうと云つた。そこでその家を改造し、必要なものを備へつけ、そこで毎夜祈禱文を唱へ説教をやつたが、集まるのはポルトガル人が多かつたので、領主の禁を破つたとの印象は興へなかつた。かうしてダルメイダは平戸の會堂を再建し、信者たちを喜ばせたのである。

八月下旬平戸を去るに際して、ダルメイダは生月島と度島とへ別れを告げに行つた。そのためには、土曜日午後訪ねて行つて日曜日午後歸つてくるといふ豫定を知らせてだけで、島の船は土曜日晝食の時刻にちやんと迎へに來て居り、島々では歓迎の手筈がちゃんと整つてゐた。島の信者の様子を見ようとするポルトガル人たちも

同行した。夕方生月島につくと、大きい炬火を持った出迎へが出て居り、直ちに會堂へ案内した。そこには多數の信者が待ち受けてゐた。ダルメイダは暫らく説教した後、兒童たちに教義を唱へさせて見學のポルトガル人を驚かせた。翌日曜日には早朝の説教や授洗のあとで九時頃から新築の會堂を見舞ひに行き、正午にそこから船に乗った。その時信者たちが別れを惜しむ有様は、石の心を持つてゐる者をも感動させるほどであつた。信者を収める者の手が足りない、といふことの最も具體的な姿がそこにある。度島には二時間で着いた。兒童たちは晴着をつけて濱邊に出迎へ、ダルメイダやポルトガル人たちを十字架の方へ案内しながら高らかに教義を歌ひ唱へた。十字架の前で祈りをした後、また教義の高唱につれて會堂に行くと、そこには信者が充滿してゐた。ダルメイダは説教をして、暫らく経つてから別れの挨拶をしたが、信者らは是非一晩位泊つてくれと云ひ、それを斷わるところでも非常に別れを惜しんだ。いよいよ船に乗る時になると島中の者が殆んど皆濱邊に出て来て、船着場までのかなり長い途を見送りながら、悲しみと涙の中に別れを述べた。この有様を見てポルトガル人たちは非常に感動し、世界を廻つていろ／＼珍らしいことを見たが、今日見たことほど話し甲斐のあるものはない、と云

つた。ダルメイダはそれに續けて、もしヤソ會の神父がこれを見たならば、このやうな良い信者と共にこの島で死にたいと祈るであらう、と書いてゐる。二年後に日本に來たルイス・フロイスが、一年間をこの島に送り、フェルナンデスが側で日本文法書を編纂するのを眺めながら、日本についての基礎的なことを學び取つたのは、決して偶然ではないのである。

博多へは風の都合が悪く、陸路を取つて非常に難澁した。そのためダルメイダは途中で病氣になり、博多へやつと辿りついた後にも癒らなかつた。博多の富める信者は馬二頭と附添ひの人や必要な物資を出して彼を豊後へ送り届けた。そこで彼は一ヶ月以上寝ついてしまつた。

三 ダルメイダの薩摩訪問

しかし一五六一年におけるダルメイダの活動はそれに終らなかつた。十月に病氣がなほると、トルレスは彼を府内附近の村々に派遣して會堂五ヶ所を建てさせた。十一月には薩摩の坊の津で冬越しをするマヌエル・デ・メンドサの一行が告解のためにやつて来て、ダルメイダの薩摩派遣をトルレスにすゝめた。島津氏からもトルレスにそれを求めた。トルレスは薩摩に歸るメンドサたちにダルメイダを同行させることにした。日本人青年ベルシ

ヨールも同伴したのであらう。出發は十二月であつた。ダルメイダの鹿兒島訪問は、シャビエル以來十三年目のことである。そこには到るところシャビエルの息のかつたものが残つてゐた。彼がメンドサたちと共に訪ねて行つた市來の鶴丸城がさうであつた。そこには城主の夫人・子・老臣ミゲルその他シャビエルが洗禮を授けた信者が十五人ほどゐて、豊後や京都における布教事業のことを熱心に聞いた。翌朝出發の前に城主の二子を初め九人の少年に洗禮を授けた。鹿兒島でもポルトガル人たちと共に領主を訪ね、トルレスの書簡を渡した後、日本人ベルシヨールと共に説教した。それから更にメンドサたちを薩摩西南端の坊の津まで見送り、船の乗組員たちの病氣の治療に努めた。さうしてその船の出帆の頃鹿兒島にひき返し、こゝに約四ヶ月滞在したのである。

ダルメイダの受けた印象では、鹿兒島は決してキリスト教にとつて不毛の地ではなかつた。なるほどこゝは佛敎の勢力が強く、説教を聞きにくるものは少い。しかしその佛僧のなかでシャビエルと親しくした人に接近していろ／＼話して見ると、話はよく解つた。シャビエルのときは通譯がなくて詳しいことが聞けなかつたが、今度はどうな問題でも解答を得ることができたのである。彼は領主に對してもキリスト敎のことを説明したが、その

とき領主は、殊勝な (Xuxona) ことだと云つた。領主のこの言葉と、ダルメイダの佛僧との親しい交際とは、人々を動かしてキリスト教にひきつけた。領主の側近である二人の身分の高い武士が歸依したのをきつかけとして、その夫人・家臣など、約三十六人が信者となつた。續いて他にも改宗する人が出て來た。ダルメイダはこれらの信者の助けによつて、遂に鹿兒島に會堂を建設するに至つた。

鹿兒島滞在中に市來の城へも行つた。十日ほどの間毎日二回説教し、そのほかに教義を教へた。信者でないものためには仕事のない夜を選んで説教した。城中の重立つた武士四五人が改宗した。その中の一人はキリスト敎の要旨を巧みに記述した。ダルメイダはその才能と熱心とを認めて、自分の持つてゐた日本語の教義書を寫させ、日曜日の集會の時にその書の一章を讀んで、それについて一時間ほど話させた。城主の長子も非常に俊敏で、短期間に教義・祈禱・信仰問答などを覚えてしまつたので、これにも同じやうに他の信者たちに教へさせるための準備である。かうしてダルメイダは城内に新らしく七十人の信者を作つた。信者らは城内に立派な會堂を建て、聖母の肖像を祀つた。城主自身は改宗しなかつた

が、キリスト教に對して極めて同情的であつた。

かういふ仕事をした後に、ダルメイダはトルレスに呼ばれて豊後に歸つた。薩摩の信者たちは心から別れを惜しみ、親切をつくした。ダルメイダが痛感したのは宣教師の手の足りないことである。この地に駐在する宣教師さへあればもつともつと信者がふえる。それが彼の確信であつた。

四 横瀬浦の建設

豊後に歸つて一月ばかり経つと、トルレスはダルメイダにダミヤンをつれて平戸や横瀬浦へ行くことを命じた。

ダミヤンは日本人の青年で、ビレラに附いて京都へ行つてゐたが、一五六一年に豊後に歸り、一五六二年に一人の老人と共に博多に派遣されて非常な働きをした。年は二十一歳であるが、非常に謙遜で、諸人に愛せられ、強い感化を周囲に及ぼしたのである。博多では二月の間に約百人の身分ある人たちが信者になつた。ダルメイダはこのダミヤンとベルシヨールと一老人信者とをつれ、博多駐在を命ぜられたフェルナンデスと共に、一五六二年七月五日に豊後を出發した。

一行は博多の四里手前でダミヤンの改宗させた貴人の

それにはトルレスのいろ／＼な苦心があつたらしい。平戸はトルレスが最初一年ほど開拓したところである。しかるに平戸の領主は一五五八年に至つて宣教師を追放してしまつた。平戸に入港するポルトガル船と豊後の宣教師たちとの間の聯絡も不自由になつた。そこでトルレスは平戸に代るべき港やキリスト教を保護すべき領主などを物色して、大村領に着目した。京都で信者となつた近衛家關係のバルトロメオや、山口で信者となつたトメ内田などは、その意を受けて大村氏に働きかけたらしい。他方トルレスはポルトガルの船長たちと聯絡をとり、平戸附近に良港を探させて、大村灣を西から抱いてゐる西彼岸半島の突端、佐世保へ入る入口のところの横瀬浦に見當をつけた。一五六一年の夏、ダルメイダが平戸やその附近の信者を訪ねた頃には、トルレスのさういふ計畫は相當に進んでゐたのであらう。ダルメイダが平戸の領主の禁教政策にもかかわらず、ポルトガル人の會堂を作るといふ形式で平戸の會堂の再建を強行したことは、この形勢と照し合せて見ると、よく理解することが出来る。果してその後平戸では、ポルトガル人に反感を起させるやうな事件が起つた。その機會にポルトガルの商船は一齊に碇をあげて平戸を去り、横瀬浦に移つた。領主の大村純忠は、豊後のトルレスのところへ、布

家に泊つた。この人はこの地方でこれまで信者となつた者のうちの最も有力な、最も身分の高い者で、博多の町でも非常に尊敬されてゐた。家族は皆信者となつて居り、玄關前の庭には美しい十字架が立ててあつた。こゝで一行は申分のない款待を受けたが、ダミヤンの人氣は大變なもので、博多に駐在する管のフェルナンデスを遙かに凌駕してゐた。翌日着いた博多においても事情は同じであつた。こゝの信者は皆商人で裕福であつたから、破壊された會堂や倉庫はすでに彼らによつて再建修理されて居り、また一行を待遇することも非常に厚かつたが、しかしダミヤンが平戸に行くことを聞くと、熱心にひき止めにかゝつた。ダミヤンは新しく信者となつた人の個性を見て、各人に向くやうに導いてくれた、皆が彼を愛してゐる、これから新しく信者を作つて行く上にも彼は是非必要である、などがその理由であつた。フェルナンデスはトルレスの命令に背くことの出来ない所以を説いて漸くそれをなだめることが出来た。

ダルメイダの一行は七月十二日博多を船で出發した。途中平戸でダミヤンとその伴の老人とをおろし、ダルメイダたちはそのまま南方十里、大村灣口の横瀬浦に向つた。

こゝで急に横瀬浦が布教活動の舞臺になつて来るが、

教のために非常に有利な申込をして來た。それは一人のイルマンを横瀬浦に派遣してキリスト教を説かしめること、數ヶ所に會堂を建て横瀬浦港をその周圍約二里の地の農民と共に教會に附すること、神父もしそれを欲するならばその地に非キリスト教徒を居住せしめざること、貿易のために来る商人には十年間一切の税を免ずることなどであつた。

この重大な申込が來たのはダルメイダの薩摩旅行の留守中であつたが、これを實現するには一五六二年度に日本へ来るポルトガル船を平戸へ入れず横瀬浦へ集中しなくてはならぬ。トルレスはダルメイダを呼び返してこの時期に間に會ふやうに、横瀬浦に派遣したのである。しかしダルメイダが平戸を通つた時には、すでにそこに一隻のポルトガル船が碇泊してゐた。

ダルメイダは横瀬浦に着いた翌日、すぐに數人のポルトガル人と共に大村灣の奥に領主大村純忠を訪ね、トルレスの名において右の申込に就ての協議をはじめようとした。純忠はダルメイダの一行を非常に款待した後、家老たちをして協議の衝に當らせた。その結果、前の申込の通りに種々の特權を與へることを承諾したが、しかし横瀬浦の所領關係は、領主と教會とが半分づつを領するのであると云つた。ダルメイダはこの點についてトルレ

スに回訓を求めると云つて、二日滞在の後横瀬浦に歸つた。しかし回訓が来るまでも宣教師館は建てはじめて貰ふことにしてあつたので、早速一軒の家が出来、そこに祭壇を造つて、ダルメイダは宣教師としての活動を開始した。そこへ不意に、豊後からトルレスがやつて来たのである。

トルレスはひどく老衰してゐるので、誰もこの困難な旅行が出来るとは思つてゐなかつた。そのトルレスをここまで引き出して来たのは、豊後に行つてゐたポルトガル人たちである。平戸の領主はポルトガル船を平戸へひきつけようとして、この年にはキリスト教信者を苦しめず、會堂の建立を許可した。その數日後にポルトガル人のジャンクと帆船とが入港した。これでは平戸をホイコットしようとする計畫は破れる怖れがある。その時豊後にゐたポルトガル人のうちに、二年前まで船長をしてゐた一人の貴族がゐて、その帆船は自分の叔父のものである、トルレスと一緒に行くつてくれるならば、それを平戸港から外へ出すことが出来ると申出た。トルレスも、他のポルトガル人や信者たちも、この考に賛成した。大友義鎮は少し躊躇したが、結局許可を與へた。かくしてトルレスは困難な旅途に上つたのである。彼が横瀬浦開港をいかに重大視してゐたかはこれによつても察すること

が出来た。

トルレスが近くまで来たとの意外の報に接したダルメイダは、十數人のポルトガル人と共に出迎へ、港外一里ほどの海上でその乗船に逢つた。トルレスの船が横瀬浦に入ると、ポルトガル船は旗をかゞげ祝砲を放つて歓迎した。陸上でも、早速儀式を行ひ得るやうな家の建築にとりかゝつた。ダルメイダは大村侯との交渉の結果をトルレスに報告したが、トルレスは、大村側の條件を認めて交渉の妥結を命じた。ダルメイダは直ちに大村に行き、五日間滞在して、領主からの書類を受取つて歸つて来た。領主はまた會堂建築のために材木を取る森を寄進し、多數の人を送つて寄越した。

トルレスが横瀬浦に來たことを知ると、平戸の信者たちは、二十人位づつ次から次へと告解のためにやつて來た。だからこの新しい港には平戸の信者の船がいつも三四隻づつ滞在してゐた。それと共に平戸に碇泊してゐた帆船とジャンク船とのポルトガル人たちも告解にやつて來たので、トルレスは容易に、また穩やかに、ポルトガル船の平戸退去を要求する事が出来たのであつた。

トルレスは豊後を出發する時にも、また横瀬浦へ來てからも、この新しい港に留まるつもりではなかつた。九月に豊後で恒例の通り領主の宣教師館訪問を受けるため

代理にダルメイダを派遣したりなどしたが、しかし十月の末頃ポルトガル船が出帆してしまへば、あとは平戸諸島を巡回し、博多に寄つて豊後へ歸るつもりであつた。だから九月中にダルメイダが豊後へ往復した機會に平戸のダミヤンを博多に移し、博多のフェルナンデスを横瀬浦へ連れ歸らせて、横瀬浦の教會の基礎固めに力を集中してゐる。がトルレスの仕事は横瀬浦に限るわけには行かなかつた。神父がゐないため告解や聖餐の機會を恵まれてゐなかつた平戸の島々の信者は、今やその機會を得るために二三十人づつの群になつてあとからあとから波狀的にトルレスの許に集まつてくる。横瀬浦は一時この地方の信者の中心地になつた。この熱心はやがてトルレスを引きつけた。先づフェルナンデスやダルメイダを派遣して準備させて置いて、一五六二年の十二月の初めに彼は平戸に移つた。こゝでクリスマス祝ひ、島々を廻つてから、博多へ出るつもりであつた。平戸は十三年前にトルレスが種を蒔いた土地であるから、彼にとつても特別の親しみがあつたであらう。こゝでは籠手田氏やその家族が心から款待してくれたが、領主もまたポルトガル人との交際の回復を考へてトルレスを厚遇した。クリスマスは非常に盛大であつた。そこから生月島へ廻つたのは一五六三年の初めで、こゝでも愛と信仰とに浸りな

がら一ヶ月滞在し、度島を廻つて平戸へ引上げたが、さして博多へ向つて出發しようとする、その道は塞がつてゐた。博多地方を領してゐた大友配下の武士がまた大友氏に叛いたのである。そこでトルレスは止むを得ず二月二十日に横瀬浦へ引返した。しかしその時にも、まだ、他の路によつて豊後へ歸るつもりだつたのである。それを不可能にしたのは、先づ第一には彼が庭で足を挫き、歩けなくなつたことであつた。がそれに加へて彼をこの地に釘づけにするやうな事件が、この四旬節の間に、次から次へと起つて來たのである。

横瀬浦は、歸つて來ない筈のトルレスが歸つて來たのを見て、「主の愛を以て燃えはじめた」とダルメイダは書いてゐる。一五六三年の四旬節は、こゝでの最初の(後になつて見れば唯一度の)四旬節であつたが、そのために豊後で人々を感動させた少年アゴスチニョや、博多にゐたダミヤンもやつて來た。説教のうまいパウロはもう前の年からダルメイダを助けてこゝで働いてゐた。信者の側でも、平戸諸島はいふに及ばず、遠く博多や豊後からさへ集まつて來た。さうして熱心な説教や告解や鞭打苦行が続いてゐた。

その間に事件は外から起つて來たのである。まづ第一は、四旬節の初めに、島原の領主から宣教師の派遣を求

める使者が来たことであつた。これが島原半島への布教の端緒である。前の年にトルレスはダルメイダをして有馬の領主有馬義直(義貞)を訪問せしめた。この領主は横瀬浦を領してゐる大村純忠の實家の兄で、純忠もその下に附いてゐたし、また教を聴かうとする意志のあることも聞えて来たからである。その時、有馬侯は戦陣にあつたので、ダルメイダはたゞ逢つただけであつたが、その家臣の一人で、また姻戚でもある島原の領主が、領地に歸つてから宣教師の派遣を求めらうと云つた。ダルメイダはそれをたゞ挨拶の言葉として聞いたのであつたが、それが本當になつて来たのである。トルレスは、直ぐには出せないが、七八日中には派遣しようと思つた。さうして四旬節の中頃に、ダルメイダと日本人ベルシヨールとを、復活祭までの豫定で島原に派遣した。領主はダルメイダを非常に厚遇し、有馬侯の夫人の姉妹であるその妻と共に、熱心に説教を聞いた。家臣たちで洗禮を受けるものは五十人位あつた。その間に有馬義直が出陣の途中島原に寄つたので、ダルメイダが訪ねて行く時、有馬侯は、有馬から二里餘の口の津に會堂を建てるため、トルレスの許にイルマンの派遣を求めつたりだと語つた。有馬侯のこの態度は島原の信者たちを一層活氣づけた。島原の領主も、ダルメイダが復活祭に間に合

ふやりに歸らうとする前日、その一人娘である四五歳の少女に洗禮を授けて貰つた。「この女は今日まで日本で信者となつたものうち、最も高貴な血統の最初の人である」とダルメイダは誇らしげに報告してゐる。

有馬義直の使者は實際に復活祭前にトルレスの許に來た。前年のダルメイダの訪問を謝し、おのれの領内に横瀬浦以上の大きい會堂を建てて布教をやつて貰ひたい、自分もそれを助けようと申入れたのである。使者の一人は口の津の領主で、その港に宣教師館を建てることを頼りにすゝめた。さうすれば自分や領民は直ぐに信者になる。それを見て有馬でも會堂を建てるやうになるであらう。さう彼は云つた。

第二に、島原の使者よりも少し遅れて、領主大村純忠が、筆頭家老の弟ですでに信者となつてゐるドン・ルイス新助その他多くの重臣を連れて、トルレスを訪ねて來た。酒樽六つ・鮮魚・猪一頭・錢三千などが手土産であつた。トルレスは領主を午餐に招き、七八人の武士と共に洋食を饗應した。身分あるポルトガル人五人が鄭重に給仕の役をつとめた。午餐後トルレスは別席で純忠に教をすゝめ、聖母の像を飾つた祭壇を見せたりなどした。純忠は直ぐに説教を聞くことを望んだので、フェルナデスがそれを始めたが、しかし深く理解するためには長

五 島原半島の開拓

い説教を聞く必要があると云はれて、翌日は晚餐後から夜半の二時まで熱心に聞いた。さうして氣持の上ではもう信者になつてゐた。翌日ドン・ルイスを使い寄越して、十字架を携へることやキリストに祈ることの許可を求めて來たほどである。

かういふ二つの出来事のあとで、横瀬浦での最初の復活祭の週が來た。各地の日本人信者のみならず船のポルトガル人たちも加はつて、これまで日本で見られなかつたほど盛大に復活祭が行はれた。ところでその復活祭の週に、大村純忠は、再びドン・ルイスなどを連れて横瀬浦を訪ねて來たのである。その目的はトルレスの同意を得て會堂附近におのれの住宅を建てることであつた。ポルトガル人と親しく交はり、またこの港を發展させるためには、なるべく多くの日をこの地で送らなくてはならないからである。この時彼はトルレスの請ひにまかせて、この新開の港の秩序と平和のための掟七八ヶ條を立札に書いて與へた。その第一條は、この港に住まうとする者は皆天主の教を聞かなくてはならぬ、聴くことを欲しないならばこの地を去るがよい、といふ意味の規定であつた。しかし彼には改宗の覺悟はまだ出來てゐなかつた。

丁度復活祭の頃に大村では高い地位にある二人の武士の間に争が起り、領内が沸き立つた。それに對する見舞を兼ねて、復活祭後間もなくダルメイダは大村に行き、そこに數日留まつた後、三人の「イルマンの如き」日本人(ダミヤン、パウロ、ジョアン)をつれて、當時有馬義直が出陣のため部下の集合を待ち受けてゐた所へ行つた。それは島原から二三里のところであつた。有馬侯はダルメイダを厚遇し、晚餐を共にした後説教を聞いたが、翌日口の津港宛の説教聽聞を命ずる書簡や、トルレス宛の領内布教許可の書簡などを與へた。ダルメイダは島原に數日留まり、海路口の津へ行つたが、こゝは日本全國から人々の集まつてくる港で、人口も非常に多く、住民の物解りも好かつた。ダルメイダはこの地の領主の家を迎へられ、その主君たる有馬侯の書簡を渡して、早速布教活動にとりかゝつた。十五日間教へた後洗禮を授けたものは二百五十人であつた。その中にはこの地の領主、その妻、子女などもはいつてゐた。これらの様子を見てダルメイダはこの地を重視しようと思へ、島原の信者を見舞つた後またこの地に歸る豫定で、留守を日本人パウロにあづけて、再び島原に行つた。

しかるに島原では、丁度この時佛僧たちの指揮する反抗運動が起つてゐた。島原の舊城址を會堂用地として宣教師に與へたのはよろしくない、ポルトガル人が来てそこに城を造り、この國を奪ふおそれがある、といふのがその主要な主張であつた。佛僧たちは諸地方の領主と親縁があり、相當の政治的勢力があつたので、島原の領主の態度は微温的であつた。ダルメイダは他の諸地方において宣教師を求めてゐるにかゝらず、特にこの地の領主の招きに應じて來てゐるのである、佛僧の妨害で布教が出来なければこの地を去るほかはない、と抗議したが領主は暫らく隱忍することを請うた。さうして領主の支配權内にある家臣や民衆に對しては、説教を聴くやうにとの命令を發した。それで聽衆は非常に多く集まり、受洗希望者は三百人に達した。この形勢を見た佛僧たちは、ダルメイダが着いてから十六日後に、説教の場に入して机上の十字架を破壊するといふやうな示威運動をやつた。次の日にも信者たちの戸口の十字架を畫いた貼り紙をはぎ取つて廻るといふやうなことをやつた。それらに對しては信者たちは、領主の指示に従ひ、無抵抗の態度を取つた。しかし更にその次の日、即ち聖靈降臨節の前々日に至つて、遂に事が起つた。島原から一里の他領に屬する二人の青年武士が説教を聞きに來たのであつ

たが、その一人が酒に酔つてゐて不穩當な質問をするので、他の一人がこれを制し連れ去らうとした。それに侮辱を感じた武士は、百人ほどの信者の集まつてゐる中で劍を抜かうとした。信者たちはこの酔どれから劍を奪つた。これがもとになつて、その武士の親戚友人が集まり島原に來て復讐しようとしたのである。目標はダルメイダが滞在し説教してゐた信者の家であつた。しかしこの争の理非曲直は明白である。島原側ではたゞに信者のみならず信者でないものも武器を取つてダルメイダのゐる家を護つた。聖靈降臨節の前夜はその襲撃を待ち受けて物々しい有様であつた。もし襲撃があれば少くとも五百人は死ぬであらう。キリシタンの到るところ必ず戦争があるといふ佛僧の宣傳は、それによつて實證されることになる。ダルメイダはそれを非常に悲しんだが、幸にして襲撃はなかつた。さうしてこの事件が逆に翌日の聖靈降臨節を盛大ならしめた。すでに受洗の準備の出來たものが、この日約二百人洗禮を受けた。

ダルメイダは次の日に領主が會堂用地として與へた舊城址に移る許可を求めた。そこは海へ突き出た突角の上にあつて村より離れて居り、佛寺からも遠いからである。領主はこれに賛成し、右の地所のそばの信者の持家へ移轉させた。ダルメイダはそこにダミヤンを殘し、再

びこゝに歸り來ることを約して口の津に向つた。かうして彼の口の津に重點を移さうとする計畫は破れ、島原と口の津とをかけ持ちするほかなくなつたのである。

口の津に歸つて見ると、日本人パウロは説教を聴きにくる者が非常に少數になつたと報告した。ダルメイダがその原因を探究して見ると、領主の家へ出入するのが窮屈であるからだと解つた。そこで彼は領主に交渉して、人々が氣樂に出入し得る家を求めた。領主はダルメイダに選擇をまかせた。ダルメイダの選んだのは、有馬侯が會堂用地として與へた地所にある大きい廢寺であつた。これを掃除し、縁を造り、席をしくと會堂になる。翌日早朝百人ほどの人夫が集まり、佛像を運び出して、一日中に立派な會堂に造りかへた。この會堂でダルメイダはパウロと共に再び活潑な活動をはじめ、二十日ほどの間に百七十人の信者を作つた。

六月の初めにダルメイダはまた島原に行つた。こゝでも舊城址に會堂を造る活動がはじめられた。領主は地所附近の七十戸を住民と共に教會に寄進し、會堂建築用の材木を寄附した。また敷地の地均らしのために二十日間毎日二百人の人夫を寄越してくれた。ダルメイダは地所内の大石を運び出して會堂の門前に埠頭を造らせ、相當の船がそこへ直接に着けるやうにした。

六 大村純忠の受洗

かうしてダルメイダが島原半島で活潑に開拓をやつてゐた間に、横瀬浦でも著しい事件が起つた。

トルレスは復活祭の後四十餘日、昇天祭の過ぎた頃に、大村に領主純忠を訪ねて、その地に會堂を造るやうにすゝめた。純忠は、自分もその希望を持つてゐる、會堂を造れば領内のものは皆信者になると確信する、しかしそのためには佛寺を破壊する必要があるが、佛僧の勢力は中々侮り難いから、未だその時期ではない、と答へた。その時には受洗の話は出なかつた。しかるにその後一週間ほど経つて、純忠は、洗禮を受けようといふ決意を以て二三十人の武士と共に横瀬浦にやつて來たのである。先づ彼はおのれの心事をトルレスに打ちあけ、その意見をきくために、日本語のよく解る人を寄越してくれと云つて來た。トルレスは一人の日本人を送つたが、純忠はそれと夜半まで語つた。彼のこだはつてゐたのは佛敎排撃の問題なのである。彼はその兄である有馬の領主の配下についてゐる。その兄はまだ佛敎徒である。従つて彼は佛像を燒き佛寺を破壊することが出来ない。しかし彼は、佛僧と關係せず補助をも與へない、といふことを約束する。さうすれば佛敎はおのづから崩壊する筈で

ある。その程度でも洗禮は授けて貰へるであらうか。これが彼の知りたところであつた。トルレスはそれに對して、彼が時機の熟した時その權力内の異教を破壊するといふ約束をするならば、またさういふ決意を持つならば、洗禮を授けようと答へさせた。純忠は喜んで、同夜直ちに家臣一同と共に説教を聞きはじめ、夜明に及んだ。トルレスは洗禮の準備が十分であることを認め、領主の身分にふさはしく盛大に式を挙げようとしたが、純忠は非常に謙遜な態度で、簡素に洗禮を受け、ドン・ペルトラメウとなつた。伴の家臣たちも洗禮を受けた。

これは一五六三年五月下旬、ダルメイダが口の津に會堂を造つた頃のことである。丁度同じ頃に東の方では奈良で結城山城守と清原外記とが洗禮を受け、新しい機運を醸成してゐた。どうしてこのやうに大村や島原のみならず畿内地方までが時を同じうして動き出したのかは、よくは解らない。しかし恐らくこの頃に、日本全國を通じて、戦亂時代の心理的な峠があつたのであらう。同じ年に少し遅れて三河の國に一向宗一揆が起り、それが徳川家康の一生の運の岐れ目となつてゐることも、決して偶然ではないであらう。

七 横瀬浦の没落

よい」と云つたといふ。フロイスが早速着手した仕事は、純忠が送つて寄越すその家臣たちに日々洗禮を授けることであつた。

丁度そこへ、七月の初めに、島原半島の大きい收穫の報を携へて、ダルメイダが新來の宣教師に會ひに來た。トルレスは早速この有能な働き手を、自分と船長ドン・ペドロ・ダルメイダとの代理として、陣中の大村純忠の所へ使にやつた。純忠は陣羽織にエズスと十字架の紋所をつけ、頸に十字架や數珠をかけて、熱心に教のことをきいた。その情景は陣中といふよりもむしろ宗教家の會合のやうであつた。そこから彼が七月半ばに歸つてくる時、トルレスは新來の神父ジョアン・パウティスタを豊後に派遣することとして、ダルメイダに同伴を命じた。一行は翌日すぐに出發し、途中からダルメイダだけは島原と口の津とを廻つて、豊後に赴いた。

七月の末になつて、大村純忠は神父たちやポルトガル人に會ふために横瀬浦を訪ねて來た。ルイス、フロイスや船長ドン・ペドロ・ダルメイダは非常にこれに款待し、鍍金の寢臺、絹の敷布團、掛布團、天鵝絨の枕、ポルネオの精巧な蓆、その他織物類を贈つた。純忠は熱心にミサを聴き、聖餐のことを學び、數日して大村へ歸つたが、夫人に對して改宗を迫り、また次の出陣の前に

大村純忠が受洗に際して佛寺破壊の問題にこだはつたのは、決して軽い意味のことではない。一國の政治的權力を握るものの改宗には、この問題がつきまとふのである。こゝに布教事業と政治的な争ひとの絡まつて來る機縁がある。純忠はこの點に用心したやうに見えるが、しかし「妬みの神」はその不徹底を許さなかつた。

純忠が洗禮を受けたのは、その實家の有馬氏と龍造寺隆信との戦争の前夜であつた。龍造寺隆信は肥前の少貳氏の部下であつたが、今やその主家に代つて肥筑地方に勃興し、有馬氏に壓迫を加へたのである。純忠もその兄の下について出陣したのであるが、その途中で、恐らく戦争氣分の結果であらう、摩利支天像やその堂を焼き拂ひ、そのあとに十字架を建ててこれを禮拜するといふやうな思ひ切つたことを敢行したのである。これを口火として領内の多くの佛寺佛像が焼かれた。この急進的な態度は、彼の心配した通り、領内に不穏な空氣をまき起した。謀叛が企てられたのはその頃からであつた。

横瀬浦では領主が受洗の時の約束以上に果敢に振舞ふのを見て非常に喜んだ。丁度そこへ、六月の末に、シナからドン・ペドロ・ダルメイダの船が數人の神父やイルマンを運んで來た。神父ルイス・フロイスもその一人である。トルレスは歡喜の餘り涙を流し、「もう死んでも

壯麗な會堂を建てようとして、場所の選定のためにトルレスを大村へ招いた。また丁度その頃に孟蘭盆會の廢棄を考へてゐた彼は、大村の先代の像（位牌か）の前に香をたく代りに、その像を焼却するといふことをやつたらしい。それらのことが謀叛の陰謀を熟せしめたのである。

大村の先代は庶子後藤貴明を残してゐたが、先代の夫人はそれをさし置いて養子純忠を夫人の實家の有馬家から迎へた。その養子が、先祖の祀りをしないばかりか、先代の位牌を焼いたのであるから、大村の家臣たちにとつては、庶子を擁して養子を誅すべき十分な理由があると思はれたのである。そこで謀叛人たちは、逆手を使って、會堂の建設、夫人の受洗、トルレスの招請などを家臣らの希望として進言した。トルレスが大村に來たとき、クーデターによつて一舉に害惡の根源を絶たうといふ計畫であつた。さういふ計畫に全然氣づかないドン・ルイス新助は、横瀬浦へトルレスを迎ひに來た。その儘トルレスが大村に赴き得たならば、計畫は成功したかも知れない。しかしトルレスは、側にヤソ會の神父がゐないため五年間行ふことの出来なかつた宣誓を、八月五日の聖母の祭日に、新來の神父フロイスの前で行ふ筈であつた。そのためになわざわ豊後から、日本でヤソ會

に入つたイルマンのアイレス・サンチェズが、ヴィオーラを弾く少年たちをつれてやつて来たほどであつた。従つて大村行はその後にするほかはなかつた。祭の當日ドン・ルイスは二度目の迎ひに来たが、生憎フロイスもトルレスも病氣で、式を辛うじて擧げた程度なので、大村行はまた二三日延ばした。この間に有馬の領主が改宗の意志を表明したとの報があり、三度目に迎ひに来たドン・ルイスも大村純忠が兄の改宗のことを相談したいと云つてゐると傳へたので、トルレスは「日本全國の門戸が開かれるであらう」といふやうな大きな希望を抱いて、いよ／＼翌八日早朝出發しようとして約束した。ドン・ルイスはその約束を携へて勇んで歸つて行つた。ところが翌日早朝、トルレスがミサを行ひポルトガル人に別れを告げて、さていよ／＼出發しようとしてゐた七八時頃に、様子が變になつて来たのである。トルレスは日本人を偵察に出した。ドン・ルイスは前日歸途を横瀬浦對岸の針尾の武士たちに襲撃せられ、殺害されたのであつた。大村でも前夜暴動が起り、大村純忠はドン・ルイスの兄の家老たちと共に近くの城に逃げ込んだのであつた。

この時の事情はよくは解らない。トルレスが大村行を幾度も延ばしたので、陰謀が洩れたと感じて急に事を起したのか、或はドン・ルイスの船にトルレスも同船して

ゐると見て襲撃したのか、當時の人にもよくはわからなかつた。がいづれにしても暴動の手際は悪く、トルレスも純忠も暗殺をまぬがれた。同日夕方、トルレスは碇泊中のゴンサロ・バスのジャンクに移り、フロイスはフェルナンデスと共にドン・ペドロの帆船に乗つた。他の人も、信者らも、それ／＼財物を携へてこれらの船に運れた。純忠も約四十日の後にはともかくも領主権を回復し大村に歸つた。さうして彼に叛いた地方の領主たちと對峙し得るに至つた。

しかしトルレスが大きい望をかけてゐた横瀬浦——アジュダの聖母の港——の運命は、この内亂を以て終つた。横瀬浦は騒ぎの當座直ちに焼かれたのではない。そこは抵抗せずに謀叛人に服従したし、また謀叛人たちもポルトガル船に留まることを求めた。純忠が大村を回復したとの報に接したときには、ポルトガル船は旗をあげ大砲を發射してこれを祝したし、横瀬浦を占領してゐた謀叛人も逃げ去つてゐた。フロイスも陸上で働いてゐた。しかし商船がシナに向つて出帆しようとしてゐた頃に、横瀬浦に最も近い所にゐた謀叛人の一味が、横瀬浦を奇襲して町や會堂や宣教師館を悉く焼き拂つたのである。丁度その時には有馬の武士（島原の信者であらう）が二艘の船を率ゐて救援に来てゐた。トルレスは敵が近

づいたのを見てその船に乗り、大きい望をかけてゐた會堂や純眞な信者の家が焼かれるのを見てゐたのである。これは宣教師たちにとつて非常な打撃であつた。急激に擴大しさうに見えてゐた布教事業はこゝで一時期頓挫したのである。

大村の内亂が世間に與へた印象もさうであつた。ダルメイダが八月下旬に豊後で報告に接した時には、大村純忠は殺され、有馬の領主は逃げ、ポルトガル船は横瀬浦を去り、會堂も町も焼失し、信者らは皆殺しにされた、といふことであつた。さうしてそれらは純忠が佛像を焼いた結果であり、有馬の領主もキリスト教の同情者として同様の運命に瀕してゐる、と噂された。これはほとんど皆事實に合はない誇大な噂であるが、しかしそれがキリスト教に對する反感を煽るやうに見えた。急いで横瀬浦にかけつけようとしたダルメイダは、途中でこれまでにない侮辱を受けた。また人々は満足さうに、「何處へ行かれるか、會堂は焼けたし神父は横瀬浦にゐない」と挨拶した。島原の對岸の高瀬まで来て、彼はやつと、純忠の死も、横瀬浦の焼失も、商船の退去も、すべて嘘であることをつたつたのである。島原でも信者たちの態度は少しも變つてゐなかつたが、しかし口の津まで来ると、政治的情勢が變つてゐた。有馬の領主の父仙岩（晴純）

は、この様な内亂の原因となつたキリスト教を、斷然禁止したのであつた。信者たちの信仰は崩れてゐなかつたが、しかしダルメイダは上陸することが出来なかつた。そののみか、仙岩の領内を通る間中、死の危険を感じなくてはならなかつた。緒についたばかりのダルメイダの島原半島布教も、一頓挫を來たしたやうに見えた。

こゝに政治的意義を帯びた大仕掛けなキリスト教排撃の最初の現はれがある。それは一國の領主が改宗して佛敎排撃をはじめるところが多い。ポルトガル人と貿易を營みヨローパの文明を取り入れようとする關心は、必ずしもキリスト教への關心ではなかつた。前者は當時の日本人にほとんど共通のものであり、従つて政争を捲き起すことなく實現し得られるが、後者は忽ち政争に火をつけるのである。この事情が平戸の領主に曖昧な態度をとらせ、豊後や有馬の領主に長い間改宗を躊躇させた。しかるに宣教師たちは、前者を後者のために利用し、前者のみの獨立な實現を阻まうとしたのである。この態度はいはば開國と改宗とを結びつけるものであつて、鎖國の情勢を呼び起す上に關係するところが多い。日本民族が國際的な交際の場面に入り込み、世界的な視圈の下におけるの民族的文化的の形成に努めることと、在來の佛敎を捨

ててキリスト教に轉ずることとは、別の問題である。前者は倫理的、後者は宗教的な課題であつた。ヤソ會士がたゞ宗教の問題をしか見ず、異教徒をキリスト教に化することをのみその關心事としたことは、ヤソ會士としては當然であつたかも知れぬ。しかしそのために倫理的な課題が遮斷されたことは、實に大きい弊害であつたといはなくてはならない。その一半の罪は、ヤソ會士を介してでなくては視闊擴大の動きが出来なかつた日本の政治家や知識人の方にある。無限探求の精神や公共的な企業精神の缺如が、こゝにもうその重大な結果を現はしはじめてゐるのである。

八 口の津と平戸

横瀬浦を焼かれたトルレスはダルメイダや新來のイルマン、ジャコメ・ゴンサルベスを伴つて、有馬の武士の船で、島原の對岸高瀬に向つた。そこは豊後の大友の領地で、豊後への往復の要衝とされてゐたところである。ルイス・フロイスは籠手田氏が迎ひに寄越した船で、既に一月前からフェルナンデスの行つてゐる「天使の島」度島タクシマに向つた。かうしてこの後の一年間、トルレスは島原半島の回復をねらひ、フロイスは日本布教者としての能力の獲得に努めたのである。

トルレスは一五六四年の夏まで高瀬に留まつてゐた。先づ初めにダルメイダを豊後に派遣して大友義鎮（この頃に宗麟と名を變へたらしい）に高瀬滞在の許可を乞ひ、地所、家屋、布教の許可などを與へられた。更に三ヶ月後には、領内のあらゆる人への改宗の許可、宣教師の保護、全領内の布教許可の三ヶ條を記した立札二枚を送られた。一枚は高瀬に立てるため、他の一枚は熊本クマノの川尻カハシに立てるためである。川尻へは豊後にゐたドリテ・ダ・シルバが派遣された。ダルメイダはクリスマスから復活祭まで豊後に留まつて、自分のはじめた病院の仕事や思ひ出の深いこの地の教會の仕事に久しぶりで没頭することが出来た。しかし復活祭の後には川尻で病んでゐるシルバを見舞はなくてはならなかつた。シルバは熱心に布教につとめる傍、日本語の文法や辭書を編纂してゐたが、過勞に倒れたのである。ダルメイダはもう手のつくしやうのないこの重病人を、その希望に委せて高瀬のトルレスの許に運んだ。病人は十日ほどの後に満足して死んで行つた。

き、彼は、その保護者である豊後の領主の許可を得るまでの代理として、ダルメイダを有馬の領主のもとに派遣した。ダルメイダは島原で非常な歓迎を受けた後、有馬へ行つて領主義貞に會つた。義貞は前年の騒ぎの時よりはよほど權力を回復してゐた。彼はトルレスが口の津へ來てよいこと、敵に對して勝利を得るまでそこに留まつてゐて貰ひたいこと、地所家屋はトルレスが來るまでもなく直ちにダルメイダに與へることなどを云つた。かうして口の津が回復されたので、トルレスは大友宗麟の諒解を得て口の津に移り、地所家屋の處理をはじめた。この地の信者たちは、十ヶ月に亙る禁教の間にも、少しも退轉してゐなかつた。トルレスはそれを見て非常に喜んだ。さういふ状態になつたところへ、一五六四年八月半ばに、ポルトガル船サンタ・クルス號が三人の新らしい神父、ベルシヨール・デ・フィゲイレド、バルタサル・ダ・コスタ、ジョアン・カブラルを運んで來たのである。

この年のポルトガル船は、トルレスの意に反して平戸へ入港した。その時の折衝をやつたのは、度島タクシマにゐたフロイスである。フロイスは度島に移つて以來、島の外へは出ず、過失によつて會堂を焼失するといふ不幸に逢つたほかは、純眞な信者に取り巻かれて平和な生活を送り、

説教や祭式を營む傍、六七ヶ月を費してフェルナンデスが日本文法書や語彙を編纂するのを眺めつゝ、靜かに日本語や日本人の氣質を學び取つてゐた。かうして一五六四年の四旬節も過ぎ、復活祭も終つたのであるが、その頃から平戸の情勢が少しづつ變つて來たのである。前にビレラが平戸から追放せられた時、背後の主動力であつた佛僧は、籠手田氏との争に負けて平戸から追放された。平戸の信者らも漸く動き出した。丁度その頃、七月の半ばに、帆船サンタ・カタリナと、ベルトラメウ・デ・ゴベヤのジャンク船とが、平戸附近へ來た。松浦侯はこれを平戸へ迎ひ入れようとしたが、船長らは神父の許可なしには入港しないと答へたので、松浦侯は止むなくフロイスの許に使者を寄越して入港の許可を求めた。その時の條件は、神父の平戸來住を船長らと協議しようといふことであつた。フロイスは必要を認めて許可を與へた。そこで平戸に入港した船長たちは、神父の平戸來住と新會堂の建築との許可を松浦侯に求めたが、松浦侯はいゝ加減なことを云つて許可をひきのばしてゐた。そこへ、二十七日遅れて、神父三人を乗せた司令官（カピタン・モール）の乗船サンタ・クルス號が着いたのである。フロイスは度島でこの報を聞くと、その平戸入港を阻止するため、直ぐに小船に乗つて出掛けた。トルレス

が前からこのことをフロイスに命じていたのである。サンタ・クルスはもう帆をあげて平戸に向ひつゝあつたが、司令官・船長ドン・ペドロ・ダルメイダはフロイスの申入れをきいて直ぐに引還さうとした。しかるに同船の商人たちはそれに反対した。サンタ・クルスはサンタ・カタリナよりも僅か二日後にシナを出帆したのであるが、途中暴風のために非常に難航して、一ヶ月近くも遅れてしまつたのである。だから一刻も早く馴染の港に着きたかつた。彼らの平戸入港が、キリスト教徒となつた大村純忠の敵に力を與へることになるといふ説得も、商人たちを動かすことが出来なかつた。でフロイスは、ともかくも船を平戸から二里ほどの所に停めさせ、三人の神父たちを伴つて島へ歸つた。さうして再び司令官を船に訪ね、神父を平戸に入れるのでなければ、平戸へは入港しない、といふ旨を松浦侯に傳へて貰つた。その結果、松浦侯は遂にフロイスに平戸の會堂再建を許可したのである。

これはビレラの追放以來失はれてゐた平戸の教會を回復することであつた。だからフロイスの平戸入りは出来る限り壯大になされた。サンタ・カタリナやジャンク船は大小の國旗を掲げ砲を並べてゐる。船長以下ポルトガル人たちは盛裝して舷側に並ぶ。陸上に出迎へた人々も

着飾つてゐる。フロイスとフェルナンデスが船で着いて上陸すると、サンタ・カタリナは祝砲を發し、信者たちは歡呼の聲をあげる。それから人々は行進を起し、松浦侯の邸に向つた。フロイスは船長たちやその他の人々と共に松浦侯に會つて、入國許可に對する挨拶をした。さうしてその足で籠手田氏を訪ね、會堂の敷地に廻つて、早速再建の計畫にとりかゝつたのである。かうして横瀬浦壊滅の一年後に平戸が回復されたのであつた。

新來の神父の一人フイゲイロは到着後七八日口の津にトルレスを訪ねて行つた。カブラルはフロイスと入れ代つて度島に赴いた。コスタは乗つて來たサンタ・クルスに留まり、ゴベヤのジャンクに泊つたフロイスと共に、ポルトガル人の告解を聞き、ミサを行つた。フェルナンデスは信者の家に泊つて會堂建築のことに當つた。かうして急に手がふえたので、トルレスは、ポルトガル船が日本を去つた後フロイスやダルメイダを京都地方へ派遣しようと考えたのである。

第六章 京都におけるフロイスの活動

一 フロイスとダルメイダの上京

ルイス・フロイスがトルレスの命令によつて京都のビレラに協力するため平戸を出發したのは、一五六四年の十一月十日であつた。

フロイスは日本へ來てから一年餘の間に、横瀬浦の没落や、度島での日本人の信仰生活や、ポルトガル船の貿易と布教事業との微妙な關係などを経験し、日本における宣教師の仕事のおほよその見當はつけ得たのであつたが、しかし日本の諸地方への旅行はまだ少しもしてゐなかつた。そのためか、度島のフロイスの許へはダルメイダが迎ひに行つた。ダルメイダもフロイスと共に京都地方へ行き、その地方の事情を調査してトルレスに報告する筈になつてゐた。しかしトルレスがさういふ計畫を立てた後の僅かな時日の間にも、ダルメイダの活動はめざましいものであつた。彼はまづ口の津のトルレスの許から豊後に派遣された。毎年の例になつてゐる領主饗應の

ためである。だから十月の半ばにはまだ豊後にゐた。その彼が、高瀬まで引き返して、そこから平戸へ陸路四五里を旅行してゐる。この道筋は多分初めてだと思はれるが、途中、博多から十一二里の所にある信者の町を訪ねたり、また海岸へ出て姪の濱とか名護屋とか信者のゐる町に足を止めたりしつゝ平戸へ行つたのである。そこには神父コスタがゐた。度島にはフロイスと共に神父カブラルがゐた。そこで平戸に半月餘り滞在した後、フロイスと共に出發したのであつた。

風の都合がよく、船は翌日の夜口の津についた。トルレスとフロイスとは横瀬浦の没落の時別れたきりであつたから、再會の喜びは非常なものであつた。しかし口の津にもたゞ四日留まつただけで、フロイスとダルメイダとは旅程に上つた。この時にも風の都合がよくその日の内に島原についた。この島原、ダルメイダの開拓した島原が、度島で一年を送つて來たフロイスを實に喜ばせたのである。港へ突き出てゐる舊城址——會堂の地所が、

比類なく優れた場所であつたばかりでなく、更に島原の街はこれまで見た最も美しい街であつたし、そこに住んでゐる信者たちは殆んど皆身分の高い人たち、富める商人たちであつて、一般に教養も高く、教義に對する理解能力も優れてゐたからである。フロイスはそれを見て、信者たちがこれまでミサを聞いたこともなく、たゞ日本人のベルシヨールやダミヤンに二三ヶ月説教を聞いただけであるのを残念に思ひ、「もし自分に委せられるならば、日本での最も良い仕事に代へて、この地に留まるであらう」と早速トルレスに書き送つてゐる。さうして熱心にトルレスの島原訪問をすゝめ、「もし貴下が八日間この地に留まられるならば、この町がこれまで滞在せられたどの地方よりも優つてゐることを認められるであらう」とさへも云つた。それほど島原での二日間はフロイスにとつて印象が深かつたのである。

それから二人は高瀬を経て豊後に行き、臼杵丹生島に大友宗麟を訪ねた。その後府内に歸り、船の談判をして出發しようとしたが、風の都合で一ヶ月待たされ、遂にクリスマスを府内で祝ふことになつた。いよく豊後を出發し得たのは一五六五年の一月一日で、堺に着いたのは一月二十七日であつた。途中の航海は相當苦しく、特に寒さが烈しかつたので、ダルメイダは病氣になり、堺

ビレラに逢ふと、まだ四十歳でありながら苦勞して七十の老人のやうに白髪になつてゐるこの日本布教者は、フロイスが遙々インドから日本布教に来てくれたことよりも、大坂の危険を脱したことを一層悦んだのであつた。

フロイスの京都入りを何故このやうに重視するかといふと、一つにはこのフロイスが熱心な宣教師であると共にまた比類なく優れた記者であつたこと、もう一つにはフロイスが到着してからの半年の間の京都が戦國時代の混亂の絶頂を具象的に展示して見せた舞臺であつたことによるのである。フロイスは日本に着いて間もなく横瀬浦の没落を自分の眼で見た。この事件は日本におけるキリスト教布教事業の運命をすでに象徴的に示してゐるといふことも出来る。その同じフロイスが、京都に入つて半年後に、最初の公然たる禁教政策に出會つたのである。いづれもキリスト教が権力と結びつくや否や間もなく起つたことであつた。

フロイスは京都に入つて、半年後には轉覆される運命にあつた古い傳統的なものを、相當詳しく見る事が出来た。彼が京都に着いた翌日は陰暦の元旦であつたが、ビレラは將軍への年賀を必要と認めてゐたので、彼もビ

の富豪日比屋の邸宅で寝ついてしまつた。

フロイスは五人の信者と共に翌日直ちに京都に向つて出發した。(五人の内の一人は多分ダミヤンであらう。) その夜は本願寺の門前町大坂に泊つたのであるが、當時大坂はすでにコチンの町よりは大きかつたといはれてゐる。フロイスはまだこの地の領主「妻帯せる坊主」が宣教師にとつての最大の敵であることを知らなかつたので、この夜はのんきに於いて、同船した異教徒の泊つた家に行き、款待を受けてゐたのであるが、夜半過ぎに火事が起つて、本願寺を初め九百戸を焼き拂ふといふ大火になつた。フロイスの取つた宿は焼けはしなかつたが、避難者を收容するためにフロイスたちの退去を求めた。信者たちは警備の厳しくなつた町でフロイスたちをかくまふのに骨折つた。本願寺の町であるといふことがこの時ひし／＼と身にこたへたのである。が一日目の目を見ない暗い二階にひそんでゐただけで、翌々日の早朝、氣づかれずに町の門から出ることが出来た。「私はこの時ほど道を遠いと思つたこともなく、またこの時ほど早く歩いたこともない。人の本性が自己保存を欲することはこの通りである」と彼は書いてゐる。この日は稀有の大雪で三四尺も積つてゐた。で歩くことが出来ず、漸く淀の川船を捕へて、一月の末日に京都に入ることが出来た。

レラに伴はれて正月の十二日に將軍に謁した。そのために出来るだけの盛装をも工夫した。十年前にマネスの連れて來た少年の持つてゐた金襴の飾りのある古い長袍、船室で使ひ古した毛氈、さういふものをフロイスは豊後から携へて來たが、ビレラはその毛氈で廣袖の衣を作り、金襴の長袍と共にこれを着て、その上に更に美しい他の衣をつけた。フロイスはキモノの上にポルトガルの羅紗のマントを羽織つた。進物はガラスの大鏡・琥珀・麝香などであつた。かうして二人は輿に乗り、二十人ほどの信者に伴はれて、多分今の二條城のあたりにあつたと思はれる足利將軍の宮殿に赴いた。將軍義輝は神父を一人づつ接見したが、フロイスはその際の義輝の印象については何も語らず、たゞその室の美しかつたことを言葉で極めて讃めてゐる。自分はこれまで木造の家であれほど美しいのを見たことがない。室は金地に花鳥の美しい繪で取巻かれ、疊は實に精巧なもので、書院の窓の障子も非常に好かつた、と彼は云つてゐる。次の間に下つたとき、神父の着てゐるカバは珍らしい、見せて貰ひたい、といふことであつた。次で將軍の夫人に謁する時には、間の襖を開いて、次の間から禮をした。義輝の母慶壽院尼も同じ構へのなかにゐたので、二人はそこへ行つて、大勢の婦人の侍坐してゐる前で盃を頂戴した。フロ

イスはこゝでも、その静かで、簡素で、きちんとしてゐる有様を、僧院のやうな感じだとほめてゐる。この人たちが半年後に悲惨な目に逢つたのである。

この年賀の翌日にビレラは、當時の實權を握つてゐた「三好殿」を河内の飯盛に訪ねて行つた。三好長慶は實は前年の夏、四十二歳で病死したのであるが、まだ喪を發してはゐなかつたのである。ビレラはそこから堺のダルメイダを呼んだ。

ダルメイダはフロイスと共に堺に着いた時直ぐ日比屋で寢込んだのであるが、その病中二十五日ほどの間は、父母の家にあつてもこれほど親切にされることはなからうと思はれるほどの愛情を以て看護された。日比屋の主人のみならず夫人も子女も晝夜心をつくした。やゝ快方に向つてから少しづつ説教なども始めたが、日比屋の娘のモニカの結婚問題について相談相手になり、父のサンチョを説いて正しい結婚の實現に努力したりなどもした。ビレラは呼ばれていよく飯盛に向つて出發しようとする前日には、日比屋の主人の茶の湯の饗應を受け、その珍藏する道具類を見せて貰つたのであるが、當時すでに高價なものとなつてゐた茶道具類はとにかくとして、茶の湯の作法そのものは相當に深い感銘をダルメイダに與へたやうに見える。客はダルメイダと日本人イル

る。日没頃船を上り、約半里の山道を輿に擔がれて、夜半近くやつと城に着いた。ビレラや信者の武士たち、その家族たちが、非常な喜びを以て彼を迎へた。

この飯盛山上の堅固な城は、今や畿内を押しへてゐる實力の所在地であつた。その城の内の身分ある武士たちが、ビレラやダルメイダに對して、恰かもその主君に對する如き尊敬の態度を示してゐるのである。こゝでビレラは一週間の間、武士たちの告解を受けた。その間にビレラやダルメイダは三好の殿を訪問し益を受けたといふのであるが、長慶は既に半年前に歿してゐるのであるから、誰に會つたのか解らない。嗣子の重存(義重、義繼)は未だ非常に若く、それに會へば何か氣づく筈である。或は三好三人衆の内の誰かが會つたのかも知れない。その時三好の殿はビレラやダルメイダと同じく跪坐し、二人が辭去する時にも禮を盡した、とダルメイダは記してゐる。ビレラが飯盛山下の三箇を訪れた後、奈良へ出て松永久秀を訪ねてゐるのは、或は形勢の變化に對する幾分の理解を示してゐるのかも知れない。

三箇は當時は大河に圍まれた半里位の島で、領主の伯耆守はダルメイダが日本で見た最も信仰の厚い信者の一人であつた。彼は日本全國のキリスト教化を希望してゐたし、また堺の町の會堂建築費として錢五萬を寄附しよ

マン(これはダミヤンではないらしい)と事務一切の世話をしてゐる信者とであつた。朝の九時に日比屋の家の横の小さい戸口から入り、狭い廊下を通つて檜の階段を上つたが、その階段はこれまで何人も踏んだことがないほど清らかで、實に精巧を極めてゐた。そこから二間半四方位の庭に出、縁を通つて室に入つた。室の廣さは庭より少し廣く、「人の手で作つたといふよりもむしろ天使の手によつて作られた」と思ふほど美しかつた。室の一方には黒光りのする爐があつて、白い灰の中に火を入れ、面白い形の釜がかゝつてゐた。この釜は高價なものだといふことであつたが、その爐や灰の清潔でキッチンとしてゐることがダルメイダを驚かせた。やがて席につくと食物が運ばれ始める。美味は驚くに足りないが、その給仕の仕方の秩序整然として清潔を極めてゐることは、實に世界に比類がない、と彼は讚嘆してゐる。食後主人サンチョの立てた濃茶の味も、出して見せた名物の蓋置きも、大した印象は與へなかつたらしいが、會席の氣分そのものは彼を敬服せしめたのである。

さういふ仕方で日本の生活を瞥見したダルメイダは、信者たちに送られて堺を出發し、堺から三里餘のところまで飯盛からの迎ひの船に乗つた。當時は寢屋川が淀川の支流でもあつたらしく飯盛山下まで船で行けたのである。いと申し出た。この領主の熱心が半年後には非常に役立つことになるのであるが、この時にもダルメイダの體の痛みを心配して、治療のために、輿を用意し十里の道を京都へ送りつけた。そこでダルメイダはまた二ヶ月ほど寢ついたのである。

二 日本文化の觀察

フロイスが京都に入つてから、日本文化に對するヤソ會士の考察が非常に精密になつたやうに思はれる。フロイス自身の報告のみならず、ダルメイダの報告などにもその傾向が顯著に現はれて來てゐる。ヤジロー、ロレンソ、その他九州の信者を通じて見てゐた日本を、自分たちの眼ではつきりと見直さうといふ要求が、強く働き出したのであらう。

フロイスが京都に着いてから二ヶ月足らずで書いた最初の書簡は、この地の風俗について報告するといふ書き出しではあるが、實際は日本文化の概観といふやうなものになつてゐる。先づ日本の風土から説き起し、衣食住の細かい特徴を述べた後に、この日本文化の中樞地方においては男女が通例読み書きを知つてゐること、身分あるものは皆禮儀正しく、教養があり、外國人に會ふのを喜ぶこと、外國のことは些細な點まで知らうとするこ

と、生來道理に明かであること、などを力説し、次で日本の政治組織に及んでゐる。日本は、首府京都に「公方様」と呼ばれる主權者がゐて全國を支配してゐたが、地方の諸侯の獨立のために今は六十六ヶ國に分れ、公方様はたゞ名目上尊ばれてゐるだけである。實力を持つた諸侯は互に他を征服しようとし、戦争の絶える時がない。京都にはもう一人、日本人が日本の首長として殆んど神の如く尊崇してゐる神聖な君主がある。神聖であるから足を地に付けることが出来ない。しかし非常に貧しく、たゞ進物によつて己れを支へてゐる。それに仕へてゐるのが公家で、頗る貪欲である。諸侯の間の争議の調停などをやると、多額の金を受ける。さういふ政治的支配者の衰微した状態に比べると、宗教的支配者の力は非常に強い。悪魔がいかに力をつくしてこの國民を欺いてゐるかがそれによつて察せられる。佛教は十三の宗派に分れてゐるが、その寺院は實に壯麗であつて巨額の収入を有してゐる。僧尼の數も非常に多い。殊に高野山の勢力、奈良の寺院の壯觀など、實に驚くべきものである。しかし悪魔の働きはそれだけに盡きない。山伏といふものがかんりの勢を持つてゐる。エンキ(善鬼)とか鳩の飼かとかといふものもある。悪魔は實に綿密に網を張つてゐるのである。さういふ網のなかで日本人は、死者を葬るた

めに實に壯麗な行列や儀式をやつてゐる。山口や豊後でキリシタンのはじめた葬儀の比ではない。更に悪魔は日本人に、生きながら葬る方法をさへも教へ込んでゐる。葬られるものはそれによつて法悦を感じ、送るものはそれを羨望するのである。フロイスは京都への途次伊豫でそれを見聞した。それ位であるから、生けるものに對する説教も非常に發達して居り、説教師は通例極めて雄辯である。その上坊主は一般民に對する態度が眞面目で優しい。パリサイ人の偽善を悉く備へてゐる。だから一般人はそれらの宗旨を信じ、そこに救ひの望みをかけるのである。

このやうにフロイスは日本に行はれてゐた宗教をすべて悪魔の仕業として説いてゐるが、これは當時のキリスト教宣教師に通有の傾向であつてフロイスに限つたことではない。たゞフロイスがその「悪魔の仕業」を綿密に考察し始めたこと、それが著しく目立つのである。半月後に書いた二度目の書簡にも、京都の寺院見物について報告してゐる。三十三間堂と東福寺とを見たのである。三十三間堂は今と大差はなかつたであらうが、フロイスは千體の觀音像の金箔の光が堂内に横溢してゐる光景に感服したらしく、もしこれが異教のものでなかつたならば、「天使の集團を想ひ浮べたであらう」と思はれるほ

どに、佛像の姿が美しかつた、と言つてゐる。東福寺は今と異なり堂塔の揃つてゐた頃のこと、規模は非常に大きかつた。フロイスはこゝでも、坊主の家や庭の清潔で整頓してゐることは、注目すべきだと言つてゐる。

更に五十日ほど後に書いた三度目の書簡にも、ピレラやダルメイダと共に案内された見物の記事がある。この時には先づ將軍の宮殿を見た。その中で、休養のために設けられた家といふのが、精巧なこと、清淨なこと、優雅なこと、立派なことにおいて、ポルトガルにもインドにも比類のないものであつた。この家の外の庭も非常に美しく、杉・柏・蜜柑・その他の珍らしい樹木、百合・石竹・薔薇・野菊・その他さまざまの色や匂の草花が植ゑてあつた。そこを出て廣い街路を通り、内裏へ行つた。

「日本全國の最も名譽ある君主、元は皇帝であつたが今は服従せられない君主」の宮殿である。この宮殿は入ることが出来ず、たゞ外から眺めただけであるが、庭は見物することが出来た。そこを出て西陣の繁華な街を通り、大徳寺へ行つたが、そこには大きい森のなかに、ゴアのコレジョの敷地ほどの廣さ、或はその二三倍もある僧院が、五十もあつた。フロイスたちはそのうち三つの僧院をさつと見物したただけであつたが、どの一つを取つても數日間見るに値するほどのものを持つてゐた。建

築は美しく、精巧で、清潔である。庭も非常に凝つてゐる。室内の裝飾は實に華麗であつた。フロイスたちもそれには驚嘆せざるを得なかつたのである。

その翌日は東山見物で、祇園から知恩院に廻り、そこで日本の説教師の説教の模様を視察した。その説教師は高貴な生れの四十五歳位の人で、容貌が非常に美しく、聲の質や、優雅な態度・動作など、確かに注目すべきものであつた。その説教の技倆も嘆賞に値した。これを見てピレラもフロイスも、日本の信者に對する説教の方法を改善しようと考へたほどである。

かういふ印象を記したあとでフロイスは力説する。シャビエルが云つたやうに、日本人は、文化や風俗習慣に關しては、多くの點において、スペイン人よりも遙かに勝つてゐる。日本に來るポルトガル人があまり日本を尊重しないのは、九州の僻地の商人や民衆にのみ接してゐるからである。さういふ民衆と都の人々とは實に甚だしく異なる。シャビエルが日本に眼をつけたのは確かに聖靈のうながしによるのである、と。

さう云ふ考のフロイスであるから、日本人が洗禮を受ける前にさまざまの難問を提出する所以をも理解することが出来た。ヨーロッパ人は物の道理などを考へる前にすでにキリスト教徒となつてゐるのであるが、日本人は

異教のなかで育つて来た後にキリスト教の眞なることを認めて改宗するものであるから、豫め教義についての理解に徹しなくては、洗禮を受けることが出来ない。従つて宣教師は、日本の八宗を學習研究し、その立場に立つてこれを反駁し得なくてはならない。またさういふ異教の影響から脱し得た人々に對しても、キリスト教の教義がひき起す疑問に對して十分に答へ得なくてはならない。フロイスはさういふ疑問として、次のやうな問題を列記してゐる。(一) 悪魔は神の恩寵を失つたものである。しかるにその悪魔が、人よりも大きい自由を持ち、人を欺くことも出来れば、正しい者を滅亡の危険に導くことも出来る。それは何故であるか。(二) 神がもし愛の神であるならば、人が罪を犯さないやうに作つて置く筈である。さうでないのは何故であるか。(三) 神が人間に自由を與へたのであるならば、最初に悪魔が蛇の形をして誘惑を試みた時、何故に天使をしてそれが悪魔であることを知らせなかつたのであるか。(四) 人の精神的本質が清淨であるならば、何故に肉體にある原罪によつて汚されるのであるか。(五) 善行をなすものが現世において報いられず、悪人の繁榮が許されてゐるのは何故であるか。等々である。ビレラはそれに對して、問者の満足するやうな答を與へた、といふのであるが、その

答は記されてゐない。それはさう容易ではなかつた筈である。なほその他にも、もしキリスト教の説く如き全能の神があるならば、何故今日までその愛を日本人に隠して知らしめなかつたのであるか、といふ問が掲げられてゐる。これも簡單には答へられなかつたであらう。フロイスもその困難ははつきりと認めてゐる。しかし日本にある多數の宗派が互に相反した意見を持つて對立してゐることは、キリスト教を説くに非常に都合がよかつた。もしこれらが悉く一致して唯一の宗教となつてゐたならば、右の困難は切り抜けられなかつたかも知れない。

フロイスが日本の文化に丹念な注意の眼を向けた態度は、ダルメイダにも影響を與へたらしい。堺の日比屋の茶會記を書いたことなどもその結果と思はれるが、奈良地方の見物記などにもその趣が現はれてゐる。

京都で寝込んだダルメイダは、復活祭の頃には回復して教會の行事に参加し、そのあとでビレラやフロイスと共に京都見物をもやつた。さうして、多分ロレンソをつれて、大和地方をも巡回したのである。奈良につくとすぐ翌日には松永久秀の信貴山城を訪れた。少し前二月の末頃にはビレラが奈良に松永を訪ねてゐるが、この時にも先づ松永の居城に行つたといふことは、恐らく當時の

政情とかゝりがあるであらう。ダルメイダはその記事のなかに、三好殿や將軍の臣下である松永彈正が、逆に將軍や三好殿を己れの意志に従はせてゐると、はつきり書いてゐるのである。がこの訪問の時には、松永の家臣の信者たちに款待され、松永の城内を見物しただけで、久秀自身には會つてゐない。城は着手以來もう五年になつたので、城内には重臣たちの二階建や三階建の白壁の邸宅が美しく建ち揃つてゐた。それは「世界にもあまり比類のないやうな美しい別荘地」に見えた。松永の館は總繪造りで、一間廊下は一枚板で張られて居り、障壁は悉く金地に繪をかけたものであつた。京都で立派な建築を見て来たばかりのダルメイダの眼にも、これは一層立ちまさつて見えた。「世界中でこの城のやうに善美なものはないからと思ふ」とダルメイダは極言してゐるのである。

翌日ダルメイダは、日本人が遠國から苦心して見物に来る奈良の寺々を見て廻つた。先づ行つたのは興福寺であるが、これは應永修築の、七堂伽藍の完備したものであつて、その結構の壯大なことが彼の眼を驚かせた。柱が太くて高いことだけでも、さういふ大きい樹木をあまり見たことのないダルメイダには驚異であつた。そこから、杉並木の壯麗なのに感嘆しながら春日神社に行き、

手向山八幡宮を通つて大佛殿へ出たのであるが、これも壽永修築の大佛殿で、今のとは形も大きさも違ふものがある。ダルメイダは日本の建築が一目して寸法の解るものであることを説いたあとで、大佛殿を間口四十ブラサ(約二九〇尺)、奥行三十ブラサ(約二一八尺)と記してゐる。しかしこの堂は天平尺で間口二九〇尺奥行一七〇尺であつたのであるから、間口の方はかなり精確であるが、奥行の方が合はない。恐らく十一間七面の柱間を各四ブラサと見つもり、正面の柱間を十としたのに對し、側面の柱間を七と數へ誤まつたのもであらうか。いづれにしてもこの堂は、唐招提寺の金堂を重層にして擴大したやうな、壯大なものであつた筈である。ダルメイダはこの堂を取り巻く廻廊と、それに取り巻かれた庭との美しさを特筆してゐるが、この美しさの印象に大佛殿の印象が籠つてゐない筈はないであらう。大佛の大きさはさほど彼を驚かさなかつたが、立ち並ぶ九十八本の太い柱は彼に強い刺戟を與へた。日本のやうに開けた、思慮のある國民が、こんな壯大な殿堂を築くほどまでに悪魔に欺かれてゐるとは、實に驚くのほかはない、と彼は感じたのである。

ダルメイダは奈良見物のあとで、ロレンソの教化した十市城の信者たちや澤城の領主ドン・フランシスコなど

を訪ねた。これらは、當時松永久秀の手についてゐた武士たちである。特にドン・フランシスコは、ダルメイダが見た日本人のうちで最も偉大な人物であつた。體格が大きい上にあらゆる美質を備へ、優雅快活で愛と謙遜に富み、勇敢であると共に深慮のある人であつた。ダルメイダの滞在中にこのドン・フランシスコは、四五里離れた他の城主を訪ね、松永久秀から叛かうとする意圖を喰ひ止めたといふ。

ダルメイダはドン・フランシスコの手の者に送られて堺に出、五月中旬に船に乗つた。ロレンソのほかに、堺の高名な醫者で、「この世を捨ててヤソ會に入つた」學者が、一緒であつた。

三 將軍暗殺と宣教師追放

京都で將軍暗殺といふ變事が起つたのはそれから間もなくである。

前年三好長慶が死んだにもかゝらずその喪を祕してゐたことは、いろいろ不安を反映したものであらう。先づ第一に三好や松永はその把握した權力を敵から守る必要があつた。第二に三好の權力は家臣の松永の手に移りつゝあつた。この情勢を察したビレラは、二月から三月へかけて、河内の飯盛城や奈良の松永の城を訪ねて行

つたのである。しかし、松永久秀への働きかけはうまく行かなかつたであらう。ビレラの留守の間に書いたフロイスの書簡によると、畿内において武士たちの改宗の先驅けとなつた結城山城守は、その主君たる松永久秀の京都統治が専横殘虐であるのを見て、郷里の尾張へ歸りた意志を洩らしたといふ。その頃からもう何かが萌してゐたのである。しかし事が起つたのは、三好と松永の軍隊一萬二千が五月末(永祿八年五月一日)に京都に来てからであつた。

フロイスはこの時のことを記して、三好殿が將軍から榮譽を興へられた機會に、その謝意を表するため、己れの子、松永彈正、及びもう一人の大神をつれて京都に來たと云つてゐる。當時京都の町の人もさう思つてゐたかも知れぬ。しかしこの時來たのは三好長慶の子重存(義重)、松永彈正の子久通(義久)である。重存はまだ十五歳、久通も若かつた。初めての任官で、兩人とも將軍義輝の「義」の字をもらつた。兩人はその御禮に將軍を饗應したいと申し出たが、將軍は彼らの軍隊の物々しさに怖れて、その受諾を躊躇し、或は京都からの脱走を計つたとさへ云はれてゐる。結局、饗宴の豫定の日の二日前、一五六五年六月十七日(永祿八年五月十九日)早朝、清水詣を裝つた七十騎ほどの三好の隊が突如方向を變へて將軍の宮

殿に赴き、訴狀を出した。それは將軍の夫人、侍女、その他の侍臣が彼らを讒したといふ理由を以て、その引渡しを要求したものであつた。この訴狀に關して將軍ととやかく折衝してゐる間に、三好、松永の軍隊は宮殿を圍み、銃隊はすでに庭にゐた。やがて射撃が始まり、宮殿には火が放たれた。將軍義輝も母堂慶壽院も殺された。(夫人のみは幸ひに脱れたが、二三日後、見出されて頸を切られた。)これがこの年の正月の參賀にフロイスの見た貴人たちの最後であつた。

かういふ思ひ切つたやり方が、十五歳の義重や義久の頭から出たのでなく、奈良の多聞城で采配を振つてゐた松永久秀の計畫であつたことはいふまでもあるまい。下剋上の大勢を代表する久秀は、傳統的なものの權威に終止符を打ちたかつたのであらう。久秀の重臣であつた結城山城守は、その日の夜、キリシタンの老人を使に寄越して、自分は主人の心を知つてゐる筈のものであるが、しかし今度のことは全然知らなかつた、將軍を殺すほどであるから何をするか解らない、宣教師たちは信者らと談合して自ら救ふ方法を講じなくてはならぬ、といはせた。老人の説明によると、松永久秀は法華宗徒である。法華宗の僧侶はキリスト教を憎むこと甚しいのであるから、久秀を説いて宣教師殺戮をやらせるかも知れない、

といふのであつた。翌日ビレラは數人の信者と談合して次のやうに決心を語つた。松永彈正、或はその子が、宣教師たちを殺さうと決心したならば、宣教師たちには脱れる道はないのである。だから逃げては仕方がない。京都の會堂は異教徒に占領されればもはや回復は出來ないであらう。だからあくまでも會堂を守り、祭壇の前に跪いて喜んで死なう、と。信者たちは同意見であつた。三好の部下のキリシタン武士たちも、百人位しか來てゐなかつたが、皆同意見であつた。彼らは松永彈正を呪ひ、その宣教師に對する計畫を探知して知らせると約したが、しかし將軍の場合と同じく奇襲をやられては自分たちは間に合はないだらう、と云つた。で祭具などはこつそり堺や飯盛に移すことにした。さうしてじつと形勢を觀望してゐた。

將軍家の次にはキリスト教の宣教師である、とフロイスたちは感じてゐたが、しかし將軍の家臣や親近者が續續として捕へられ殺されて行く間に、キリスト教會堂に對する襲撃は全然なかつた。それは三好の部下のキリシタン武士たちのお蔭であつたのか、或は松永彈正自身が宣教師問題に重きを置かなかつたのか、よくは解らない。が丁度この頃に、右に言及した結城山城守の長子で三好の部下となつてゐたアンタン左衛門が、毒殺される

といふ事件も起つた。法華宗の僧侶がこの機會を捉へてキリスト教排撃運動を強化したといふことも事實であらう。松永彈正は結局宣教師の追放、布教の禁止の策を取つた。しかし最初布教を許可したのは將軍や三好長慶のみではない。京都の統治の責任者としての彼自身の名において、宣教師たちは京都居住を許されてゐたのである。だから彼は、おのれの名においてではなく、將軍よりも一層無力でありながら將軍よりも一層尊貴である「日本全国の君主」の名において、追放令を出した。即ち禁裏に申し出でて女房奉書をもらひ受け、「大うす逐ひ拂ひ」をやつたのである。それは一五六五年七月三十一日(永祿八年七月五日)三好、松永の軍隊が京都を引き拂つた日の日附で、その翌日市内に布告された。布告の出た時には宣教師たちはもう京都に居なかつた。

このやうに、宣教師の京都脱出がうまく行つたのは、三好の部下のキリシタン武士たちの働きのためであつた。宣教師たちが殺されるであらうといふ噂を聞いたキリシタン武士たちは、所々の城から神父のもとに使を寄せ越したが、特に飯盛の城からは、信者のうちの主立つた武士がビレラを連れに來た。ビレラを自分たちが擁してゐれば、萬一危険が迫つた際に緩和策を講ずることができると考へたからである。ビレラは、フロイスがまだ日

ある。出来るだけ早く堺もしくはビレラの滞在地に向つて出發して貰ひたい。途中は兵士を以て護衛する、といふのであつた。船二艘がすでに準備してあり、所持品の保護や關稅の免除の手筈も整へてあつた。なほ日向守のほかにもう一人、三好義重の後見の如き職にある人も、同じやうな手配をしてくれた。それでもフロイスはその日に出發はしなかつた。翌三十一日には命令の傳達があるであらうと待ちかまへたのである。その命令の傳達は「われらの大敵なる二人の異教の武士」によつて行はれる筈であつた。その豫定の通りに行けば、フロイスやダミヤンは侮辱と苦痛とを受けて文字通りに追放せられたであらう。しかし三十一日の朝には、三好義重の祕書官役をつとめてゐたキリシタン武士が、主君と共に出發せしめ、部下を率ゐてあとに残つた。さうして部下をして會堂を護らせたのみならず、追放命令を實施しようとしてゐた武士たちと懇談し、同日中に宣教師を連れ出すから追放令は翌日まで市内に布告しないで置いて貰ふこと、彼らが追放令を持つて會堂に赴かずとも彼がそれを宣教師に取次ぐべきこと、などの諒解を遂げた。そこでフロイスはゆつくりと信者たちに別れを告げた。信者たちも會堂を異教徒によつて破壊せられる前に、自分たちの手で戸障子疊などを外して運び出してしまつた。フロイス

本語を十分に話し得ないので、自ら留まつて事を處する必要があると云つて、中々承知しなかつたが、武士たちの熱心なすゝめにより、遂に出發することにした。フロイスに對しては、「日本全国の君主」或は松永彈正の命令を受けるまでは、會堂及び住館を捨ててはならないと命じた。ビレラの出發は七月二十七日金曜日であつた。

それから三日目、二十九日の午後になると、いよいよ追放令が出たらしい情報を信者たちが持つて來た。松永彈正のすゝめによつて日本全国の王が追放の書附を出したことは事實である。彈正の子の義久も同じ命令を出した、即刻會堂を捨てて退去するがよい、といふのであつた。フロイスは三人の少年に祭具の類を託して出發させたが、自分は動かなかつた。追放の命令を自分が受けるまでは、會堂を捨てることは出来ない。ビレラの命令の方が自分の命よりも重い。これがフロイスの態度であつた。しかし翌三十日の朝になると、三好三人衆の一人である三好日向守が、その家臣のキリシタンを使に寄越して、實情を傳へた。日向守は宣教師の追放といふ如きことを極力阻止しようと努めたのであつたが、松永彈正が背後から指圖してゐるために、遂に成功しなかつた。三好、松永の軍隊は翌日朝京都を引き拂ふことになつてゐる。神父たちがその後まで京都に滞在することは危険で

たちは午後三時頃、キリシタンの武士たちに護られ、大勢の信者たちに取り巻かれて、京都の地を離れた。町から一里半ほど來た野の中で、ダミヤンが見送りの信者たちに信仰の堅持を説き、教會回復の期待を語り合つて別れた。熱心な信者三人は別れずに飯盛までついて來た。その一人は小西行長の父、小西隆佐であつた。

かうして京都の教會は、建設以來六年、漸く盛大になりかけた途端に覆滅させられたのである。その隆盛の機運を作つたのは、三好氏に屬する武士たちであつたが、今や同じ三好氏の配下にゐた松永久秀が、はつきりと反對の態度を見せはじめた。松永方と三好三人衆との對峙は、この頃から激成されて來たのである。キリスト教が武士の政治的權力と結びつくと共に、同じ武士階級の間から反キリスト教的な運動が擡頭してくるといふ現象は、九州の大村の場合と同じやうに、こゝにも見られる。尤もこゝでは、キリシタンの武士が佛像佛寺の破壊を敢行するといふところまで行つたわけではないが、松永久秀はその獨裁的權力の掌握のために、キリスト教排撃を有利としたのである。奈良を根據地とする久秀にとつては、佛寺の勢力は無視し難いものであつたに相違ない。この關係を考へると、佛寺及び宗教一揆に對して思ひ切つた彈壓の態度をとつた織田信長の出現が、日本に

おけるキリシタン全盛時代を作り出した所以は、理解せられ易くなるであらう。

四 京都回復の努力

京都を立つたフロイスたちは、鳥羽から船に乗り、夕方枚方で飯盛の武士たちに迎へられ、夜半に飯盛山下砂の結城左衛門の建てた小庵に着いた。そこにはビレラや信者たちが集まつてゐた。キリシタンの武士たちは宣教師の京都追放を憤り、おのれの所領や妻子を捨てて死の覚悟を以てそれに抗議しようといきり立つてゐたので、ビレラはそれを鎮めるのに苦心してゐた。フロイスは更に一里ほど先の三箇島に行つて泊つた。

一週間ほど後に、ビレラとフロイスとは送られて堺の町に移つた。こゝは當時としては最も安全な場所であつた。二人は日本人のイルマン二人と共に布教に従事し、訪ねてくる飯盛の武士たちを力づけると共に、この富裕な町の教養ある人たちの間に教をひろめた。その間にも京都の教會の復興の努力は絶えず續けてゐた。一方では飯盛の武士たちが、他方では京都の信者たちが、それに呼應した。追放令は松永彈正の名においてではなく、「日本全國の王で絶對君主でありながら何人も服従せず、偶像のやうに宮殿の中にある外に出ることのない内

裏」の名において發せられたのであるから、京都へ歸る免許状もこの内裏から得なくてはならない。京都の信者たちは、將軍、三好長慶、松永久秀等から得た免許状を提出して、諒解を求めた。一年後の一五六六年六月頃には内裏の意向が解つた。免許状は與へてもよい、しかし「神父たちは、人肉を食ひはしない」といふことを、信者一同が佛前に誓はなくてはならぬ、といふのであつた。偶像による宣誓といふ條件は問題の解決を困難にした。もう一つの望みは、阿波公方足利義榮を擁してゐる三好長治の家の實權者篠原長房であつた。この人は人物も立派であり、キリスト教に同情を持つてゐる。その勢力が京都に及び、義榮を將軍とすることが出来れば、そこにも教會回復の道は開けるであらう、とフロイスたちは考へてゐた。しかしこの道も容易に開けなかつた。一五六六年四月の末に、ビレラはトルレスの命によつて豊後に移つた。平戸を追放された直後、京都布教を命ぜられて初めて堺に着いてから、もう八年目であつた。その間のさまざまの艱難が、この四十代の神父を白髪の老人にしてしまつた。今また京都を追放され、彼の建てた聖母の會堂を再興する見込も立たないまゝで、堺を立つて行つたのであつた。

あとに残つたフロイスは、日本に着くと間もなく横濱

浦の没落を見、京都に入ると間もなく京都の教會の没落を経験した人であつた。といふことは彼が最初の開拓者たちのあとを受け、その仕事の再興といふ立場に立つてゐたことを意味する。そのためには何よりも先づ、ビレラやロレンソが数年間の苦心で作上げた信者たちを、保持して行かなくてはならなかつた。堺には信者の數が少なく、會堂らしいものもなかつたが、一五六六年のクリスマスには堺の町の會議所を借り、町の外で對峙してゐた軍隊のなかのキリシタンの武士たち七十人ほどをも

参加せしめて、告解・聖餐・ミサなどにつとめた。戰場では敵對してゐる武士たちが、こゝでは一人の主君の家來でもあるかのやうに睦まじかつた。飯盛からはサン

チョが部下をひきゐて参加した。一五六七年の一月にはサンチョに招かれて三箇に行き、八日ほどの間毎日二回のミサを行つた。四旬節には三箇から灰をもらひに來たが、復活祭の週は堺と京都との信者たちが三箇に集まつて一緒に祝ふことになつた。そのためのサンチョの盡力は非常なものであつた。交通のための船や馬の用意、宿の割りあて、會堂の應急擴張など、費用を惜しまずに努めた。三年來告解の機會を持たなかつた京都の信者たちは、泣いて喜んだ。がかうして信者たちが集まつて來た丁度その時期に、三好義重が兵を起したとの知らせが堺

から來た。一同は騒ぎ立つて復活祭の行事も滅茶々になるかと思へたが、サンチョは平然として、この地は安全である、十五日や二十日の間に戦争の起ることはない、歸途の安全も引きうける、神の光榮のために集まつたものは神が守つて下さると云つた。それで一同は安心して豫定通り復活祭を終つた。

この時信者たちを脅かした戦争の噂は、三好義重が三好三人衆の手を離れて松永久秀と合し、久秀がその黨を集め始めたことにかゝるであらう。サンチョの豫言の如く半月や一月で戦争にはならなかつたが、半年後には、奈良の大佛殿を焼いたあの戦争になつたのである。

このやうに三好の當主義重が三好三人衆と離れたのは、阿波より迎へられた足利義榮が三好三人衆を重んじて義重を省みなかつたからである。足利義榮は前年の夏篠原長房に擁せられて兵庫に上陸し、攝津越水城に據つてゐた。三好三人衆は篠原長房と力をあはせ、義榮を足利將軍たらしめようと企ててゐたのであるが、その長房の寵臣に一人のキリシタンがあり、その縁でフロイスも二三度長房に會ひ款待を受けた。長房はフロイスの請に委せ、公家の一人に書簡を送つて宣教師の追放解除を説いたこともある。飯盛のキリシタン武士たちもこの點において長房に結びついた。二十五人ほどの主立つた武士

が尼ヶ崎で會合し、篠原長房と三好三人衆との前へ出て、代表者三箇のサンチョをしてその主張を述べしめた。自分が三好の居城飯盛を預かつた時には、神父を京都へ歸らしめるといふことのほかに希望はなかつた。しかるに三好三人衆はそのことを實現しないのみか寧ろそれを妨害して來た。しかし神父を京都に歸還せしめることは我々の面目の問題である。今や三好の當主は松永と合體し、三好の家臣たる我々はそれに従はなくてはならないのであるが、しかしもし篠原長房及び三好三人衆が神父の京都復歸を決定せられるならば、我々は篠原殿の手について力限り働くであらう。我々の求めるのは祿でもなく名譽でもなく、たゞ神父の京都歸還である、といふのであつた。長房はこれに同意し、三好三人衆をもほぼ同意せしめた。しかるに丁度その頃、三人衆の親戚の青年で、三箇でキリシタンとなつた武士が、越水城の青年武士と共に遊山に行つた際、些細な言葉争ひから佛像に不敬を加へるといふ事件が起つた。三好三人衆はまた硬化しさうに見えた。篠原長房もこの事件を喜ばなかつた。しかしそれは神父の責任ではないといふので、半月ほど後に、長房は公家宛の書簡を書き、三好三人衆にも澁々と同様の書簡を書かせた。かうして篠原長房の壓力が漸く内裏に加はり始めた途端に、堺附近にゐた三好義

ば、自分は權力を以て彼らを復歸せしめるであらう、といふのであつた。

しかるに、それがどうなるか解らないうちに、織田信長が、將軍たるべき足利義昭を擁して上京して來たのである。

重が松永久秀に擁せられて信貴山城に入つたのである。それは一五六七年の五月の初めであつた。公家は形勢を觀望して容易に返答を與へなかつた。松永久秀と篠原長房とのいづれが勝つかは、——況んやこの二人のいづれもが制覇に成功しないであらうなどは、當時何人にも解らなかつたのである。

一五六七年の夏、奈良まで攻め寄つた三好三人衆の軍隊は、大佛殿に陣して多聞城の松永の軍に對したが、攻圍半年の後、夜襲によつて大佛殿を焼かれ、敗退した。しかし京都制壓の勢力を失つたわけではなかつた。篠原長房らは足利義榮の將軍宣下に努力し、年内には成功しなかつたが、翌年の三月の初めには遂に成功してゐる。堺のフロイスの状況はあまり變らなかつた。一五六八年の復活祭は前年のやうに三箇で行はれた。サンチョの計畫した會堂はすでに出來上りつゝあつた。前年に異なるところは、フロイスが尼ヶ崎その他攝津の地において身分ある武士たちを教化したことである。京都の會堂は篠原長房の盡力によつて信者たちの手に返り、聖靈降臨祭の後には日本人のイルマンが行つて四十日ほど働いた。神父の京都歸還については、長房は遂に、最後通牒を發した。神父を追放しなくてはならないといふ理由は、何にもない。だから神父の京都歸還を許可せられないなら

第七章 九州北西沿岸地方における布教の成功

一 福田の開港

一五六五年、京都で將軍暗殺の變事が起つた時よりも一ヶ月ほど前に堺を出發したダルメイダは、豊後を経て島原でトルレスと落ちあひ、おのれの開拓した葡萄園の果實を靜かに味ふことが出來た。そこから信者たちの二艘の大船に送られてトルレスと共に口の津に歸つたが、こゝも彼の開拓した土地であつた。しかし彼は、席の温まる暇もなく、半月の後にロレンソを伴つて福田の港に派遣されたのである。

長崎の直ぐ西の、外向きの海岸にある福田が、横瀬浦に代つて大村領の開港地に選ばれたのは、この年からである。やがて一五七〇年に長崎が開かれるに至るまでの四五年の間、(口の津が用ゐられた唯一年のほかは)、福田がポルトガル船の寄港地になつた。しかし平戸の地位を福田が奪ふについては、相當に面倒なことが起らなかつたのではない。前の年には、トルレスの平戸忌避の方

針にもかゝはらず、ポルトガル船が平戸へ入つた。ポルトガル王から任命された司令官カピタン・モレルの乗船サンタ・クルスさへもさうであつた。司令官ドン・ペドロ・ダルメイダがトルレスの方針に従はうとしても、商人たちはそれをきかなかつたのである。そこで當時度島タクシマにゐたフロイスは司令官と相談して、平戸の領主松浦侯に交渉し、宣教師追放の取消しや會堂再建の許可を取りつけることに成功した。平戸の領主にとつては、さういふ犠牲を拂つてでもポルトガル人との貿易を續けたかつたのである。かうして前の年の十一月には、日本で最も大きく美しいといはれた會堂が出來上り、日本に馴れたフェルナンデスのほかに新來の神父ダ・コスタ・カブラル、少し前に來たイルマンのゴンサルベスなどが滞在して、盛んに布教を始めた。松浦侯に對しても、會堂へ招待したりなどして、いろ／＼と働きかけた。附近の島々では、著しく教勢を擴めることが出來た。さういふ形勢から考へて、平戸の領主は、一五六五年度のポルトガル船も勿論平戸へ

入港すると考へてゐたに相違ない。しかるにその一五六五年の七月ごろ、司令官ドン・ジョアン・ペレイラの乗つた商船が横瀬浦について平戸へ連絡したとき、平戸にゐた神父コスタは、ペレイラの平戸入港を止め、新しい港福田に廻航させたのである。その理由は、松浦侯の嗣子がキリシタンの少年の持つてゐた錫のキリスト像を潰したことに對し、松浦侯が謝罪の約束をしながら、それを履行しなかつた、といふことである。キリシタンが佛像の破壊を大仕掛けにやつてゐることに比べれば、この少年の仕業は、松浦侯の眼には一小事に映つたであらう。従つてこの事を口實としてポルトガル船が平戸入港をやめるとは豫期してゐなかつたであらう。しかし神父たちは既にキリシタンとなつた大村純忠を支持するため

に、たゞ貿易のための方便として濫々布教を許してゐるやうな平戸の領主から、貿易の利を取上げるといふ方針を確定してゐたのである。司令官ペレイラはこの方針を是認し大村領の福田港で貿易を開始した。これを知つた平戸の領主は、ポルトガル船の「生意氣」な振舞ひを憤り、遂に五十餘艘の軍船を派してこれを襲撃せしめたのである。ドン・アントニオ籠手田は勿論この企てには反對であつた。だから松浦侯は彼に知られないやうに、ただ反キリシタンの武士たちだけを集めてこの企てに參加

せしめた。倭寇と關係がないでもない彼らは、ポルトガルの「商人」に何程のことが出來ようと見くびつてゐたのでもあらうが、しかし襲撃は全然失敗であつた。大砲の威力は大きかつた。軍船隊は分散破壊せられ、死者六十餘、負傷者二百餘を乗せて歸つて來た。目ぼしいキリスト教の敵が大勢死んだ。これでポルトガルの商船と平戸港との關係はきつぱりと絶えたのである。

福田の港へ來たポルトガル人の告解を聽きミサを行ふためには、豊後から神父フィゲイredoが呼ばれ、ダルメイダに一足おかれて來た。丁度その頃に領主の大村純忠が、七歳位の長女の病氣をなほしに來てくれと頼んで寄越したので、ダルメイダは、畿内で多數の武士を教化したロレンソをつれて大村に赴いた。純忠は内亂勃發の一す前にトルレスに會つて以來、二年の間、宣教師の誰にも會ふ機會がなかつた。その間彼は、キリスト教信者なるとは、多くの攻撃を受け、それに堪へなくてはならなかつたのである。従つて彼の周圍において最も必要であつたのは、佛敎との對決においてキリスト教の信仰を確立することであつた。この仕事はロレンソの最も得意とするところであつた。ダルメイダが純忠の女を治療してゐる間に、ロレンソは數回説教を行ひ、武士たちを感動せしめた。

ダルメイダは福田の港に引き返すと直ぐトルレスの命によつて口の津に歸り、そこから、豊後へ派遣された。途中島原に寄つて、「日本中での最も熱心なクリシタンたち」の面倒を見、豊後では府内のパウティスタを助けて働き、臼杵の町に宣教師館を建てて世話をしたが、十月にはまた福田の港へ来た。

その間に純忠は福田の港へ神父フィゲイレドや船長ドン・ジョアン・ペレイラなどに會ひに来た。會堂で祈禱した後、船に行つて盛大な饗應を受けたが、ポルトガル人たちは非常に喜んで、この領主のためにはどんな事でもしようとして出した。クリスト教のために戦ふ領主といふことで、彼は、ポルトガル人の同情と、さうして貿易とを、一手に集めたのである。

二 キリシタン武士たちの努力

一五六五年の十月にドン・ジョアン・ペレイラの船は福田港を去つた。そのあとでトルレスは、病氣療養のため平戸から福田へ呼び寄せてみたカブラルをイルマンのバスと共に豊後に移し、クリスマス後にはフィゲイレドを島原に派遣した。フィゲイレドはまだ日本語が話せないのので、堺の人パウロが彼を助けて、一五六六年の四旬節・復活祭などを營むことになつた。告解をきくために

は、口の津からトルレスが出向いて行つた。ダルメイダが基礎をつくり、フロイスが口を極めて賞讃した島原の教會は、かうして一時非常に隆盛になりかけたのである。(そのため翌一五六七年には烈しい反動を呼び起したのではあるが。)

有馬領の口の津や島原がかうしてクリスト教化して行くのを見た大村純忠は、頻りに宣教師の大村派遣を懇請して来たが、トルレスはそれに應じなかつた。今はもう「手が足りない」からではない。敵地の平戸や、大村よりも新しい島原にさへ、神父を駐在せしめてゐる。しかも日本で最初のクリシタン大名たる大村純忠の許へ宣教師を送らないのは、純忠の敵に謀叛の機會を與へないためだ、と説明された。従つてトルレスは、純忠が針尾地方を占領するまでは宣教師を送らない、と明白に答へた。針尾は横瀬浦の對岸の島で、平戸領に接し、トルレス暗殺の計畫を立てた勢力の根據地であつた。トルレスのこの態度を見た純忠は、さしづめの必要として家臣を三四人づつ次々に口の津へ洗禮を受けに寄越したが、問題の根本的解決をはかるためには、一五六六年の五月頃に、いよいよ針尾地方、従つて平戸の勢力に對して、戦端を開く決心をしたらしい。温厚なトルレスにも十字軍的な氣持はあつたのである。

平戸の領主や、その配下の反クリスト教的な武士たちが、この形勢を察知してゐなかつた筈はない。しかし彼らの教會に對する態度は、上べに愛情を現はしつゝ、行ふ所において敵たることであつた。福田の港から教會に送られる食糧や器具の類はしばしば掠奪をうけ、掠奪された聖母像が潰されるといふやうな事件も起つた。それにつれて、クリシタンの武士と反クリスト教的な武士との間の軋轢も起つた。もし宣教師が抑止しなかつたならば、ドン・アントニオ籠手田やその兄弟ドン・ジョアン一部などは、聖母への侮辱に報復するために、武器を取つて立つたであらう。しかし宣教師は、異教徒が數においてクリスト教徒に三倍すること、報復の行爲は異教徒に教會破壊の口實を與へることを説いて、堅く手出しを止めた。反クリスト教側の武士たちも會堂破壊、ドン・アントニオ襲撃などの計畫を立てたことがあつたが、クリシタンたちの決死の防衛態勢を見た領主たちは、同じやうに手出しを禁じた。さういふ仕方では漸く平戸の教會は、「平和のうち」に存立することが出来たのである。

一五六四年の秋、平戸の教會が回復される機會に渡來した神父のコスタは、日本語を學ぶ上に驚くべき進歩を示し、翌一五六五年のクリスマスの一月ほど前には、自分で告解をきくほどになつた。告解の際の勤めは、

トルレスよりもよく解るほどだとさへも云はれた。これは平戸や附近の島々の信者たちにとつては、大きい出来事であつた。この地方で告解をきいたのはトルレスだけで、そのトルレスが口の津にゐるために、もう四年來告解が出来なかつた。あとの神父たちは、フロイスもカブラルも、告解をきくほどに日本語が出来なかつたのである。だからコスタが告解をきく始めると共に、島々の信者は沸き立つた。一五六六年の一月からは、生月島、度島、平戸西岸の村々を廻つて、告解をうけた。この地方の古馴染のフェルナンデスも一緒であつた。この巡回は島々の信仰を新しく活氣づけたが、その後四旬節から復活祭までの營みを平戸の會堂で行ふ際にも、これまでに見られなかつたやうな活氣が現はれた。教會回復以來、毎年の復活祭は、敵のゐない度島へ行つて營んだのであるが、この年には異教徒の妨害に備へた武裝警戒のもとに、平戸で盛大に行つたのである。かうして平戸諸島には、この後のどんな迫害も根絶せしめなかつたやうな根強い信仰が育てられたのであつた。

三 ダルメイダの五島、天草及び長崎の開拓

この同じ年にトルレスは、ダルメイダをして二つの新

しい土地を開拓せしめた。五島と天草とである。

一五六六年の初め、フィゲイレドが島原へ派遣されたと同じ時に、ダルメイダは五島へ派遣された。元琵琶法師のロレンソが同行した。この五島の開拓についてはダルメイダが詳細な報告(一五六六年十月二十日附政誌發)を書いてゐる。一人も信者のみなかつたこの島で、彼は半年餘の間に、多くの信者と數ヶ所の會堂とを造り出したのである。

最初、彼が島に着いたのは太陰曆の正月の前であつたが、やがて新年になり、島の主立つた武士たちが領主の許へ集まつて來た。(ダルメイダは領主の居所をオチカとしてゐる。しかし小値賀島ではなさうである。普通には今の福江港だとされてゐる。)それらは皆相當の教養を持つてゐた。そこで正月の十五日過ぎに、これらの武士たちに對して、七日間説教をしたいといふことを申し出た。領主は、今空いてゐる舊邸を提供し、自分や夫人も聽聞する旨を告げた。翌日夕方その邸に行くと、大廣間に燈火を多く掲げ、四百の男子が列んでゐた。婦人たちは接續した他の室に控へてゐた。領主は上段の間にゐたが、そこへダルメイダやロレンソを請じた。座が静まつたときダルメイダは、自分は日本語が十分でないから、ロレンソをして自分の考を述べさせる、と挨拶し、ロレンソに説教を始めさせた。その内容は宣教師が日本

の各地で説いてゐることと變りはなかつたが、しかしその説き方が實に放膽・輕妙・明快で、聽衆を承服させずにはゐない力を持つてゐた。特に異教の立場との討論を一人でやつて見せたのが鮮やかであつた。かうしてロレンソは三時間の間聽衆を魅了した。その手際はダルメイダをも驚嘆させるほどのものであつた。領主も武士たちも非常な感銘を受け、續いて説教を聽かうといふ氣持で歸つて行つた。

このやうにすべり出しは好かつたのであるが、突然その翌日、領主は烈しい熱病にかゝつた。命も危いやうに見えた。佛僧たちはそれを佛罰だと云つた。武士たちの心に萌えた芽は直ぐ枯れさうになつた。しかし、佛僧たちが病氣平癒のために大わらはになつてやつた大般若經の轉讀も効果はなかつた。三日目には病氣は一層重くなつた。この時ダルメイダは、領主は恢復する、このまゝほつて置けば大般若がきいたことになる、と考へた。そこで宿の主人である武士を介して、自分は藥を持つてゐるし醫療の經驗もある。領主が脈をとり尿を驗することをお許されるならば、病氣は癒せるであらう、と申し入れた。領主は喜んでダルメイダを招いた。翌日ダルメイダは領主を鄭重に診察し、解熱劑を與へた。藥はその日からきゝ始め、次の日にはよほど熱が下りた。ダルメイダ

はその心理的な效果に一層力を入れた。あとにはひどい頭痛が残り、夜間の往診を必要とするほどであつたが、この時には鎮痛劑催眠劑を與へた。領主は久しぶりで熟睡した。その心理的な效果もまた大きかつた。次の日往診したダルメイダは、領主の病の快癒したことを告げ、彼を救つたのが天地の造主であつて、大般若經でないことを説いた。ダルメイダの宿には、領主から贈つた猪一頭、雉二羽、家鴨二羽、大きい鮮魚五尾、酒二樽、米一俵、その他領主夫人、庶子などの贈物が充滿した。ダルメイダはそれで以て領主の家臣數人を招き、領主の病氣平癒の祝宴を開いた。ダルメイダは勝つたのである。

しかし半月ほどの後、四旬節の初めに再び説教をはじめると、その二日目にまた突然火災が起り、同時に領主の指が腫れて痛み出した。指はダルメイダの藥で癒つたが、説教をきゝにくるものは殆んどなくなつた。たゞこの島に來てゐた博多の商人が二人、教をきいてキリシタンになつたことが、この地の人々の注意を引いた位のものであつた。

他方、醫者としてのダルメイダの信用は大したものであつた。領主は、その伯母の病氣の治療をダルメイダに頼んだ。領主の娘・庶子・甥・弟なども彼の治療を受けた。これらの病人が簡単な藥で癒つたことは、ダルメイ

ダ自身にも不思議に思はれるほどであつたが、そのお蔭で彼は領主やその家族親戚と非常に親しくなつた。領主は説教場に使つた邸宅を彼に與へると云ひ出した。

この現象は貿易のために熱心な平戸の領主がキリスト教を喜ばなかつたのと似たものである。だからダルメイダもまた、布教がうまく行かないならばこの地を去るほかはない、といふ態度を取ることになつた。島に來てから三ヶ月以上を経たとき、彼はトルレスからの使者が携へて來た大友宗麟の招きの書簡を見せて、領主たちに島を去る旨を告げた。領主は涙を流して引きとめたが、ダルメイダは、長老の命令であるからと云つてきかなかつた。止むを得ず領主は家臣一同を招いて盛大な別宴を催した。が、出發の前夜になつて領主は、二十歳になる一子と共にダルメイダを訪ねて來て、再び熱心に引きとめた。領主がダルメイダを招いて以來もう百日を超えてゐる。しかるに領内にはまだ一人のキリシタンも出來てゐない。かく無收穫でダルメイダが去ることになると、家臣たちは何と批評するであらう、と領主は云つた。これはダルメイダが云ひたかつたことなのである。それを領主から云はせて、ダルメイダは留まることに同意した。トルレスからの使者にその旨を復命して貰ひ、再度の指令の來るまで取り敢へず留まらうといふのであつた。

領主は非常に喜んで、ダルメイダの望む布教活動の支持に乗り出した。會堂の敷地を與へ、その建築を補助する。キリシタンとならうとする者には許可を與へる。異教の祭は強制しない。會堂に領地を附け、その収入を慈善事業に使はせる、などである。またトルレスに多くの贈物を届け、ダルメイダの五島滞在を懇請する手紙を書いた。領主の家族や、町の人の喜びも非常なものであつた。やがて領主は五十人ほどの武士と共に説教をきゝはじめた。ロレンソがまたその雄辯をふるつた。十四日の間説教は續いた。重臣など二十五人の武士が改宗を決心した。そこで更に二十日間の準備教育をして洗禮を授けることになつた。その途中で佛僧の妨害や平戸人との紛争が起つたが、それは二十五人の武士の決意を揺がしはしなかつた。そこでダルメイダは、最後に一夫一婦の條件を持ち出した。武士たちは大抵三四人の妻妾を有してゐたからである。武士たちはその條件をも容れて、妻一人を定めた。この事は領主の夫人を初め婦人連に非常に好評であつた。キリシタンとなつた者の妻は幸福である、と領主の夫人は云つた。かういふ準備のあとで、二十五人の武士は、出来る限り莊嚴な仕方で洗禮を授けられたのである。

これを皮切りとして急激に布教の仕事は進んだ。領主

島に復讐した。

口の津のトルレスは、ダルメイダの病氣のことを聞き、恢復期を大事にするために歸還を命じた。あとにはロレンソが残ることになつた。領主は、非常に悲しんだが、やがてダルメイダが引き返してくるか、或は他の神父が來るといふ約束で承知し、色々の物資を携へてキリシタン一同と共に奥浦の港まで見送りに來た。

ダルメイダが、暴風雨になやみながら福田の港につくと、そこにはポルトガル船が一隻着いて居り、近畿地方から久しぶりにひき上げて來たビレラが滞在してゐた。豊後から來たジョアン・カブラル——血を吐く病氣のために遂に、この秋日本を去らざるを得なかつたカブラル——も一緒であつた。

ダルメイダはトルレスの許に二十日ほど留まつただけで、益過ぎにはまた天草島北端の志岐に派遣された。志岐の領主志岐鎮經は、有馬の領主と親しく、有馬義貞や大村純忠の弟に當る諸經を養子にしてゐたのである。諸經は上品なよい青年で、すでにダルメイダたちの注意をひいてゐた。ダルメイダは日本人イルマン・ベルシヨールをつれて志岐に行き、領主や諸經から非常に款待を受けた。直ぐ説教を所望されたが、大廣間は身分ある武士

の居所から一里半ほどの所(大津)では、寺を會堂に改造した。その近くの奥浦では、景色の好い岬の上に會堂の敷地を作り、ダルメイダの二十日間の滞在の間に百二十三人の受洗者を出した。やがてこの敷地には、領主が美しい會堂を建ててくれたのである。それほどあるから、領主の居所オチカの町では、受洗希望者は續々として現はれて來た。領主は、ロレンソが最初説教した大きい邸をダルメイダに與へたが、ダルメイダがそれを利用しないのを見て、ダルメイダに希望の設計圖を引かせて會堂の建築にとりかゝつた。婦人や子供の教化はこの會堂の落成後に延ばさざるを得なかつた。

かうして五島の布教が順調に進み出したのは六七月の頃であつたが、間もなく、平戸の領主の姻戚である武士が、五島の領主に叛いて兵を擧げた。キリシタン武士たちは勇敢に戦つて謀叛人たちを敗走させたが、平戸の領主はその姻戚を助けるために二百隻の軍船を派遣することになつた。沿岸の住民は食糧を携へて山城に籠つた。奥浦で病氣になつてゐたダルメイダも、命からかゝ峻険な山にのぼらざるを得なかつた。しかし幸にもドン・アントニオ籠手田の率ゐた平戸の大艦隊は、五島の端の島の海岸數ヶ村を焼いただけで、約一ヶ月の後にひき上げてしまつた。五島の領主は百隻の艦隊を派して平戸領の

たちで一杯であつた。領主の前に出ることの出來ない人々のためには、旅宿で説教を始めた。かうして説教を續けてゐるうちに、やがて領主はキリシタンにならうと考へ始めたが、大村領におけるやうな内亂を慮つて、秘密に洗禮を授けてくれないかと云つた。これはダルメイダが斷わつた。しかし、この懸念は家臣たちが續々キリシタンになつて行けばおのづから取り除かれるのであるから、家臣たちの改宗を促進することが雙方の關心事になつた。十月の中頃には洗禮を受けようと決心したものが五百人以上に達した。すべては順調であつた。十月の末には、遂に領主が、多くの身分ある武士たちと共に、洗禮を受けるに至つた。會堂の工事も、ほとんど出來上つた。

ダルメイダは福田の港に行く必要があつたので、代りにイルマンのサンチェズがやつて來た。やがて福田の港のポルトガル船がジョアン・カブラルを乗せて去つて了ふと、神父ビレラもまたダルメイダの開拓したこの土地へ收穫にやつて來た。彼の手で洗禮を受けた武士たちは非常に多かつた。やがてビレラは去つたが、サンチェズは一五七七年を通じてこの地に残り、附近のフクロや梅島に布教すると共に、志岐の會堂の増築や信者の固めに盡力した。

からして天草の志岐は、初めのうち非常に調子が好かつた。で、一五六八年の初めに、老年のトルレスが口の津から志岐に赴いた。イルマン・バスを先發させて準備した上、志岐の有力な武士たちの迎への船で、盛大な歓迎のうちに志岐に乗り込んだのである。さうしてこゝで四旬節や復活祭を營んで夏になると、シナからの船が神父アレキサンドロ・バラレツジョを福田の港へ運んで来た。トルレスはこの新來の神父を志岐で迎へた。その時にはダルメイダも來てゐたが、トルレスがイルマンたちや童男童女の合唱隊を率ゐ、ラテン語の讚美歌を唱ひながら出迎へたときには、バラレツジョは歡喜のあまり茫然としてしまつたといふ。會堂について信者たち一同と祈禱した時にも、このやうな遠隔の地で、イタリヤにおいてさへ見られないものを見るといふ氣持がした。志岐の教會が、短時日の間に急速に發達したことは、このバラレツジョの印象によつても察することが出来るであらう。

そこでトルレスは、この機會に、諸地方の神父やイルマンたちを志岐に招集し、日本におけるヤソ會の方針を協議することにした。口の津にはトルレスの去つたあとへビレラが來てゐた。五島にはダルメイダの去つたあとへパウテイスタが行つてゐた。豊後にはフィゲイレドがい

ゐた。平戸には、引きつゞきコスタが滞在してゐたが、シャビエルに同伴して來た老年のフェルナンデスは、前の年に靜かにこの地で世を去つた。それらの神父たちは一五六八年の八月に志岐に集合して會議を開いた。この時一時的にもしろ、天草の志岐は日本布教の中心地となつたのである。日本の他の地方には、領主がキリシタンであつて、しかも、それを理由とする内亂が起つてゐない、といふ所は、どこにもなかつた。トルレスがこの事態をいかに重要視してゐたかが、この志岐會議に示されてゐるといつてよいであらう。

ダルメイダはいつも開拓者であつた。一五六七年には長崎を開拓した。長崎の領主は大村純忠の臣下で、既にキリシタンとなつてゐたが、ダルメイダはその領地に行つて多數の信者を作つたのである。勿論日本人のイルマンを伴つて行つたであらうし、その訪問も幾度か回を重ねた。一五六八年秋の報告によると、身分あるものは悉く信者になり、平民の間にも五百人の信者が出來た。附近の村々からも信者が長崎の會堂に集まつて來た。志岐會議の後、福田の港に行つてゐたビレラは、船が去つてから長崎に移つてその冬を過し、その間に三百人の信者を作つた。恐らくその頃にもう長崎の地が福田よりも良

い港であることは知られてゐたであらう。ポルトガルの船はこの後もなほ二年ほど福田の港に來てゐるが、しかしビレラはこの冬、即ち一五六八年の末以來ずつと長崎に住み込み、トドス・サントスを建てて、長崎繁榮の基礎を築いたのである。

四 トルレスの最後の活動——大村の會堂と北九州の政治的情勢

ビレラが長崎に住み込んだと同じ頃に、大村純忠の多年の望みが達せられ、大村にも會堂が出來た。日本最初のキリシタン大名は、改宗後五年半にして漸く自分の城下でミサを聴きクリスマスを祝ふことができるやうになつたのである。

純忠が二年前に熱心に宣教師の派遣を懇請したときには、トルレスは内亂の危険を口實として宣教師を送らなかつた。純忠はその領内の福田の港にポルトガル船が着き神父が來住する機會を捉へて、そこを訪れ、僅かにその渴望を癒すほかはなかつた。しかし純忠は絶えずトルレスと聯絡をとり、その懇請をも續けてゐる。志岐會議に先だつこと三ヶ月の頃にも、彼はその子に洗禮を授けるためにトルレスに大村へ來ることを懇請した。トルレスは大村の領内が平和に歸したことを認め、迎ひの船を

送つて貰ひたいと答へたのである。しかしこの時には、志岐の領主が熱心に引きとめ、トルレスの提出した要求を承諾したりしたために、出發することができなかつた。やがて志岐會議が催されたが、その濟んだあとの九月に、口の津で腫物を病んでゐたダルメイダを見舞ふといふ口實のもとに、トルレスは志岐を出發した。口の津で半月餘を送つた後に、更にポルトガル人の間の不和の調停のためといふ口實をもつて、彼は福田の港に赴いた。こゝでは帆船その他の船が祝砲を打つて迎へた。十日経たない内に純忠が福田へトルレスを訪ねて來た。着くと先づ會堂へ行つてミサを聴き、そのあとでトルレスに挨拶し、それからやつと宿へ入つた。その日の午後トルレスは七十人ほどのポルトガル人を連れて純忠を訪ねた。それから二日の間協議を重ね、トルレスは巡察のため、大村へ行くといふことになつた。出發の準備をしてゐる間に近隣の領主たちや純忠の家臣らが盛んにトルレスを訪ねて來た。やがて十月五日にトルレスは五人のポルトガル人と日本人イルマンのダミヤン及びパウロを連れて大村に行つた。翌日一行は純忠の館で晩餐の饗應をうけ、そのあとでダミヤンが夫人たちに説教をした。やがて純忠は評議會を招集し、トルレスにこのまゝ大村滞在を懇請すること、會堂の敷地をトルレスに與へること

などを附議した。キリシタンであるものもないものも皆これに賛成し、彼らの意志としてトルレスに懇請して来た。トルレスが多年切望して来たことは、今や向ふから轉げこんで来たのである。

純忠はかなり広い地所を興へた。會堂の建築は早速始められた。それが出来るまでトルレスは、その滞在してゐた家でミサや説教を行つた。受洗者は續々と出で、三回で二百四十人ほどになつた。純忠もその子の洗禮を希望したが、トルレスは純忠夫人の歸教を重視してゐたので、母親と共に授洗しようと云つて先へのばした。

會堂は一五六八年十二月の初めに出来上つた。そこで大村での最初のクリスマスが盛大に祝はれた。純忠はこの祭を盛大にするために、會堂の隣りの地に大きい舞臺を造り、周圍に多數の棧敷を設けて、二千人の公衆の前に宗教劇を演ぜしめた。純忠夫人も侍女たちを連れて大きい棧敷に来て居り、トルレスも二人の日本人イルマンやポルトガル人と共に他の棧敷にゐた。この時のトルレスの満足はほと推測することができる。彼が純忠をめぐりて豊後から移つて来て以來、六年を経て、漸くキリシタンを領主とする國の首府に、領主を信者の筆頭とする教會を作り上げたのである。

トルレスは、一五六九年から一五七〇年の復活祭の後

ちであつて、神父たちではない。神父は信頼するに足りる。かういふ印象の下に、キリスト教は反つて地歩を占めることが出来たのである。

トルレスは一五七〇年六月、新しく着いた神父フランシスコ・カブラルに長老の職を譲り、間もなく十月二日に志岐で歿した。七十一歳位であつた。だから大村での一年半はその最後の活動期なのであるが、丁度その時日本は政治的に新しい時期に入りつゝあつたのである。東の方では信長が京都に現はれた。九州では大友宗麟の勢力が非常にのび、北九州から毛利の勢力を追ひ拂つたのみならず肥前の龍造寺を壓迫して来た。それに應じてトルレスも、ダルメイダを使つて、いろ／＼な手を打つてゐるのである。

天草島東側の本渡城の主天草氏は、志岐氏の三倍ほどの領地を支配してゐた。前から宣教師に關心を持ち、トルレスが初めて志岐に赴いた頃にはダルメイダを名指してその派遣を懇請して来たほどであつたが、大村に落ちついたトルレスは、一五六九年の初めにダルメイダをこの天草氏の許へ派遣した。ダルメイダはそこで開拓者としての辣腕をふるつた。領主の方でキリスト教への熱心を示して来なければ、彼は直ぐ立ち去らうとする態度を示すのである。領主はそれに釣られてあわてて布教の許

まで大村に留まり、こゝで日本諸地方の布教の指揮をした。彼が二十年來目ざして来たことは漸く緒についたと云つてよい。政治的權力を教會の下に置くといふ彼の企ては、大村では非常に成績がよかつた。武士たちが神父の命令を尙び服従したことは、一ポルトガル人をして世界中にその比がないと云はせたほどであるが(一五六九年八月十五日發無名ポルトガ)、トルレスはその服従を異教との對立の克服に利用した。大村でポルトガル人の從僕が數人の佛僧に殺されたことがある。それを見た純忠の家臣たちは、猛然として殺されたキリシタンのために復讐しようとした。

トルレスは純忠に復讐をとめた。純忠は、自分の家臣たちが最早自分の命令を聞き得ない段階に達してゐることを述べ、トルレスに直接の命令を乞うた。トルレスは、寺院の焼き討ち、僧侶殺戮に乗り出して行つた武士たちに、途中から引き返しを命じた。領主の命令に従はなかつた武士たちも、トルレスの命令には躊躇することなく従つた。世界中で最も復讐を重んずる武士たち、復讐をしないのは最大の恥辱であると考へてゐる武士たちに對して、トルレスは、復讐を抑止することが出来たのである。そのために大村では、新しい紛争を防止することが出来た。このことは未だ改宗してゐない有力な武士たちを非常に感動せしめた。争ひを挑發してゐるのは佛僧た

可を興へたが、政治の實權が家臣の手に移つてゐることを見て取つたダルメイダは、先づ五ヶ條の條件を提出した。一、領内の布教を喜ぶ旨の城主等署名の文書、二、領主も家臣と共に八日間説教をきくこと、三、キリスト教をよしと認めた場合には子の一人をキリシタンとし、キリシタン武士の首領たらしめること、四、會堂の敷地を興へること、五、志岐との間の沿岸七里の住民にキリシタンとなる許可を興へること、などである。領主はこれを承認した。そこで、それまで靜かに形勢を觀望してゐたダルメイダは、二人の日本人イルマンと共に目ざましい活動をはじめた。先づ、全領の行政を握つてゐた家老のドン・レアンが、家人ら約五十人と共に洗禮を受け、次でその外舅が同じく五十人ほどと共に洗禮をうける。他にも重臣數人がそれに續く。更にダルメイダはドン・レアンの援助をうけて村々を巡り、そこにも四百人ほどの信者を作つた。かうして僅か二ヶ月ほどの間に全領内が動き出したやうに見えた。

その形勢は、直ぐに政治的な分裂をひき起した。佛僧たちの働きかけで、領主の兄弟が先頭に立ち、有力な武士たちを集めて、ドン・レアンの排斥運動を企てたのである。一夜、一味の武士たち七百人が寺院に集合し、ドン・レアンの家を襲撃しようとした。出發に先立ち領主

にこの擧の承認を求めたが、領主は承認を拒んだ。レアンを殺すのは領主を殺すも同様であると答へた。さうしてレアンの許に急を傳へた。キリシタンの武士たちは續續レアンの家集まり、その手につくものは六百人に達した。一人の主立つた佛僧が、領主やレアンに説いて廻つた。レアンに對しては、キリスト教を捨てよ、然らずばこの地を立ち去れと要求した。レアンは、たゞ領主の命令にのみ従ふ旨を答へた。領主はつひに口説き落されて、平和のため暫くこの地を去れ、とレアンに命じた。レアンは止むを得ず、妻子及び家臣約五十人と共に船に乗つて口の津に赴いた。

この出来事は五月に起つたが、ダルメイダは八月まで天草に留まつて攻勢の回復に努めた。先づ第一に彼は大友宗麟に依頼して、キリスト教の弘布を希望する書簡を天草の領主に送つて貰つた。當時肥前の龍造寺を壓迫してゐた宗麟の睨みは、天草へは十分に利いたのである。領主はこの書簡を家臣たちに示し、ダルメイダの布教活動を繼續させた。すると反動側は三人の有力な領主を動かして、天草の領主に對してキリスト教排撃を申し入れさせた。領主は、一時それに屈せざるを得ない所以をダルメイダに説明し、暫く隱忍することを求めた。そこでダルメイダは、領主と協約を結び、大村のトルレスの許へ

歸つて行つた。その協約は、ダルメイダが再び天草領へ來た時、領主の長子と二人の重臣とをキリシタンにする事、ダルメイダの選んだ十六ヶ村をキリシタン村としてダルメイダに託することなどであつた。

ダルメイダの去つた後、天草領内の内亂は激化した。領主は一時一つの城に籠つて僅かに生命を全うし得たほどであつたが、やがてもり返し、謀叛した兄弟を他の城で包圍するに至つた。その間にダルメイダの斡旋によつて得た大友宗麟の助力が相當に利いたらしい。翌一五七〇年の二月には、ダルメイダはトルレスの命によつて宗麟を筑紫國境の日田に訪ね、九通の書簡を認めて貰つたのであるが、その内の三通は天草の領主に關するものであつた。一は島津氏宛の書簡で、天草の叛亂軍を後援しないやうに頼んだもの、二は宗麟配下の一領主に宛てた書簡で、天草の領主を助け内亂鎮定に努めるやう依頼したもの、三は天草の領主宛の書簡で、領地を悉く回復するまで援助を約したものである。かういふ助力によつて遂にキリスト教排撃派を鎮定し得た天草の領主は、やがて新來のカブラルの手によつて受洗するに至つた。かうして有名なキリシタン地方天草領は、トルレスの最後の仕事の一つとして、ダルメイダによつて開拓されたのである。

しかしトルレスが大友宗麟の勢力を利用したのは、天草領についてのみではなかつた。宗麟の北九州制覇が都合よく進み、毛利の軍勢を北九州から追ひ拂つたのは、一五六九年の夏から秋にかけて半年に亙る大仕事であつたが、この際逸早く山口の教會の回復を思つたのは、トルレスであつた。彼は一五六九年の十一月にダルメイダをして日田の陣營に大友宗麟を訪ねしめ、天草布教に對する援助を謝すると共に、また「山口の正統の領主たるチロヒロ」との聯絡のことを相談せしめてゐる。ダルメイダはその足でチロヒロの陣營を訪ねた。チロヒロは毛利勢が筑紫に進撃してゐる隙をねらつて山口を襲撃しようとしてゐたし、その部下には、山口のキリシタン武士がゐるのである。彼はダルメイダの要求に應じ、山口を回復したならば領民をキリスト教徒たらしめるであらう、といふトルレス宛の返書を認めた。このチロヒロの山口領襲撃は、大友宗麟が、大内四郎左衛門輝弘をして軍勢空虚の長府あたりを奇襲せしめた事件を指すのであらう。博多東方の立花山に陣してゐた毛利の大軍は、この奇襲に驚いて北九州を引き上げたのである。

毛利勢が立ち去つたあと、大友宗麟の壓力が西方へ加はつてくるのを見て、大村純忠は幾分の危険を感じ、トルレスに頼んで大友氏との親交を斡旋して貰つた。宗麟

はトルレスの申し出に對しては何事によらず拒絶したことがないので、この時にも、大村氏や有馬氏に好意を寄せてゐた過去のことを不問に附し、トルレスの意に従つた。今やトルレスは大名の運命を左右する地位に立つこととなつたのである。

しかし一五七〇年五月頃、宗麟の軍隊が肥前の龍造寺の領地に迫つたときには、大村純忠は落ちついてはゐられなかつた。大村は飛ばつちりを受けるかも知れないといふので、純忠はトルレスに長崎の會堂へ移ることを請うた。大村にはダルメイダが残つた。が半月の後にはトルレスはダルメイダを呼んで、宗麟及びその部將の陣營へ派遣した。戦争の際に會堂や信者を保護するやう頼むためであつた。

ダルメイダは、多分久留米附近にゐたと思はれる宗麟を訪ねて來意をのべたが、宗麟は心配するに及ばぬといふ親切な返書をトルレス宛に書いた。さうして彼の部將たちを訪ねるといふダルメイダにいろ／＼の保護を與へた。ダルメイダは陣營で主將に會つて款待をうけ、大村純忠のために大いに辯じた。會堂の保護ほどの部將もひきうけてくれた。

さういふ形勢のたゞ中へ、フランシスコ・カブラルが、日本のヤソ會士たちの長老として赴任して來たので

ある。カブラルは六月に志岐で、第二回の會議を召集した。京都のフロイスを除いてすべての神父が集まつた。日本における布教活動の指揮はこの時からカブラルの手に移つたのである。

第八章 ルイス・フロイス——和田惟政——織田信長

一 フロイス信長に會ふ

天草の島でトルレスが、志岐會議を催してから間もなく、一五六八年の秋に、織田信長は足利義輝の弟義昭を擁して上京して來た。松永久秀は立ちどころに彼に降つた。三好黨や篠原長房の擁立した將軍足利義榮は、阿波に逃れて死んだ。京都をめぐる覇權競争は、こゝで急激に面目を改めたのである。

足利義昭は、三好松永のクーデターの當時、奈良興福寺の一乗院主であつた。三好黨は早速彼を幽閉した。それを祕かに救ひ出し、還俗せしめ、結局信長と結ぶに至らしめたのは、長岡藤孝(細川幽齋)、和田秀盛、明智光秀などの働きである。これらの人々は室町時代の高貴な傳統を守らうとしたのであつて、成り上り者である信長に奉仕しようとしたのではなかつたが、結果においては、彼らの利用した新興の勢力に逆に利用せられることとなつたのである。

フロイスが信長に渡りをつけたのは、この義昭側近の勢力を通じてである。その中で長岡藤孝や明智光秀が當時どういふ態度を取つてゐたかは明かでないが、後に有名となつた細川ガラシャ夫人が明智光秀の娘、長岡藤孝の嫁であることを考へると、滿更無關心であつたとも思へない。特に關係の深いのは和田秀盛の一族和田惟政である。惟政は藤孝などと共に義昭に従つて將軍守り立ての努力をした一人であるが、その親しくしてゐた(或は兄弟であつたともいはれてゐる)高山圖書頭ダリヨが畿内キリシタン武士の先驅者であつた關係から、かねてキリシタンに深い同情を持つてゐた。信長の上京後は攝津大和の平定に功を立て、京都の南の押へとして高槻の側の芥川城、ついで高槻城の城主となつた。フロイスはこの惟政に働きかけたのであるが、キリシタンでない領主のうちでこの惟政ほど衷心の愛情を以てキリスト教の保護に盡してくれた人はほかにはないと彼は云つてゐる。この惟政の盡力で、信長の二度目の上京の時に、フロ

イスの歸京が許された。一五六九年三月末、惟政の命により、高山ダリヨが堺まで迎への人馬を寄越したのである。フロイスの一行は途中高槻近くで高山ダリヨに迎へられ、高山の守つてゐる芥川城にも一泊して、三月二十八日に、信者たちの盛大な出迎へを受けつゝ、五年ぶりで京都に入つた。この期間に九州へ行つて活躍して來た元琵琶法師のロレンソも、ベルシヨール、アントニオ、コスモなどの日本人イルマンと共にフロイスに従つてゐた。

京都では、このフロイスの入京の二週間前(永祿十二年二月廿七日)に、信長が二條城築造の鋏初めをやり、その後恐ろしい勢でその大土木工事が進行しつゝあつた。何故信長が急激にこの工事を始めたかといふと、前年の末に信長が岐阜に引き上げて行つたその留守をねらつて、正月早々三好三人衆が京都を奇襲し、一時新將軍を危地に陥れたかからである。この時には、將軍側近の長岡藤孝らの守備や和田惟政らの來援で、辛うじて三好黨を潰走させることが出來たが、しかし京都の防備の弱いことは露骨に曝露された。信長は即座に上京して來て、これまで永い間どの武將も企てなかつた京都築城のことを考へ出したのである。しかもその城は、當時盛んに行はれてゐた山城(やましろ)とは異なり、平地の京都市中に、深い壕や堅固な城壁を以

とつては非常な驚きであつた。彼がこゝに何か新しい時期の開始を豫感したことは、彼の信長に對する熱心な働きかけによつても察することが出来る。この豫感はやがて信長の猛烈な佛教破壊によつて充たされるのである。

しかし信長への接近は初めは容易ではなかつた。フロイスの入京を聞くと、松永久秀はフロイスに先んじて信長を訪ね、キリシタンの神父のゐる所には、必ず擾亂や破壊が起るといふことを理由にして、その追放を懇願した。それに對して信長は、かういふ大きな町でたゞ一人の人が擾亂の原因になるなどは、お前の膽は小さい、と答へた、といはれる。しかし、入京の翌々日、フロイスが城へ信長を訪ねて行つた時には、信長は會はなかつた。その理由は、數千里の遠方から來た外國人にどういふ禮儀で接してよいか解らぬといふことと、密かに面會すれば神父が信長に洗禮を授けに來たなどと心配するものがあるだらうといふことであつた。つまり彼はキリスト教排斥運動を顧慮してゐたのである。内裏から出た宣教師追放令はまだ取り消されてはゐなかつた。排斥派はそれを據り所にした。フロイスが信長を訪問すると、すぐその夜には、内裏から將軍に對して宣教師追放を信長に命令せよといふ交渉があつた、といふ噂がひろまつた。翌々日の早朝には、内裏の使がフロイスのゐる信者

て、山城(やましろ)以上に防備嚴重に築いたものであつた。フロイスの言葉でいふと、それは「日本において曾て見たことのない石造」であつた。信長はこの大土木工事のために近畿十四ヶ國の諸將を動員し、彼らをして、部下の武士たちや人足を率ゐて勞役せしめた。總指揮者は信長自身で、日々工事場に臨んだ。通例は二萬五千人、少ない日でも一萬五千人の人々が彼の指揮の下に動いた。鐘の合圖で、諸方の領主や武士たちが、各々その部下を率ゐ、鋏を携へ手車を押して集まつてくる。さうして、堀を掘り土を運ぶ。石垣の工事のためには多量な石が必要であるから、或は近郊の山から運び、或は市中から集めてくる。或る領主は部下を率ゐて寺々を廻り、毎日一定數の石をそこから運び出した。石の佛像や臺座の石などもばらばらにして車に積まれた。時には、石像の頸に繩をつけて工事場に引いて行くといふやうなことも行はれた。さういふ石で積み上げられたのが、高さ七八間、厚さもまた七八間、時には十間に及ぶやうな、巨大な城壁である。フロイスはこの光景を見て、ソロモン王の「エルサレムの殿堂」の建築や、「デイドのカルタゴ都市建築工事」などを聯想してゐる。

普通ならば四五十年はかゝるであらうと思はれるこの大工事を、信長は七十日間に仕上げた。それはフロイスに

の家を壊しにくると注進する人があつた。フロイスは早速ロレンソを和田、佐久間、高山などの許に使にやり、自分は他の信者の家に逃れて一日中潜伏してゐた。信長が宣教師に會はなかつたといふことだけで、これだけの不安があつたのである。

この不安は和田や佐久間の保證で取り除かれ、フロイスは初めの信者の家へ歸つて復活祭の週のさまじい祭儀を行つた。さうして復活祭の一週間後、入京してから二十日目に、初めて足利將軍を六條の本國寺に訪ねた。この訪問は和田惟政の斡旋で信長の指圖により行はれたものであつたが、將軍は面會しなかつた。このやうに信長も義昭も神父を引見しないといふことはキリシタンにとつては相當の打撃であつたので、惟政はその面目にかけて信長を動かさうと努めた。その結果、將軍訪問の數日後に、惟政は信長の承諾を取りつけ、突然騎馬の士二十三人を率ゐてフロイスを迎ひに來た。信長は平生通り工事の指揮をしてゐたのであつて、遠來の客を迎へる態勢を取つてはゐなかつた。フロイスが乗物で工事場に着いた時には、信長は堀の橋の上に立ち、附近で六七千の人が働いてゐた。工事はすでに半ばは出來てゐたのである。フロイスたちが遠くから敬禮すると、信長は自分の側へ招き寄せた。かうして信長とフロイスとの最初の會

見は、この未曾有の大工事の見渡せる橋の上で、衆人環視の中に行はれたのである。

信長が最初に知らうとしたのは、この珍らしい外国人の身の上であつた。それはフロイスにとつては重要な前置に過ぎなかつたが、信長にとつてはさうでなかつたらしい。非常に遠い國から親を離れ、艱難を冒して、布教のためにこの國に來てゐる心境、——そこにいはばヨーロッパ文化の尖端があつたのであるが、それを彼は捉へようとした、フロイスにとつて本論である布教の問題も、信長はこの視點から見つてみた。キリスト教が擴がなければインドへ歸る氣か、といふ問もそこから出たのである。フロイスはそれに對して、信者がたゞ一人になつても、神父一人は生涯この地に留まるであらうと答へた。次で信長は、キリスト教が京都で榮えないのは何故であるか、ときいた。それに對してロレンソは、稻を育てるには田の草取りをしなくてはなりません、といふ風に答へ、佛僧たちの迫害を示唆した。信長はそれに和して僧侶の墮落を長々と語り、坊主らは欲と色に目がくられてゐると云つた。その機會に、フロイスは、ロレンソをして次のやうな意見を述べさせた。宣教師たちの目ざすところは、名・富・好評、その他いかなる世俗的なものでもなく、たゞキリスト教を擴めることだけである。

就てはこの教と日本の宗旨とを比較するために、佛教各派の最も優れた學僧を集め、信長の面前でキリスト教との討論をやらせて頂きたい。もし負けなければ追放されてよい。もし勝つたならば佛僧たちにもキリスト教を聽かせることにしてほしい。さうでないといふ時までも陰謀が絶えないであらう、といふのであつた。信長はこれ聞いて愉快さうに笑ひ、なるほど大國には大膽な學者が出ると云つた。さうしてフロイスに向ひ、日本の學者が承知するかどうか解らぬが、或はさういふ催しをするかも知れぬ、と答へた。フロイスの最大の用件、信長の布教免許状については、明答は得られなかつたらしい。フロイスはこの免許状が宣教師に對する最大の恩恵であること、この恩恵によつて彼の美名がキリスト教國民の間に知れ渡つて行くであらうことを説いた。それに對して信長は愉快さうな顔をしたが、何も云はなかつた。

この會談は一時間半乃至二時間位かゝつた。そのあとで信長は和田惟政に工事場の案内を命じた。この工事が彼の心を占領してゐたことはこの時の彼のそぶりにありありと現はれてゐた。

信長がフロイスに會つたので、將軍も二日後に彼を引見した。しかし布教免許状の方はさうすらくとは運ばなかつた。それを心配した信者たちは、信長への獻金の建築の壯麗なことをお讚めなさい、また免許状の譯文をインドやポルトガルへ送つて信長の恩寵を知らせるとお云ひなさい、といふのであつた。フロイスは惟政の親切を感謝し、キリシタンになることを勧めた。惟政は笑ひながら、心中はキリシタンである、信長が岐阜へ歸つたら教を聽く暇が出来るであらうと云つた。

將軍義昭の免許状は一週間遅れて手に入つた。それも惟政の盡力であつた。惟政はまた目覺時計を信長に見せるためにフロイスを連れて行つた。この三回目の會見は室内においてであつた。信長は時計を見て驚いたが、構造が複雑で、自分が持つてゐても使へない、と云つて受けなかつた。さうしてフロイスに茶を振舞ひ、美濃の干柿を與へた。この時も二時間ほど話したが、信長は頻りにヨーロッパやインドのことを知らうとした。さうして別れ際に、近々尾張へ歸るから出發前にもう一度來るがよい、その時は將軍訪問の時に着てゐたポルトガル風の衣服を着けて來て貰ひたいと云つた。それはオルムズの緞子で作つた短い大型の雨外套に金襴の裝飾を附けたもの及び黒頭巾なのであつた。

二 フロイスと朝山日乗との衝突

その出發の前日、一五六九年五月六日(永祿十二年四月二十日)フロ

必要があるのではないかと考へた。何故なら堺の町、大坂の町をはじめ、諸方の寺院などは、信長の簡単な免許状を得るために巨額の金を獻じてゐたからである。そこで信者たちは銀三本を和田惟政の所へ持つて行つた。惟政はそれに銀七本を加へ、信長の機嫌の好い折をねらつて、貧しい神父からの贈物として獻じた。信長は笑つてそれを斥けた。神父から金銀などを受ける必要はない。神父は外國人だから、免許状のためにそんなものを受けたとあつては聞えが悪い。そんなことをしなくとも免許状は與へる。汝が文案を作り、神父にこれでよいかと念を押した上、持つて來るがよい。署名してやらう。さう信長は云つた。工事に氣を取られてゐた信長は、文案が面倒なのでついほつて置いたのである。

さう解ると、和田惟政は迅速に事を處理した。信長の朱印状は、神父の京都居住許可、會堂に對する徵發や公課の免除、領内における保護などを表明したものであつた。日附は永祿十二年四月八日(一五六九年四月二十四日)である。惟政はこの免許状を高山ダリヨに持たせて寄越し、翌日御禮言上のためにフロイスを同伴して信長の許に行つた。信長は相變らず工事場にゐて上機嫌であつた。さうしてまた惟政に命じて工事を見物させた。惟政は城内を案内して歩きながら、フロイスに信長の扱ひ方を教へた。こ

イスは、ロレンソたちを伴ひ、シナの大型紅紙一束、蠟燭一包を携へて、別れの挨拶に信長を訪ねた。時は夕方、面會を求める人々が大勢待つてゐたが、彼の来たことをきくと信長は直ちに引見し、彼の差出した蠟燭に自ら火を點じて手に持ちながら、例のポルトガル服はどうしたとたづねた。フロイスはかういふ待遇を豫期せず、その服を着てはゐなかつたが、念のために持参してはゐた。信長は自分の面前でそれをフロイスに着させ、頻りに眺め入つてその形を讚めた。さうして、出發前の多用途のを顧慮して辭去しようとするフロイスを、強ひて引き留めた。

この席でフロイスは、朝山日乗と衝突したのである。この日乗といふ人物は、法華宗の日乗上人といふふうりに傳へられてゐるが、法華宗の僧であつたかどうかは明かでない。しかし非常な山師で、珍らしい雄辯家であつたことは、確からしい。もと出雲の豪族で備後に領地を持つてゐたが、戦亂の間に領地を失ひ諸國を流浪して歩いた。フロイスによると、尼子に叛いて山口の毛利に頼つた時には、彼は、釋迦の示現により佛教改革・皇室復興の使徒と稱してゐた。八九年前京都で買った金襴の布を内裏から拜領の衣と稱し、小片に切つて、多額の寄附をなしたものに與へる、などといふこともやつてゐた。そ

れによつて彼は山口の寺院を建築し得たほどである。その後毛利氏と松永彈正との間の聯絡を計らうとして東上したが、三好三人衆の手に捕へられ、篠原長房の裁斷で西の宮の獄に投ぜられた。しかるに彼は巧みに内裏との聯絡をとり、内裏から彼の赦免を求めるといふことになつた。日乗上人の號は後奈良天皇の勅によると傳へられてゐるし、彼が皇室復興を標榜したことなどを考へ合はせると、朝廷との關係は相當深かつたらしい。丁度そこへ信長が上京して、最初に企てたのが内裏の修造や供御の復興であつた。日乗のためには機が熟して來たのである。彼は信長と朝廷との間の仲介者として立つた。この地位と、さうしてそのしたゝかな才能とが、信長をして彼を重んぜしめたのであつた。

その日乗は、前の日に信長を訪ね、出發前に宣教師を追放せよと頻りに口説いた。宣教師追放令は五年前に朝廷から出たのであるから、日乗がかく主張する根據はあつたのである。しかし日乗はさういふ法律論を持ち出したわけではなく、たゞ當時の極まり文句として、宣教師の到る處擾亂と破壊ありといふことを理由とした。信長はその心の狭さを笑ひ、既に免許狀を與へたのだから追放は出來ない、ときつぱり答へた。これは實質的には五年前の女房奉書の効果などは認めないといふ態度の表明

でもあつたのである。このいきさつは和田惟政からロレンソを通じてフロイスに知らせてあつた。そこで、信長に引き留められたフロイスは、日乗が直ぐそばにゐるとも知らずに、信長に向つて、坊主らの反對意見をそのまま信じないで貰ひたいこと、信長出發後は和田惟政に神父保護を託してほしいことなどを頼んだ。信長は、坊主らは何故キリスト教を嫌ふのかときいた。それに對してはロレンソが、兩者は熱と寒、徳と不徳とのやうに相違すると答へた。信長は再び、汝らは神佛を尊ぶかときいた。その答は、神とか佛とかと云はれてゐるのは皆我々と同じ人である、人類を救ひ得るものではない、従つて尊崇することはできぬ、といふのであつた。この時に信長は、日乗上人の名を呼んで、この答には何か意見があるだらう、何か質問するがよいと云つた。それで初めてフロイスやロレンソは日乗がそばにゐることを知つたのである。日乗は氣取つた態度で、それでは汝らの崇拜するのは何であるかときいた。答は、三位一體のデウス、天地の造り主、であつた。「ではそれを見せて貰はう。」「見ることは出來ない。」「釋迦や阿彌陀よりも前にあつたのか。」「勿論前である。始めなく終りなく永遠のものである。」「さういふ問答のあとで、ロレンソがその意味を詳しく述べ始めたが、日乗は一向に理解が出來ないら

しく、これは亂暴だ、民衆を瞞すものだ、早速彼らを追放すべきであると云つた。信長は笑つて、氣が弱いではないか、解らない所をもつと質問するがよい、と云つたが、日乗はもう言葉が出せなかつた。で、ロレンソが逆に、生命を作つたのは誰であるか、御存じか、とたづねた。日乗は知らないと答へた。次々にロレンソが色々な問をかけたが答はいつも知らない、であつた。そんな問題はそつちで説明して見ろ、と云つて威壓するやうな態度を取つた。ロレンソは平然として詳しい説明を展開した。日乗は、そのデウスは禪宗の本分と同じだな、と云つた。その言葉を捉へてロレンソはまた兩者の相違を明かに論じ立てた。さういふ風にして議論はもう二時間位に互つてゐた。日乗はよほどむか／＼して來たらしく、もう遅い、追放すべきである、彼らが京都にゐたために前の將軍は殺されたのだが、その彼らがまた京都に來てゐるのだ、と云つた。しかし、「信長は元來神も佛も尊敬しないのであるから、さういふことは氣にかけず、日乗に對して殿しい顔を向けた。」フロイスがこの報告を書いたのは一五六九年六月一日(永祿十二年五月十七日)であるから、信長はまだ佛教に對する強硬政策を始めてはゐなかつたのであるが、しかしフロイスの眼にはもうはつきりとその態度が映つてゐたのである。

が、日乗はそれだけで凹んではゐなかつた。一層大きい衝突は、靈魂不滅の問題に關して起つた。そのきつかけとなつたのは、デウスは善を賞し悪を罰するか、といふ信長の問である。それに對してロレンソが、勿論である。しかし賞罰には、現世におけるものと來世における永遠のものがある、と答へると、日乗は、來世において賞罰を受ける當體、即ち不滅なるものの存在といふ考を、大聲をあげて笑つた。そこで、病中のために疲れて來たロレンソに代つて、フロイス自身が日乗との間に靈魂不滅の議論を始めたのである。來世の信仰や靈魂不滅の思想が當時の佛教徒の間になかつたといふことは甚だ理解し難いことであるが、しかし佛敎哲學の空の原理から云へばそれらを否定する方が正しいであらう。その否定の主張に對してフロイスは、肉體と獨立な靈魂の存在をいろ／＼な點から證明しようとした。この落ちついた議論をきいてゐるうちに、日乗は、色を變じ、齒を鳴らし、不思議な狂暴さを現はして、よし、それでは汝の弟子（ロレンソ）の首を斬るから、靈魂の存在することを示せ、と云ひながら、室の一隅に立てあつた信長の長刀に走り寄つて、それを抜かうとした。信長は急ぎ起つてうしろから抑へ、和田、佐久間その他の大身たちが他方から抑へて、長刀をもぎ取つた。信長は笑ひながら、

三 追放論旨の效力問題——日乗と惟政との對立

しかし信長が京都にゐなくなると、日乗のキリスト敎排斥は急激に力を得て來た。フロイスの報告によると、信長出發後五日目の五月十二日に、古いキリシタンの結城山城守がロレンソを通じて最初の情報を傳へたといはれる。日乗が宣教師追放の新しい論旨を得て將軍にその實行を迫らうとしてゐる、神父は急いでその備へをしななくてはならない、といふのである。この情報と殆んど同時に、ベルシヨールもまた別口の噂をもたらし外から歸つて來た。それによると、日乗は内裏の庇護の下に武装兵を率ゐて神父を襲ひ、キリシタンを皆殺しにしようとしてゐる、といふのであつた。この五月十二日（永祿十二年四月二十日）に、何か論旨が出たことは事實であるらしい。御湯殿上記に「四月二十五日はてれん、けふりんしいたされて、むろまちとのへ申され候」とあるのがその證據である。しかしこれだけでは布敎許可の沙汰であつたと解する人もある。信長の布敎許可の十七日後、將軍のそれの十日後に、それと全然反對の追放の論旨が出たとは考へにくいのである。しかしフロイスに傳はつて來たところはまさに右の通りであつた。

予の面前において甚だ無禮ではないか、もとへ坐れ、と云つた。他の大身たちも彼の無禮を責めた。和田惟政の如きは、信長の前でなければ斬り捨てる所だと云つた。やがて座が鎮まつたとき、フロイスは信長に向つて、日乗上人の亂暴は予の挑發したものではない、予はたゞ眞理を説いただけである、と云つた。日乗はまたかつとしてフロイスを突き飛ばした。信長はまた厳しく彼をたしなめたが、彼はひるまず、キリスト敎を罵つて、宣教師追放を主張し續けた。

以上はフロイスの記述によつたものであるから、朝山日乗の態度には同情すべき餘地がない。がそれにもかゝらず、信長は日乗の亂暴を大目に見てゐるのである。當時フロイスの聞いたところでは、信長のこの態度は、「内裏のため」であつた。彼は前日内裏の工事のための獻金を日乗に託した。が何のためであるにしろ、彼はキリスト敎排斥の主張を禁壓しようとはしなかつた。即ちキリスト敎にも反キリスト敎にも同じやうに自由を與へようとしたのである。だから彼は日乗の亂暴を寛恕すると共に、フロイスには親切な態度で別辭を述べ、またゆつくり聞かせて貰はうと云つた。さうして翌日、途中まで見送つた和田惟政に、安心してゐるがよい、といふフロイスへの傳言を託したのであつた。

フロイスは和田惟政の所へロレンソを急派して、この情報を傳へた。惟政の答は、實否を質しては見るが、自分の保護を信賴してゐてよい、といふのであつた。そこで惟政が聞き合はせて見ると、その日日乗は一人の公家と共に將軍を訪ね、「内裏が京都より追放した神父は、京都へ歸つて來てゐる。彼は日本の諸々の敎の敵であるから、その追放を命ずべきである」と申入れた。それによつて將軍は、「朝廷は人の入市とか追放とかに關與せらるべきでない。それは自分の行ふべきことである。自分はずでに宣教師に免許狀を與へた。信長もそれを與へた。今更追放すべき理由はない」といふ旨を答へた、といふことであつた。して見ると日乗が奉じたといふ論旨は、五年前の追放論旨が守られないことに對する抗議であつたのかも知れない。

翌日、城の工事を巡視してゐた惟政の所へ、ロレンソが様子を見に行く、と、惟政は將軍の態度を傳へた後、午後フロイスが將軍と信長の免許狀を持つて城へ來るやうにと頼んだ。その午後日乗はまた、公家と共に將軍を訪ね、信長に對して免許取消しを求め急使を出して貰ひたいと交渉したが、將軍は應じなかつた。その公家が、フロイスの着いたときにまだ残つてゐた。惟政はフロイスの面前で、その公家に對し、次のやうなことを云

ひ切つた。自分は今日まで内裏のためにいろ／＼盡して来た。將軍や信長と交渉して御爲を計つたことも少なくない。その報償として自分は神父への免許状のほか何事も望まなかつた。しかるにその免許状を與へないのみか神父の追放を命ずるといふのは、自分の名譽を奪ひ、不正を行ふものである。もしさういふことを決定せられるならば、自分は内裏に仕へることをやめる。公家を庇護することもやめる。神父に對する將軍や信長の態度はこの免許状の通りである。かう云つて惟政は、フロイスの持つて行つた免許状を、眼の前で寫させて公家に渡し、延から出たのでないことを示すものであらう。

この日將軍はフロイスを引見しようと思つたが、たゞ人をして、自分が庇護してゐるから、内裏とのことは心配しなくてよいと云はせた。しかし惟政は、この際將軍が會はないのは拙いと考へ、日覺時計を種に使つて、フロイスを將軍の前へひき出した。將軍は時計を見て非常に喜び、ヨーロッパ人の工夫と才智とを讚めた。

以上によつて察すると、日乗がふりかざしてゐたのは五年前の追放の論旨であり、また論旨の方が武將たちの免許状よりも重たいといふ主張であつたらしい。だからこの後も、日乗が論旨を奉じて宣教師を追放或は誅殺する

といふ噂は世間に絶えなかつた。で惟政は多數の兵士を會堂に派遣し、日乗の策動を武力で押へるといふ態勢を示して、噂を消さうとした。半月位は平靜になり教會もその平常の活動を始めた。

日乗の方では、皇居修復の仕事や京都の經濟復興などに辣腕をふるひ、信長の信用を深めたのに乘じて、執拗に宣教師問題を信長に交渉し、遂に宣教師の追放に關しては内裏に一任するといふ返書を書かせるに至つた。これは日乗の方からいへば五年前の追放論旨を有効に實施させるといふ意味になるであらうが、信長の方ではこれから決定する問題だと考へてゐたのであらう。この交渉の顛末を知つた惟政は、公家たちの書類を受理しないといふ態度で對抗した。さうして三日の間公家たちと折衝した結果、彼は云つた、「日乗の所行は公家たちの所爲であると認められる。もし内裏が宣教師追放を決定するならば、山城攝津の守護の地位を捨てても神父の保護を續けるであらう」と。

かりして、日乗と惟政との對立が尖鋭化して來た五月の末に、惟政は攝津の諸城の巡視に出かけた。日乗はこの惟政の不在に乗じて事を起すであらう、といふ噂が立ち、キリシタンたちは危険の身に迫るのを感じた。フロイスはロレンソをして惟政のあとを追はせた。ロレンソ

は高槻の城で惟政に會つて、二通の書簡を書いてもらつた。一は將軍側近の三人の重臣にあつて神父の保護を依頼したもの、他は日乗にあつて妄動を封じたもの、である。後者には、「神父は將軍と信長との免許状を得て京都に居住してゐる。その神父を追放しようとする動きがある」と聞き、公家をして内裏の意向を伺はせたところ、内裏の方では何事もないとの返事であつた。内裏以外の方面の動きであるならば、これは意に介するに及ばないことである。もし神父について何か云ひ分を持たれるならば自分に通知せられたい。その辯明は自分がする」といふ意味のことが認めてあつた。

この書簡は六月一日に日乗に届けられたが、日乗は激怒して、即夜惟政宛に次のやうな趣旨の返書を送つた。「内裏の宣教師追放令が出たのは五年程も前のことである。論言汗の如し。追放令は撤回され得ない。しかるに貴下はこの追放令に反して行動してゐる。これは未曾有の不正事といはなくてはならぬ。この道理を悟つた信長や將軍は、今や追放に關しては内裏の意向に一切を委ねた。貴下は内裏・將軍・信長などに背反してもキリスト教を庇護せんとするのであるか。元來、キリスト教は悪魔の教であるが故に、内裏及び公家たちは、宣教師の誅殺、會堂の破壊を令したのであつた。この内裏の命に反

對するものは天下になからうと思はれる。山城攝津の守護たる貴下がそれを守らず、支持庇護の態度に出るならば、信長はこれを心外とするであらう。貴下は靜かに反省して庇護をやめるべきである。」

この返書によつて見ても、日乗が新しい追放論旨を受けたとは考へられぬ。彼は五年前の論旨の有效を主張してゐるのであつて、フロイスたちが怖れてゐたやうに、新しく宣教師追放誅殺の論旨を受けたのではない。しかしフロイスたちがさう感じたとするれば、日乗の威嚇は成功してゐたのである。フロイスはこの返書を惟政に届ける前に讀み、直ちに主立つた信者を集めて對策を協議した。信者らの意見は、岐阜の信長に頼ることに一致した。そこでフロイスは翌日未明に京都を立ち、坂本でロレンソを待ち受ける、ロレンソは日乗の返書を携へて和田惟政を訪ね、信長側近の大身への紹介状を得てくる、といふことになつた。

翌日未明には小西隆佐とその一子がフロイスに伴つて出發し、坂本で知人の家を宿に世話した。その子はロレンソの來るまで附添つてゐた。ロレンソは越水城で惟政に會ひ、日乗の返書を見せた。惟政は微笑しながら、この法螺吹き首を斬つてやる、と云つた。フロイスの岐阜行きについては、自分が案内したのであるが急には

間に合はない、と残念がりながら、二通の紹介状を與へた。一は秀吉にあてて神父のとりなしを依頼したもの、他は岐阜の宿屋の主人に宛ててフロイス一行の世話を頼み、費用萬端は自分が引受けると云ひ送つたものであつた。他に丁度美濃へ行かうとしてゐた柴田勝家にも庇護を依頼した。ロレンソは右の紹介状を携へて小西隆佐と共に六月三日に坂本についた。そこでフロイスの一行は夜の三時に船で坂本を出發した。

四 フロイス岐阜に信長を訪ふ

岐阜は當時人口一萬位に過ぎなかつたが、新興の城下町として、「バビロンの雑沓」を思はせるほどに、商人や商品で混雑してゐた。フロイスの着いた時には、秀吉は尾張に行つて居らず、佐久間信盛、柴田勝家もまだ着いてゐなかつたので、二日ほど空しく待つてゐた。その内に先づ着いたのは佐久間、柴田の兩人で、フロイスはそれらの人たちに會つた。二人が信長にフロイスの來たことを告げると、信長は、「内裏の宣教師追放誅殺の論旨は困つたものだ。神父のある所、破壊が起るなどとは迷信に過ぎない。神父は外國人だから、自分は同情し庇護する。京都から追放させてはいけない」と云つたといふ。そのあとで、新築の宮殿の方へ出掛けて行く時に、

フロイスは途上で信長に出逢つた。信長は機嫌よくフロイスを迎へ、こんなに遠くまで來る必要もなかつたのにと云つた。さうして柴田、佐久間、その他七八人の人と共にフロイスを新築の宮殿に案内した。この宮殿は岐阜城のある稻葉山の麓の斜面に四段に互つて建てられてゐた宏壯なものであつたらしいが、信長はフロイスに向つて、「ヨーロッパやインドのものに比べると小さいではあらうが、しかし、貴下は遠來の客であるから、自分で案内してお見せする」と云つたといふ。その宮殿を敘述するに當つて、フロイスは、「ポルトガル、インド、日本に互つて自分がこれまで見た宮殿建築中、これほど精巧で美しく清らかなものは一つもなかつた」と云つてゐる。

その後二三日經つて秀吉が尾張からやつて來た。フロイスはロレンソと共に惟政の紹介状を持つて訪ねて行つた。秀吉は彼らを款待し、午餐を供した上、フロイスの宿の主人宛にフロイスを優遇するやうにとの書簡を作らせ、依頼の件は満足の行くやうに計らふから、ゆつくり休んでゐるがよいと云つた。この時フロイスはロレンソと相談して作つた四五行の覺書を秀吉に渡したのであるが、秀吉はそれを信長の所へ持つて行つて、指令を仰いだ。すると信長は、それは簡單すぎると云つて、内裏及

び將軍に宣教師の庇護を請ふ一層長い書簡を書かせ、それに署名して、秀吉に渡した。秀吉は、この信長の書簡に、惟政及び日乗に宛てた自分の書簡二通を加へて、フロイスに渡し、さつさと戰場へ歸つて行つた。フロイスが信長に禮を言ひに行くためには、また柴田勝家の手引きを頼まなくてはならないやうな始末であつた。

フロイスが勝家に伴はれて信長の前へ出たとき、信長は多數の京都の武士の面前でフロイスに云つた。内裏や將軍を意に介するには及ばぬ。すべては信長の權内にあるのであるから、信長の言に従つて行動し、居たい所に居てよい、と。さうして、フロイスが翌朝出發しようとするのを更に二日延期させ、翌日は京都の武士七八人と共にフロイスを饗應し、食後城を見せるといふ手筈をした。この信長の優遇は、前例のないものとして、人々に強い印象を與へた。

翌日、饗宴の後に、柴田勝家がフロイスとロレンソを案内して城の山に登つた。信長は城の中に住んでゐたので、表の方には大身たちの子息である少年武士が百人ほど詰めて居り、奥の方は侍女のみが用を辨じて何人も入ることが出来なかつた。フロイスたちが信長の室に招き入れられると、信長の子息、十三歳の信忠や十一歳の信雄（實際は十二歳であつた）も接待に出た。信長が信雄

に茶を命ずると、信雄は最初にフロイスの前へ、次に信長の前へ、第三にロレンソの前へ、茶碗を運んで來た。そこで茶を飲みながら、美濃尾張の平野を遠くまで見晴らした。信長は、インドにもかういふ城のある山があるか、と尋ねた。それから二時間半か三時間ほどの間、次に日月星辰のこと、寒地と暖地との相違、諸國の風俗などのことを質問した。その間に信雄を呼んで夕食の支度を云ひつけさせたりなどもした。このことは、信長としてはよほど異例であつたらしい。やがて立つて行つたが、自分でフロイスの膳を捧げ、信雄にロレンソの膳を持たせて出て來た。さうして、急のことで何もありませんが、といふ挨拶をした。食事のあとで信長はフロイスとロレンソに美しい衣服を與へ、直ぐに着させて、よく似合ふ、また訪ねてくるがよい、と云つて彼らを歸らせ

た。このやうに信長訪問は非常な成功であつた。それを記述してゐるフロイスは、現世のことを蔑視すべきヤソ會士が何故にかくも異教の權力者の款待を重視するかについて、長々と辯解してゐる。この國においては、權力者の意志を捉へなくては布教は出來ないのである。がこの時にはまだ信長は、新しい時代の形成者としての姿をはつきりと現はしてはゐなかつた。競争者は東にも北にも

西にもなほ健在であつた。信長がこれらの競争者に打ち克つといふ時代、即ち元龜天正の時代は、まさにこれから始まらうとしてゐる時であつた。この時に逸早く信長に眼をつけ、その意志を捉へることに全力を傾注したフロイスの炯眼は、感服のほかはないのである。

五 日乗の惟政排斥運動、日乗の失脚

しかしフロイスの見當がすぐに實現したわけではなかつた。日乗が失脚してキリスト教排斥運動をやめるまでにでも、一年餘は経つてゐる。

フロイスが信長や秀吉の書簡を得て京都に歸り、惟政と協議して日乗のキリスト教排斥運動を封じようとした後にも、日乗はその態度を改めなかつた。惟政が日乗に送つた書簡には、信長が宣教師庇護の態度を取つてゐること、内裏にも將軍にも宣教師排斥の意志はないことを力説し、おのれの宣教師庇護の理由は遠來の外國人であるが故であつて他意はないといふ風に穏やかに出たのであつたが、日乗は前の主張を引込めないのみか、一層露骨に狂信者の信仰闘争の態度を示して來た。信長や秀吉の書簡はほとんど眼中に置かないかのやうであつた。のみならずこの折衝の五六日後には、みづから信長に會

ふために岐阜に向つて出發した。その用件は主として内裏の修復、公家の所領の處置に關するものであつたと思はれるが、フロイスたちは宣教師追放問題のためであらうと推測し、惟政に頼んでそれに對抗する措置をとつたのであつた。日乗は勿論岐阜においても信長の宣教師に對する態度を變更させることは出来なかつたが、惟政に對する敵對心はそれによつて一層高まり、キリスト教排斥の運動を惟政排斥の運動に轉じたやうに見える。

異教徒である惟政は、フロイス庇護の運動を續けるうちに、漸次その信仰にも親しんで行つた。フロイスが岐阜から歸つて來た頃には、高槻に會堂を建築し、宣教師を自由に宿泊せしめようと考へてゐた。萬一、内裏が宣教師追放を決定したならば、その宣教師を高槻にひき取り、自分が京都に出る度毎に同伴して行つて一月でも二月でも滞在させる、さういふことを考へてゐた。しかしさういふ風に惟政が宣教師庇護に力を入れることに對しては、山城攝津の武士のなかに不平を抱くものも決して少くはなかつた。日乗が眼をつけたのはその點である。彼は信長の信用しやうな有力な武士で惟政を快く思はないものを煽動し、惟政の行政を非難させた。またさういふ證言を集めて、巧みに信長に吹き込んだ。さうして遂に惟政に對する信長の信頼の念を突き崩すことに成功し

たのである。

かうして一五六九年の秋惟政が岐阜に信長を訪ねて行つたとき、信長は惟政を岐阜に入れず、追ひ返した。さうして高槻のそばの要害芥川城を破壊させた。領地の一部も沒收された。惟政は部下二百人と共に剃髮して謹慎の意を表した。日乗たちはこの惟政の失脚を宣教師庇護の罰としてはやし立てたが、惟政の宣教師に對する態度は少しも變らなかつた。自分の不幸な運命などは意に介するに足らぬ。宣教師が無事に京都にゐることの出来るのが何よりである。もし宣教師が追放されれば、自分はインドまでもついて行く。さう彼は云つた。

一五七〇年は信長を中心とする争覇戦がいよ／＼始まつた年である。この年の三四月頃には信長と家康とが揃つて入京し、夏には北方の勢力朝倉淺井との衝突が始まつた。その信長の入京の際に、和田惟政は高槻の城から信長に會ひに來た。日乗らの仲間は、信長が惟政の首を斬らせるであらうと待ち構へてゐた。しかるに信長は、突然惟政を招き、多數の諸侯の面前で非常に情ある言葉をかけた。さうして美しい衣服を興へ、領地を増してやつた。これは日乗らにとつては案外のことであつたが、その五六日後に、日乗は、他の人々から重罪の訴へを受け、信長の激怒に觸れた。信長は多數の大身たちの面前

で日乗を罵り、彼奴を足蹴にして追ひ出せと云つた。その後も日乗は内裏修復の仕事にかじりついてはゐたが、もはや信長の愛顧を得ることは出来なかつた。日乗を中心とするキリスト教排斥運動はこれでほゞ終りを告げられたらしい。

六 戦亂に對するフロイスの方針と惟政に對する讚美

日乗のキリスト教排斥運動は以上のやうにして片づいたが、しかしすぐ引き續いて慌しい戦争騒ぎが起つた。淺井朝倉に對する夏の戦争は、姉川で信長方が綺麗に勝つたのであるが、それがきつかけとなつて秋には一層大きい戦争が巻き起つて來たのである。三好三黨は再び攝津に盛り返して、信長に反抗した。石山の本願寺がこれに應じて立つた。信長はその討伐のために西下して來た。惟政も信長の部下の有力な將として攝津に轉戦したが、信長方は相當の苦戦であつた。北方の淺井朝倉は三好三黨に呼應して再び立ち、近江の坂本城を攻陥して京都の郊外に侵入し、信長を背後から脅かした。この時信長は、柴田勝家と和田惟政とを殿軍として三好の軍に當らせながら、實に急速に京都に引き返し、咄嗟に坂本に出で淺井朝倉の軍の退路を絶つたのである。淺井朝倉の

軍は叡山へ逃げ上るほかはなかつた。信長は叡山の衆徒を味方につけて淺井朝倉の軍を降らせようとしたが、衆徒はこれに應じなかつた。そこで彼は東と西とから叡山を包圍し、山上の軍隊を自滅せしめようと計つたのであつた。包圍の開始は、寒さの近づき始めた十月の末であつた。

フロイスが包圍開始後一ヶ月の頃に書いた書簡(一五七〇年七月二日 京都發)によると、この時の市内の混亂と不安とは實に甚しく、最後の審判の光景を見るやうであつたといふ。何故なら、勝利はまだいづれに歸するとも解らず、信長が負ければ京都の町は焼かれ蹂躪されるからである。そこで市民は山上に穴を掘り、街路に逆茂木を設け、家財を隠し、妻子を市外に避難させた。しかもその市外には強盗や殺人が横行してゐた。市内でも、夜警・叫喚・警鐘・突撃などとみじめなことばかりであつた。フロイスも、大切な祭具は愛宕山に送り、他の家財は數人の信者の家に預けて、會堂には古い祭具だけを殘して置いたのであるが、しかしそれを使つてミサを行ひ、説教を續けてゐた。包圍のために食糧は著しく缺乏してゐたが、それでも信者の好意で米と乾大根乾蕪などの貯藏があり、包圍の繼續中持ちこたへ得る見込みがあつてゐた。かうして混亂のなかで會堂を維持し布教を續け得たところを

見ると、市民大衆のなかに積極的なキリスト教排撃運動などのなかつたことは明かだといはねばならぬ。

ところで、この年、一五七〇年の夏には、布教長フランシスコ・カブラルが志岐に着き、日本のヤソ會士の指揮をとつた。信長が三好黨の討伐をはじめた十月はじめには、トルレスがその志岐で死んだ。その同じころに、カブラルに従つて來たオルガンチノが堺に着き、出迎へたロレンソとともにそのまゝ堺に留まつてゐた。戦争で京都へ來ることは出来なかつたのである。そのロレンソからフロイスの許へ、三好三黨の反キリスト教的な傾向を知らせて來た。宣教師を庇護する領主や大身は必ず没落するから、今度勝利を得たならば、直ちに宣教師を京都から追放しようといふのである。この報を受けて、萬一信長や惟政が敗れた場合には篠原長房に頼らうと考へてゐたフロイスは、すつかり腹を据ゑて、信長にのみ頼らうといふ覺悟をきめた。信長が敗れても、彼が生きてゐる限りは、その領内へ行つて布教をしよう。やがてまた彼が勝利を得た時には、京都へ歸つてくることも出来る。かうフロイスは、勝負のまだきまらぬ内に考へてゐたのである。

その後包圍はなほ一ヶ月半ぐらゐ續いた。山上の軍隊も疲勞困憊して來たが、一層參つたのは物資の供給を絶

たれた京都の市民であつた。そこで將軍が調停にのり出し、正親町天皇も、勅使を派遣されるといふことになつて、遂に妥協が成立し、包圍は解かれた。この間に三好三黨の南からの壓迫をはね返したのは、和田惟政と木下秀吉との働きであつた。

フロイスがオルガンチノを京都へ迎へ入れたのは一五七一年の一月一日(元龜元年十一月六日)で、信長が包圍を解いた日より八日前であつた。このオルガンチノはフロイスの到達した決意と方針とをそのまゝ受け入れた人で、信長時代のキリスト教の隆盛と深く關係してゐるのである。

フロイスの功績は、新しい信者を數多く獲得するといふことではなかつた。信者の數はむしろ死亡によつて減少して行つた。彼の努力はむしろ信仰を深め、その退轉を防ぐことであつた。殊にこの戰亂の期節においてはさうであつた。長期に亘つて布植せられた佛教の勢力は中抜き難く、また京都には諸宗派の精銳が集まつてゐるのであるから、京都で一人の日本人を改宗せしめることは他の國々で二百人を改宗せしめるよりも難しいことであつた。しかしフロイスは、その中で教會を維持しつゞけ、親族の強硬な反對にもかかわらず信仰を貫き通した少年コスモや、清淨の理想を追うて結婚することなく死

んで行つた愛らしい少女パウラのやうな、感嘆すべき信者をも出したのである。がそれよりも著しいフロイスの功績は、京都における教會の存在の權利のために戦ひつづけ、和田惟政や織田信長の意志を捉へることによつて、政治的に、或は公共的に教會の地位を確立したことであつた。

この仕事のために異教徒和田惟政がフロイスを助けた態度には、實際驚くべき一貫性や強靱さがあつた。彼は高山ダリヨと親しく、キリスト教徒に同情を持つてゐたには相違ないが、しかし狂信者らしいところは少しもなく、従つて右の態度も信仰の情熱から出たのではない。フロイスによると、惟政は非常に愛情深く、一度人の保護をひき受ければ、そのため領地を失ふやうなことがあつても決して保護をやめなかつた。心變りといふことを非常に憎んだといふ。また家臣との間も非常に親密で、外から見ると、君臣の差別がつかなくつたといふ。これは、生命を賭して信賴に答へるといふ、鎌倉武士の獻身的な態度にはかならない。惟政はこの古風な武士氣質の人であつたと思はれる。しかしフロイスを保護し通した態度には、因襲に縛られた保守主義的な傾向と正反對なものがある。外國人を受け容れ、愛情をもつてこれを庇ひ、その説くところには虚心坦懷に耳を傾ける。従つて

もし戦争が彼を妨げなかつたならば彼はキリスト教に歸依したかも知れない。高槻城にフロイスとロレンソを迎へた時、彼は妻子と共にロレンソの二時間に亙る説教を聞き、非常に興味を覺えた。でロレンソをひきとめて四日間續けて説教を聞き、靈魂不滅の教に深く感動した。しかしこの時は戦争騒ぎで聽聞を中斷され、その後再びそれを續ける機會が來なかつた。惟政としては、教義を根本的に理解した上で、また自分がキリシタンとなつても差支へのないやうに一切を處理した上で、受洗するつもりであつたが、その暇を得ないうちに戦死してしまつたのである。この惟政の新舊いづれにも囚はれない自由な態度は、當時の武士の一つの類型を示すものとして、十分重視せらるべきであらう。

一五七一年九月、惟政の戦死後間もなく、フロイスはインド地方區長に宛てて惟政に關する愛情のこもつた長い書簡を送つてゐる。それによつてフロイスは、この異教の領主の、護教の功績を永遠に記念したのである。惟政の戦死は、惟政に似合はない油斷の結果であつた。この時の敵は、曾て惟政の味方であつた攝津池田の城主の家臣たちであつた。彼らは遠くを達觀することの出來ない勇猛一途の連中で、城主を逐ひ出し池田の實權を握つて新興の信長の勢力に反抗しようとしたのであるが、惟

政はこの下剋上の現象の故に彼らを蔑視し、警戒を怠つて奇襲にひつかゝつたのであつた。

フロイスはこの日、河内の三箇にあつて、悲報を聞いた。京都へ歸るために、護衛兵を惟政に頼んでやつた使が、この悲報を持つて歸つて來たのである。京都の會堂ではオルガンチノとロレンソとが、この庇護者の戦死のあとに起るべき迫害について協議を始め、急いでフロイスを京都へ迎へ取る方法を講じた。教會の人々の感じた不安と悲痛とは非常なものであつた。ロレンソは、近江の國まで來てゐる信長に訴がるために、一五七一年九月二十八日に京都を出發した。

ところがその翌日、實に意外な事件が突發し、教會の人々の不安などはどこかへ吹き飛んでしまつた。

それは信長の叡山燒討である。こんな思ひ切つた傳統破壊は、戰國時代の亂暴極まる武士たちでも、否、佛敎打倒を心から望んでゐた宣教師たちさへも、全く思ひがけぬことであつた。

第九章 信長の傳統破壊

一 本願寺との敵對、叡山燒討

織田信長が佛敎に對してはつきりと彈壓の態度を取り出したのは、一五七一年からである。その直接の機縁となつたのは、前年の秋の畿内における苦戦であつた。攝津では大坂石山の本願寺が三好三黨にくみして立ち、彼の攝津制壓を妨げたのみならず、伊勢尾張の門徒をして木曾川下流右岸の長島に據つて、信長を背後から脅かさしめた。京都では叡山の衆徒が淺井朝倉の軍を助けて信長の京都把握を危殆に陥れた。結局彼は、本願寺に痛棒を與へることも出來ず、淺井朝倉を制壓することも出來ず、淺井朝倉と一時和を講じて岐阜にひき上げたが、本願寺や叡山を打倒しなくてはならないといふ考は、この時に萌したのであらう。

彼が先づ手をつけたのは、本願寺の勢力の打倒であつた。一五七一年の初夏には、信長はみづから諸將をひきゐて伊勢の長島に迫つて行つた。しかし一向一揆の力は

彼の豫想を裏切るほどに強力であつた。だからこの時には信長は、兵を損することを恐れて、いゝ加減にしてひき上げたのである。長島征伐はこの後三年の間懸案として残り、一五七四年の夏に至つて、三ヶ月間の強攻の後に、遂に二萬人皆殺しといふ脅威的手段に出たが、しかし石山の本願寺はひるまなかつた。次の年には越前の本願寺一揆を討伐したが、本願寺の反抗は一層高まつた。いよゝ石山の攻圍にかゝつて見ても、五年間に亙つて遂にこれをくだすことは出來なかつた。結局一五八〇年に至つて、信長は皇室の仲介を請うて和を講じ、本願寺を石山から紀州の雜賀に斥けることが出來たのである。この経過によつて見れば、信長の覇權時代の大部分は本願寺との敵對のうちに過されたと云つてよい。信長の反佛敎的態度が根強かつたのは、その故であるとも見られよう。

本願寺との長期に亙る關係に比べると、叡山との關係は極めて單純であつた。叡山が信長に反抗して淺井朝倉

の軍を立て籠らしめた年の翌年の、正月の賀に、細川藤孝が信長を岐阜に訪ねたとき、信長は叡山焼討の意圖を洩らしたが、藤孝は、聞かぬ振りをして歸つて来たといふ。王朝文藝に通達した、學者でもあつた藤孝にとつては、たとひ衆徒の墮落が眼にあまるほどであつたとしても、この傳統の聖地を破壊するなどは思ひも及ばぬことであつたに相違ない。従つてこの言葉を聞いても、まさか實行するつもりだとは思はなかつたのであらう。しかし信長は、「日本で不可能なことを考へられてゐた」ことを敢て實行するやうな偶像破壊者であつた。一五七一年夏に、浅井の兵が近江に進出したのをきつかけとして、その秋、信長はまた近江に大軍を入れ、浅井の軍を北に壓迫しつゝ、三井寺から東坂本まで達したが、その時、信長は突如として、叡山攻撃の命令を發したのである。部下のものも驚愕して諫止しようとしたが、信長の決意は動かかなかつた。叡山の衆徒だけでは到底信長の軍を防ぎ得るものではない。叡山の力は八百年の傳統を背負つた教權や、それを象徴する山王の神輿などにあつたのであつて、それを恐れないものにとつては物の數ではなかつた。信長は平氣で山王二十一社やその神輿を焼き拂つた。また根本中堂をはじめ山上の堂塔四百餘をも餘すところなく焼き拂つた。僧侶千五百、それに附隨する

ほと同數の俗人（その中には多數の美しい稚兒や、稚兒に仕立てた美女があつたといはれるが）、それらをも一人残らず殺戮させた。

このやうな未曾有の傳統破壊を執行しながら、信長は平然として即日京都に入り、將軍に會つて政務を見た。京都市民に米を貸し、その利子で公家の生活を救ふといふ風な手を打つたのもこの時である。内裏の修復をも促進して、その秋に工事を完成させるやうにした。フロイスやオルガンチノも、叡山全滅をキリスト教弘布のよい機會として喜びつゝ、信長を訪ねて款待を受け、長い間話し合つた。その後この二人を一層喜ばせたのは、キリスト教排撃の原動力となつてゐた竹内三位が、將軍の前で信長の没落を豫言したといふやうなことから信長の忌避にふれ、信長退京の途中で斬首されたことであつた。

かういふ情勢になつては、宣教師たちを脅かしてゐた追放の問題などは、何時の間にか消えてしまつたのである。

二 信長の危機、京都の攻圍戦

カブラルは一五七〇年の夏天草島の志岐に着いてトルレスに代り日本におけるヤソ會の指揮をとり始めたのであるが、志岐で第二回の宣教師會議を開いた後、先づ九州諸地方の巡視にとりかかり、それを終へて堺まで来たのは一五七一年の末であつたらしい。一五七二年の初めには、フロイスやロレンソを連れて、岐阜に信長を訪ねた。その時の饗應の席で、信長が宣教師の肉食のことを尋ね、カブラルが大つびらに肉食する旨を答へると、信長はその態度をほめ、「坊主は内證でやつてゐる」と云つたといふ。佛僧に對する信長の反感は事毎に現はれたのであらう。京都では、オルガンチノも一緒に將軍に謁し、非常に厚遇せられた。その後カブラルはフロイスと共に河内や攝津の信者群を訪ねた。これらはビレラの開拓した地方で、そのキリシタン武士たちの信仰を堅固に維持させて行くことが、當時の京都の最大の仕事であつた。でカブラルは復活祭を三箇で營んだ。さうして一五七二年の夏の間に九州に歸つたのであるが、この巡視旅行の全期間を通じて、人々の怖れてゐたやうな危険は少しもなく、將軍、信長、その他大身たちから、周圍の人々の驚くほどの優遇を受けた、とカブラルは特筆してゐる。反キリスト教的な氣運はとにかく鎮まつたのである。

しかし時勢は平和な傳道などには不向きであつた。元龜天正の兵亂は漸く白熱點に達して來たのである。信長を東と北と西とから壓迫してくる諸勢力は、丁度この頃に、相結んで信長を打倒しようとして試みた。一五七二・三年の頃は、信長にとつて最も大きい危機ではなかつたかと思はれる。その中心的な勢力は東から迫ってくる武田信玄であつた。彼は將軍義昭が信長の權力に對して不平を抱くのを利用し、これを味方につけた。さうして西の方は石山の本願寺をはじめ、松永久秀、叡山の殘黨等とも聯絡をとり、北の方は浅井朝倉と協力を約した。この形勢に氣づいた信長は、一五七二年晩秋、義昭に對して十七ヶ條の問責書を發したが、同じ頃にもう信玄は數萬の兵を率ゐて甲府を出發したのである。信長と義昭との間の交渉は、もうこれまでのやうに簡単に解決しなかつた。幾度も使者が往復し、義昭が信長の急襲に備へて二條城の防備を堅くするといふやうな態度を取つても、信長は宥和政策を續けて動かうとしなかつた。一五七三年の初めには信玄の軍が三方ヶ原で家康の軍を破つたが、信長はなほ信玄に對して和親の努力を續け、義昭に對しても温和な使者を送つておのれの娘を人質に出さうとさ

へもした。この際強硬であつたのはむしろ、信玄と義昭とである。信玄は義昭にあてて信長の罪五ヶ條を數へた意見書を送つたが、叡山撲滅はその罪の大きいものであり、従つて叡山復興が信玄の主たる目的とされてゐた。フロイスによると、信玄は信長に宛てた書簡に「天台の座主沙門信玄」と署名し、信長はその返書に「第六天の魔王信長」と署名したといはれる。これは二人の英雄の間に取り交はされた諧謔の應答に過ぎぬが、しかしその背後には兩者の佛教に對する態度が示されてゐる。フロイスはその點を敏感に感じて、信長が容易に上京し得ないやうな窮境に陥つてゐることを憂慮し、信玄が上京して叡山を復興した場合の迫害についてさへも心構へをしよとしてゐた。

が、さういふ不安はフロイスに限つたことではない。京都の市民全體が非常な不安に陥り、避難の準備で騒いでゐた。家財の荷造り、市外への運搬、それに對する兵士たちの掠奪、さういふ騒ぎが毎日續いた。フロイスも祭具や書籍を醜酬、八幡などに送つた。やがて女子供たちの避難も始められた。當時オルガンチノとロレンソは三箇に滞在してゐたが、その三箇の領主はフロイスに避難をすゝめて來た。攝津の高山ダリヨも丹波の内藤ジョアンも、度々その居城へ來るやうにとすゝめて來た。京

た。東からの信玄の壓迫、北からの淺井朝倉の攻撃が、信長を危地に陥れてゐるからである。京都の義昭は、攝津の三好黨や本願寺の勢力を味方として、今や確乎たる地歩を占めてゐるかのやうに見えた。

この頃に、フロイスの前に大きく現はれて來たクリシタン武士は、丹波の八木の城主内藤ジョアンであつた。ジョアンは前年京都でカブラルに會つた時には、「憐れむべき窮乏の状態」にあつたといはれるが、僅か一年後のこの時には、二千の兵を率ゐ、十字架の旗印を掲げ、兜にゼズスの金文字を輝やかせながら、將軍義昭の味方に馳せ參じて來たのである。義昭は非常に喜んでこれを迎へた。ジョアンはその日の午後、クリシタンの兵士たちをつれて會堂にフロイスを訪ね、告解のための準備を熱心にはじめた。その熱心、謙遜、従順な態度は、フロイスに非常によい印象を與へた。このジョアンがこの時以來會堂や信者に手厚い保護を加へたのである。その後彼は、高山右近などと共に、最後までクリシタン武士としての操守を貫いた。

その高山右近も丁度この頃に表へ浮び上つて來た。彼は父の高山ダリヨと共に和田惟政の部下として高槻城を守つてゐたのであるが、惟政の戦死後、後を繼いで城主となつた惟長の統率力の不足から、遂に悲劇的な異變を

都の信者たちも同意見であつた。いよ／＼京都の町が兵火に焼かれる時には、フロイスを救ふことが困難になるからである。

しかしフロイスは動かなかつた。自分の任務はキリスト教の信仰を日本人にすゝめることである。信長は自分たちの親友であり、キリスト教を庇護してゐるのであるから、その軍隊が京都へ侵入しても、信者や會堂に對して害を加へることはあるまい。信長の軍隊が近づいてくれば、自分は市外に出迎へて、カブラルからの贈物の楯や書簡を渡すつもりである。かう彼は云ひ切つた。市内の騒擾が主として心理的な不安に基づくことを、彼は見抜いてゐたらしい。或る日一群の盜賊たちが、掠奪の機會を作るために、信長來襲、二條城炎上といふ虚傳を飛ばした。すると京都の市内は、俄然、「最後の審判の日」のやうな混亂に陥つた。さういふ市民の心理状態を彼は觀察してゐたのである。

義昭は春の彼岸の頃に遂に兵をあげた。それに對して即座に信長が打つた手は、柴田明智等の部將を派遣して石山や今堅田の城を陥し、京都への通路を確保することだけであつた。信長が大軍を率ゐて京都に來たのは、それよりも一ヶ月ほど後のことであるが、その當時京都では、信長の上京は、到底不可能であらうと信ぜられてゐ

ひき起すことになつたのである。事の起りは、惟長の家臣のうち、高山父子の聲望と勢力とを妬んでこれを除かうとする連中があつたことである。惟長はそれに同じたわけでもなさうであるが、またそれを抑へることも出来なかつた。で、惟長が高山父子を誅しようとしてゐる、といふことが、高山父子に傳はつた。高山父子は、和田惟政に代つて權力を握つてゐる荒木村重の諒解のもとに、遂に惟長の不意を襲つた。當時十九歳の青年であつた右近が、同じやうに若い惟長と渡り合つて共に傷つた。この争を調停したのは、桂川の西の地方を領してゐた細川藤孝である。その結果、惟長は高槻城を出て伊賀に歸り、高山ダリヨは高槻城主として留まることになつた。が間もなく惟長は、右の負傷のため伏見の城で死んだ。キリスト教を外護した和田惟政のあととはかうして絶えたが、その代りクリシタン武士高山右近の活躍がこれから始まるのである。

ところが、その惟長の死後十日ほどを経て、上京不能であらうと思はれてゐた信長が、突如近江の國に姿を現はした。一五七三年の四月末であつた。その報が達すると共に、義昭は急いで味方の兵を二條城に籠らせ、濠の橋を引いた。内藤ジョアンも部下の兵と共に城に入つた。市民はまた大混亂に陥つた。フロイスもまた家財の

荷造りや發送をはじめた。内藤ジョアンは護衛、馬、人夫などを出して、その荷物を丹波へ送らせた。さうして熱心にフロイスに丹波へ避難することをすすめた。しかしフロイスはなほ會堂と信者を見捨てなかつた。丁度その頃に細川藤孝と荒木村重とは、信長の軍を逢坂まで出迎へたのである。もし内藤ジョアンが信長方であつたならば、フロイスも信長を出迎へることが出来たかも知れない。

信長は四月三十日(天正元年三月二十九日)午前、京都の東の郊外に入り、智恵院から祇園へかけて陣を取つた。フロイスはその午後、カブラルの信長への書簡や贈物の楯などを携へて小西隆佐の家を訪ねた。多分信長への接近の手だてを隆佐に相談しに行つたのであらう。隆佐の家では家族は皆避難し、隆佐と子の行長だけが武器を持つて残つてゐた。隆佐の智慧を以てしてもフロイスの計畫は實行し難かつたのであらう。フロイスは書簡と楯とを隆佐に託し、機會を見て信長に届けるやうに頼んだ。さうしてフロイス自身は、十人ほどの信者のある九條村に避難することになつた。十數人の信者が同伴した。丁度麥が穂を出しかけた時分で、掠奪者が麥畑にひそんでゐたが、またこちらに麥畑に隠れることが出来た。九條村では信者の親戚や知己の家を轉々して隠れてゐたが、掠奪に來た

このやうに信長は、最初四日間、軍隊を動かさず義昭に和睦をすすめた。將軍は將軍として立てる。たゞ戦争と政治のことは譲歩して貰ひたいといふのであつた。義昭が承知しなければ實力を以て強行することも出来るが、しかしそのためには京都の市民や郊外の農民が非常な災厄を受ける。それは何とかして避けたい。さう信長は考へた。しかし、義昭を取り巻く「若衆」の鼻息は頗る荒く、信長の足許を見透かしたやうな氣持になつてゐた。だから義昭は和睦に應じなかつた。そこで信長は止むを得ず五月三日に京都の周圍二里から四里位の間の町村九十餘を焼き拂はせたのである。それは京都の市民がその家財や妻子を避難させた場所であつた。従つてそこで行はれた掠奪や暴行は實質上京都の町に加へられたのと同じであつた。フロイスが最初避難した九條村もこの日焼かれた。

この大破壊のあとで信長は再び義昭に働きかけたが、義昭は依然として應じなかつた。上京や下京の市民は、市内へ手をつけないやうにと熱心に信長に請願し、信長も下京に對しては焼かないといふ書付を與へたが、上京に對しては、答へなかつた。しかし、五月三日夜に上京に起つた火は、信長がつけさせたのではない。三十人ほどの掠奪隊が勝手にやつたことである。信長は部下の兵

荒木の兵士やそれに内應した村人たちに對し、危険を顧みず敢然としてフロイスを庇つたのは、その父がキリシタンであつたといふ一人の異教徒であつた。その騒ぎのあとで信者たちはフロイスの避難先を相談し、夜の闇にまぎれて東寺の村へ連れ込んだが、迫害者の内通で、東寺の坊主らはすでにフロイスの隠匿を禁ずる觸れを出してゐた。この時にも死を賭してフロイスを隠まつてくれたのは、老信者メオサンの親戚の異教徒であつた。その家にフロイスは八日間隠れてゐたのである。

その八日間に信長は一應京都のことを處理して、急速に京都をひき上げてしまつた。だからフロイスは信長には會へなかつた。しかし最初東山に陣取つた信長は、部下の兵士に京都市内へ入ることを禁じ、義昭に對して依然宥和政策を續けたので、フロイスが九條村へ逃げさへしなければ、翌日あたりには、會ふことも出来たのである。カブラルの書簡と楯とを託された小西隆佐は、翌日即ち五月一日には信長を訪ねてその託されたものを手渡すことが出来た。信長は非常に喜んでフロイスやオルガンチノの消息をたづね、ポルトガルの楯をほめた。このことはすぐフロイスの方へ聯絡されたと見え、二三日後には隆佐に金米糖入りの瓶を持たせて、再び信長を訪ねさせてゐる。

士が京都の町に火を放つたのでないことを示すために、その夜軍隊を全然動かさなかつた。かうして五月四日の朝には上京の三分の一以上は焼けてゐた。そこへ信長は軍隊を入れて、二條城包圍に都合のよいやうに、残存の部分をも焼き拂つたのである。この上京の焼き拂ひでは多數の寺院の焼失が目立つた。信長が上京を容赦しなかつたのは、寺院が多い故であらうとも云はれてゐる。

信長は自分の築城したこの堅固な二條城、三つの堀と數ヶ所の稜堡を以て取巻かれたこの要害を、攻撃によつて陥さうなどとはしなかつた。周圍に四つの城を設け、通路を塞ぎ、糧道を絶つて、包圍の態勢を整へたのである。地元の細川藤孝などがその押へを命ぜられた。この形勢を見て義昭は和睦に應ずる態度をとるに至つた。五月八日(天正元年四月七日)勅使が義昭と信長とを訪れ、信長は即日京都を去つてその日は近江守山に陣取つた。

この時の和睦が一時的なものに過ぎなかつたことは、事件の二十日後に書かれたフロイスの書簡にも明記せられてゐる。義昭は淺井朝倉や三好三黨の救援をあてにして一時免れの策を取つたのである。信長もそれを知つてゐた。だから彼は義昭の再舉を豫想して、琵琶湖に百挺櫓の大船十數艘を急造させ、京都急襲の用に備へた。

ところでこれらの信長の進退を東から牽制してゐた武

田信玄は、三河野田の陣中で病み、信濃まで引き返して五月十三日に歿した。それは直ぐには發表されなかつたが、しかし東からの強い壓迫はこゝで止んだ。この信玄の死が恐らく信長にとつては實質上の運命の轉回點であつたであらう。従つて形の上では、信長のこの時の九日間の在京が、彼の地位を決定したのである。この時信長は、「その心が寛大であつて思慮があり、時に臨んでよくおのれの情を撓めることが出来る」といふ印象を京都市民に與へたといふ(フロイス、一五七三年五月二十七日都發書簡)。將軍の存在はもう宙に浮いてしまつた。

三 將軍の没落、淺井朝倉の滅亡、傳統破壊者の勝利

高山ダリヨはこの戰亂に際し、フロイスの身の上を心配して數人の家臣に村々を搜索させたが、八日の後にやつと東寺にゐるのを見つけた。それは信長の退京の日であつた。その日京都からも信者が迎ひに来て、フロイスは會堂へ歸つた。翌日、在京の信者たちが集まつて來たが、フロイスを見ると皆涙を流して泣いた。

内藤ジョアンは城を出てほとんど毎日會堂を訪ねて來た。兄の支蕃も、家老の内藤土佐も、他の家臣らと共に説教を聞きに來た。やがて間もなくこの兩人は洗禮を受

らひたい。この意見には、將軍に隨行しようとしてゐた大身たちも、賛成した。さうして義昭は移轉を思ひ止まつた。市内の動搖も靜まつた。このジョアンの諫止は市民の間にも非常に好評判であつた。

同じ頃に三好三黨や本願寺などの聯合軍は、大坂と京都との中間まで進出してゐた。高山ダリヨは危険を慮つてフロイスを高槻の城に避難させるため人馬を京都に寄せ越した。丁度その時に三好の軍中からもキリシタン武士たちの書簡を携へて使が來た。それによると、三好の軍隊が京都に入るかどうかはまだきまつてゐないが、もし入ることになれば、會堂のある町はキリシタン武士たちが責任を以て保護するから、避難するに及ばない、といふのであつた。フロイスはこの申出に満足して、高山の兵士を歸らせた。

さういふ状態でフロイスは三月ほど京都で活動をつづけた。内藤ジョアンの一族のほかには攝津の池田の兵士たちも内藤支蕃のすゝめに従つて説教をきくにくるやうになつた。六七月頃には、池田の人々に對して、毎日午から夕方まで説教をつづけた。池田領にキリスト教をひろめようといふことは、フロイスの年來の望みだつたのである。

け、支蕃はドン・ジュリアン、土佐はドン・トマスとなつた。丹波に會堂を設けること、ロレンソがそこへ説教に行くことなども追々に運んだ。

フロイスによると、この内藤ジョアンは義昭とかなり親しかつたやうに見える。信長の退京後六日の頃、義昭は二條城にゐることを不安に感じ、ジョアンに對してその城の借用を申込んだ。義昭が八木城に入り、ジョアンが二條城を守るといふ計畫を立てたのである。ジョアンはそれに對して、將軍の意志には喜んで従ひたいが、しかし將軍ともあるものがこの堅固な二條城を逃げ出して信長を再び敵とすることは、甚だふさはしくないといふ意見を述べた。すると將軍は初めの計畫を變更して宇治の槇の島に移ることにきめ、婦女子や家財の運び出しをはじめた。京都の市民はそれを見て再び恐慌に陥り、同じやうに女子供や家財の搬出に狂奔した。當時病中であつたジョアンは、それを聞いて急いで城に馳せつけ、出發のために將に馬に乗らうとしてゐた義昭をとめて、その場に居合はせた大身たち一同の面前で、この移轉を諫止した。京都市民は將軍を愛するが故にこの絶大な災禍に逢つたのである。その將軍が今京都を見捨てるならば、將軍の名譽と尊敬とは、全然失はれてしまふであらう。自分は死を賭してもこの城を守る。是非留まつても

義昭は六七月頃に再び京都を去らうとして思ひ止まつたが、八月のはじめには遂に意を決して宇治の槇の島にたてこもつた。二條城は部下の武士や公家が大將となつて守つた。三好三黨や本願寺の軍は、京都の南方まで來てゐる。淺井朝倉は信長の京都への通路を遮ぎるであらう。今度こそは後顧の憂のある信長を苦しめることが出来る。さう彼は考へたであらう。しかしすべては無駄であつた。信長は義昭擧兵の報知を得ると、岐阜から大軍を一日一夜で京都へ入れた。京都の市民はあきれて、まるで天狗のやうだ、將軍がかなふ筈はない、とつぶやき合つた。琵琶湖に準備した百挺櫓の船隊が物を言つたのである。二條城は包圍せられると間もなく降つた。十日目にはもう槇の島の攻撃がはじまつたが、これも一日で陥ちさうになつた。義昭は和を請うた。信長はさすがに殺さうとはせず、どちらへでも送つてあげると云つて秀吉たちに處置をまかせた。そこで秀吉らは、將軍方についた三好義繼の居城、河内の若江へ義昭を送り届けた。義昭はこの後も本願寺や毛利の勢力に頼つて信長に反抗し続けるのであるが、しかし信長の眼中にはもう彼はなかつた。足利將軍の傳統的意義はこゝで壊滅してしまつたのである。

このことは京都では形の上に示された。上京を兵火に

よつて破壊したのは、信長ではなくして足利將軍の責任である。信長はたゞ、市民の不幸に同情して復興を助ける。そのために彼は、地子錢及び諸役の免除、鰥寡孤獨の扶持、そのほか種々の技術において名人と呼ばれるものの保護、儒學の奨励などを布告した。市民は古い傳統を擔ふ將軍よりも、實力を持つたこの新しい英雄の方を喜び迎へたのである。

この新しい形勢を完成するかのやうに、信長は、すぐその翌月に、淺井朝倉を討滅してしまつた。それは僅か二十日ほどの間の出来事であつた。信長は江北の淺井の城を押へて置いて、朝倉の援軍に強壓を加へ、近江から越前へ續く峻嶮な山地のなかを追撃して行つた。さうして朝倉の軍をその本據一乗ヶ谷から追ひ出し、遂に徹底的に崩壊せしめた。それから直ぐひき返して、江北の虎姫山の城を強襲し、淺井父子を自殺せしめた。これで、長年の間信長を北から壓迫してゐた力は取除かれたのである。

このやうに一五七三年は、五月に東方の信玄が歿し、八月に京都の將軍義昭が追はれ、九月に北方の淺井朝倉が討滅されて、信長の運命がはつきりときまつた年であつた。フロイスは冷々しながらこの信長の運命を見まも

つてゐたのであつたが、それは彼の希望する通りに開けて行つた。彼はこの騒ぎの最中、五月の末に、かう書いてゐる。日本の異教徒たちは、坊主も俗人も、神佛が信長に嚴罰を加へるだらうと期待してゐた。しかるに寺院や神社を破壊しその領地を武士たちに分配するやうな亂暴を働いた信長は、その後ますます榮え、ますます大きい勝利を得、何事をも意の儘になし得るやうになつた。それを見て異教徒たちは、神も佛も頼りにならないと嘆いた。中には、信長がひそかにキリシタンになつてゐると信するものもあつた。さうでなければ、あのやうに思ひ切つて神佛を潰すことは出来ないからである、と。この言葉には、フロイスの信長にかけてゐた希望が鳴り響いてゐるやうに思はれる。

第十章 京都の新會堂『昇天の聖母』の建立

一 新會堂の計畫とその主動者たち

一五七三年を境として信長の地位は非常に強固なものになつたが、しかし彼を包圍する敵の勢力はなほ残つてゐた。東からは信玄の歿後嗣子の勝頼が信長を襲はうとしてゐる。西の方では本願寺が反信長の勢力を糾合し、北方の越前の一向一揆を活氣づけてゐる。一五七四・五年の頃はこれらの敵對勢力の處理に忙がしかつた。が一五七四年には伊勢長島の一向一揆を全滅させ、一五七五年には長篠の合戦で巧みな鐵砲戰術により武田の精銳を壊滅させたのみならず、北の方越前へ攻め込んで本願寺一揆を平定した。かうして一五七六年以後は、石山の本願寺とその與黨とを討滅することが、唯一の問題として残つたのである。

その一五七六年の初めに、信長は近江の安土に城を築いてそこへ移つた。それは同時に、中世的な種々の特權組織から解放された近世的な都市の建設の開始でもあつ

た。信長の政治家としての才能はこゝで顯著に現はれてくる。後に秀吉が大坂を、家康が江戸を作つたのは、いづれも信長の安土經營に學んだものである。

この機運はそのまゝ、京都のキリスト教會にも反映した。一五七五年にはじめられた新會堂の建築がそれである。

京都の信者は永年の戰亂つゞぎのために數の上でふえたわけではなかつたが、しかしビレラの教化以來堅實に信仰を守つて來た人が多かつた。困難の時期にいつもフロイスを援助した小西隆佐父子のほかに、フロイスが特に名をあげてゐるのは、老アンタン、コスモ、アンタンの兄弟ベント、ジュスチノ・メオサン、その子アレシヤンドレ、レアン清水などである。メオサンはその妻子と共に京都で最初に信者となつた老人で、教會のことに非常に熱心であつた。妻のモニカも徳行のすぐれた人であつた。フロイスが九條村に逃げた時にはメオサンもその

子と共に歩いて行き、東寺の自分の甥の家に入日間フロイスを匿まつたのである。レアンは五十歳位の相當富裕な人で、才智があり思慮深く、言葉少なで實行力に富んでゐた。その父は熱心な法華信者で、レアンのキリシタンとなることを非常に嫌ひ、不幸の死を遂げた。その妻と子も中々改宗しなかつたが、レアンはその熱心によつて遂に信者となることが出来た。このレアンが實に眞面目な信者で、その富を教會と慈善のために惜しみなく使つたのである。京都の信者のうち、新しい會堂建築の主動者となり、その建築のために最も熱心に働いたのはこのレアンとメオサンとであつた。レアンはこの建築のために多額の寄附をしたのみならず、この計畫のために、いろ／＼智慧を絞つた。フロイスは、事毎に、殆んど皆レアンの意見に従つたと云つてゐる。メオサンも分以上の寄附をし、木材買入れに寒中四十里餘の山中へ出掛けたりなどした。この好き老人は、夜眠れない時に、キリシタン都市としての京都の都市計畫を考案して楽しんでたといふ。京都に數多い佛寺を改造して、キリスト教の大寺院、貧民病院、受洗志願者の家、學校などを建設するのである。

しかし新會堂の建築に力をつくしたのは、京都の信者のみではなかつた。攝津河内のキリシタン武士たちも熱

事につとめた。キリシタンの客人は、全然未知の人であつても、親戚のやうに款待した。貧者には、衣食を給した。戦死者の遺族は、親身になつて世話をした。貧しい者の葬儀も、信者一同の参加によつて、盛大に營んでやつた。

さういふ風にしてダリヨの仕事が實つて来た頃に、京都で會堂新築の議が起つたのである。ダリヨも京都に来て宣教師や大工と共に製圖をやり、主要な材木の供給をひき受けた。そのために彼は自ら騎馬の士二三人と共に大工木挽を引率して六七里の山奥に入り、材木を伐り出した。それを先づ高槻まで運び、船で京都近くまで持つて来て、更に荷車で一里ほどの途を工事場に届ける、といふことをすべて自費でやつた。工事が始まつてからも人夫の供給その他いろ／＼なことを引受けた。かなり困難だと思はれることでも、頼まれると、お易い御用だと云つて氣持よく引受けるのが彼の常であつた。

この工事の進行中、一五七六年の復活祭に、ダリヨは懇請してオルガンチノを高槻に迎へた。ダリヨはいろいろと祭の準備を整へ、非常な熱心と獻身的な態度とを以て聖週の行事を手傳つた。聖餐の後には、會衆六百餘を饗應して、人々にその慈愛を感嘆させた。オルガンチノは、これほど莊嚴な復活祭を日本で見たことがない、と

心にこれに加はつた。

先づあげられるのは高槻城の高山ダリヨ、ジュストの父子である。一五七三年の春、和田惟長を追ひ拂つて高槻城主となつた高山ダリヨは、もう五十歳を越えて居り古い戦傷が時々痛みもするので、城の支配をジュスト右近に委せて、自分はキリスト教のことに専心し始めた。先づ第一に着手したのは會堂の建築である。元神社のあつた、大樹のある廣い場所にそれを建て、周圍に大きい庭を造つた。會堂の傍には、宣教師の宿泊用に美しい住宅を建て添へ、その前には石を多く使つたしやれた庭を造つた。この新しい會堂で最初のミサを聞いたとき、ダリヨは床の上に伏して歡びの涙を流し、地上の望みはもう達せられた、御意のまゝに、何時にても御許に召し給へ、と云つたといふ。この會堂へ、信者らは毎朝鐘の音と共に集まつて、禱りをした。夕方アベ・マリアの時もさうであつた。ダリヨとその子はいつとも眞先に來た。日曜や祭日にはダリヨが説教をしたり、或は書籍を讀んで聞かせたりした。さうして時々京都から宣教師に來て貰つて、ミサや説教をきいた。かうしてその後二年ほどの間に、城内の武士や兵卒たちをその妻子と共にキリシタンに化して行つたのである。

ダリヨはこの信者らを組織して教化の仕事や慈善の仕

云つたといふ。その後數ヶ月を経てオルガンチノは京都の會堂で獻堂式を行つたのであるが、その時にはダリヨは、夫人を伴ひ、子ジュストと共に二百餘人の士卒をひきゐて參會した。附近の市民はかくも多數の輿や騎馬が會堂に入るのを見て驚いた。式後にダリヨは、運ばせて來た多量の食料品を以て、諸方からの參會者のために盛大な饗宴を設けたのであつた。

高山父子について擧げられるのは、河内飯盛山下の岡山城の家老、ジョルジ結城彌平治である。ジョルジはこの時三十三歳位であつたが、洗禮を受けたのは十四五年も前で、ビレラが最初に作つたキリシタン武士結城山城守の甥だといはれてゐる。ジョルジの母親は熱心な法華信者であり、兄弟二人も僧侶にされてゐたのであるが、ジョルジは非常に骨折つて、これらをすべて好いキリシタンにした。岡山城に來る前には、三箇のキリシタン武士の一人として活躍し、キリシタンなるが故に戦死を脱がれたこともあつた。岡山城主は彼の甥であつたが、彼は見込まれてその後見となり、その家を治めることになつた。城主は彼のすゝめにより家族と共に洗禮を受けてジョアンとなつた。城主のみならず、岡山の住民千餘人も、彼の熱心に化せられて、一人残らずキリシタンとなつた。そこには會堂や宣教師の宿舍も建てられた。フロ

イスヤロレンソは度々こゝを訪れてゐる。

京都で會堂の新築がはじまつた時には、ジョルジは早速會堂の附近に一軒の家を借り、そこに四五十人の士卒を宿泊せしめて、毎日工事を手傳はせた。會堂の大きい礎石を運び込み、据えつける時などには、ジョルジがこの仕事を引き受け、自ら士卒の先頭に立つて、兩肩を腫れ上らせるほどに働いた。家老であるから、いつも京都に來てゐるといふわけには行かなかつたが、祭日などには、一兩人の件をつれて夜のうちに十里の道を馬で飛ばせ、午前中に告解や聖餐をすませて、午後直ちに歸つて行く。まるで一二里の所から來るやうな何氣のないふりをして、骨折りを人に知らせないやうにする。建築費の寄附なども率先して人より多く出したのであるが、それを秘して人に知られないやうにしてゐた。或時、上京の節に工事場に大工の數の少ないのを見て建築費の窮乏を察し、宣教師館の一隅でこつそりおのれの帶刀の金の飾りを外して紙に包み、日本人のイルマンに託して行つたこともあつた。さういふ慎ましいやり方が宣教師たちを非常に感動させたのである。

岡山の近くの三箇の信者たちも勿論會堂の新築に協力したのであるが、その中で特に著しかつたのは、三箇の城主の姉妹で、キタといふ武士に嫁してゐたフェリパで

若江の城を守つてゐた。そのうちキリシタンであつたのはたゞ池田丹後のみであつたが、しかしその部下の武士たちは、ビレラが飯盛山下に布教した頃からのキリシタンであつた。だから若江の城内に立派な會堂を建てたのみならず、京都の會堂の工事についても非常に援助を與へた。その後一五七七年に信長が紀伊の雜賀を攻めたとき、シメアンも從軍して寺々を焼いたが、その戦争の最中に、彼は分捕つた大釣鐘を京都まで運ばせ、聖母の會堂に獻じたりなどした。

が以上に擧げたのは特に目立つた數人なのであつて、ほかに無數の信者たちがそれに類した熱心さを以て働いたことはいふまでもない。河内の山から材木を淀川に出し、それを伏見までひいてくる時などは、若江、三箇、甲賀などのキリシタン武士たちが集まり、その家臣・親戚・友人など、千五百人が出動した。高槻の傍を通る時には高山ダリヨが士卒を出して手傳はせた。その他富者は富者相應に、貧者は貧者の分以上に、金銀米、その他雜多なものを寄進した。或者は繩を持つてくる。他の者は手一杯の釘を持つてくる。或は大工らのための魚類、或は手織の木綿の布を届ける者もある。或は自家の鐵鍋を携へて來て料理を手傳ふものもある。戦死した子の武

ある。この五十歳を越えた老夫人は、キリシタンの女子の模範であつたといはれてゐる。さほど富裕ではなかつたが、會堂や貧者のためには物惜しみせず愛の行をつとめた。病人を訪ねて慰め、心弱きものの信仰を堅めてやり、うか／＼としてゐたものは呼び醒し、争ひがあれば調停する。異教徒に對する教化にも熱心であつた。またクリスマスや復活祭に他の地方から三箇に集まつてくるキリシタンの貧しい女たちで、フェリパの世話にならぬものはなかつた。その他の時でも、岡山にくるキリシタンはいつも夫人の世話になる。冬になるとフェリパは侍女たちと共にせつせと機を織り、衣服に仕立て、京都の宣教師のもとへ持つてくる。新會堂の工事の始まつたときには、工事に役立てるために多量の織物の荷を携へて京都へやつて來た。その所行は全く初期の教會の婦人のやうであつたとフロイスはいつてゐる。

河内若江城の部將、シメアン池田丹後も京都の會堂の新築に力をつくした人である。若江の城は信長が將軍義昭を逐うた頃には三好義繼の居城となつて居り、義昭もさしづめ宇治の旗の鳥からこの若江の城に送りつけられたのであつたが、その冬信長の軍に攻圍せられた時、池田丹後は他の部將たちと共に信長方に内應し、義繼を自殺せしめたのである。その後はその部將たちが共同して

具や衣類を寄進する母親、壘百枚を寄進して人々を驚かせた老寡婦などもあつた。かういふ無數の人々の心からの協力が新會堂の建築を仕上げたのである。従つてそれは單なる建築の仕事といふわけではなく、京都地方の信者たちの、集合的な感情や意志の表現だつたのである。

二 建築工事と村井貞勝の外護

ではその建築の仕事はどういふ風に運んだか。

一五七五年までの小さい貧弱な會堂は、風の烈しい日には中にゐられないほど頽廢してゐた。

それを何とかしたいといふことは前から宣教師も信者も考へてゐたのであるが、いよ／＼新築の議が起つたのは、一五七五年の前半であつたらしい。その時は賣物に出てる佛寺を買ひ取り、その材木を使ふ計畫であつたが、値段が折合はず、その計畫は放棄された。しかしそれが却つて刺戟となり、信者たちの熱心が高まつて、夏の頃に新會堂建築の相談がきまつた。宣教師は豊後のカブラルに報告して、ヤソ會の經常費を、いくらか割いて貰ふことにした。有力な信者たちは集まつて、製圖したり、工事の分擔をきめたりした。人々は手を分けて、材木の買入れ、工所用の米の買入れ、大工や人夫の工面などをひき受けた。かうして、多分、一五七五年の末頃に

工事に着手したのである。

工事は、前に述べたやうな熱心な信者の協力のもとに押し進められて行つたのであつたが、工事のために特に都合がよかつたのは、村井長門守貞勝が、一五七三年の足利將軍失脚以來、京都所司代となつてゐたことであつた。貞勝はそれ以前にもすでに朝山日乗と共に内裏の造營に従ひ、京都の行政を見てゐたのであるが、日乗とは異なり、宗教的な偏向を全然持たず、信長のキリシタンに對する態度をそのまま、施政の上に反映し得る人であつた。フロイスも彼のことを「尊敬すべき老年の異教徒」「生來の善人」などと呼んでゐる。その貞勝が、前の和田惟政と同じやうに、異教徒でありながら、熱心にキリシタンの保護をはじめたのである。所司代は「京都の總督」と呼んでもよいやうな地位で、權勢の上でも惟政に匹敵してゐた。

最初教會から新會堂建築のことを所司代へ届け出たとき、貞勝はそれに對して特別の恩典を與へた。當時京都では、内裏修復用の建築資材のほかは、材木その他一切搬入が禁ぜられてゐたのであるが、貞勝は會堂用の材木その他建築資材の自由搬入を許し、その上税を免じたのである。ついで棟上げの時には、七百人以上の人手が必要だと考へられてゐたが、貞勝はそれに對して、要るだ

け申出るがよい、千人でも送つて上げよう、と申入れたといふ。さうして、棟上げの當日には、代理の武士二人が、多數の人を率ゐ、祝ひの品を携へてやつて來た。この人々は夜に入るまで工事場に留まり、所司代が會堂に好意をもつことを市民の間に周知せしめようとしたのである。その日はほかにも諸方からキリシタンの大身が集まつたが、それらと併せてこの所司代の處置は非常にきまがあつた。これまで會堂に好意を持たなかつた町内の人々も、急に態度を變へ、工事に助力するやうになつた。なほ、棟上げの数日後には、貞勝自身が工事場に来て、小錢二萬を贈つて好意を表したのみならず、當時安土造營のために行はれてゐた大工の徴發を、會堂の大工にのみは適用しないことにしてくれた。

が貞勝の與へた最も大きい庇護は、會堂新築に對する京都市民の反對を抑へてくれたことであらう。反對の理由は、會堂の上に二階のある高い建築（日本風にいへば三階建であらう）が、寺院や住宅を越えて聳え立ち、京都の市民を見下すといふこと、或は禮拜堂の上に住屋を重ねるのは日本の風でないといふこと、などであつた。貞勝はそれに對して、至極合理的な意見をのべ、反駁した。外國人が京都へ來て家を建てるといふことは、京都に名物がふえるやうなものではないか。市民はむしろそ

れを尊重すべきである。會堂の上に住屋を重ねるのは、地所が狭く餘地がないためであつて、止むを得ない。また高い二階を造るのがよくないといふのならば、外國人と日本人とを問はず禁止すべきである。京都に現存する二階を悉く壊させるといふのであるならば、キリシタンの會堂に對しても二階を壊せと命じよう、といふのであつた。

329 (二)建築工事と村井貞勝の外護

所司代が會堂新築反對に同じないのを知ると、京都の町の自治組織を代表する年寄たちは、自分たちの權限を以て、會堂の上の二階を壊せといふことだけを命令して來た。これは會堂の構造に難癖をつけたのであつて、會堂の新築に反對したのではないやうに見えるが、しかし工事の途中にこの變更を命ずることは、工事を不可能ならしめるに近かつたのである。それを察した宣教師たちは次のやうに抗辯した。二階の住屋がいけないならば、工事を始める前にそのことを通達すべきである。建築の構造上、上と下とは密接に聯關してゐる。下の構造を害ふか、或は非常に多額の費用をかけなくては、上部を取除くことは出來ない。この建築は開始前に信長及び所司代に届け出てある。それらの人々の保護の下に宣教師は京都に居住してゐるのであるから、この事についてもそれらの人々の命令には従ふであらう。

かうして京都の町の自治當局と教會とははつきりと對立した。何故、町の年寄連がこの筋の通らない難癖にやつきとなつたかは、よくは解らないが、フロイスは坊主らの使喚によると解釋してゐる。町の方では意地になつて、四十人ほどの主立つた人々に、多量の進物を持たせ安土の信長に陳情させることにした。京都市民の希望とあれば、民衆の動向を重視する信長は動くに相違ないと考へたのであらう。これは、京都の町としては相當の大事件である。この形勢を見て教會の方では一足先に、日本人イルマンのコスマを安土に派遣し、有力な武士數人に事情を報告させた。その人たちは、氣にせずに工事を續けるがよい、陳情者が來ても工合よく計らつてやる、といつてくれた。所司代の村井貞勝もこの陳情團が出發したと聞いて、信長及び彼自身の庇護してゐる外國人を京都の町が苛めるといふことは、彼の面目にかゝはると考へた。で、老體にかゝはらず寒いなかを急遽安土に馳せつけた。陳情團が安土について見ると、そこには意外にも彼らに反對した京都所司代が居り、しかも信長側近の武士たちは誰も彼らを信長に取り做さうとはしてくれなかつた。結局彼らは何も出來ずコソ／＼と京都へ引き返して來たのである。

以上のやうな所司代の外護に加へて、キリシタン武士

たちも、意外なほど熱心であつた。一五七六年の五月には、石山本願寺に對する信長の犬伏掛な攻撃が始まつたので、高槻、若江、三箇、岡山の四城のキリシタン武士たちはそれに參加しなくてはならなかつたのであるが、さういふ慌しい際にも彼らは一定の人数を京都の工事に派遣することを決して中止しなかつた。それらの部署を互に代り合ひ、交替して京都に出て來たのである。

この工事の有様はフロイスやオルガンチノを非常に喜ばせた。所は神社佛閣に充ち溢れた偶像の都である。そこにたつた二人の外國人があつて、多數の敵の意志に反して美しい會堂を建築してゐる。この素晴らしい状況をヨーロッパ人に想像せしめるために、フロイスは次のやうな表現を使つた。この状況は、ローマカリスボンへつた二人のアラビア人が來て、キリスト教の會堂の側に、モハメッド教のモスクを建ててゐるのと同じである、と。この氣持は恐らく當時の日本人には解らなかつたであらう。しかしモハメッド教徒との對抗に刺戟されてインドに進出し日本まで來ることになつたヨーロッパ人にとつては、この表現は實に多くのことを語つてゐるのである。

一五七六年の夏には、會堂はまだ落成してはゐなかつたが、オルガンチノはシャビエルの日本に着いた八月十

ことを心得て居り、いろいろ工夫を加へたので、その點からも日本人の眼を驚かせるに十分であつたらしい。信長をはじめ日本人たちは、この會堂に關して西洋人の知識を讚めた、といはれてゐるところを見ると、かなりヨーロッパ風が加味されてゐたと思はれる。信長たちが満足したのみならず、この建築を妨害しようとしてゐた人々へも、出來上りを見て賞讃したほどであつた。

問題となつた二階は、會堂の上部にあつて、美しい室を六つ含んでゐた。そこからは市内が見渡せるだけである、郊外の諸寺院や田園をも遠望することが出來たのである。この高い構造もまた日本人には珍らしかつたのであらう。

かくて新築の會堂は、京都におけるキリシタンの存在を非常に顯著に示すことになつた。京見物のために諸國から出てくる人々の眼にもつき易くなつた。これは宣教師たちにとつても信者たちにとつても非常に大きい意義を擔つたことだつたのである。キリシタンらは日本の中央の都に壯麗な會堂を持ち、屋根に勝利の旗・光榮ある徽章としての十字架を輝かせ、そこで公然と福音を説いてゐる、——このことが日本全國の異教徒や領主たちに知れ渡るのである。それはあたかも主キリストの勝利を示すかのやうに感ぜられた。この氣持は、日本の各地に

五日、聖母昇天祭の日を選んで、この會堂での最初のミサを獻じた。會堂の名も『昇天の聖母』と呼ばれた。この時フロイスはロレンソと共に河内に行つてゐて留守であつたが、諸地方の信者は多數に集まり、盛大な祭が行はれた。

その年の末、クリスマススの頃には、會堂は大部分落成してゐた。着工以來ほど一年である。その會堂へ諸方から信者が集まつて、クリスマススを賑やかに祝はうとしてゐるところへ、前々年に長崎へ着いた新しい神父ジョアン・フランシスコが到着した。その喜びをも加へて、新會堂最初のクリスマスは非常に盛大であつた。

會堂は部分的にはなほ未完成であつたのであらう。半年後にフランシスコの書いた書簡にも、新會堂は殆んど落成したとあつて、未だ完成を云つてはゐない。更にその一年後にオルガンチノの書いた書簡に至つて初めて新會堂は落成したといふ言葉に出會ふ。しかしこの時にもなほ壁畫は出來てゐなかつたのである。

三 新會堂の効果

會堂は宏大とはいへないが、しかし壯麗なものであつた。京都の石工や木工は非常に技術が優れてゐたし、建築工事を監督するオルガンチノがイタリア人で、建築の

勃興した英雄たちがいづれも京都をめざして動いてゐた時代、京都占領が覇權の成就として受取られてゐた時代にあつては、實際に現實的な裏づけを持つてゐたのである。

その證據は、會堂新築の仕事と共に、また新築の結果として、急激に教勢が高まつて來たことである。オルガンチノが新會堂の獻堂式を擧げた頃までの二年間の教化の收穫は、その前の二十五年間のそれよりも多かつたといはれてゐる。さらにこの堂が大部分落成したといはれる一五七六年のクリスマス以後になると、僅か三四ヶ月の間に攝津河内で四千人のキリシタンが出來た。一五七七年の七月頃には六千三百人と數へられてゐる。高槻、三箇、岡山などがそのおもな場所である。一向宗徒二百人が一時に改宗するといふやうなこともあつた。

一五七七年九月にオルガンチノが當時インドにゐた巡察使ワリニャーニに宛てて書いた報告によると、この年の四旬節の初日以来彼は七千人以上に洗禮を授けた。さうしてなほ續々と改宗者が出來て來さうであつた。彼はこの形勢を京都の會堂の新築と結びつけて記述してゐる。この『昇天の聖母』の會堂は、新築のために非常に骨が折れたが、しかしキリストの御名を擧げる基となるであらう。今既に大いなる効果が現はれて來てゐる。京都の

町全體は教會に對して態度を改めた。建築の初めの頃に教會を忌み嫌つてゐた人たちが、今は教會を尊敬し、悪言を放たなくなつた。がこの變化は京都だけのことではない。京都の會堂の噂は全國の津々浦々に傳はり、何處へ行つてもキリストの教を説くことが出来るやうになつた。のみならず京都の會堂の新築はクリシタンの領主たちを動かし、それらの領内に宏壯な會堂を造らうとする機運を呼び起してゐる。一五七七年の秋までに着工したのは三箇と岡山とである。これらの會堂の裝飾用として大毛氈二枚、金欄或はびろうどの法衣數着、美しい畫像數面を用意せられれば幸である、と。

かくして一五七七年中の京都地方の受洗者は一萬一千に達したのである。

四 信長一門の同情

その同じ年に信長は、大坂の本願寺に更に一層の強壓を加へたのみならず、その背後の勢力を絶たうとするもくろみで、春には紀伊の雜賀一揆を自ら討ち、秋には秀吉をして播磨征伐を開始させた。

が信長が動き出す前、多分陰曆の正月の禮に、オルガンチノはロレンソその他の日本人を伴つて、安土の信長を訪ねた。安土の城は京都の會堂より少し遅れて起工さ

た。

オルガンチノたちが歸京してから十日の後、一五七七年の三月に、信長は三人の子を同伴して、雜賀遠征の途次、京都に寄つた。この時にもオルガンチノは、新來のフランススコや日本人ロレンソ、コスモなどを伴つて、妙覺寺に宿つてゐた信長を訪ねた。當時、大勢の有力な武士や公家が面會に来てゐたが、信長は誰にも會はうとせず、たゞ「貧しい二人の外國人」と、ロレンソやコスモだけを居間に呼び入れ、一時間ほど雜談した。當時フロイスは病氣がちで、この日も同伴しなかつたのであるが、信長は早速彼のことを尋ねた。フロイスが豊後に行くといふが、ロレンソも一緒に行くのか、といふ問でかつた。ついで新來のフランススコの名や、生國を聞いた。話はさういふ些末なことであつたが、しかし信長の宣教師に對するこの特別扱ひは、集まつてゐる人々を驚愕させずにはゐなかつた。宣教師たちが歸つたあとで、彼はまたいつものやうに佛教を罵り、キリスト教を讚めたといふ。さういふところから、信長にはクリシタンにならうとする意志がある、といふ臆測も生じて來たのである。さうしてまたそれは、宣教師たちが實際希望してゐたところであつた。

この臆測は、信長の大坂本願寺に對する猛烈な敵意と

れたのであるが、信長の權力を以て畿内地方の材木を集め、大工その他の職人を徵發して、工事を急いだのであるから、この時にはよほど出來てゐたのであらう。「キリスト教國にあるとも思へないほど宏壯なもの」と、オルガンチノはいつてゐる。中央の塔は、二十間四方で、高さ十五間、五層の屋根を持つてゐた。(信長記によると、安土の殿守は、二重の石垣に、高さ十二間、上の廣さ南北二十間、東西十七間、石垣の内を藏に用ゐる、それより上、七重である。) 信長は宣教師たちを喜んで迎へ、厚くもてなした。キリスト教のことも長時間に亙つて聞き、飽くことなく質問を續けた。またこの時にも同席した諸國の領主たちの前で、キリスト教及び宣教師の生活の清淨なことをほめ、日本の佛僧たちの墮落を罵つた。さうして、自分は坊主らを悉く亡ぼしてしまひたいのであるが、方々に騒ぎが起るので遠慮してゐる、といふ意味のことをさへ云つた。今や大坂の本願寺を正面の敵としてゐる彼にとつては、これは單なる放言ではなかつたであらう。

オルガンチノたちはその足で岐阜に信長の長子信忠を訪ねた。この青年が曾てクリシタンとなる意志を示したと傳へ聞いたオルガンチノは、熱心にそれに働きかけようとしたのである。信忠も彼を款待し、長時間語り合つ無關係ではあるまい。信長が紀州の一向一揆を目ざして京都を出發したとき、宣教師たちも教會の附近で彼の通過を見物したらしいのであるが、その時の信長の顔つきは非常に暗く、人に恐怖を抱かせるやうなところがあつた。京都の市民たちは、信長がよほど思ひ切つたことをやるだらうと噂し合つた。叡山燒討ちの記憶はまだ新しかつたのである。その上、信長の本願寺に對する大仕掛な戦略は、市民の間にもう知れ互つてゐた。フランススコが右の信長の京都出發のあと二週間ほど書いた書簡には、信長がいま従事中の雜賀征伐を終つたならば、次には毛利氏の二國(播磨淡路)を攻撃し、堺に築城して大坂本願寺の後援を絶つであらう、と明記してゐる。信長の本願寺打倒の努力は、今や世間の關心の焦點だつたのである。

紀伊の一向一揆は一ヶ月餘で片づき、信長はその子と共に京都に凱旋して來た。その時オルガンチノは、この三子、信忠、信雄、信孝に熱心に働きかけてゐる。八年前フロイスが初めて岐阜を訪問した時には、彼らはまだ愛らしい少年で、フロイスをいろ／＼と接待してくれたのであつたが、この時はもう二十歳二十一歳などの青年で、それ／＼軍隊を指揮してゐた。そのうち先づ會堂を訪ねて來たのは信雄である。彼は二時間ほど宣教師たち

と語り合ひ、ヨーロッパ人は日本人よりも勝れてゐると云つた。また、遠い國の外國人が、敵の充滿してゐる國の都の眞中にこのやうな壯麗な會堂を建てるといふことは、實に勇氣のある事業だ、と感嘆した。辭去した後、贈物につけて自筆の禮狀を寄越したが、その中には、キリスト教のことをもつと詳しく聞いてキリシタンにならうと思ふが、今は戰爭中で、それが出来ない、機會を待つ、といふやうなことが記してあつた。オルガンチノたちはこの信雄に非常に望をかけたのである。彼は信長の三子のうちで最も信長に似てゐる。意志が強く果斷である。彼は部下の兵に給與するために、餘裕ある大身の米六千俵を奪ひ取つたことがある。信長が彼を呼んで叱りつけると、自分はあなたの子供のうち最も貧しく、部下に與へるものがない、だから餘つてゐる所から少し取つた、と答へた。信長は、あいつは叱つても聽かない、腕づくで取返せ、とその大身に云つた。そこでその武士の一萬人の部下と信雄の七百人の部下とが對峙した。信雄は、誰も動くな、と云つて、自分一人で相手の軍中に乗り入れ、敵將を探し廻つた。信長の子だといふので誰も手を出さず、相手の武士も姿を隠したので、喧嘩はそれだけで済んでしまつた。さういふ信雄の行跡を承知の上で、オルガンチノやフランシスコは信雄をひいきにした

のである。

信雄の來た翌日に長子の信忠が會堂を訪ねた。彼もまた人々が驚くほど、宣教師たちに親切にした。彼の希望で、會堂に入り切れぬほどの部下の武士たちと共に、説教を聞いた。岐阜に來て會堂を建て説教するがよい、自分は部下が皆キリシタンとなることを望んでゐる、と彼は云つた。

さらにその翌日に、第三子の信孝が訪ねて來た。彼は長い間宣教師の許に留まり、いろ／＼キリスト教のことをきいた。ロレンソが満足の行くやうに答へた。九州にゐる宣教師の數を聞くと、京都は日本の文化の中心だのに何故こんなになんか少ないかと云つた。彼もその領國の伊勢へ神父を一人つれて行きたいといふ希望を述べた。廣い門が開けた。オルガンチノの心は燃え上つたのである。

五 部將たちの同情、佐久間信盛と荒木村重

が、信長一門のみではない。彼の部將の間にもキリスト教への同情が流れた。中でも著しいのは佐久間信盛である。

信盛は一五七四年以來、大坂本願寺への押へとして、

天王寺城にゐた。前からキリシタンの同情者ではあつたが、丁度この頃に、河内の古いキリシタンの中心地三箇の城主及びその子、反キリストの徒の迫害から救ふために、非常に骨折つてくれたのである。この父子を冤罪に陥れ、キリシタンの中心を破壊しようとしたのは、若江城をシメアン池田丹後と共に守つてゐた多羅尾右近であつた。多羅尾はそれによつて河内のキリシタンを亡ぼし、京都のキリシタンの根を絶つことも出来るかと考へ、三箇城主が信長に對して叛逆を計つたといふ噂をいろいろな方面に擴めた。信盛は三箇の城主を信じてゐたので多羅尾の奸策を察し、城主を近江の佐久間自身の城へ行かせた。そこには、三箇の城主の孫が人質として預かつてあつた。しかし信盛の配慮にかゝらず右近の讒言は效を奏した。信長は信盛に、三箇城主の嗣子マンシヨを捕へることを命じた。信盛は止むを得ず、若江城の池田シメアンと共にマンシヨをつれて京都へ行き、信長の前でマンシヨ父子の功績を述べ冤罪である所以を辯じた。その熱心によつて一應信長の誤解を解くことが出来たのである。

しかし事件はそれだけでは濟まなかつた、多羅尾右近は右の結果を見て黙過することが出来ず、六人の武士を説きつけて味方にならせ、それらを證人として信長の許

へ抗議を持ち出したのである。その際多羅尾は、三箇の城主の叛逆を立證するために、當人の署名した書類を提出することが出来るとさへ述べた。六人の證人もそれを保證した。そこで信長は前の決定を翻へし、歸國の途中にある信盛やマンシヨを呼び返してマンシヨの處刑を命じた。ひき返して來た信盛が、激怒しながら信長の宿へ入つて行くと、多羅尾は既に出發して居らず、右の六人の共謀者だけが控室にゐた。信盛は一人づつ呼んで、おれが三箇の城主父子の庇護者だといふことを知つてゐるか、ときいた。また謀叛の書類といふのがあるなら見せろと迫つた。誰一人まともに答へ得るものはなかつた。多羅尾に聞かせられたことのほかは何も知らない、といふのが彼らの答へであつた。で信盛は信長に謁して、處刑に先立ち側近の重臣二人にマンシヨを訊問せしめるやうにと懇願した。信長はそれを容れ、父子に對する嫌疑の諸條を問はせた。信盛もその場に同席した。マンシヨはすでに死を覺悟して祈りを捧げてゐたが、訊問に對して非常にしつかりと明晰に答辯し、人々を驚嘆させた。終りに彼は、叛逆がキリシタンの教に背くことであり、かゝる汚名を受けてキリシタンの名を恥かしめるのが死よりもつらい、といふ旨をのべた。信長はマンシヨの辯明に満足し、即座に無罪を認めたとである。しかし目前

の戦争の繼續中は、マンショを父と共に信盛の城に居らせることにした。

城主父子の冤罪は解けたが、三箇へは歸つて來なかつたので、三箇の城はしばしば危険に陥つた。この年は洪水が多かつたので、三箇から大坂へ通ずる川の増水を利用すれば、大坂の本願寺の船隊が三箇を攻撃し占領することも出來たのである。キリシタンの根據地として特に三箇にはこの危険があつた。それに對して三箇を守つてくれたのは、勇猛の名の聞えたシメアン丹後であつた。しかるにこの危険が去ると、次には信長方についてゐるキリシタンの敵たちが、陰謀によつてシメアンを三箇から引き離し、自分たちで三箇を占領しようとした。この計畫は九分通り成功したのであつたが、最後の段階で急遽シメアンを三箇に歸し、奇蹟的にキリシタンらを救つてくれたのは、遠く播磨の戦争に赴いてゐた佐久間信盛であつた。

三箇の城主父子は、一五七八年の初めには三箇に歸ることが出來、三箇の城も安全になつた。父は一切をマンショに譲つて、自分はたゞ會堂のことに専念した。會堂は非常に大きく、構造も好かつたのであるが、彼はなほその上に壁畫を計畫した。教化のことに熱心で、日曜と祭日には自分で説教をした。さらに説教しつゝ諸所を

巡歴しようといふ志もあつたと云はれる。三箇を守つてくれた若江城のシメアン丹後は、功績を認められて信長から加増を受けたが、それを貧民救済に使つた。これらのことは皆信盛の庇護の下に行はれたのであらう。

佐久間信盛のほかにもう一人注目すべきは荒木村重である。村重は攝津武庫郡の郷士であつたが、その臣事してゐた池田の城主の不才なにつけ込み、同僚と共に黨を組んで池田城の實權を掌握した。和田惟政を奇襲して斃したのはこの連中である。當時は反信長の陣營にゐたが、村重は漸次信長方に傾き、高山ダリヨを後援して高槻城主たらしめた頃には、はつきりと、信長の手についてた。それは一五七三年四月、信長が足利將軍との對決のために急遽上京して來た時であつた。信長は村重を重んじ、和田惟政にやらせたと同じやうに、攝津の統治をやらせた。京都の教會は池田の兵士と幾分の關係を持つてはゐたが、池田地方が深くキリスト教と關係し始めたのは、村重の下に高山父子がゐたからである。

村重は、高山父子との接觸の初期に、おのれの領民に對して、權力を以て一向宗への歸依を強制したことがある。聽従しないものは罰するといふのである。これは村重が一向宗の狂信者であつたからではなく、一向宗の僧

侶が巧みに村重を籠絡したが故に起つたことであつた。一向宗徒は、宗派の命令として、領主に特別の年貢を納めることになつて居り、それが村重をひきつけたのである。

村重のこの措置は高山ダリヨを強く刺戟したが、ダリヨはそれに反對する代りに、自分の領内で全然反對な自由なやり方をやつて見せた。それは、キリシタンの妻子のまだ洗禮を受けないものや、農民・職工などの未信者に對して、自由選擇を標榜して説教の聽聞をすゝめたことであつた。とにかく、會堂へ來て説教を聞いて貰ひたい。聞いた上で、氣に入らなければ信者になる必要はない。信者になつた場合に特別の年貢などの義務がないと同じく、ならない場合にも罰などは加へない。がとにかく説教を聞いて見なければ、善いも悪いもきめられないではないか、といふのであつた。丁度その時、フロイスが高槻に來てゐて説教をした。最初集まつた二百人は、皆キリシタンとなる決心をした。彼らはさらに親戚友人を勧誘したので、説教の聽聞を希望するものはますます殖え、會堂が狭くて困るやうになつた。強制なくして強制以上に教勢は盛んになつて行つたのである。

村重はこのやうなキリシタンのやり方を、一向宗の僧侶の政略的な活動と對照しつゝ、經驗することが出來た。

それに加へて、彼の上に立つ信長のキリシタンに對する態度や一向宗に對する態度が、いろ／＼な形で彼に響いたのであらう。一五七七年に村重が高槻城を訪ねた際には、キリスト教の弘布を助けるやうに動き出してゐる。高山右近には、一向宗徒に對してキリシタンとなることを命ずる一札を與へた。この命令下に立つ宗徒の數は五萬以上であつた。一向宗以外の宗派のものもキリスト教の説教を聞くやうに命ぜられた。この措置に對してオルガンチノは謝意を表するため村重をその城に訪ねたが、そのとき村重は、領民が悉くキリシタンとなることを欲すると語つた。一向宗への歸依を領民に強制した村重とは、まるで別人のやうになつたのである。

村重が信長を訪ねて來てゐた時に、法華宗の信者である大身數人が、キリシタン宣教師の追放を主張したことがあつた。このとき信長は、村重の意見を聞いた。村重は、自分はキリスト教のことはあまり知らないが、部下のキリシタンたちは非常に忠實で、道義を重んずる、と答へた。他にもそれに賛成する人々が多かつた。信長も同意見であると云つた。

ルイス・フロイスは一五七七年の最後の日に京都を出發して豊後に向つたのであるが、船まで見送るロレンソとともに、まづ高槻の城で方々から集まつた信者たちと

別れを惜しみ、翌日高山ダリヨも一行に加はつて伊丹の城に荒木村重を訪ねた。村重は彼らを非常に款待し、もし京都で何事か事が起つて信長の庇護を必要とするやうな場合には、彼も極力援助するであらうと云つた。翌日は、村重の支配下にある兵庫まで村重の兵士たちに送られ、村重の指圖によつて法華寺に宿つた。こゝへも方々から信者が送りに來た。堺の信者たちは船で來た。かうして兵庫の港が利用し得られるやうになつたのは、村重のキリスト教庇護の結果であらうと思はれる。

しかし一向宗への歸依強制から一向宗徒のキリシタンへの改宗強制に轉じた荒木村重は、一五七八年の末に、また一向宗徒と結んで信長に反するに至つた。そのため高山父子は非常に苦勞しなくてはならなかつた。だから村重が教勢擴張に寄與したのは、比較的短かい間のことであつた。

がとにかく、京都の會堂が壁畫以外は全部落成し、いろいろ世話になつた京都所司代村井貞勝を會堂に招待して、ロレンソの説教を聞かせたりなどした一五七八年には、信者の數は急激に殖え、信長一家の庇護は十分であり、異教徒の大名たちさへも、キリスト教に好意を示して、日本におけるヤソ會の仕事の最高潮期に入りつゝあ

つたのである。

第十一章 キリシタン運動の最高潮

一 信長の鐵砲隊と艦隊

信長がキリシタンの宣教師たちを庇護したのは、新しい宗教を求めたが故ではなくして、ヨーロッパの文明を求めたが故であつた。その態度は、最初にフロイスに逢つて以來一貫してゐる。彼はフロイスにおいてヨーロッパ文明の尖端に接觸すると共に、この人物の擔つてゐる象徴的な意義に非常に引かれたのである。従つて彼はこの人物を好み、それを理解しようと努め、その事業を保護した。その態度を彼自身は、外國人であるが故に庇護する、といふ風に云ひ現はしてゐる。彼は佛僧の墮落を事毎に罵つてゐたし、またその後思ひ切つた佛敎彈壓を始めたのであるから、それと對照して彼がキリシタンの宣教師の眞面目な態度を賞讃したり、また彼らを特別に優遇したりしたことは、ともすれば彼の信仰の要求と結びつけて解釋されることもあつたやうであるが、しかし彼は信仰などを求めてゐたのではない。佛僧の墮落や宣

教師の眞面目な活動は、當時にあつては明白な客觀的事實であつて、それを認めたことは、何ら主觀的要求の證據とはならない。信長は宣教師と會談する毎に、世界についての新しい知識を得ようとはしてゐたが、救ひを求めざるやうな態度を示したことはない。佛敎に代つてキリスト教が全日本に弘布しても、そのキリスト教が彼の庇護の下に榮えるのであり、従つてキリスト教徒は決して彼に反抗などはしない、といふ見とほしのある限り、彼はむしろそれを喜んだであらう。しかしその際にも彼自身が信仰を必要とするに至つたかどうかは疑問である。信長が強い關心を抱いたのはヨーロッパの新しい知識である。さうしてそれは、この戰亂の時代にあつては、先づ武器に關する知識として現はれてくる。ヨーロッパ人との接觸を記念するものは、種子島、即ち鐵砲の知識であつた。それは迅速にひろまり、九州西北沿岸では早くから戰爭に影響を與へてゐる。がそれを戰術に取り入れて、一つの決定的な勝利の形にまで具體化することが

出来たのは、ほかならぬ信長なのである。一五七五年の長篠の戦勝がそれであつた。これは全国的に強い刺戟を與へたであらう。一五七八年に書いたフランシスコの書簡によると、大坂の本願寺の城内には八千の銃があつたといふ。長篠における信長の戦術は、もう信長の敵が使つてゐるのである。

それに加へて、本願寺を後援する毛利氏は、すでに信長に先んじて、有力な海軍を創設してゐた。一五七六年の夏、毛利氏の送つた兵糧船が數百艘大坂へ近づいたとき、信長方の軍船はそれを迎撃したが、毛利方の「はろく火矢」で散々な目に逢つた。兵糧船隊は悠々大坂に入港し、兵糧を大坂城へ入れて、悠々として歸つて行つた。淡路の岩屋城は毛利の海軍の根據地であつた。多分この形勢に刺戟されたのであらう、信長は志摩の國鳥羽の城主九鬼嘉隆に命じて、大きい軍艦を造らせた。嘉隆は六隻、瀧川一益が一隻造つたが、それらは鐵張りの船で、長さ十二三間、幅七間であつた。一五七八年夏には九鬼嘉隆がこの七隻の艦隊を率ゐて伊勢灣から大坂灣へやつて來た。乗員は五千人であつたといふ。途中雜賀などの一揆が數百艘の兵船で襲撃して來たが、九鬼の艦隊はそれを近くへひきつけ、やにはに「はろく火矢」即ち大砲を放つて撃破したのである。その時敵船三十餘艘

を捕獲したらしい。艦隊は孟蘭盆の日に堺に着き、翌日大坂港の封鎖を開始した。この鮮やかな成績に氣をよくした信長は、二ヶ月ほど後に、わざ／＼艦隊を見るために大坂にやつて來て、住吉の沖で演習をやらせたりなどした。

この艦隊が堺に着いた時には、丁度オルガンチノが居合はせて、その報告を書いてゐる。それによると、これらの船は日本で最も大きく、また最も立派なもので、ポルトガルの船に似てゐる。日本でこんなものを造るとは驚くのはかはない。信長がこれを造らせたのは、大坂港封鎖のためであるから、大坂の市はもう滅亡するであらう。船には大砲を三門づつ載せてゐるが、何處から持つて來たものか解らない。豊後の大友が數門の小砲を鑄造せしめたほか、日本には大砲はない筈なのである。自分は船へ行つて大砲やその装置を見た。ほかに無數の精巧な大きい長銃も備へてあつた。

オルガンチノに解らなかつたやうに、日本の歴史家にも、この大砲の出所は解らないのであるが、『國友鐵砲記』によると、信長は元龜二年（一五七一年）に秀吉を通じて二百目玉の大筒を、國友鍛冶に造らせたといふのであるから、一五七七・八年の頃に日本の鍛冶工が大砲を作り得たといふことは、さほど不思議ではあるまい。

オルガンチノは當時の貿易關係を熟知してゐたであらうし、従つてポルトガル人が大砲を輸入したのでないことは確實であらう。宣教師たちが日本に大砲はないと信じてゐた間に、いつの間にか宣教師たちの眼の届かない毛利の領國や信長の領國において、大砲の製造がはじまつてゐたのである。これが恐らく築城の上にも大きい變化をもたしたのであらう。大砲を備へた軍艦の使用においては毛利の方が一歩先であるが、信長は鐵張りの大きい軍艦の製造によつて毛利の艦隊を壓倒したのである。

この信長の艦隊は、當時の日本においてヨーロッパの知識を攝取する努力の尖端の姿であつた。信長の「外國人」に對する關心や庇護は決して單なる好奇心ではなかつたのである。がさういふ實用の範圍に止まらず、さらに廣汎な世界への視圈を開かうとする衝動も彼のうちに動いてゐた。それを示すものは宣教師たちとの會談の時の話題である。それは宣教師たちが、二次的な重要でない事柄として、あまり詳細には記述してゐない點であるが、しかし信長には信仰よりも重大な事柄であつたであらう。不幸にして信長の周圍の知識人は、信長ほどに視圈擴大の要求を持たず、従つて、政治家であり軍人である信長がさういふ知識欲の先頭に立たざるを得なかつた。しかもその信長に對してヨーロッパの知識を媒介す

る地位にあつたヤソ會士たちは、あまりにも信仰と傳道のこととに偏り過ぎた人々であつた。比較的關心の範圍の廣かつたフロイスといへども、ヤソ會士としての狂熱は今から見れば不思議なほどである。それらのことを思ふと、先驅者としての信長といふ人物には、よほど見なほさなくてはならない面があると思はれる。

二 荒木村重の背叛と高山右近の去就

信長の艦隊が大坂港を封鎖し、信長の陸軍が播磨における毛利の勢力を、着々と壓迫し始めた一五七八年の暮に、攝津の領主荒木村重は再び逆轉して一向宗徒と結ぶに至つた。これは本願寺や毛利の勢力に再び活を入れる主な出来事であつた。何故村重がこの舉に出たかは信長自身も理解に苦しんだらしく、祕書の松井友閑や明智光秀などを派遣して村重と懇談させ、一時は納まるかに見えたが、村重部下の諸將が沸き立つて遂に引きずつて行つたのである。恐らく本願寺側の必死の働きかけが利いたのであらう。信長は早速京都に來て討伐をはじめたが、村重は中々頑強で、翌一五七九年の秋に至るまで十ヶ月の間伊丹有岡城に據つて反抗を續けたのであつた。

この戦争の最初に先づ問題となつたのは、キリシタンの城高槻城であつた。城主の高山父子は、村重の後援に

よつてその地位を得た關係上、村重に背くわけには行かなかつた。のみならずダリヨの娘即ち右近の妹と、ダリヨの孫即ち右近のひとり兒とが、人質として村重の手許に置いてあつた。だから信長が攝津へ攻め入らうとした時、高山父子は高槻城に據つて信長の軍を防いだのである。城は廣い堀に圍まれ、堅固な城壁を持つてゐて、中落ちさうにもなかつた。そこで信長はオルガンチノに命じて高山右近を説得させようと思ひついたのである。オルガンチノは高槻城に行つて説いて見たが、全然効果がなかつた。すると信長は、宣教師たちや信者たちを山崎の陣營に呼びつけた。その様子でキリシタンたちは事によると殺されるかも知れないといふ豫感を抱いた。さういふ連中に對して信長の祕書の松井友閑は、信長の意を次のやうに傳へた。汝らキリシタンたちは、高槻城主高山右近に説いて、直ちに信長の味方にならざるべきである。右近はそれによつて自分の子と妹とを失ふであらうが、その代り信長の領内の神父及び信者を助けることができる。もしさうしないならば、信長は直ちに右近の眼前においてキリシタンたち一同を十字架にかけるであらう。——この宣言はキリシタンらを泣かせた。彼らは信長が村重の謀叛による形勢の逆轉を非常に重大視してゐることを知つてゐると共に、ジュスト右近の降服の困

難な事情をも知つてゐた。だからその間に挿まつた宣教師たちが、先づ殺されることになるだらうと考へざるを得なかつたのである。

この時右近との談判には、オルガンチノたちに佐久間信盛や羽柴秀吉や松井友閑なども付き添つて行つたらしい。ジュスト右近は信長の決心を聞いて、あつさりと城を投げ出すことにした。彼は部下のキリシタン武士一同を集めて次のやうに降服の理由を述べた。自分が城を開け渡すのは、それによつて利益を得ようと思ふからではない。自分の子と妹との命を以て多數の神父やキリシタンたちの命を購ふのは、われらの主に仕へる所以だと考へるからである。神父やキリシタンたちへの愛のためには、自分は一切のものを捨てるのみならず、おのれの命を投げ出すことをも辭せない、と。かうして右近は、城を捨てると共に世を捨て、神父のもとにイルマンとして働かうと決心したのであつた。

この右近の措置は、信長の陣營でもキリシタンの間でも、非常な喜びを以て迎へられた。それは信長の戦略的地位を有利に導くものであつたと共に、またキリスト教のための「生きた説教」ともなつたのである。前には知らなかつた外國人を救ふために、自分の肉親の愛を捨てる、さういふ慈悲の行をキリスト教はさせたのだ、とい

ふことが、廣く世間に知れわたつた。信長も非常に喜んで、キリスト教保護の朱印狀を改めて交付し、二つの町を選んでキリシタンに免税の特權を與へた。信忠初め他の大身のうちにも、キリシタンとなることを約束するものが少なくなかつた。

この事件は信長のキリスト教に對する腹を割つて見せたやうに見える。降服しなければお前の重んじてゐる神父らを殺すぞ、と云つて右近を脅した態度は、キリスト教を戰爭の道具に使つたものにはかならない。『信長公記』によると、信長はこの時神父に對して、右近口説落しを引き受けろ、もし引き受けなければ、デウスの宗門を斷絶する、と云つて迫つたことになつてゐる。この方が一層露骨である。神父フランシスコがその書簡のなかで、信長の取つた策は「われ／＼にとつて非常に苦痛であつた」と認めてゐる所を見ると、何かそのやうなことがあつたのであらう。しかしそれにもかゝらず、フランシスコの報告のなかには、信長を非難する調子が現はれてゐない。信長は右近の心情を諒としたのであるが、しかし、おのれの領土全體の安危にかゝる大問題であつたために、敢て道理に對して眼を閉ぢたのだ、といふ彼の記述は、幾分信長を辯護してゐるやうにさへも取れる。「小鳥を殺し大鳥を助ける」といふ右近の決斷が、

信長と宣教師との間に醸し出されたかも知れぬ暗雲を、未然のうちに防いだのである。

このやうに、肉親を犠牲にするといふ右近の決意は、キリスト教のために大きい貢獻をしたのであるが、しかしその犠牲そのものは、遂に捧げられずにすんだ。といふのは、父のダリヨが、その娘と孫を救つたのである。彼は娘や孫を見捨てる氣持になれず、高槻の城を出て、伊丹の村重の城へ奔つた。娘や孫が死すべきであるならば、おのれも運命を共にしようと思は考へてゐた。伊丹の城内にゐた多數の親戚も、部下をつれて彼のもとに集まつた。さうなると、子の右近は村重に叛いたが、父のダリヨは叛かなかつたといふことになる。人質を處分すべき理由は半ば消失したのである。だから村重も、事を荒立てようとはせず、知らぬ振りをして放任してしまつたのであつた。

がさうなると高山ダリヨは、荒木村重の味方について信長に叛いたといふことになる。その報いは信長の方から受けなくてはならない。一年の後、伊丹の有岡城が陥落したとき、信長はかなり残酷な大量處刑を行はせた。ダリヨも勿論その中に含まれるであらうと考へられ、彼を敬愛するキリシタンたちは熱心に彼のために禱つてゐた。しかし幸ひにも信長の報いるところは非常に寛大で

あつた。彼はダリヨのために命乞ひするものの言葉に耳を傾け、彼のために肉親の犠牲を辭せなかつた右近のためを思つて、ダリヨの死刑を取りとめ、幽閉するに止めたのである。やがて彼は右近の許に使者を送つて、ダリヨの放免を傳へた。ダリヨは死刑に處すべきものであるが、右近に對する愛のためにその刑を免ずる。目下幽閉中の牢を出て妻と共に暮らしてよい。兩人には生活の資を與へる。宥免狀は夫の許に赴く妻に持たせてやらう、といふのであつた。かうして高山ダリヨは越前の柴田勝家に預けられ、同地で直ぐに福音傳道の仕事を始めた。高山右近も高槻城主に復せられたのみならず、前の二倍の領地を與へられた。その子や妹も無事であつた。一五八〇年には、その領内のキリシタンは一萬四千に達した。高山家には反つて繁榮が來たのである。

三 安土宗論

荒木村重に對する長期の攻圍が行はれた一五七九年には、もう一つ世間の耳目を聳動する事件が起つた。それは安土宗論として知られてゐるものである。初めは法華宗と淨土宗との間の喧嘩に過ぎなかつたのであるが、信長はその機會を巧みに利用して、手ひどく法華宗の迫害を斷行したのであつた。

い、といふ一札を差出した。

そこで信長は日を定め、四人の奉行や、判者を任命した。京都からは法華宗の主立つた僧侶が呼ばれ、多數の檀徒と共にやつて來た。淨土宗側では、智恩院の僧が一人來ただけであつた。問答の衝には、安土の淨土宗の僧が當つた。

問答は法華經の權威と念佛の權利とをめぐつて行はれたのであるが、最後に淨土宗側が、「もし法華經以前の經を悉く未顯眞實とするならば、方座第四の妙をも捨てるか」と問うたとき、法華宗側は答辯に詰つた。それを見て、淨土宗の僧は、第四の妙の意味を説明した。そのとたんに、判者も聽衆もどつと笑ひ出した。法華宗の僧たちは袈裟衣をはぎ取られ、鞭うたれ、捕縛された。富裕な檀徒も數人捕へられた。群集は非常な混亂に陥つたが、やがてその場へ信長が出て來て、討論には加はつてゐなかつた法華宗の僧普傳と、最初争ひをひき起した法華宗徒との二人の首を斬らせた。その場にゐたマツと小西隆佐の一子とは、この日の法華宗徒の敗北が曾てない甚だしいものであつたことをオルガンチノに向つて證言したのである。

この報道が安土の町にひろまると共に、早速法華宗の寺院や檀徒の家の破壊が始まつた。京都から勝利を確信

この宗論の行はれたのは一五七九年六月二十一日(天正五年五月二日)であるが、その月の終らぬ内にオルガンチノはフロイスに宛ててこの事件を詳細に報じてゐる。従つてこの書簡は安土宗論に關する現存の最も古い記録と云つてよい。その内容は信長記を通じて普通に知られてゐることとほぼ一致してゐる。問答の箇條書までもさうである。

事の起りは、坂東の淨土宗の僧が安土で數日間説教をやつてゐた席へ、安土の町の一人の法華宗徒が行つて、説教の途中で質問を始めたことであつた。説教師はそれに對して、俗人と法論しても結着はつかない、誰か法華宗の學僧を連れて來れば答辯しよう、と答へた。法華宗徒はこの答を憤り、自分の質問に答へ得ないならばその座を下りるがよい、と云つて、説教師を高座からひき下ろし、衆人の前で侮辱を加へた。淨土宗徒はこの亂暴を信長に訴へた。そこでこの喧嘩が兩宗派の間の公の争ひとなつたのである。法華宗徒は兩宗の間の討論を要求し、淨土宗徒もそれを拒みはしなかつたが、信長は遠方から學者を集めることの困難を理由としてそれを止めさせようとした。しかし法華宗徒は強硬に討論を主張し、學僧は遠方から呼ぶ必要なく、京都の人だちで澤山であると云つた。さうして、もし負ければ頸を切られてもよ

して見物に出掛けた法華宗徒たちは、捕へられることを恐れて物をも食はずに逃げ歩いた。隆佐の子もその一人であつた。その日のうちに京都へも騒ぎが傳はつた。伊勢、尾張、美濃、近江の四ヶ國の法華寺院は悉く掠奪された。前後を通じて掠奪により法華宗徒が失つたところは、黄金一萬を超えるだらうと云はれてゐる。

數日後に信長は人を派して、京都の法華宗諸寺院に巨額の罰金を課した。捕へられた三人の僧と五人の檀徒とは、なほ十數日の間釋放されなかつたが、法華宗側から差出した起請文は所司代村井貞勝の手によつて公表された。それは宗論において法華宗の負けたことを承認し、今後他宗に對して論難攻撃を加へないことを誓つたものである。

十數年來キリスト教に對して最も積極的に迫害の努力を續けて來た法華宗は、かうして殆んど倒れるばかりの所まで押しつめられた。オルガンチノは大喜びで早速この報道を書いたのである。

信長記では、普傳たちの首を斬らせる場で信長の述べた言葉を詳しく傳へてゐる。彼は先づ争ひをひき起した男の不屈を責め、ついで普傳の法螺吹き・インチキ師としての性格や所行を數へ上げ、兩人を處分したあとで、宗論をやつた法華僧たちに向つて次のやうに云つてゐる。

お前たちは働かずに食はせて貰つてゐながら、學問もよくしない、討論に負けたのは、甚だ不都合である。しかし法華宗の僧侶は法螺を吹く癖があるから、宗論には負けなかつたのだなどと云ひ出すに相違ない。だから今度の宗論で負けたことを承認し、今後他宗を論難攻撃しないと誓つた書附を差出して貰ひたい、と。

信長のこれらの言葉をどうしてオルガンチノが傳へなかつたかは解らぬ。隆佐の子たちは落ちついてそれを聞く餘裕がなく、従つてオルガンチノにも話さなかつたのかも知れない。しかしこの信長の言葉に對應する起請文は、村井貞勝に見せて貰つたらしく、その寫しをフロイスに送つてゐる。

ところで、この安土宗論については、裏面の事情が問題とされてゐる。宗論は信長の術策だといふのである。京都の法華宗の僧侶たちは、何も知らないであつたところへ、突然、淨土宗との宗論だと云つて安土へ呼び出された。さうして奉行から次のやうな二者擇一の返答を強要された。宗論をやるならば、もし負けた場合には京都及び信長領國中の寺々を破却せらるべしといふ一札を差出した上で、やるがよい。それが迷惑であるならば、問答をせずにこのまゝ歸つてもよい。宗論をやるか、やらぬ

か、一つを答へよ、といふのである。法華僧たちはそれに答へることを拒んだ。自分たちは命令によつて出向いて來たのであつて、宗論をすゝめたくないとかは自分たちの方からは云へぬ。するもしないもたゞ命令に従ふ、といふのである。して見ると、法華宗徒があくまで宗論を主張したといふのは嘘である。負けた場合に寺を破却されてもよいといふ書附も差出さなかつたのである。宗論は信長の命令によつて行はれた。

當日の討論においても、法華宗が負けたといふのは信長の細工である。因果居士の批判によると、討論の成績では淨土宗の方が悪かつた。それを淨土宗の勝にしたのは、信長の意を受けた因果居士の仕業である。それを因果居士自身が告白してゐる。

して見ると安土宗論は、法華宗に打撃を與へようといふ信長の意圖の下に仕組まれた狂言であつて、公平な宗論ではなかつた、といふことになる。或はさうであつたかも知れない。しかし京都の僧侶たちが宗論を發起したのではないといふことは、法華宗がこの争ひをひき起したのでないといふことの證明にはならないのである。安土の法華宗徒が、先づ淨土宗徒に對して攻勢に出た。これが事件の起りであり、さうして、信長の關知しない偶發の事件である。淨土宗側は、學僧をつれて來れば返答す

る、と答へただけであつて、あくまでも受身だといつてよい。それに對して法華宗徒が侮辱を加へたとすれば、その侮辱は罰せらるべきであるか、或は當然の所爲として是認せらるべきであるか、それが争點になる。訴へられた法華宗徒は、おのれの所爲が正當であつたことを立證するために、學僧をして討論せしめなくてはならなかつたのである。従つて宗論をあくまで主張したのは安土の法華宗徒であらう。宗論に負けた場合、首を斬られてもよいといふ一札を差出したのも、安土の法華宗徒であらう。京都の法華僧たちは、これらのことが定まつた後に呼ばれたのである。この關係はオルガンチノの報告によつて明かに知り得られると思ふ。さうであるとするれば、京都の學僧たちに對して、宗論をすゝめかしないかの選擇を迫つたといふことも、極めて理解し易くなる。彼らは争ひをひき起した法華宗徒の不謹慎を詫び、宗論をしないで引上げることも出來たのである。しかし、それは法華宗の敗北を意味するが故に、彼らはなし得なかつた。それならば、争ひをひき起した法華宗徒の責任をひき受けて宗論をすゝめ主張すべきであるが、その場合には、首を斬られてもよいと誓つた法華宗徒の責任をもひき受け、法華宗の寺院を破却せられてもよいと誓はなくてはならぬ。これもまた彼らのなし得ないところであつ

た。信長は法華宗徒の始めた争ひを巧みに利用して、法華宗をこの窮地に追ひ込んだのである。必ずしも暗い術策を弄したわけではない。

さていよいよ宗論をやらせるについて、信長が初めから法華宗を敗北させるやうにもくろんでゐたといふことは、恐らく本當であらう。種々雑多な説を包含する大乘經典の文句を、論證の有力な根據とする佛敎の論議にあつては、さういふことは比較的容易である。だから因果居士もそれをひき受けたのであらう。結局淨土宗側は、「方座第四の妙」といふ如き、どの經にあるか解らない文句を持ち出して法華宗側を閉口させ、因果居士がそれを認めて法華の負けを宣したのである。それは舞臺効果の十分な場面であつた。オルガンチノはそれをマツとか隆佐の子とかの如きその場にゐた人々から聞いたのであるから、信用してよいであらう。最後の瞬間に、判者を初め聽衆一同が大笑した、といふ敘述は、オルガンチノの書簡と信長記とが奇妙なほどによく一致してゐる點である。

以上のやうに考へると、安土宗論について普通に知られてゐるところは、ほとんどの事實に近い。それは信長の佛敎彈壓の一つの現はれとしての法華宗彈壓であつた。法華宗のキリスト敎に加へた壓力が大であつただけに、この

事件がキリシタンに與へた喜びも大であつた。彼らにとつては信長は、この種の所行のみによつても讚美せらるべきものとなつた。

四 巡察使ワリニャーニの渡來

荒木村重の謀叛と安土宗論とのほかに、もう一つ一五七九年における大事件は、巡察使アレッサンドロ・ワリニャーニの渡來であつた。

一五七〇年トルレスのあとを受けて日本ヤソ會の指揮を取つたカブラルは、トルレスとはかなり性格の異なる人であつた。トルレスはシャビエルと同じく日本人に信頼し、日本人の生活のなかに融け入ることを念とした。だから苦痛を忍んで日本の衣食住の様式におのれを適應させようと努めた。風習の相違の如きは魂の救済の前には末梢的なことに過ぎなかつたのである。日本人を宣教師として養成することも彼の熱心に努めたところであつて、ロレンソ、ダミヤン、ベルシヨール、アントニオ、コスモ等々、二十六人の優れた日本人が、活潑に日本人教化の實際の成績をあげてゐた。しかるにカブラルは、トルレスのやうな柔軟な心の持主でなく、偏狭で、主觀的な判断を固持する人であつた。彼は日本人教師がこのまゝ伸びて行けばやがてヨーロッパ人教師を見下すに至

は、一五七二年以來カブラルの指導の下に九州で働いてゐたガスパル・クエリヨであつた。

五 石山本願寺の開城、安土城の完成、安土のセミナリヨの開設

以上のやうな情勢のもとに、一五八〇年にはいろいろなことが一緒に起つた。七年の間も信長が攻圍を續けてゐた大坂石山の本願寺の開城、——安土城造營の完成、——安土における宣教師館の建築、——少年のための學校セミナリヨの開設、などがそれである。これは信長の勝利が、ヨーロッパの知識への接近と時を同じうして起つたことを意味してゐる。

石山本願寺は、信長の艦隊に海上を封鎖され、荒木村重の没落、秀吉の播磨地方制壓などによつて、毛利氏との陸上の聯絡も絶たれてしまつたために、一五八〇年の春、朝廷の調停によつて、遂に、信長と和を講ずるに至つた。その條約は、大坂城を守つた人々を處罰しないこと、諸國の末寺を破壊しないこと、本願寺の領地として加賀二郡を残すこと、その代りこの年の夏に大坂及び附近の二城を明け渡し、人質を差出すことなどを含んでゐた。本願寺光佐は間もなく石山を出て紀伊の雜賀に退いたが、子の光壽は信長を信頼せず、父に背いて信長への

るであらうことを恐れ、その成長を阻止する態度に出たのである。その布教の態度もまた、トルレスのやうに廣く政治的な見透しを持つたものでなく、むしろ狂熱的に殉教を煽るといふやうな猪突的なものであつた。さういふ點から云つて、カブラルの指揮はトルレスよりもよほど見劣りのするものであつた。彼の在任の末期には、もと十八人であつたヤソ會士が五十五人に殖えてゐるが、しかし特に彼の名に結びついた実績は、大友宗麟の洗禮のほかには、殆んどないと云つてよい。

しかるにワリニャーニは、一五七九年七月末日本に着いて口の津で宣教師會議を招集した時に、直ちに「シャビエルの方針に歸れ」と唱道し始めた。日本人は信頼に値する。傳道の主なる目的は、殉教に走るのではなくして、少しでも多くの魂をキリストに近づけることである。それには日本人を教育し日本人の教師を出来るだけ多く作らなくてはならぬ。かゝる考のもとにワリニャーニは少年のための學校セミナリヨや専門の學林コレジヨなどの計畫を樹て、有馬には早速セミナリヨを造つた。これはカブラルの方針とはまるで逆であつた。ワリニャーニはこの長老の頑固な心が、恐らく不幸な結果を生ずるであらうとさへ考へてゐた。従つて、新しく日本に設置した副管區長(ビセプロビンシアル)に彼が選んだの

反抗を續けるかに見えた。いよ／＼開城すべき夏の頃には、信長は軍隊をひきゐて京都まで出て來た。石山の城は依然として水の充滿した廣い堀に三重に圍まれ、城中にはなほ一萬の戰士が立てこもつてゐた。が結局光壽も反抗を斷念し、條約通りに開城が實現された。これによつて信長の毛利氏に對する戦争は非常に有利になつたと共に、宣教師たちは、キリスト教の傳道が容易になつたと感じた。一向宗は今やキリスト教の「最大の敵」となつてゐたからである。

信長やその子たちのヤソ會に對して示した好意は、一向宗に對する敵意と比例して高まつた。オルガンチノたちが訪ねて行くときも非常に機嫌が好かつた。しかし信仰の方へ近づいて行つたとは見えない。この年に信長は多數の大神たちの列席してゐる前でオルガンチノとロレンソを相手にしている／＼の質問を試みたことがあるが、その時彼は神(デウス)や靈魂の存在についての疑惑をはつきりと表白したらしい。彼岸の世界や地獄極樂のことは佛僧たちも説いてゐるところであるが、しかしそれは民衆を善導するための方便に過ぎまい。それが彼の考であつた。それに反して、地球儀を持ち出させ、それに關してオルガンチノの與へた説明には、非常に感服したらしい。ヨーロッパから日本に來る旅程の説明など

は特に彼を喜ばせた。それほどの旅行をするにはよほどの勇氣と意志が必要である。神父たちがそのやうな冒険をしてこゝまでやつてくるのは、よほどの大望があるからであらう。なども云つた。この疑問を解くためには世界の大勢を理解しなくてはならない。さうしてその衝動が彼のうちには動いてゐたのである。

安土城の造営はこの年の初夏に完成した。その機會に信長は一般民衆の參觀を許した。無数の人々が見物に集まつた。オルガンチノたちもまた安土に赴いた。信長が安土に會堂や宣教師館の建築用地を與へるであらうかどうかをためすためである。もし信長がこれらのものの建築を宣教師に命じたと日本國中に知れ互つたならば、キリスト教の日本における地位は非常に確乎としたものになるであらう、さう彼らは考へた。

信長はオルガンチノたちの參觀を喜び、非常に款待した。オルガンチノはすかさず、信長の開いたこの著名な町に會堂や宣教師館を建築したいと申出た。それは信長の方でも望むところであつた。そこでいろ／＼と配慮した末、五月の末にキリシタン側の希望に従ひ、山下の新しい埋立地に廣い地所を與へた。そこに壯麗な宣教師館や會堂が出来れば、この都市の裝飾になる、と彼は云つた。

ナリヨが開かれ、貴族の少年約二十二人が集まつた。その大部分は、新築の宣教師館に住んでゐた。巡察使ワリニャーニが来れば、セミナリヨの建築をも始める筈であつた。

六 ワリニャーニの京畿地方巡察

巡察使ワリニャーニは、一五八一年三月八日に、ルイス・フロイス、ロレンソなど、神父四人、イルマン三人を伴つて白杵を發し、三月十七日、復活祭の週の始まる前に堺に着いた。同行のフロイスは三年前から豊後にゐたのであるが、ロレンソは前年の秋、巡察使の上京を促すために、京都から迎へに行つたのであらう。それほど京都地方ではワリニャーニの上京を待ちこがれてゐた。堺ではフラガタに似た船五艘を準備して、豊後まで迎へに行かうとした位である。

この時のワリニャーニの旅行を、これまでの宣教師たちの旅行に比べれば、實に雲泥の相違があるといつてよい。ワリニャーニの一行を乗せたのは大友宗麟の提供した大きい船である。それには二十五歳以下の青年漕手三十人が乗り組んでゐて、必要とあれば飛ぶやうに早く漕ぐことも出来たし、また兵士たちも乗り込んでゐた。海賊の危険に對しては武装することも出来た。さういふ船

信長は早速この建築を始めるやうにと注文した。さうなるとこの建築は教會の名譽や信用にかゝる問題となつた。キリシタンの大身はオルガンチノに早く始めるやうにと迫つた。高山右近なども、一切をひき受けるからと云つて熱心にすゝめた。幸ひこの頃オルガンチノは、ワリニャーニの命によりセミナリヨを開設するために、京都に二階建の大きい家を數軒建てる豫定で、材木の切り込みをすでに終つたところであつた。で彼はこの材木を安土に運び、早速壯麗な宣教師館を建てることにきめた。大身らはその人夫を出した。高山右近だけでも千五百人であつた。かうして材木と瓦とを運び、直ちに組み立てて行つたので、一ヶ月ほどで出来上つてしまつた。しかもその家は安土の町では信長の城を除いては最も立派な建築で、第二階には三十四の座敷があつたといふ。信長はそれを見て非常に満足し、オルガンチノに感謝の意を傳へさせた。しかし會堂の方はさう迅速に建てることは出来なかつた。

この宣教師館の建築は、オルガンチノが豫想したやうに、非常に宣傳効果の多いものであつた。佛僧や佛教徒たちは、神父らに敬意を表するやうになり、武士たちの中にも、神に關心を抱くものが殖えた。さういふ情勢の下に、この秋にはすでに、安土において少年の學校セミで送られてくるといふことは、宣教師の社會的地位が如何に高まつて来たかを示すものである。その代り宣教師たちの財寶をねらふ海賊の活動や、毛利の海軍の危険も大きかつた。丸龜沖の鹽飽諸島では危く難を免れることが出来たが、兵庫附近では、遂に海賊船の追跡を受け、堺までまるで競漕のやうな形で力漕して来た。堺に入港してからも、それらの海賊船に取巻かれて容易に荷役が出来なかつた。堺の富商日比屋良慶は、部下三百人に鐵砲を持たせ、海岸からワリニャーニの船を守つた。結局良慶らの調停で多額の償金を出すことになつた。それほどこの航海は大げさだつたのである。

上陸後の歡迎もワリニャーニの驚くほどであつた。質素を重んずるヤソ會士として、ワリニャーニは、自分に對しこのやうに華々しい名譽と好意とを表はす必要はない、と云つて斷わらうとしたが、日本のキリシタンたちは押し返して云つた。神父たちはおのれの利益には少しもならないのに、多額の經費を使ひ、多大の艱難と危険とを冒して、遠い所から救ひの道を説きに來られた。われわれは曾て、いつはりの教を説いてゐる坊主たちに對してすら大きい敬意を拂つてゐたほどであるから、まことの教を説く神父たちのこの獻身的な努力に對しては、出来るだけの敬意を拂ひ、奉仕につとめなくてはならぬ

と。この道理ある言葉にはワリニャーニも従はざるを得なかつた。で彼は、日本の習慣に従ふ、といふ口實のもとに、盛んな歓迎を甘受することにした。

このやうに社會的に顯著な現象となつたワリニャーニの畿内巡察は、日本におけるキリシタン傳道史の上では一つの頂上をなすものと見てよいであらうが、日本とヨーロッパとの文化的接觸といふ點から見ても、恐らく最高潮の時期を示すと云つてよいであらう。この時には、ヨーロッパ文化の攝取に對する肯定的な機運が最も高まつてゐた。従つて日本民族に世界的視圈を與へ、近代の急激な精神的發展の仲間入りをさせるといふ望みが、まだ十分にあつた。セミナリヨの開設は、萌芽的な状態ではあつたが、その望みを象徴的に現はしたものである。事によればそれは國民的事業として發展し、全然別趣の近代日本を作り出してゐたかも知れないのである。

ワリニャーニが堺に上陸したのは、多分三月十七日の夕方であらう。待ちかまへてゐたキリシタンは直ちに八方へ使を派したので、同夜直ちに結城、池田丹後、その他のキリシタン武士がやつて來た。烏帽子形城のパウロ文太夫が教會に寄附した家は、日比屋の向ひ側にあつたが、ワリニャーニはそこで翌々日ミサを行つた。翌々日

リシタンに迎へられ、先づ十字架の所に、ついで會堂に入つた。人々の喜びは非常なものであつた。

翌日はワリニャーニが單獨でミサを行つた後に、高槻に向けて出發した。多數の身身や夫人たちなどが行列に從つた。高槻の近くの渡し場までくると、數人の武士が船を準備して待ち受けて居り、對岸は出迎への人たちで一杯であつた。高槻にゐた神父グレゴリヨ、イルマンのデヨゴ・ピレイラ、右近の家族たちもその中であつた。

ワリニャーニは初め京都で聖週を迎へたいと考へてゐたらしいが、高槻に着いたのがもう月曜日の夕方で、復活祭の準備は急がなくてはならなかつたし、それに信長が二三日中に上落して京都で派手な祝祭を行ふことになつてゐたので、かたゞ神父たちは暗黒の諸儀式や復活祭を高槻で行つて貰ふやうにと望んだ。そこで復活祭は俄かに高槻で行はれることになり、早速その準備に取りかゝつた。高山右近は十分な準備をする暇のないことを残念がつたが、しかしワリニャーニの一行は裝飾品一切を携へてゐたので、會堂は立派に飾りつけられた。集まつた人の數も未曾有であつたし、儀式の莊嚴なことも曾てないほどであつた。信者のうちには遠く美濃尾張から來た人もあつた。ワリニャーニの一行が運んで來たオルガンも今度初めて据ゑつけ、土曜日の儀式の時から使つ

三月十九日は枝の日曜日であつたが、ワリニャーニは枝を祝福した後、河内の岡山に向けて出發した。ワリニャーニが非常に背が高いのと、一行の中に一人の黒ん坊がゐたのとで、それを見るために狭い街路に無數の人々が集まり、店屋を壊したほどであつた。堺を出てからの行列は、駄馬三十五頭、荷持人足三四十人、一行の乗馬もほゞ同數であつたが、ほかに、出迎への武士が騎馬で八十人位、多數の兵士を率ゐてゐた。この行列は進むに従つて出迎への人や騎馬の武士が殖えて行つた。

池田丹後はこの頃八尾の城にゐたが、一行が八尾に近づくと、待ち受けた多數のキリシタンが手に手に持つてゐた枝と薔薇とを道に投げ、ワリニャーニたちはその上を通つていつた。少し行くと野原に蓆をしき屏風を立て廻して、池田丹後夫人が子供や貴婦人たちと共に待ち受け、一行に食事を饗した。

三箇に近づいて、飯盛山麓まで來ると、三箇の領主や夫人ルシアなどが、多數のキリシタンと共に街道に蓆を敷いて待ち受けてゐた。すでに夕暮も近づいたので、ゆつくり挨拶する暇もなく三箇に行つたが、そこには食事が準備してあり、オルガンチノがセミナリヨの少年數人と共に迎へに來てゐた。

その日は岡山まで行つて、方々から集まつた多數のキ

て見たのであるが、これは會衆の間に非常な驚嘆を巻き起した。ワリニャーニは信者たちの熱心な態度を見て、身が高槻にあるのではなく、ローマにある思ひをしたといふ。

復活の日曜日には、天明の二時間前に、莊嚴な行進が行はれた。これはフロイスが日本で見た中で最も盛んな整つたものであつたと共に、ヨーロッパで行はれるそれに比肩し得るものであつた。この行進には身分のある武士たちを初めキリシタンだけで一萬五千、異教徒も加へて二萬の人が參加した。主立つた武士たちや、二十五人の白衣を着けたセミナリヨの少年たちは、今度ワリニャーニの携へて來た繪を一人々々捧げてゐた。大きな繪は數人で高く捧げた。その他信者たちは手に手にさまざまの形や色の提灯をかざしてゐた。ワリニャーニは十字架の木の聖匣を持つて天蓋の下に立ち、それに従ふ神父たちはカッパやアルマチカを着てゐた。

この日右近は、宣教師たちや方々から集まつた信者たちのために、盛大な宴を開いた。そのうち京都から使が來て、信長を訪問するために直ちに出發するやうにと云つて來たので、復活祭の日の午後ワリニャーニは高槻を立つて京都に入つた。

翌日、京都の會堂は、恐ろしい群集に取り巻かれた。

ワリニャーニの連れて来た黒ん坊を見ようとして人が集まつたのである。その混雑のため怪我人が出、門が壊された。信長からも黒ん坊を見たいと云つて来たので、オルガンチノが連れて行つた。信長は皮膚の黒さが自然の色であることを信ぜず、上半身を裸にして調べて見たりなどした。

一日おいて、三月廿九日にワリニャーニは、オルガンチノ、フロイス、ロレンソなどをつれて、信長を訪問した。進物は鍍金の燭臺、緋天鷲絨一反、切籠硝子、金の装飾のある天鷲絨の椅子などであつた。信長は彼を款待して長時間いろ／＼なことを語り合つた。歸り際に、丁度坂東から届いた鴨十羽を彼に贈つた。この厚遇の噂はすぐに全市にひろまり、キリシタンたちは皆祝辭をのべにやつて来た。

信長の計畫した祝祭はその三日後、四月一日(天正九年二月二十日)に行はれた。それは部下の諸將を集めてその威容を展覧させる馬揃へであつた。諸將は、部下の衣裳や馬匹の装飾に工夫を凝らし、巨額の金をつかつた。緋の服を着、馬も緋で覆ふとか、五十人の家來に金欄の揃ひの服を着せるとかいふ類である。高山右近でさへも、己れと馬とのために七通りの服装を作つた。祝祭の場所は東の野で、砂を撒いた競技場のまはりに多數の棧敷が造つて

た。忽ちの間に、あれはキリスト教の宣教師の長が信長に贈つたものだといふ評判が場内にひろまつた。こゝには諸國の人が集まつてゐたのであるから、この評判はやがて迅速に日本全國にひろまることになつた。信長の祝祭場は巧まずしてヤソ會の宣傳場に化したのである。

祝祭の後、四月十四日に信長は安土へ歸つたが、ワリニャーニは直ぐその翌日、あとを追つて安土に行つた。ワリニャーニが安土に着いた翌日、信長は城を見せると云つて神父たちを招待した。この城の工事は、神父たちの報告によると、ヨーロッパの最も壯大なものと比することができると云はれてゐる。周囲の石垣の大きくて堅固なこと、内部の宮殿の廣大壯麗なことは、このヨーロッパ人たちにとつても驚くべきものであつた。中でも中央の塔は七層の樓閣で、内外共に驚くべき構造を持つてゐた。木造であるにかゝはず石と石灰で造つたもののやうに見える。信長は見るべき箇所を一一指圖して案内させたが、自身も三度出て来て、ワリニャーニと語つた。ワリニャーニがヨーロッパの最も壯麗な建築に劣らないと云つて讚めると、信長は非常に喜んだ。さうして料理場から既まで見せた。その日は見物だけで、翌日饗應に呼ばれることになつて辭去したが、しかしこの信長の厚遇がすでに城下では評判になつてゐて、城から出て

ある。競技に参加した武士たちは、十三萬と云はれた。諸將はおの／＼揃ひの服の家臣たちをつれて定めぬ位置につく。信長は、多數の良馬を右側に曳かせ、うしろにワリニャーニの贈つた天鷲絨の椅子を四人の武士に擔はせ、その後方に歩兵を隨へて臨場した。

祝祭として行はれるのは、騎馬の武士たちが、或は三人づつ、或は十二人づつ、或は四五百人も一時に、競技しながら、場内の一端から他端へ走るだけのことであつた。しかしその武士たちが多年來近畿地方の戦争の舞臺に立つてゐる役者である、といふことは、市民の關心をそゝらずにはゐなかつた。それらの役者が、今や數寄を凝らした華美な服装と装飾に包まれて、市民に顔見せをするのである。だから内裏・公家衆・高僧たちを初め、觀衆は二十萬に達した。フロイスをはじめ、他の神父たちも、このやうに豪華な光景は曾て見たことがないと云つた。つまりこの祝祭は、京都の平和が回復されて来たといふ歡びを表現するものでもあつたのである。

この祝祭に信長はワリニャーニを招待して、非常によい見物席を與へた。ワリニャーニは迷惑がりながら他の神父たちと共に臨席したのであるが、そこから見てゐると、信長が天鷲絨の椅子を持つて來させたことは非常に目立ち、彼を他の武士たちから區別する目じるしになつ

くる宣教師たちを見るために多數の見物が集まり、その間を通ることが出来ないほどであつた。

前年オルガンチノが建てた安土の宣教師館はワリニャーニをも非常に満足させた。釣合のよい三階建て、信長の特別の許可により城のと同じ瓦で葺いてあつて著しく人目をひく建築であつたが、それが安土の城下に聳えてゐるといふことの大きい意義を、ワリニャーニはすぐに見取つた。オルガンチノはすでにこゝで相當の事をしめてゐたのである。各地から安土に集まつてくる身分の高い武士たちは、この珍らしい建築を見物に來ては説教を聞き、キリスト教に親しむやうになつた。さういふ人の中からも、土地の人の中からも、洗禮を受ける人たちが續出した。もと近江の守護であつた京極高吉夫妻や、信長の金工刀工などもその中にまじつてゐた。信長の子たち、信忠や信孝も、ます／＼宣教師に親しんだ。特に信孝は、週に一二回は宣教師館にやつて來た。ワリニャーニの滞在中は一層熱心で、特にロレンソと非常に親しくした。ワリニャーニに對してはまるで子が父に對するやうに振舞つた。これは日本では珍らしいことであつた。かういふ情勢を見たワリニャーニは、オルガンチノの判斷通り、セミナリヨをこゝに置くのが適當と考へ、宣教師館の最上層に弘派な廣間を造つた。オルガンチノは

すでに二十五六人の少年武士を集め、教育をはじめたのであるから、ワリニャーニはそれに對して、有馬のセミナリヨの場合と同じ注意・規則・時間割などを與へた。日本語の読み書きと共に、ラテン語の読み書きを教へ、ほかにオルガンで歌ふこと、クラボを弾くことなどを仕込むのである。有馬ではすでに、日本の少年がヨーロッパの少年よりも優つてゐることが實證されたが、安土では少年たちが有馬地方よりも洗煉されてゐるので、一層よき成績が期待された。

ワリニャーニはなほ安土に會堂を建築することを計畫し、材料を集めにかゝつた。信長はこの會堂を非常に壯麗宏大なものとすることを希望し、しばしばそのことについてワリニャーニと語り合つた。

五月十四日、聖霊降臨節の日の午後、フロイスは高槻の信者らをつれて高山ダリヨを訪ねるために、越前に向けて出發した。近江から越前の方へかけて宣教師が動いたのは、この時が初めてである。ダリヨは信仰を堅持してゐたし、領主の柴田勝家も非常にフロイスを款待した。勝家は信教の自由を認め、布教は手柄次第であると云つた。ダリヨの熱心と伴つて、この地方にもキリスト教は榮えるかのやうに見えた。

五月廿五日の聖體の祝日には、ワリニャーニは高槻城

選んで安土の祭に招待した。祭のあとでいろいろ勸めて見ると、少年たちはすぐに入學の決心をした。しかし問題は親たちを納得させることであつた。そこでオルガンチノは、問題の解決を右近に託したのである。右近は少年の父親たちを初め臣下一同の集まつてゐる前で、この少年たちの決心を讃め上げ、彼らがセミナリヨの生活を選んだことに對して、毎年米百俵の扶持を與へると宣言した。これでセミナリヨの生徒募集に緒がついたのである。ワリニャーニが來てセミナリヨの規則を定めた頃には、親も子も熱心にセミナリヨへの入學を希望するやうになつてゐた。

高槻で高山右近の款待を受けたワリニャーニは、ついで河内の諸城の信者たちを訪ねた。京都の會堂の新築に際して力をつくしてくれた人々である。岡山の領主結城ジョアン、その伯父ジョルジ彌平治、その下には三千五百の信者があり、宏壯な會堂もある。次には三箇の領主と千五百の信者、こゝにも立派な會堂や宣教師の家がある。次にはシマン池田丹後、前に若江の城にゐたが、今は八尾の城にゐる。シマンの努力で附近の他の城主たちもキリスト教に近づきつゝある。烏帽子形城の領主は既に歸依し、會堂の建築にとりかゝつてゐた。烏帽子形の大身パウロ文太夫は堺の町の數軒の家を神父に寄附して

に行つた。復活祭のとき、十分な準備をなし得なかつたのを遺憾に感じた高山右近が、聖體の祝日の祭儀を是非高槻で營んでほしいと懇請したからである。今度は十分に準備されたので、高槻の町全體が祭のために裝を凝らした。祭儀も行進も復活祭の時よりは遙かに莊嚴に行はれ、祭の後の饗宴も前よりは盛大であつた。それらの經費はすべて右近が負擔したのである。ワリニャーニはこの祭の機會に二千餘の人々に洗禮を授け、また數日かゝつて右近の領内の二十餘ヶ所の會堂を巡視したのであるが、その興へた喜びが右近にとつては十分の報酬であつた。ワリニャーニはこの右近の仕事を賞讃せざるを得なかつた。しかし右近はこの時の經驗によつて高槻の會堂が狭過ぎることを感じた。彼は早速他の武士たちと相談して、廣大な會堂を建築する準備に取りかゝつたのである。

右近はまた、ワリニャーニの新しい方針にも共鳴してゐた。すでに前年末以來、彼はオルガンチノのセミナリヨ開設の努力に協力して來たのであつた。といふのは、日本の身分ある武士たちはその子のセミナリヨへの入學を在來の出家と同視して躊躇してゐたために、先づそれを打破する必要があつたのである。オルガンチノは先づ手初めに高槻城内の少年をひき入れようと思へ、八名をくれたので、ワリニャーニは堺に出て、そこに小會堂を設けた。ついで、市の中央に地所を買ふことが出來たので、この富裕な自由市に立派な會堂と宣教師館を建て、行く／＼はコレジヨをも設立しよう、と彼は考へたのであつた。

ワリニャーニが巡察を終つて安土へ歸つたのは、多分七月の頃であらう。信長はますますワリニャーニに好意を示した。その第一に、ワリニャーニの歸國の際のみやげとして、愛藏の屏風を贈つたことである。それは信長が、「日本の最も著名な畫家」に命じて安土の城と町とを描かせたものであつて、非常に出來が好く、しかも信長が滅多に人に見せないもので、大評判になつてゐた。それを信長はワリニャーニの許に届け、次のやうに云はせた。貴師の歸國に際し何か記念品を差上げたいが、立派なものには皆ヨーロッパから來たものであるから適當な品がない。しかし貴師は安土におけるキリスト教の建築を繪にかゝせたいと思つてゐられるかも知れぬ。それを考へてこの屏風をお届けする。見た上で氣に入れば受納されたく、氣に入らなければ送り返して貰ひたい、と。やがてワリニャーニが、非常に氣に入つた旨を答へさせると、信長は満足して次のやうに云つた。これで神父に對する自分の愛がいかに大きいか解るであらう。あの屏

風は内裏の懇望をさへ断わつたほど大切にしてみたのであるが、それを神父に與へて、自分が神父を尊敬するといふことを日本全國に知らせるのが嬉しいのだ、と。このことは直ぐに全市に傳はり、さらに周圍の諸國に廣まつた。屏風を觀るために宣教師館に集まる人が非常に多く、三七信孝などもその一人であつた。それと共に神父たちに對する尊敬も非常に高まつて行つた。

第二に信長の示した好意は、建築費などで困つた場合には申出るがよい、補助を與へるであらうと傳へさせたことである。ワリニャーニは協議の上、會堂建築の遷延する事情を報告し、漠然と信長の外護を求めるだけに止めて、具體的な補助の要求はしなかつた。

第三の好意は、ワリニャーニに豪華な夜の祭を見せたことである。ワリニャーニが暇乞に行つたときに、信長は、この祝祭を見ることを勧めた。でワリニャーニは止むを得ず祝祭の日まで十日ほど滞在を延ばした。この祭は通例町の住民が各戸で火を焚き、提灯を窓や門に吊すのみであつて、城では何もしなかつたのであるが、この時には信長の命によつて各戸の火や提灯をやめ、城の天守閣にいろ／＼の色の提灯を飾らせた。これは立派な觀物であつた。そのほかに、キリシタンの宣教師館の角から始まつて、山の裾を通り、城にまで續いてゐる街路の

兩側に葦のたいまつを持つた人を整列させ、一時にその多數のたいまつに點火させた。たいまつは盛んに火花を出し、町中が晝のやうに明るくなつた。その火花の散る間を多數の青年武士や兵士たちが走つた。そのあとで信長が宣教師館の門の前を通つたので、ワリニャーニは他の神父たちと共に出迎へた。信長は、祭はどうだつたなどと愉快さうに聲をかけた。この日の祝祭は、どうやら信長がワリニャーニに見せるために行つたらしいのである。

ワリニャーニが堺まで見送るオルガンチノと共に安土を出發したあと、暫く宣教師館を預かつてゐたのはフロイスであつたが、フロイスは古くからの信長の馴染でもあつたので、信長は彼を招いて長い間語り合つた。ロレンソも一緒であつたらしい。やがてオルガンチノが歸つてくると、信長は或る日突然、宣教師館へ遊びに來た。家來たちを下に留めて、たゞ一人宣教師館の最上層に登り、宣教師たちと親しく語りあつた。また少年たちにクラボヤビオラを彈奏させて喜んだ。クラボを彈いた少年は日向から來てゐた伊東祐勝であつた。

かういふ信長の態度が宣教師たちに對する厚意を示してゐたことはいふまでもないが、しかしそれでも宣教師たちは信長がキリシタン教に歸依するであらうとは考へてその彼が、堺から土佐を經由して九州に歸り、大友、有馬、大村など諸大名の使節を伴つて長崎を出發したのは、翌一五八二年の二月二十日であつた。その使節はセ、ミナリヨの果實たる少年たちであつたが、それによつてワリニャーニは、日本人がいかなるものであるかをヨロッパ人に見せようとしたのである。それは同時にヨロッパがいかなるものであるかを日本人が知る緒ともなる筈であつた。

七 大友宗麟の受洗

九州地方ではカブラルが渡來しトルレスが死んで以來の十年間に、大友、有馬、大村の諸領、及び平戸附近諸島、五島天草島などの既開拓地において、着實にキリシタン教の地歩が堅められて行つた。初めの間はさほど目ぼしい現象も起らなかつたが、京都地方で急激な政情の變化があり、やがて信長の勝利とその宣教師庇護の態度とが明かとなつてくるに従ひ、人目を聳たしめるやうな事件が續出するに至つたのである。大友宗麟の受洗と社寺焼き拂ひ、有馬義直の受洗などがその例である。

豊後の教會は大友宗麟の庇護のもとにもう二十何年かの活動を續けて居り、府内の慈善病院などは一つの名物

みなかつた。信長が信仰を求める人でないことは、彼らの眼にも明かだつたのである。それを彼らは信長の「慢心」として云ひ現はしてゐる。がこの時まではまだどの宣教師も信長の傲慢を非難するやうな報告を書いてはゐない。たとひ信長自身の改宗が望み少ないものであつたとしても、その子信忠や信孝は決して望みのないものではなかつた。信忠が、もし姦淫戒をさへ緩めるならばキリシタンになるであらうと云つたことは有名であるが、ワリニャーニの巡察當時には既に岐阜の城下に神父セスペデスと日本人イルマンのパウロとを迎へ、盛んに布教させてゐた。その收穫も決して少なくはなかつた。信孝はまだ領地を與へられて居らず、従つてその領内での布教といふ事はなかつたが、しかし京都や安土で親しくワリニャーニと交はり、ワリニャーニからも非常に愛せられてゐた。「佐久間信盛のほかには、畿内でのこのやうに善い教育を受けた人を見たことがない」とは側にゐたフロイスの言葉である。かういふ信長の子らへの信頼が、信長の傲慢の埋め合はせになつてゐたのかも知れない。とにかくワリニャーニにとつては、日本布教の前途は洋々たるものに見えた。「日本のキリスト教會は、ヤソ會の有する最も善きもの一つである。それはインド全體よりもつと價值がある。」これが彼の考であつた。

となつてゐたが、しかし宗麟は大村純忠のやうに教に入らうとはせず、部下の武士たちも改宗するものは少なかった。府内の教會では武士でキリシタンとなつたものは二十一年間にたゞ一人であつたといはれてゐる。しかるに臼杵の會堂では、青年武士のキリスト教に近づくものが追々に現はれて來た。一五七五年頃には、宗麟の長女とその妹たち、世子とその弟たちなどが頻りに説教を聞き改宗の意志を示すやうになつた。當時土佐から逃げて來てゐた親戚の一條兼定夫妻などもさうであつた。さういふ機運がやがて、大友家の内部に激烈な紛擾を巻き起すに至つたのである。

紛擾のきつかけを作つたのは、一五七五年のクリスマスの前に宗麟の次男親家が洗禮を受け、ドン・セバスタヤンとなつたことである。この十四歳の少年は、次男である故を以て出家させられることになつてゐたが、幼少の頃から父に伴はれて宣教師館に出入してゐた關係もあつて、佛教を嫌ひ、キリシタンとなることを熱望した。宗麟はこの子の意志の動かし難いを見て、遂にカブラルを大村領から呼んで、數人の武士と共に洗禮を受けさせたのである。その三日後にカブラルは、府内でクリスマスを祝ふために出發したが、その時宗麟はセバスタヤンにも同行を命じた。ところで、府内の教會のクリスマス

スに參列したセバスタヤンは、府内の佛教寺院を破壊するといふやうな過激なことをはじめた。それによつて領主の子や多數の武士がキリシタンとなつたことを世間に周知せしめようとしたのである。これは身分あるものにキリシタンの少なかつた府内においては一つの劃期的な出來事であつた。

この後臼杵では青年武士の受洗者が多くなり、修養會などを作つて活潑に動き出した。當時政務を執つてゐた宗麟の長子義統も、それに同情の態度を見せた。この形勢を見て、義統や親家の實母である宗麟夫人は、猛然として反對運動を始めた。娘たちは母の味方に附いた。彼らはあらゆる手段をつくして宗麟や義統にキリシタンを憎ましめようと計つた。生憎新たに改宗した武士のうち殿中で刃傷したり、義統の機嫌を損じたりするものが出て來た。遂に義統は母親の意に従ふやうになつて行つた。家臣は改宗を禁ぜられ、既にキリシタンとなつたものも轉向を要求せられた。それにつれてキリシタン迫害の噂が立つた。カブラルはキリシタンたちと共に會堂にたて籠つて殉教する準備にとりかゝつた。ドン・セバスタヤンは母夫人から義絶を以て脅かされたが、少しも心を動かさず、殉教の覺悟をきめて會堂に入つた。殉教の噂を聞いた府内の信者たちも、殉教者にならうとして急

いでやつて來た。會堂内の感激は非常なものであつた。が結局何事も起らなかつた。カブラルの訴をきいた宗麟は、キリシタンの保護を再確認し、長子義統を宥めて穩便に事を治めたのである。

が宗麟夫人の反對運動は鎮まりはしなかつた。次で起つたのは夫人の實家の嗣子の改宗問題に關してである。夫人の兄弟田原親堅は大友家で第二位或は三位の重臣であつたが、子がないたため京都の公家から親虎を迎へて養子とした。これは非常に才能のある優れた少年で、一五七七年には十六歳であつたが、この年の内に宗麟の娘と結婚する筈になつてゐた。その少年がキリシタンにならうとしたのである。宗麟夫人はそれを聞いて「牝獅子の如く」怒つた。早速親堅を呼んで、その子のキリシタンとなることを決して許してはならない、もしなるやうなら婚約はやめる、また彼に會ふこともやめると云つた。親堅は前にこの少年をつれて會堂を訪れ、カブラルの説教を聞かせたこともある位で、キリスト教嫌ひといふわけでもなかつたが、宗麟夫人に押されて、親虎を監禁した。しかし親虎にとつては領主の娘との結婚も、大身の家督相続も問題でなかつた。廢嫡や離縁は覺悟の上であつた。やむなく親堅は時の力に頼ることとして親虎を豊前の僻地に送りキリシタンとの聯絡を絶つた。しかしそ

れは祕かに届けられたカブラルの激勵の手紙を一層有效ならしめたに過ぎなかつた。數ヶ月後、もう熱は冷めたであらうと親堅が呼び返したとき、親虎が眞先にやつたことは、急いで受洗したいといふ希望をひそかにカブラルに申送つたことであつた。ついで彼は父の取り扱ひの不當な點を領主の前に訴へて領主を驚かせた。遂に親堅は教會に人を派して説諭を依頼するに至つたので、教會の方からは教に背かぬ限り父の命に従へといふ勸告を送つたのであるが、親虎は急に從順になり、周圍の人々が驚くほどであつた。しかしその際に親虎は、父には祕密で、三人の少年武士と共に、カブラルの手から洗禮を受け、ドン・シマンとなつたのである。

その祕密はやがて洩れた。さうしてそれはドン・シマンの希ふところであつた。父は怒つて、追放を以て脅かし、子はそれを甘受する旨を答へた。カブラルは監禁されたドン・シマンの所へひそかに、殉教者サン・セバスタヤン傳の譯書を届けた。宗麟夫人は親堅と計つて、ドン・シマンの側近のものや、共に洗禮を受けた友人たちを迫害し、彼に惨めな氣持を味はせようとした。またいろいろな人に頼んで利害得失を説かせた。しかしドン・シマンは少しも動搖しなかつた。結局この時にもまた親堅は神父カブラルに説諭を乞ふことになつた。しかしカ

ブラルは今度は親堅のあげる理由を悉く反駁し、自分の生命を失ふともドン・シマンに信仰を捨てよと勧め、宗麟夫人の壓迫をますます強く受けてゐる親堅は、遂にカブラルに對して會堂の破壊、宣教師の殺戮を以て威嚇するに至つた。カブラルはひるまなかつた。道理に逆らつて、武力により、會堂の破壊や「二人の憐れなる外國人」の殺戮を欲するならば、われ／＼はこゝに無防備で待つてゐるのであるから、何時でもやられるがよい。それが彼の答であつた。同時に彼はこの事を宗麟に報告せしめた。

その前にカブラルは、迫害に苦しむドン・シマンの懇請によつて、日本人イルマンのジョアンを宗麟の許に派し、親堅の所爲の不當なことを訴へしめた。宗麟はこの事件に關するカブラルの處置を是認し、また信仰の自由の原則を確認したが、しかしこの事件に容喙することは、いま暫く避けると答へた。で今度、親堅の會堂破壊の威嚇について報道を受けても、田原一家の紛擾に對しては依然として容喙を好まず、たゞ「會堂と宣教師とは領主の保護の下にあるのであるから、親堅に一指もふれさせない」とのみ答へた。つまり會堂破壊や宣教師殺戮などは單なる威嚇の言葉に過ぎない旨を示唆したのである。カブラルが威嚇に屈しないのを見た親堅は、その威嚇

をドン・シマンに向けた。彼の父親堅は今明日中に會堂を焼き宣教師を殺すであらう。彼の決意一つでこの災禍を避けることができる。この威嚇は少年には十分に利いた。彼は父の意に従ふことを誓つた。親堅も宗麟夫人も非常に喜んだ。しかしドン・シマンが一切の経過をカブラルに報告すると、カブラルは、神父たちの生命などを顧慮すべきでない、神父はインドからいくらでも来る、キリシタンとしての操守の方が大切であると教へた。そこでドン・シマンは、再び強硬な態度に返り、死すともキリシタンたることを止めないといふ書簡を父にあてて書いた。

この書簡を読んだ父がどういふ態度に出るかまだ解らないうちに、ドン・シマン親虎は宗麟の次男ドン・セバスチヤン親家とひそかに路上で會合した。苦勞で瘦せ衰へた親虎の姿はひどく親家を動かしたので、その同情すべき従兄弟が殺されるか追放されるかの切迫した身の上について援助を求めたとき、親家は、もしキリシタンたるが故に追放されるならば、自分はどこまでも一緒に行動し、とはつきり答へたのであつた。

子親虎の再びもとへ返つた告白を受取つた父親堅は、その威嚇の言葉を、實行に移さざるを得ない羽目に陥つた。その日のうちに親堅が多數の兵士を派遣したといふ

噂が傳はつた。後にフロイスが親家から聞いた所によると、親堅は實際に神父殺害のために武士二人、日本人イルマンのジョアンを殺すために十二三人、その他の人々を殺し會堂を焼くために多數の兵士を派遣したのである。しかし血なまぐさい事件は起らなかつたのである。といふのは、噂が傳はると共に、城内のキリシタン武士たちは皆殉教の情熱に燃えながら會堂に集まつて來た。カブラルは武器を持たない宣教師だけを會堂に残してくれと頼んだのであるが、武士たちは聞かなかつた。却つて神父たちに隠して多數の銃・槍・弓矢などを會堂に運び込んだ。かうして殉教の情熱が高まつて行くと共に、その武士たちの母親とか夫人とか侍女とかが皆動き出した。平生は手輕に外出の出來ないやうな身分の高い婦人たちがさへも、夜中會堂へ押しかけて來た。かうなるともう簡単に會堂の焼討などは出來なかつたのである。

そこで宗麟夫人や親堅の側と、會堂の側とが對峙して睨み合つた。その状態は二十日以上も續いた。そのうち最も危険の多かつたのは二晝夜ほどであつたが、その最初の夜、宗麟はカブラルに次のやうに申入れて來た。今度の騒ぎはすべて宗麟夫人の起したものだといはれてゐる。自分は當然離婚すべきだと思ふが、そのために起る國內の不安を思ふと中々實行は出來ない。ついては、カ

ブラルの旅行の豫定を少しく繰り上げ、ジョアンと共に肥前の方へ出發せられるわけには行かないか。さうすれば事件は無事に納まるであらう。會堂の保護は自分が受け合ふ、といふのであつた。その同じ夜に宗麟夫人もまたカブラルに使者を送り、悪人ジョアンの策動を非難して、もし神父が態度を改めないならば、會堂破壊、キリシタン殺戮を實行するであらう、と威嚇をくり返して來た。これによつて見ると、宗麟夫人はあくまでも強硬であり、宗麟は幾分の譲歩を希望してゐたのである。カブラルは夫人の申出は單純に拒絶したが、宗麟の申出に對しては自己の立場を詳細に説明した覺書を送つた。かうして對峙の形勢は一層緊張したのであつた。

がキリシタン武士の殉教の情熱は、會堂を容易に攻撃すべからざるものにしたと共に、宗麟夫人の側に有力な口實を與へることになつた。それは、キリシタン武士たちの所行が一向一揆に類似するといふのである。宗麟夫人にとつては、おのれの次男親家がキリシタンとして會堂側についてゐることが、口惜しくて堪らなかつた。だから親家と親虎とがこの宗教一揆の領袖であると主張することさへ辭せなかつた。丁度信長が石山本願寺の反抗に手を焼いてゐた頃のことであるから、これは一國の政治にとつてまことに「重大な問題」に相違なかつた。

フロイスが、キリシタン武士たちはカブラルの意志に反して會堂に集まり、またカブラルに隠して武器を持ち込んだ、と特筆してゐるのにも見ても、この非難がいかにも有効であつたかが解るであらう。

領主の宗麟も世子の義統も、宗麟夫人側の主張を無視することは出来なかつた。で義統はカブラルに對して、
 (一) ドン・シマン親虎は保護するが、(二) キリシタン等が領主に對する義務を捨てても團結しようとしてゐるといふのは眞實であるか、と質問を發した。カブラルは(一)の點を感謝し、(二)の點は虚傳であると答へた。さうして領主への義務に背けば完全なキリシタンではないといふことを詳しく説明した。それによつてキリシタン武士の團結が一向一揆と同じ種類のものでないと立證せられたとき、妥協の緒もついたらしい。カブラルの出發の豫定日が来る前に、宗麟は事件の解決を知らせて來た。親虎はキリシタンのまゝで父と和解し、依然として嗣子の地位を保つ。しかし父の感情を刺戟しないやうに、當分はあまり教會へは行かないことにする。キリシタンたちも喜びをあらはに表に現はすやうな態度は取らないでほしい、といふのであつた。親堅の感情を傷けないやうにいろ／＼と配慮したのである。

この最初の解決は、一五七七年の六月の初めであつた

は、次男ドン・セバスタヤン親家の夫人の母で、これまでに宗麟夫人に仕へてゐた女を、妻として迎へ入れた。宗麟夫人は興奮して自殺を計つたが、それは未遂にをはつた。

新夫人を迎へた宗麟は、この夫人をキリシタンにしたいから、日本人イルマンのジョアンを説教に寄越して貰ひたい、とカブラルの許に云つて來た。これはカブラルにとつても不意打ちであつたが、しかし彼は領主が説教を聞き始めるかも知れないことを直覺した。これまであれほど熱心に宣教師を庇護し、またあれほど熱心にヨロップのことを知らうとしてゐた宗麟も、説教だけは決して聞かうとはしなかつたのであるが、この時突然調子が變つて來たのである。

ジョアンは十八年前博多で殉教した山口人アンドレーの子で、元琵琶法師のロレンソと並び稱せられてゐる優れた説教師であつた。九州の諸大名に對するカブラルの影響の背後には、このジョアンの活躍があると云つてよい。彼を招いた宗麟は、新夫人たちに説教を聞かせるだけでなく、自らもその席に出て熱心にキリスト教の教義を聞き始めたのである。それは毎夜續いた。説教のあとでは夜遅くまでジョアンと語り合つた。かうして彼のキリスト教に對する興味はだん／＼高まつて行つたのであ

が、その一週間ほど前、五月二十五日の夜、宗麟夫人は猛烈な發作を起した。五六人でも押へ切れなかつたといふのであるから、多分癪の差し込みであらう。丁度その頃に宗麟が一應夫人を押へつけ得たのであらうと考へられる。

事件はこれで解決したやうに見えたが、しかし宗麟夫人はその怒りを鎮めたわけではなかつた。秋の頃には、殉教騒ぎの反動として、却つて夫人側の勢力の方が強まつたやうに見える。田原親堅は、ドン・シマン親虎が頑強に轉向を拒んだために、遂にこれを追ひ出してしまつた。親虎は府内の宣教師館に入つた。そこで親堅は夏前の騒ぎの時と同じやうに教會攻撃を始めた。キリシタンの宣教師たちは、日本で相當數の信者を作れば、インドから艦隊を呼んでこの國を占領するであらう。これがその主要な主張であつた。この聲に押されて信仰を捨てる武士が出て來た。會堂にくる武士の數も減つた。

かうして宗麟夫人がその勢を盛り返して來たときに、宗麟は遂に夫人を離別するといふ最後の手段を取つた。それは一五七七年の秋の末であつたと思はれるが、そのために彼は臼杵の城外に新居を建て、隱居して國政を義統に譲る、といふやうな準備工作をやつてゐる。新居へ

る。
 一通り教義の説教が終つたときに、宗麟は、その邸において新夫人と親家夫人とに洗禮を授けることをカブラルに請うた。カブラルはこの機會を捉へて宗麟に一夫一婦の婚姻を誓はせ、新夫人にはジュリア、娘にはキンタといふ洗禮名を與へた。これは元の宗麟夫人にとつては堪へ難い侮辱であつた。彼女の宣教師に對する憎悪は無限となり、毒殺・放火なども辭せない劍幕を示したといはれる。

その後ジョアンは日曜日毎に宗麟の邸へ行つて説教を續けた。それは五六ヶ月にも及んだ。その間に宗麟の改宗の準備が出来たのである。これまでの宗麟は、一方に宣教師を庇護しながらも、信仰のことに關しては禪宗の徒であつた。京都の大徳寺の大檀那であり、臼杵にも大きい禪寺を建てて大徳寺の怡雲を招いたのみならず、自らも坐禪に努めてゐた。その宗麟がすっかり禪宗を離れてキリスト教の信仰に近づいて來たのである。

さういふ情勢が宗麟の周圍で動き始めた後、一五七八年の一月に、日向の伊東義祐が島津義久の侵入を受け、孫たちをつれて豊後へ逃げて來た。義祐は宗麟の妹婿であつたが、嗣子義益はその方の出ではなく、自ら宗麟の姪を娶つてゐた。従つて嫡孫たちは宗麟の姪の子であつ

た。その一人が、後に安土のセミナリヨにゐた祐勝（義勝）である。宗麟の妹の方から出た孫は、後にローマに行つたマンシヨ祐益である。大友義統は日向を回復するために六萬の兵を率ゐて四月頃出征した。さうして比較的容易に島津の兵を追い拂ふことが出来た。

この新しい形勢を見て宗麟は、一つの思ひ切つた計畫を立てた。それは、この新領土にポルトガルの法律や制度を模した新しい都市をつくり、住民を悉くキリシタンにして、征服者被征服者の區別なく、すべての人が兄弟の如く愛し合ふやうにしよう、といふことである。因襲の妨げの少ない新しい土地でならそれが出来る、と彼は考へたのであつた。で彼は新夫人と共に日向に移り、この新しい經營によつて、豊後の當主義統の後顧の憂を除くつもりであつた。その實行に着手するのは三、四ヶ月先の豫定であつたが、しかしこの新しい都市の建設のためには宣教師の協力がなくてはならないのであるから、豫めカブラルに交渉してその同意を得た。城より先に會堂を建て、ヤソ會士十人乃至十二人を扶持する。彼自身の洗禮もこの新しい町で受ける、といふのであつた。それは一五七八年の六七月頃のことである。

しかし宗麟は、ラテン語の祈禱や信仰箇條を熱心に暗誦したり、日曜日毎にジョアンの説教を聞いたたりして

諸國でも、かなり人々を驚かせた。宗麟ほど學問あり、禪宗にも通じた人が、キリシタンになる筈はない、といふ人もあり、またあれほどの人がキリシタンになる所を見ると、キリスト教はよいものであらう、といふ人もあつた。

日向への出發の時の近づいた九月二十一日に、宗麟の希望によつて、府内のイルマンたちも参加して莊嚴ミサが行はれた。その數日後に夫人ジュリアや嫁のキンタも宗麟に伴はれて會堂に來た。さうして、いよ／＼十月四日、サン・フランシスコの祭日に、宗麟は、相當な艦隊を率ゐて、船で日向の延岡附近の土持領に向けて出發した。白緞子に赤い十字架をつけ金繡で飾つた旗を初め、多數の十字架の軍旗がその船に翻つてゐた。夫人ジュリア、神父カブラル、イルマンのジョアン及びルイス・ダ・ルメイダ、前年來府内の宣教師館に預かつてゐたドン・シマン親虎などが隨行した。これは宗麟の最も得意の時であつたかも知れぬ。

宗麟がこのやうにキリスト教に入つて行くのを側で見てゐた嗣子義統も、それに應じて宣教師たちに親しみを見せた。その態度は彼自身もまた彼らの仲間の一人でもあるかのやうであつた。丁度信長の佛教彈壓が世間の

るうちに、洗禮を新都市の建設まで待つのはよくないと感じ始めた。丁度七月下旬にはカブラルが長崎の方へ行くことになつてゐたので、その旅行を一ヶ月ほどで切上げ、歸つて來て洗禮を授けてくれるやうにと頼んだ。洗禮名も、シャビエルを記念してフランシスコとしてほしいと言つた。さういふ風にだん／＼信仰の熱が高まつて行つたのである。

カブラルが旅行に出たあとへ、フロイスが府内から留守番にやつて來た。翌日宗麟は宣教師館を訪ねて二時間ほどフロイスと語り合つた。フロイスも宗麟を訪ねていろいろ話の間に巧みに機會を捉へ、宗麟の受洗の希望が、神の恩寵によつて起つたものであることを説き聞かせた。これは宗麟の心に沁みたと見え、十六歳で初めてポルトガル人を見、二十二歳でシャビエルに接して以來の、永い年月の間の心の經歷を、ふり返つて見る氣持にならせた。その述懐を聞いたのは日本人イルマンのダミヤンであつた。がさういふ氣持の中でも、宗麟は頻りにローマ教會の制度のことをフロイスに質問してゐるのである。

カブラルが一ヶ月で旅行から歸つてくると、宗麟は待ち兼ねたやうに催促して洗禮を受けた。一五七八年八月二十八日であつた。この洗禮は豊後の國內でも、近隣の

耳目を聳動してゐた頃のことであるから、この若い領主も信長を模倣して、社寺の所領を沒收し家臣に與へるといふことをやり始めた。實母の元宗麟夫人の抗議に對しては全然耳を借さず、むしろ彼女の神佛崇敬を彈壓するやうな態度に出た。宗麟受洗の前後にはこの態度はますます顯著になり、孟蘭盆會の禁止、八幡宮祭禮の無視などを敢行するに至つたのである。

宗麟受洗後間もなく、九月の初めに、義統は深夜イルマンのジョアンを呼んで、密室で夫人と共に説教を聞き始めた。やがてフロイスもこの説教に加はり、ヨーロッパの宗教界や俗界のこと、シャビエルの生涯のことなどを、夜明頃まで話した。後にはカブラルもそれに加はつた。また母夫人に知られることなく夫人に會堂を見せるために、城の裏から小舟に乗つて眞夜中に會堂を訪れたこともある。かうして宗麟の日向行の直前には、夫人と共にキリシタンとなる決心をして、カブラルに次のことの指圖を仰いだ。即ち、本年實行したやうに、少しづつ社寺を破壊して徐々に國內の有力者たちに偶像崇拜の無益なことを悟らせる、といふ方法がよいか。或は有力者たちの背反を恐れず一舉に異教の撲滅を敢行すべきであるか。もし後者がよいならば國を失ふ危険を冒してもその道を選ぶであらう、といふのであつた。カブラルはそ

れに答へて漸進的な道をすゝめ、準備を整へば翌年の初めには彼も洗禮を受け得るであらうと云つた。

カブラルが宗麟に従つて日向へ行つた後には、義統はフロイスを度々招いていろ／＼なことを相談した。中でも夫人に洗禮を授けて貰ひたいことを熱心に希望した。夫人自身も直接フロイスに頼んだ。しかしフロイスは、信仰がまだ十分でないを見て、中々承知しなかつた。結局義統はフロイスの勧めに従つて城内に小さい禮拜堂を建て、その落成の時に夫人が洗禮を受けるといふことになつた。

當時の義統の陣營は、臼杵の西南の野津の町にあつたが、そこでも急激にキリシタンが出来始めた。野津の領主レアンとその妻のマリアは、このとき日本人イルマンの説教を聞いて改宗した人たちであるが、日本で最もよいキリシタンとなつた。その一族郎黨二百人も、共に改宗した。

日向では宗麟が會堂や宣教師館の建築を始めさせた。建築場には假會堂が出来てゐたが、そこへ宗麟は、十一月の朝寒の中を、毎日遠くからやつて来た。日向にキリスト教を植ゑつけその香りがローマにまで達するといふこと、この新しい國をキリシタンやポルトガル人の法律によつて治めるといふこと、それが彼には今にも出来さ

りに思へてゐた。

それにひきかへて臼杵では、精悍な元宗麟夫人がまた勢力をもり返して来た。彼女は義統夫人の母親を抱き込み、若い夫人の改宗を極力妨げようとした。義統は夫人の動搖を防ぐため、フロイスに頼んでその洗禮を急ぐこととし、十一月二十五日にいよ／＼式をあげることにきめたが、二人の母親たちは、自殺を以て若い夫人を威嚇し、彼女を途方に暮れさせた。義統が歸つて来て母親と喧嘩して見たが、肝腎の夫人の決心がつかず、フロイスは洗禮を中止せざるを得なかつた。

その五日の後、十一月三十日(天文六年十一月十二日)大友の軍は島津の軍に大敗したのである。それは總指揮官田原親堅の油断と無識によつたものと云はれてゐる。この敗戦は收拾の拙さによつて全軍の潰走となり、大友の勢威は忽ちにして地に墮ちた。

宗麟も義統もこの敗北によつて信仰を失ひはしなかつた。しかし一ヶ月の後に田原親堅が臼杵に現はれたときには、その姉の元宗麟夫人や戦死者の遺族たちが擧つてキリスト教を呪ふ聲をあげた。それに次いでこれまで大友氏の押へてゐた筑前、筑後、豊前、肥後などの諸領主が、大友氏に叛いた。叛かないものも義統に對してキリスト教庇護の態度を捨てよと要求した。この大勢に對し

て若い領主義統は遂に抵抗することが出来なくなつた。彼は漸次宣教師に對して冷淡となり、神佛に宣誓して異教徒としての態度を明かにした。キリスト教への反感は潮の如く高まつた。カブラルはまた死の覺悟を固め、或る夜の如きは宣教師館の一同を勵まして死を迎へる準備をしたほどであつた。さういふ切迫した苦難は數日間であつたが、しかしこの後會堂では、二ヶ月半の間、晝夜祈禱を絶たなかつたといはれる。

宣教師に對する直接の危害は遂に加へられなかつた。領主義統は異教に屈伏しはしたが、しかし宣教師たちを迫害しようとしたのではない。領主の父宗麟は信仰を堅持して力の限り迫害を抑へた。もし宣教師を害しようとするのなら、先づ余を殺せと彼は重臣たちに云ひ送つた。その重臣たちは田原親堅の指導の下に宣教師追放を決議しようとしてゐたのである。この決議を成立せしめなかつたのは、田原親堅を敵視してゐる田原親宏であつた。彼は曾てその領地の大部分を取り上げられ、それが今親堅の領地となつてゐるのである。彼は親堅が敗戦の責を宣教師に轉嫁しようとするのに反對し、宣教師を庇つて親堅を責めた。この有力な反對が宣教師追放の議を覆へしたのであつた。これは一五七九年一月末、日本の正月の少し前のことであつた。

かうして宣教師追放の危機は過ぎたが、しかし直ぐ續いて内亂の危険が迫つた。右の田原親宏は、突如臼杵を去つておのれの領地に歸り、現在親堅の所領となつてゐる彼の舊領地の返還を要求したのである。世間では親宏叛起の噂が専らであつた。また實際、その要求が容れられなければ彼は叛起したのであらう。當時の形勢では、臼杵も府内も彼を防ぐだけの力を持たなかつた。兩市は掠奪され、焼かれるであらう。キリスト教排撃でなくとも結果は同じである。兩市の市民は避難の準備を始めた。キリシタンたちも騒ぎ立つた。宗麟は、自分が國を治め始めて以來の未曾有の難境であると云つた。元宗麟夫人の周圍のものは、義統が出陣したあと直ちに兵士を以て會堂を襲撃しようなどと語り合つた。宗麟は會堂に入つて防ぐであらうから、彼をも片付けよう、といふのであつた。カブラルはまた死の覺悟をきめて、會堂で祈禱を續けた。

がこの緊張は、領主が親宏の要求を容れることで解決した。宗麟は親宏に叛意なきことを認めて、當主義統にその指圖をしたのである。それは、二月一日のことであつた。ところでこの解決は、教會にとつて豫想外の好い結果をもたらした。ドン・シマンの問題以來、教會迫害の中心勢力であつた田原親堅は、その領地の大部分を失

ひ、それと共にその名聲をも失つたのである。人々は日向敗戦の責を彼に歸した。彼は臼杵を去つて、貧弱となつた領地に引き籠つた。その後、親宏に苦しめられた彼は、宗麟とジュリア夫人の許に曾てのキリシタン迫害を詫びて來た。このやうな親堅の失脚につれて元の宗麟夫人もまたその収入や勢力を失つた。

かうして教會は落ちついた。義統もまた異教徒としてのキリスト教外護の態度を回復した。しかし容易に回復の出來なかつたのは、筑肥地方に對する大友氏の勢力であつた。

その夏、巡察使ワリニャーニが、日本に着いたのである。彼が口の津で催した宣教師會議には、カブラル以下イルマンたちも豊後から出かけて行つた。宗麟は彼らに護衛をつけたが、しかしそれでも交通は可能になつてゐたのである。

義統はワリニャーニに書簡を送り、心中は従前と變らないが、政治的必要上それを隠してゐるのだ、と辯明した。ワリニャーニがカブラルと共に豊後に來なかつたのは、豊後の政情の不安のためであらう。やがてこの年の秋には田原親宏の叛起の形勢がだん／＼熟して來た。領主の押へがもう利かなくなつてゐたのである。親宏は十

二月の初めに急死したが、後嗣親貫は直ちに府内進撃の態勢を示した。田北紹鐵がひそかにそれに應じてゐた。

この時宗麟と義統とは、少數の兵を率ゐて府内にあつたが、形勢は非常に非であつた。もし親貫の艦隊が暴風に妨げられず、豫定通り行動することが出來たならば、府内は簡単に攻略せられたであらう。重臣たちで親貫に對して戦はうとするものは少なかつた。さすがの宗麟もこの時には國の滅亡を覺悟し、宣教師たちに國外へ避難することを勧めたほどであつた。彼はこの時の心情をワリニャーニやカブラルに書き送り、自分たち父子が命を失ふことよりも、豊後のキリスト教會の破滅の方がつらいと云つた。それほどであるから、教會の人たちも今度よりも駄目だと思つてゐた。しかしワリニャーニもカブラルも、豊後から動いてはならないといふ考であつた。どこへ行つたとて危険はある。神の攝理に一切を委せるほかはない、といふのである。

この時重臣たちの間に團結を取り戻したのは宗麟の力であつた。彼らはこの隠居が再び出馬して政權を執ることを希望するやうになつた。當主の義統もこの必要を認め、自ら父を訪ねてこのことを懇請した。しかし宗麟はおのれの子の面目を傷けることを欲しなかつた。義統はあくまでも領主として留めるが、實質上すべてのことを

宗麟の意志によつて決定する、これが宗麟の解決策であつた。それでも彼の智慧と權威とは再び有効に働き出したのである。重臣たちは結束して親貫を打倒することになつた。それは一五七九年の十二月であつた。

それでもこの内亂の鎮壓は急には運ばなかつた。一五八〇年の復活祭の頃には、宗麟自身はもうワリニャーニを迎へてよいと考へたのであつたが、その時にさへも田北紹鐵は、途中で巡察使一行を誅殺しようとして計畫してゐたのである。幸にしてワリニャーニは出發せず、この危険を免れたが、その機會に紹鐵の叛逆が曝露し、間もなく討伐せられた。それによつて親貫の勢力は著しく弱がれ、宗麟の信用と權威とは著しく回復した。

一五八〇年の秋には、親貫はその居城に追ひつめられた。宗麟は筑後の國境へ出て肥前の龍造寺と勝負を決しようとして考へるまで勢力を回復した。丁度その頃、九月中旬に彼は巡察使ワリニャーニを豊後へ迎へ入れたのである。ワリニャーニは府内に數日留まつた後、親貫の城を攻圍中の義統を訪ね、次で臼杵に來て宗麟に會つた。二年前の十月四日、サン・フランシスコの祭日に、宗麟はカブラルたちをつれて日向に出發したのであつたが、今戦争遂行の協議のために義統のもとへ行かうとしてゐた彼は、その出發前、同じ祭日に、祝祭を行ふ計畫を立て

てゐた。でワリニャーニは、オルガンの伴奏の下に莊嚴ミサを行つて宗麟を喜ばせた。宗麟は神父たち一同をその邸に呼んで大に饗應した。

ワリニャーニは府内と臼杵の宣教師たちを集めて協議會を開いた。カブラルの反對にもかかわらず彼はあくまでも日本人の教育に重點を置かうとした。臼杵には、ヤソ會への入會希望者のための練習所ノビシヤドを設立する。府内の宣教師館はイルマンたちが學問を繼續し得るやうな専門の學林コレジヨにする。練習所の卒業生は、年齢と時間の許すかぎり、コレジヨに在學させるのである。外來の宣教師たちはこゝで日本語を學ぶ。文法書も出來、二年かゝれば日本語は間に合ふやうになる。なほ右のほかに、野津と由布とに宣教師館を設けなくてはならぬ。

この計畫は早速實行に移され、臼杵のノビシヤドはクリスマスの前日に開かれた。最初ワリニャーニが入學を許したのは日本人六人ポルトガル人六人であつた。教師は前にローマで新入會員を教へてゐた神父ペロ・ロマンである。新しい建築にも取りかかり、翌年出來上つた。學生も日本人をさらに四人入れた。日本人學生の成績は豫期したよりも遙かに好かつた。その中には七十四歳の

老人と、四十歳になるその子なども混つてゐた。

府内のコレジョにはヤソ會士が十三人ゐた。内三人は神父で、その中の一人がラテン語を教へる。日本語の教師はイルマンのパウロで、もう七十歳を越えた徳の高い人であつた。このパウロなどの盡力で文法書のほかに辭典や翻譯書が出来た。カテキスマ（聖教要理）の譯が出来たのもこの時である。

ワリニャーニは一五八一年の三月初めに豊後を出發して京畿地方に行き、歸りは土佐薩摩經由で秋になつて豊後へ歸つて来た。この間に宗麟は著しくその威望を回復してゐた。國內の謀叛人田原親貫は、徹底的に片づけられ、龍造寺や秋月との戦争は有利に進展した。その際に有名な彦山靈山寺の焼討をやつたのである。これは信長の叡山焼討と同じやうな意味のものであるが、恐らく信長の影響でもあつたであらう。それに伴つて國內では身分ある武士たちの改宗が頻りに行はれた。一五八一年だけで五千人を超えたといはれる。中でも、宗麟が力を入れ世間をも驚かせたのは、元宗麟夫人たちの師として聲望の高かつた高僧フインの改宗であつた。宗麟はこの人物を見込み、「領内の半分が歸依するより以上に大切なこと」として、その改宗に骨折つたのである。これにはさすがの元宗麟夫人も卵をぬいたといはれてゐる。

としてゐたのである。それは、一五八二年の二月であつた。

八 ローマへの少年使節

ワリニャーニがローマへ連れて行かうとしたのは、宗麟の姪の子であるドン・マンシヨ伊東祐益、大村純忠の甥で同時に有馬晴信のいとこに當るドン・ミカエル千々石清左衛門、この二人の親戚に當るドン・ジュリアン中浦、ドン・マルチノ原、及びこれらの少年の家庭教師の格で日本人イルマンのジョルジ・ロヨラ、の五人であつた。これらは皆有馬のセミナリヨの果實なのである。

有馬のセミナリヨはワリニャーニが日本に来て先づ手をつけた仕事であつた。何故に有馬が先づ彼によつて取り上げられたかといふと、彼は渡來早々有馬晴信の改宗に關與したからである。

大村純忠がキリシタンとなり、その領内の長崎がポルトガル船の寄港地として榮え始めた後にも、兄の有馬義貞は中々改宗しなかつたが、しかしキリシタン大名としての純忠の不思議な強さを知るに従ひ、追々と氣持が動いて行つた。さうして遂に一五七六年四月、その家族と共に洗禮を受けた。京都で新會堂の建築が行はれ、豊後

一五八一年の九月には、宗麟は白杵に大きい會堂の建築をはじめた。丁度その頃にワリニャーニが京都の方から歸つて来たのである。そこでワリニャーニは會堂のために莊嚴な定礎式をあげた。豊後にゐる宣教師たちが皆集まつて来た。その數は四十人に達した。數年前には僅かに一二人に過ぎなかつたのである。そこで人々は改めて日向敗戦以來の艱難な年月を回顧した。宗麟はあの敗戦によつて數多くのキリスト教排斥派が戦死したことを感謝しさへした。實際この二年間に宗麟の努力によつて得た教會の收穫は、その前の三十年間の收穫よりも多かつた。三十年間に出来た信者の數は僅かに二千で、しかも身分の低いものが多かつたが、今は、信者數一萬を超え、その中に身分の高い武士が多く含まれてゐる。宗麟改宗後にもしあの蹉跌がなかつたならば、豊後全國はすでにキリスト教化してゐたであらう、と人々は感じた。日向へ進出したときの宗麟の空想は、必ずしも根のないものではなかつたのである。

白杵の會堂は、日本にある會堂のなかで最も金のかゝつた立派なものであつた。宗麟はそのために工人を京都から招いた。四ヶ月かゝつて大體の建築が出来、屋根も葺き終り、内部の工事にかゝつた。その頃にワリニャーニは、ローマへの日本の使節をつれて長崎を出帆しよう

で宗麟の次男が洗禮を受けて問題をひき起してゐた頃である。有馬領内のキリスト教は領主の改宗によつて活氣を呈して来た。領主はその權力を以て佛寺をキリスト教の會堂に改造する。人々はそれに追隨し、半年の間に信者數二萬に達した。全領キリシタンの理想もやがて實現されるかに見えた。

しかるにこの形勢はこの年の末に突然逆轉した。義貞は腫物で急死し、反動派は後嗣晴信を擁してキリスト教排斥を始めたのである。葬儀は佛式で営まれた。宣教師は皆口の津に引き上げざるを得なかつた。會堂は再び佛寺となり、異教に逆轉する信者も相當にあつた。有馬晴信の治世は、このやうな反動彈壓を以て始まつたのである。

しかし新興の龍造寺の壓迫は、晴信のこの反動的な態度を持続せしめなかつた。彼はキリシタン大名たる叔父純忠の援助を受けなくてはならなかつたし、またポルトガル船の火藥の供給をも必要としたのである。さういふ政治的理由が彼の態度を緩和させた。一五七九年七月、ワリニャーニが渡來した頃には、晴信はもうかなり動きかけてゐた。

口の津會議で日本のいろ／＼な情勢を聞いたワリニャーニは、先づ豊後を訪れようとしてゐた初めの豫定を變

更して、この手近かな有馬に着目した。彼が有馬に晴信を訪ねて行くと、晴信は非常に彼を款待してキリシタンとなる意志を示した。そこで問題は、出来るだけ國內の紛争を避けつゝこの領主を受洗せしめることであつた。その内龍造寺の壓迫がひどく加はり、領内の諸城が攻略された。この形勢を見て佛僧さへもキリスト教との提携を説くほどになつた。しかし他方にはキリスト教にかこつけて背反を計るものさへあつた。ワリニャーニは洗禮を躊躇したが、しかし窮境に立つた晴信は遂に心からキリスト教の神に縋る氣持になつた。かうして一五八〇年の復活祭の頃に、晴信はワリニャーニから洗禮を受け、プロタシヨとなつた。親類や家臣大勢が一緒であつた。ワリニャーニは、既に危殆に瀕してゐた有馬の城に入り、糧食彈藥等を供給して晴信の難を救つた。これにはポルトガル船の協力を得たのである。この効果は靦面であつた。何人ももう反キリスト教的態度を執り得なかつた。晴信は領民にキリシタンとなることを勧め、領内の佛寺、全部で四十餘を悉く毀つて、キリスト教會堂建築の材料に當てた。かうしてこの後數年の間に全領キリシタンといふことが實現されて行くのである。

かういふ背景のもとにワリニャーニは有馬のセミナリ

たちは自分たちの工夫で色紙を色々に切抜いてセミナリヨの廣間を飾り、禮拜所や祭壇にも木彫の像を飾付けて盛大な歓迎會を開いたのであるが、何よりも彼を喜ばせたのは、この少年たちの著しい進歩であつた。彼らほとともと行儀がよく、入學してからの二年近い間、曾て不行迹を示したことがない。極めて仲がよく、謙遜で信心深いことは練習生以上である。だから進歩は主として知力の上に見られた。これらの少年らが學問に熱心なことは全く期待以上で、ヨーロッパの少年よりも才智と記憶力とにおいて勝つてゐる。といふのは、これまで見たことでもない文字を、僅か數ヶ月で讀み書きし得るやうになるからである。ラテン語を覺える速力で比較すると、ヨーロッパの少年と同程度、或は一層早い。

この優秀な成績を見てワリニャーニの心は躍つた。ヨーロッパ人にこのセミナリヨの成果を見せたい。さうして日本の救濟をなし得るものは實にこのセミナリヨであるといふことを納得させたい。日本ではかういふ少年がこの一二年の間にすでに五十人養成されてゐる。セミナリヨの定員をさらに百人づつに殖して教育して行けば、短期間に大した効果が上るであらう。かう考へて彼はセミナリヨの少年を何人かヨーロッパへ連れて行く計畫を立てた。それを彼はキリシタン大名のローマ教皇及びポ

ヨを建設したのである。

もつとも、一五八〇年以來ワリニャーニが着手したのはセミナリヨばかりではない。有馬と有馬には、西北九州地方で最良のものといはれる大きい會堂が建てられた。いづれも非常に大きな工事で、佛寺の木材を潤澤に使ひ、信者にも異教徒にも強い印象を與へるやうな立派なものであつた。有馬のセミナリヨも會堂と共に建築し始め、翌年大廣間が竣工したといはれてゐる。がセミナリヨは、その建物が出来る前に、多分晴信の改宗後間もなく、開設されたのである。身分の高い少年で才能の優れたもの二十六人を、有馬の地に集め、それを教育するために神父二人、イルマン四人をつける。それをワリニャーニは何よりも先にやつた。だから彼が日本を去らうとするまでの二年、足らずの間に、見事な果實がみのつたのである。

ワリニャーニがセミナリヨに定めた學課課程は、のちに安土のセミナリヨに與へたと同じく、日本語の讀み書き、ラテン語の讀み書き及び音楽であつた。彼はこの教育が始まつてから間もなく豊後に移り、次で京畿地方を巡察したのであるが、一五八一年の秋の末に有馬に歸つて、ほゞ一年半の教育を受けた少年たちを見たとき、これで巡歴の間の辛苦は十分に報いられたと云つた。少年

ルトガル王に對する使節といふことに結びつけたのである。そこで彼は大友、大村、有馬の三領主に説いて、彼らの使節たり得べきものをセミナリヨの少年のなかから選み出した。大友宗麟の使節は初め宗麟の姪の子伊東祐勝とする筈であつたが、祐勝は安土のセミナリヨにあつて間に合はないために、そのいとこの伊東祐益を以て代へたといはれてゐる。して見るとこの選擇はかなり押し迫つてから行はれたと見なくてはならぬ。が、もと／＼「使節」といふことよりも「セミナリヨの少年」といふことの方が根本なのであるから、その選擇の範圍はきまつてゐたのである。ワリニャーニたちが主として心配したのは、十四歳をまだ越えてゐないやうな少年たちを親たちが手離すかどうか、或は少年たちの方で母親の手許を離れ得るかどうか、といふことであつた。しかるにそれは案外容易に運んだ。それだけにワリニャーニも少年たちに對して親のやうに心を配つてゐる。日本人イルマンのジョルジ・ロヨラを同行させたのは、この若い日本人が特別に成績がよく、セミナリヨに數ヶ月ゐただけでヤソ會に入會を許され、その後一年の練習を経て來たといふ優秀な人であつて、「日本人イルマン」の標本として適當であつたためでもあるが、同時に少年たちが永い外國旅行の間に日本語を忘れてはならないといふ配慮か

らも来てゐたのである。

このワリニャーニの計畫は、やがて數年後に、彼の考へた以上の成功を収めた。少年たちはヨーロッパで異常な歓迎を受け、ヤソ會は日本布教の獨占權と多額の補助金を獲得した。日本人がヨーロッパの文化に直接に觸れる道も開かれたかの如くに見えた。が、往路にゴアで病死したジョルジ・ロヨラを除き、四人の少年が皆無事で八年の世界旅行を終へて日本に歸つて來たときには、事情はすっかり變つてゐた。彼らのあとに茫然として續くべきであつた流れは、もはや涸れてゐたのである。

が一五八二年の二月に彼らがこの世界旅行に出で立ちうとしてゐたときには、彼らは新しい潮流の尖端に立つてゐた。彼らはたゞに大友、大村、有馬などのキリシタン大名を代表してゐたばかりではない。これらの諸大名を壓迫してゐた薩摩の島津、肥前の龍造寺といへども、ヨーロッパへの觸手は同じやうに出したがつてゐたのである。

ワリニャーニは、有馬晴信を龍造寺の壓迫から救つたが、しかし龍造寺隆信は宣教師たちを攻撃するやうなことはしなかつた。有馬や大村の領主が彼に對して恭順の態度を示すならば、それ以上に領地を攻略する必要もなかつたのである。一五八一年に宣教師たちを心配させた

つた後にも、それに関して具體的な申入れをする使者が薩摩からやつて來た位である。

キリシタンの敵とさへ見られる異教徒の領主たちがこのやうに熱心にワリニャーニの方へ手を出した位であるから、キリシタン大名の大村純忠や有馬晴信がワリニャーニに對している積極的につくさうとしたことはいふまでもない。晴信は一五八〇年にワリニャーニに助けられた御禮として、浦上を教會に寄附した。それを聞いた純忠は、長崎を教會に寄附しようと申出た。ワリニャーニは、これを受け容れるかどうかについて、西北九州、豊後、京都などの神父たちとも相談し、純忠とも幾度か會見した。純忠が、長崎を教會領としたいといふ理由はかうであつた。第一、龍造寺が長崎をねらつてゐる。龍造寺に渡せばポルトガル貿易も彼に奪はれてしまふ。拒絶すれば壓迫を加へてくるであらう。教會領として置けば安全である。第二、教會領となれば大村は依然としてポルトガル貿易を續けることが出来る。第三、大村氏にとつての安全な避難場所になる。これらの理由は、大體神父たちを承服せしめることが出來た。龍造寺に貿易の利益を與へれば、正面の敵たる大友氏に大打撃となるであらう。それは結局キリスト教徒にとつての大損害である。長崎はキリシタンの避難所として確保しなくてはな

事件は、龍造寺隆信が大村純忠とその嗣子とを佐賀に招いたことであつた。この招待に應ずることは、純忠一族の運命を一時隆信の手中に委せることを意味した。人々は疑懼し、神父クエリヨもそれを危んだが、純忠は決然としてその招待に應じた。隆信は彼を款待し、おのれの娘を彼の嗣子に嫁せしめようと約した。それでもクエリヨたちは隆信に對して懸念を抱き續けてゐる。ワリニャーニは龍造寺と親しむことがキリスト教會の安全にとつて必要であると考へ、しばしば人を遣はして隆信の機嫌を伺はせた。さうしてその懇望に従ひクエリヨをして彼を訪ねさせた。隆信はクエリヨを款待して、ポルトガル船が龍造寺領の港に來るやう斡旋して貰ひたいこと、龍造寺領内に會堂を建て布教することを許すこと、などを話した。クエリヨはこの隆信の友情にもあまり信頼を置かなかつたが、しかし貿易の希望、従つてヨーロッパ文明との接觸の希望を龍造寺が持つてゐたことは、否定の出來ないことであらう。

島津の方も同様で、ワリニャーニが旅行の途中船で寄つた時などには非常に款待したのみならず、ポルトガル船をその領内の港に招致するために、會堂の建設や布教の許可に關して、ワリニャーニやクエリヨと交渉を始めた。ワリニャーニが日本を出發するためにすでに船に乗

らぬ。いづれ日本には司教を置く必要があるが、長崎は司教の座としても安全でなくてはならぬ。かう考へて、ワリニャーニは長崎を教會領とすることに賛成した。純忠は長崎のほかは一里先の茂木をも教會に渡した。もつとも司法權だけは領主の手に残したのである。

ワリニャーニは長崎の市民に對して會堂を何よりも尊敬すべきことを教へ込んだ。こゝの宣教師館には神父三人、イルマン一人、日本人イルマン三人を置いた。大村の宣教師館は、神父二人、イルマン二人であつた。ワリニャーニが京都から歸つて來たとき、純忠は大村で盛大な祝宴を開き、長崎へも二度訪ねて來た。さうしてその年のクリスマスには、ワリニャーニを大村へ連れて行つて莊嚴な祭を行つた。例の通り演劇の催しもあつた。

有馬のセミナリヨの少年たちは、さういふ社會的雰囲気の中からは出發して行つたのである。

第十二章 鎖國への過程

一 信長殺さる

一五八二年二月、ワリニャーニが少年使節たちをつれて長崎を出發したあとの日本は、九州でも京畿地方でも新しい機運が五月の若葉のやうに萌え上つてゐた。副管區長クエリヨは有馬で盛大な復活祭を祝ふ。晴信の母・祖母・姉妹、多數の家臣などが洗禮を受ける。相當に力のある佛僧たちさへも、轉向してくる。有馬のセミナリヨは周圍の日本人が目を見張つてたほど、顯著な存在になつて來た。フロイスも、日本でキリスト教を發展させるには、人間的にはこのセミナリヨのほかに頼るべきものがないといつてゐる。そのほか附近の有家、島原、高來、少し離れて天草、大村、長崎、平戸、筑前の秋月、何處でも教勢の進まないところはない。特に宣教師たちを喜ばせたのは、最初シャビエルが足跡を印した鹿兒島と山口が回復されさうになつたことである。鹿兒島からはワリニャーニの出發間際に有利な申込みがあり、クエリ

ヨがそれを取り上げようとしてゐる。山口の毛利もワリニャーニに宣教師派遣を求めて來たが、その後さらにクエリヨに交渉して來た。豊後では宗麟が益々熱心で、府内の萬寶寺を焼き、豊前の宇佐八幡宮を焼いた。永い間キリシタンの大敵であつた元の宗麟夫人までが、今はキリシタンにならうとしてゐる。府内のコレジヨ、臼杵のノビシヤドはいづれも豫期以上にうまく行つてゐる。臼杵の新會堂は復活祭に間に合ふやうに工事を急ぎ、府内のヤソ會士たちをも招いて盛大に祭を行つた。集まるものが多く、日本一の大會堂さへも小さく見えるほどであつた。行列の行進の時には三千の燈籠が動き、種々の仕掛火花が空に輝やいた。安土でも宣教師館とセミナリヨとは續々増築され、建築工事はなほ續いてゐた。會堂の建築はまだ着手してゐなかつたが、材木はすでに買集めてあつた。セミナリヨは豫定通り育つてゐた。オルガンチノなど五人の外國宣教師のほかに日本人イルマンのピセンテがゐる少年たちを教へてゐたのである。總勢は三

十五六人であつた。神父セスベデスが日本人イルマンのパウロと共に開拓に行つてゐた岐阜地方でも、信忠の庇護の下にかなりの收穫があつた。京都では神父カリヤンやもう一人のイルマンと共に、例のロレンソが活動してゐた。オルガンチノを父のやうに愛してゐた三七信孝は、いよ／＼父から起用されて四國征伐の指揮官に任ぜられた。四國を平定すればそこへキリスト教を導入するであらうと彼は約した。ロレンソに向つては、あなたに來てもらひたいと云つた。

さういふ好況のさなかに、突然信長が京都の本能寺で殺されたのである。それは一五八二年六月二十日(天正十年六月)の早朝であつた。明智光秀は信長の油斷を見て咄嗟に奇襲し、信長と信忠とを、一二時間で片付けてしまつた。光秀が何故この擧に出たかは、よく解らない。猜疑か、嫉妬か、或は單なる權力欲か。いづれにしても光秀が、信長に對する衆人の怨嗟といふことを宛にしてゐたのは確かであらう。この暴王を倒せば、衆人はそれを徳とする、と彼は考へたのである。その證據に彼は、奇襲成功後、直ちに近江に出で、安土城を掠奪占領することの主たる仕事としたのであつて、他の部將たちに對する戦略をほとんど考へてゐない。それは宣教師たちさへも氣づいた所であつた。安土を命から／＼逃げ出したオル

ガンチノが最も怖れたところは、光秀が彼を捕へて人質とし、曾て信長のやつたやうに高山右近などを味方につける道具に使ひはしないかといふことであつた。だから彼は光秀の部下の手中にあつたとき、右近に書簡を送り、「たとひ我が皆十字架にかけられても、この暴君の味方になつてはならない」と警告した。しかし光秀は宣教師たちを捕へようとはしなかつた。が、それはほかにしても、光秀は、攝津へ進出して諸所の城から入質を取り、その城におのれの兵を入れることが出來た筈である。それらの諸城の兵はみな毛利との戦争に出征して居り、ほとんど空であつた。高山の高槻の城などもさうである。そこには夫人ジュスタや二人の小兒が僅かの家臣と共に留守をしてゐるだけであつた。しかるに光秀は安土の占領を急いで、攝津の方へは眼を向けなかつたのである。彼は右近を初め諸將たちが當然自分の味方になるものと考へてゐた。これが彼の失敗のおもなる原因だといつてよい。

光秀には遠くを見る眼力がなかつた。信長の偶像破壊がどれほど多くの反感を呼んでゐたとしても、それはその時代の創造力の尖端であつた。信長を倒したことを徳とする人は極めて少なかつた。攝津河内のキリシタン武士のなかで光秀の味方になつたのは、たゞ三箇の領主だ

けである。信長の部將たちは急速に中國から引き返して来た。高山右近も光秀が近江から出てくる前に高槻城に歸つて光秀進出に備へた。やがて秀吉が音頭を取り、三七信孝を擁して、光秀の軍を山崎で粉砕した。信長の死後二週間と経たない七月二日のことである。

安土の城も町もその後には焼き拂はれた。二條の宮殿は信忠と共に焼け失せた。岐阜の會堂や宣教師館も破壊された。信長の建てたもの、持つてゐた財寶などは、皆焼かれるか、或は掠奪された。京都では人々が「日本の富は失はれた」と云つて悲しんだといふ。

フロイスはこの事件を報告するに際して、信長が稀なる才能を有し賢明に政治を行つたことを賞讃しつつも、その「傲慢」の故に身を亡ぼしたことを力説してゐる。その傲慢は死の年に極點に達し、ネブカドネザルのやうに自ら神として尊崇せられることを欲した。その現はれは安土山上に建てた總見寺である。そこには諸國から有名な佛像を集めたが、本尊は信長自身であつた、とフロイスは云つてゐる。信長記などには見えないことであるが、當時の宣教師たちの感じ方をよく現はしてゐると思ふ。

二 キリシタン大名の繁榮

行きたいと云ひ出した。即ちセミナリヨは安土よりも却つてよいほどである。そのほか、キリシタンの中から秀吉が非常に重く用ゐる始めたものが數人ある。その一人は小西隆佐である。秀吉は彼の知識や才能を見込み、自分の財寶の管理や堺の町の支配などを委ねた。次はその子のアゴスチニョ行長である。行長は幼少の時から京都の會堂で教育を受けたものであるが、秀吉は彼を海の司令官とし、播磨の室の津をその所領として與へた。その他祕書官の安威志門、留守居役の休庵老人などもキリシタンであつた。これらの人々のお蔭で教會は秀吉から非常に好意を受けることが出来た。といふのは、秀吉が大坂の經營をはじめ諸方から人々を引き寄せようとしてゐたとき、高山右近の勧誘に従つて、オルガンチノが、大坂に會堂を設けることを敢行したからである。當時京都の教會は安土焼失の打撃で會堂建築などの資力を持たなかつたのであるが、右近はそれが緊急の必要であることを説き、河内岡山の會堂を大坂に移す計畫を立てて、その移築を自分の費用でやらうとさへ申出たのであつた。でオルガンチノはロレンソをつれて秀吉の許へ土地を請ひ受けに行つた。秀吉は二人を居間の方へ導き入れ、小西隆佐、安威志門をも加へて、五人だけで永い間語り合つた。さうして川添ひの非常によい地所を三千數百坪ほど

信長のあとについては、光秀討伐の當時、世人は秀吉が三七信孝を立てるであらうと噂した。それは宣教師たちにとつては都合の好いことであつたが、しかしフロイスは、あれほど勢力のある秀吉がそんなに謙遜な態度を取るとは思はないと云つてゐる。事はフロイスの豫感の通りに動いた。一年の内には、政敵柴田勝家、瀧川一益を掃蕩し、信孝を自殺せしめ、大坂の築城に取りかかつた。信長を六年間苦しめた石山本願寺のあとが、安土に代つて新しい大都市として發展し始めることになつたのである。そこで工事に従事するものは、初めは二三萬であつたが、後には五萬になつた。規模の大きいことは安土の比ではない。

この新しい形勢に際して、キリシタンたちは、信長の死の意義を十分見とほすことは出来なかつた。なるほど安土のセミナリヨは覆滅したが、全員無事に京都へ逃げて来て、やがて高槻の城にセミナリヨを移した。高山右近は光秀討伐に大功があつたため秀吉から厚遇をうけてゐるが、相變らず教のことに熱心で、セミナリヨの神父二人、イルマン數人、生徒三十二人の面倒をも親身になつて見てゐる。日本人イルマンのピセンテが、こゝでカトリック教義の講義をしたがそれは非常に効果があつた。生徒も非常に優れて居り、六七人は臼杵のノビシヤドに

教會に與へたのであつた。それは一五八三年の九月のことである。この滑り出しはキリシタンたちに非常によい印象を與へた。曾て安土のセミナリヨがキリスト教の有力な宣傳となつたやうに、大坂の會堂もまた身分ある武士たちのための網となるであらう。大坂の建設が、安土よりも大規模であるやうに、キリスト教の繁榮もまた、安土時代よりは大規模となるであらう。さう人々は考へた。

さうしてまた實際、數年の間は、その方向に動いて行くやうに見えた。會堂の移築は一五八三年のクリスマス頃の頃には出来上り、そこで最初のミサを舉行した。ついで一五八四年から八五年へかけて、續々として身分ある武士たちや大名たちの改宗が行はれた。初めは秀吉の小姓衆・馬廻衆といふ風であつたが、高山右近や小西行長の勧誘が利いて、馬廻衆の頭の牧村政治、伊勢松島の城主蒲生氏郷、秀吉の有力な顧問たる黒田孝高、播磨三木の城主中川秀政、美濃で二萬俵をとる市橋兵吉、近江で一萬二千俵をとる瀬田左馬丞などが洗禮を受けるに至つた。秀吉夫人の側に勧めてゐる婦人たちの内にも固いキリシタンが出来て来た。

この情勢には當時の政情も大いに關係してゐるであらう。一五八四年の春、秀吉は、家康と信雄との叛起に備